宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第157集

野首第１遺跡 II

Nokubi 1 site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書50

２００７

宮崎県埋蔵文化財センター

野首第1遺跡遠景（南より）

遺跡の北東には小丸川が流れ、両岸に広がる平野は天正6（1578）年に勃発した「高城・耳川の合戦」で戦場となった。その奥には左右からそれぞれ延びる丘陵が見えるが、左方が高城跡であり、右方は大友方の陣跡（松山塁）と伝えられる。背後には九州山地がそびえる。

野首第1遺跡遠景（東より）

谷の開口部側から遺跡を望む。緩やかなS字を描く県道は整備事業により付け替えられたもので、丘陵は平成12年度の発掘調査後に大きく削り取られている。写真左奥では野首第2遺跡が調査されており、その背後には平坦な洪積台地が広がっている。

野首丘陵遠景（北方の高城跡より）
「高城・耳川の合戦」の際には、正面の低平な丘陵上に島津勢が陣を構えた。丘陵は写真の左手で小丸川に向かって突出し、「野首」の由来となっている。

Ａ区土層断面（Ａライン：東より）
土層観察ベルトの最上部がＫ－Ａｈ（鬼界アカホヤ火山灰）の二次堆積層で、その下には多量の散礫を含む層がある。ベルトの最奥部には36号集石遺構がかかっている。

A区集石遺構検出状況（北より）
丘陵上に位置する野首第1遺跡（県道整備事業に伴う）の直下で24基の集石遺構を検出した。正面の丘陵は野首第2遺跡である。

B区集石遺構検出状況（南より）
B区では10基の集石遺構が谷底付近に構築されていた。背後の丘陵上（野首第2遺跡）でも多数の集石遺構が検出されている。

4号性格不明遺構（東より）
調査区境の壁に断面U字形を呈する黒色土の堆積を検出した。この堆積土中からは古墳時代の土器が出土し、底面に土師器甕を安置したと考えられるピットが検出された。

2号竪穴建物跡（南東より）
古墳群の直下に位置する。土層観察ベルトの向こう側は3層の調査中であるが、この層中でピットや破砕された遺物を検出しており、埋没過程での利用が推定される。

B区低湿地調査状況（南西より）
軟弱で粘性の強い土であったため、排水路を先行して掘削し、水位を下げながら調査を行った。作業員の指差す先に扇と考えられる木製品（第51図473～475）が出土している。

61号土坑（南より）
内面に明褐色の壁土を塗っている。壁土の上半は崩落していたが、下半は平滑な壁面が残存していた。床面に明治10（1877）年鋳造の一銭銅貨が貼り付いていた。

産地不明の軟質三彩陶（牛島　茂氏 撮影）
魚を模した蓋付鉢か。緑釉を主体として黄釉・褐釉を施す（第85図731～734）。

紅猪口・紅皿など（牛島　茂氏 撮影）
商標を付した販売容器も見られる。一部の器には紅が残っている（第84図709～712ほか）。

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した野首第１遺跡は宮崎県児湯郡高鍋町に位置し、平成12年度から平成16年度にかけて発掘調査を実施したところ、旧石器時代から近世までの遺構・遺物を確認することができました。

縄文時代早期の成果としては、丘陵下の低地に展開する集石遺構群があり、当時の生活域が台地上にとどまらなかったことが分かります。また横穴式石室を有する古墳を見上げるかのような建物跡が見つかり、その中からは意図的に破砕された可能性のある器が出土しています。さらに古代～中世に堆積したと考えられる低湿地層からは、当時の木工技術を彷彿とさせる様々な木製品が掘り出されました。

特筆すべきは近世の成果で、建物のみならず屋敷地全体を調査した数少ない事例となりました。そこから出土した陶磁器をはじめとする多種多様の遺物は、当時の盛んな流通や華やかな生活をうかがわせるものです。

ここに報告する内容は、今後当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になると考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく学校教育や生涯学習などの場で活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　清野　勉

例　言

1　本書は平成12～16年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。野首第１遺跡については、県道整備事業に伴う調査報告書（86集）が刊行されているため、本書を「野首第１遺跡Ⅱ」とする。

2　発掘調査は日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
　なお日本道路公団は平成17年10月１日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社となっているが、上記のように本遺跡の調査は民営化以前であったため、本書では日本道路公団として記載した箇所がある。

3　現地での実測・写真撮影等の記録は、主に永田和久・吉本正典・堀田孝博・安楽哲史・可児直典・松元一浩・大野義人・黒木　修が行い、その他に久保春夫・柳田裕三・三品典生・岡田　諭・小字都あずさの協力を得た。

4　整理作業は現場整理作業所および埋蔵文化財センターで行った。図面作成・遺物実測・浄書等は堀田・松元・黒木・藤木　聡が行ったほか、重留康宏と整理作業員の協力を得た。玉類については藤木晶子氏（宮崎市教育委員会）に実測していただいた。

5　本書で使用した遺物写真は堀田が撮影したが、巻頭写真の一部は牛島　茂氏（奈良文化財研究所）に撮影していただいた。

6　炭化種実の同定については小畑弘己氏（熊本大学）に御教授いただき、種実の写真は杉山真二氏（古環境研究所）に撮影していただいた。

7　縄文土器胎土中の岩石鉱物については、測定を宮崎県工業技術センターに依頼し、データの分析は赤崎広志が行った。

8　サンゴの同定については門田真人氏（神奈川県立生命の星・地球博物館）に御教授いただいた。

9　下記の業務については、それぞれ次の機関に委託した。
　測量・グリッド杭設置等：有限会社黒木測量設計コンサルタント、有限会社三和コンサルタント
　空中写真撮影：有限会社スカイサーベイ九州
　写真測量（近世石垣等）：朝日航洋株式会社
　自然科学分析、木製品保存処理・実測：株式会社古環境研究所
　石器実測：大成エンジニアリング株式会社
　人骨調査：土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

10　本書掲載の遺跡位置図（現代）は、国土地理院発行５万分の１図「妻」「高鍋」を元に作成した。

11　土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』によった。

12　本書で使用した方位は全て座標北（座標第Ⅱ系）、また標高は海抜絶対高である。

13　本書の執筆・編集は堀田が行ったが、徳利の文字判読については安藤正純、炭化種実・火打石の報告部分については藤木の協力を得た。

14　出土遺物・その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

現地調査から報告書刊行に至るまでの約６年間には、地元の地権者ならびに発掘・整理作業員の皆様、様々な分野の研究者各位など、多くの方々から御指導・御教示を賜った。紙幅の都合により御芳名を記せないことをお詫びするとともに、この場で深く感謝申し上げたい。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査の経緯と概要……1
第２節　調査の組織……1

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法……7
第２節　調査の経過……7
第３節　調査日誌抄……8
第４節　整理作業および報告書作成……12

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　基本層序……14
第２節　旧石器時代の遺物
１．概要……19
２．遺物……19
第３節　縄文時代の遺構と遺物
１．概要……20
２．集石遺構……22
３．遺物
Ａ．縄文土器……33
Ｂ．小型石器……45
Ｃ．大型石器……46
第４節　弥生時代の遺物
１．概要……57
２．遺物……57
第５節　古墳時代の遺構と遺物
１．概要……58
２．遺構と遺物
Ａ．竪穴建物跡……58
Ｂ．性格不明遺構……66
Ｃ．その他……74

第６節　古代～中世の遺物
１．概要……81

2．遺物……81
第7節　近世～近代の遺構と遺物
1．概要……91
2．遺構
A．石垣・土塁・石列・屋敷入口……91
B．建物跡……92
C．近世墓……96
D．土坑……96
E．性格不明遺構……114
F．溝状遺構……116
G．水田跡……116
3．遺物
A．陶磁器類……118
B．土製品……132
C．瓦……141
D．金属製品……144
E．銭貨……144
F．石製品……144
第8節　その他の遺構と遺物
1．遺構……153
2．遺物……153
第Ⅴ章　考察
第1節　縄文時代……157
第2節　古墳時代……163
第3節　近世～近代……166

附編
宮崎県、野首第1遺跡における自然科学分析……173
宮崎県高鍋町野首第1遺跡出土の近世人骨……191
縄文時代早期土器の胎土鉱物分析……196

挿図目次

第１図　遺跡位置図（現代）……１
第２図　遺跡位置図（昭和初頭頃）……５
第３図　調査区・グリッド配置図……９
第４図　確認トレンチ配置図……11
第５図　各区の調査状況……13
第６図　土層断面実測位置図……15
第７図　土層断面図（１）……16
第８図　土層断面図（２）……17
第９図　旧石器実測図……19
第10図　集石遺構分布図……21
第11図　Ａ区縄文時代早期遺構分布図……22
第12図　集石遺構実測図（１）……23
第13図　集石遺構実測図（２）……25
第14図　集石遺構実測図（３）……27
第15図　集石遺構実測図（４）……28
第16図　集石遺構実測図（５）……29
第17図　集石遺構実測図（６）……30
第18図　縄文土器実測図（１）……35
第19図　縄文土器実測図（２）……36
第20図　縄文土器実測図（３）……37
第21図　縄文土器実測図（４）……39
第22図　縄文土器実測図（５）……40
第23図　縄文土器実測図（６）……41
第24図　縄文石器実測図（１）……47
第25図　縄文石器実測図（２）……48
第26図　縄文石器実測図（３）……49
第27図　縄文石器実測図（４）……50
第28図　縄文石器実測図（５）……51
第29図　縄文石器実測図（６）……54
第30図　縄文石器実測図（７）……55
第31図　縄文石器実測図（８）……56
第32図　弥生土器実測図……57
第33図　古墳時代遺構分布図……59
第34図　１号竪穴建物跡実測図……60
第35図　古墳時代遺物実測図（１）……61
第36図　２号竪穴建物跡実測図（１）……62
第37図　２号竪穴建物跡実測図（２）……63
第38図　古墳時代遺物実測図（２）……65
第39図　４・９号性格不明遺構実測図……67
第40図　５号性格不明遺構実測図……68
第41図　古墳時代遺物実測図（３）……69
第42図　６・７・８・10号性格不明遺構実測図……71
第43図　古墳群前ピットの深度……73
第44図　古墳時代遺物実測図（４）……75
第45図　古墳時代遺物実測図（５）……76
第46図　古墳時代遺物実測図（６）……77
第47図　古代～中世土器・陶磁器実測図（１）…83
第48図　古代～中世土器・陶磁器実測図（２）…84
第49図　古代～中世土器・陶磁器実測図（３）…85
第50図　Ｂ区低湿地木製品等出土状況……88
第51図　古代～中世木製品実測図……89
第52図　中世石製品実測図……90
第53図　近世～近代遺構分布図……93
第54図　Ａ区近世～近代遺構分布図（１）……94
第55図　Ａ区近世～近代遺構分布図（２）……95
第56図　Ａ区近世～近代遺構分布図（３）……97
第57図　Ａ区近世～近代遺構分布図（４）……98
第58図　Ａ区近世～近代遺構分布図（５）……99
第59図　近世石垣実測図（１）……100
第60図　近世石垣実測図（２）……101
第61図　近世石垣実測図（３）……102
第62図　近世墓実測図……103
第63図　近世～近代土坑実測図（１）……104
第64図　近世～近代土坑実測図（２）……105
第65図　近世～近代土坑実測図（３）……106
第66図　近世～近代土坑実測図（４）……107
第67図　近世～近代土坑実測図（５）……108
第68図　近世～近代土坑実測図（６）……109
第69図　近世～近代土坑実測図（７）……110
第70図　近世～近代土坑実測図（８）……111
第71図　11号性格不明遺構実測図……114
第72図　近世～近代水田跡実測図……115
第73図　近世～近代陶磁器実測図（１）……117
第74図　近世～近代陶磁器実測図（２）……119
第75図　近世～近代陶磁器実測図（３）……120
第76図　近世～近代陶磁器実測図（４）……121
第77図　近世～近代陶磁器実測図（５）……122
第78図　近世～近代陶磁器実測図（６）……123
第79図　近世～近代陶磁器実測図（７）……125
第80図　近世～近代陶磁器実測図（８）……126

第81図　近世～近代陶磁器実測図（9）……127
第82図　近世～近代陶磁器実測図（10）……128
第83図　近世～近代陶磁器実測図（11）……129
第84図　近世～近代陶磁器実測図（12）……131
第85図　近世～近代陶器・土製品実測図……132
第86図　近世～近代土製品実測図……133
第87図　近世～近代瓦実測図（1）……141
第88図　近世～近代瓦実測図（2）……142
第89図　近世～近代金属製品実測図……143
第90図　中世～近代銭貨拓影図……145
第91図　近世～近代石製品実測図（1）……146
第92図　近世～近代石製品実測図（2）……147
第93図　1・2・29号土坑実測図……154
第94図　3号性格不明遺構実測図……155
第95図　土錘・玉類実測図……156
第96図　TP1～3の設定位置……159
第97図　祇園原横穴墓群……164
第98図　石錘の重量分布……164
第99図　墓道・前庭部にピットを有する横穴墓 165
第100図　野首第1遺跡の建物跡……168
第101図　高岡麓遺跡の建物跡……169
第102図　陶磁器組成の比較……170

表　目　次

第1表　確認トレンチ一覧表……12
第2表　基本層序（A区）……14
第3表　基本層序（B区）……16
第4表　旧石器観察表……19
第5表　集石遺構一覧表……30
第6表　集石遺構礫集計表（1）……31
第7表　集石遺構礫集計表（2）……32
第8表　縄文土器分類表……34
第9表　縄文土器観察表（1）……42
第10表　縄文土器観察表（2）……43
第11表　縄文土器観察表（3）……44
第12表　縄文石器観察表（1）……52
第13表　縄文石器観察表（2）……53
第14表　縄文石器観察表（3）……54
第15表　弥生土器観察表……57
第16表　ピット一覧表……73
第17表　古墳時代土器観察表（1）……78
第18表　古墳時代土器観察表（2）……79
第19表　古墳時代土器観察表（3）……80
第20表　古墳時代鉄器・石器観察表……80
第21表　古代～中世土器・陶磁器観察表（1）…86
第22表　古代～中世土器・陶磁器観察表（2）…87
第23表　古代～中世木製品・石製品観察表……90
第24表　土坑一覧表……112
第25表　65号土坑出土の主要種実……113
第26表　65号土坑出土の主要種実計測値……113
第27表　65号土坑の埋土……113
第28表　近世陶磁器分類表……118
第29表　近世～近代陶磁器観察表（1）……134
第30表　近世～近代陶磁器観察表（2）……135
第31表　近世～近代陶磁器観察表（3）……136
第32表　近世～近代陶磁器観察表（4）……137
第33表　近世～近代陶磁器観察表（5）……138
第34表　近世～近代陶磁器観察表（6）……139
第35表　近世～近代陶磁器・土製品観察表……140
第36表　近世～近代瓦観察表……141
第37表　近世～近代金属製品観察表……144
第38表　中世～近代銭貨観察表……145
第39表　近世～近代石製品観察表……147
第40表　近世～近代土器・陶磁器集計表（1）148
第41表　近世～近代土器・陶磁器集計表（2）150
第42表　グリッド出土陶磁器平面分布表……152
第43表　グリッド出土近世瓦平面分布表……152
第44表　土錘・玉類観察表……156
第45表　TP1出土遺物……160
第46表　TP2出土遺物……160
第47表　TP3出土遺物……161
第48表　石鏃集計表（未成品・破損品含む）…161
第49表　石錘集計表……164

巻頭図版目次

巻頭図版1－1　野首第1遺跡遠景（南より）
巻頭図版2－1　野首第1遺跡遠景（東より）
巻頭図版3－1　野首丘陵遠景
（北方の高城跡より）
3－2　A区土層断面
（Aライン：東より）
巻頭図版4－1　A区集石遺構検出状況（北より）

4－2　B区集石遺構検出状況（南より）
巻頭図版5－1　4号性格不明遺構（東より）
5－2　2号竪穴建物跡（南東より）
巻頭図版6－1　B区低湿地調査状況（南西より）
6－2　61号土坑（南より）
巻頭図版7－1　産地不明の軟質三彩陶
巻頭図版8－1　紅猪口・紅皿など

図版目次

図版1－1　野首古墳群全景（南より）
図版2－1　1・2号竪穴建物跡（南西より）
図版3－1　B区縄文時代調査状況（東より）
3－2　A区Ⅵb層散礫検出状況（南東より）
3－3　2号集石遺構（東より）
3－4　16号集石遺構（南西より）
3－5　23号集石遺構（南西より）
3－6　26号集石遺構（南東より）
3－7　27号集石遺構（北より）
図版4－1　29号集石遺構（北より）
4－2　30号集石遺構（北西より）
4－3　34号集石遺構（北東より）
4－4　36号集石遺構（南東より）
4－5　35号集石遺構（北より）
4－6　38号集石遺構（北西より）
4－7　A区縄文時代調査終了状況（南より）
図版5－1　1号竪穴建物跡（南より）
5－2　1号竪穴建物跡土器埋設炉（北東より）
5－3　2号竪穴建物跡土器埋設炉（北東より）
5－4　4号性格不明遺構ピット（北東より）
5－5　9号性格不明遺構ピット（北東より）
5－6　6～8号性格不明遺構検出状況（西より）
5－7　8号性格不明遺構調査状況（南より）
5－8　古墳群前調査終了状況（南西より）
図版6－1　B区本製品出土状況（北より）
6－2　B区低湿地層および河床礫（北より）
6－3　近世屋敷跡全景（北東より）
6－4　1号石垣（東より）
6－5　1号石垣断面（1）（南より）
6－6　1号石垣断面（2）（南より）
6－7　平場C造成土断面（南より）
6－8　土壙断面（南東より）
図版7－1　1号石列（西より）
7－2　3～5号石垣（北より）
7－3　近世墓標（南より）
7－4　近世墓人骨検出状況（東より）
7－5　近世墓坑完掘状況（北東より）
7－6　11号土坑（南東より）
7－7　30号土坑（北東より）
図版8－1　61号土坑礫検出状況（北より）
8－2　61号土坑獣骨等検出状況（北より）
8－3　11号性格不明遺構（東より）
8－4　水出跡（北より）
8－5　3号性格不明遺構検出状況（南より）
8－6　3号性格不明遺構完掘状況（南東より）
8－7　集石遺構の礫計量風景
図版9－1　旧石器（1～8）
9－2　縄文土器（9～15）
9－3　縄文土器（16～18）
9－4　縄文土器（19～23）
9－5　縄文土器（24～27）
9－6　縄文土器（28～33）
図版10－1　縄文土器（34～42：外面）
10－2　縄文土器（34～42：内面）
10－3　縄文土器（43～48・50・51：外面）
10－4　縄文土器（43～48・50・51：内面）
10－5　縄文土器（49・52～54）
10－6　縄文土器（55～62）
図版11－1　縄文土器（63～67）
11－2　縄文土器（68～72）
11－3　縄文土器（73～82：外面）
11－4　縄文土器（73～82：内面）
11－5　縄文土器（83～89）
11－6　縄文土器（90～98）
図版12－1　縄文土器（99～107）
12－2　縄文土器（108～116）
12－3　縄文土器（117～123）
12－4　縄文石器（124～135）
12－5　縄文石器（136～144）
12－6　縄文石器（145～163）
図版13－1　縄文石器（164～176）
13－2　縄文石器（177～179）
13－3　縄文石器（180～191）

13－4　縄文石器（192～203）
13－5　縄文石器（204～212）
13－6　縄文石器（213～220）
図版14－1　縄文石器（221～225・232・233）
14－2　縄文石器（226～231）
14－3　縄文石器（234～238）
14－4　縄文石器（239～244）
14－5　縄文石器（245～250）
14－6　縄文石器（251～258）
図版15－1　縄文石器（259～270）
15－2　弥生土器（271～283）
15－3　1号竪穴建物跡出土遺物（284～293）
15－4　1号竪穴建物跡出土遺物（295～306）
15－5　2号竪穴建物跡出土遺物（307～314）
15－6　長頸壺（308）の破砕痕跡
図版16－1　4・9号性格不明遺構出土遺物（315～317）
16－2　5号性格不明遺構出土遺物（318～325）
16－3　5号性格不明遺構出土遺物（326～334）
16－4　6～8号性格不明遺構出土遺物（335～343）
16－5　7～12号性格不明遺構出土遺物（344～352）
16－6　A区土師器集中出土遺物（353～359）
図版17－1　B区低湿地層出土遺物（360～371）
17－2　その他古墳時代遺物（372～384）
17－3　その他古墳時代遺物（385～395）
17－4　古代土器（396～398および製塩土器）
図版18－1　中国産青磁・白磁（399～404：文様等）
18－2　中国産青花・白磁（399～404：高台等）
18－3　中国産青花（405～411：文様等）
18－4　中国産青花（405～411：高台等）
18－5　中世陶器類（412～416・425～428）
18－6　中世陶器類（417～424）
図版19－1　古代～中世土器（429～437）
19－2　古代～中世土器（438～447）
19－3　古代～中世土器（448～457）
19－4　古代～中世土器（458～467）
19－5　古代～中世木製品（468～482）
19－6　中世石製品（483～484）
図版20－1　14号土坑出土陶磁器（490～505）
20－2　22号土坑出土陶磁器（506～510）
20－3　23～25号土坑出土陶磁器（511～515）
図版21－1　26・27号土坑出土陶磁器（516～534）
21－2　30号土坑出土陶磁器（535～559）
21－3　61号土坑出土陶磁器（560～580）
図版22－1　10～12号土坑出土陶磁器（485～489）
22－2　近世墓出土陶磁器（592）
22－3　34・65・66号土坑，近世墓出土陶磁器（581～591）
22－4　1号溝状遺構，屋敷入口出土陶磁器（593～605）
図版23－1　土塁出土陶磁器（606～631）
23－2　土塁出土陶磁器（632～644・647～649）
23－3　土塁出土陶磁器（645・646）
23－4　その他遺構出土陶磁器（675～677）
図版24－1　1・11号性格不明遺構出土陶磁器（650～657）
24－2　その他遺構出土陶磁器（658～674）
24－3　その他遺構出土陶磁器（678～684）
24－4　水田跡下層出土陶磁器（705）
図版25－1　水田跡下層出土陶磁器（685～704）
25－2　遺構外出土陶磁器（722～730）
図版26－1　遺構外出土陶磁器（706～721）
26－2　近世～近代土製品（735～744）
図版27－1　近世～近代瓦（745～749）
27－2　近世～近代瓦（750～754）
27－3　近世～近代瓦（755～760）
図版28－1　中世～近代銭貨（780～807：面）
28－2　中世～近代銭貨（780～807：背）
図版29－1　近世～近代銅製品等（761～776）
29－2　古墳時代鉄鏃（294）・近世～近代鉄製品（777～779）
29－3　近世～近代硯・砥石（808～816）
29－4　近世墓台座（838）
29－5　姫島産黒曜石の石核（837）・土錘（839～841）
29－6　玉類（842～844）
図版30－1　近世～近代火打石（817～836）
30－2　遺跡出土のサンゴ

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査の経緯と概要

東九州自動車道（門川～西都間59km）は、平成８年12月国土開発幹線自動車道建設審議会において整備計画区間に決定した。そのうち都農～西都間約25kmについて、同年12月に建設大臣（現国土交通大臣）より日本道路公団へ施行命令が発令された。

一方、県教育委員会では、整備区間決定後の平成10年度に都農～西都間の路線上を対象とした詳細分布調査を行い、79遺跡896,000㎡の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。そして平成11年度から日本道路公団九州支社と宮崎県教育委員会との間で委託契約を締結し、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収の進捗に合わせ発掘調査および整理作業を実施している。

野首第１遺跡は小丸川右岸に向かって突き出した丘陵端部とその南東側の谷部を含んでいる。このうち丘陵部については、県道木城高鍋線の整備事業に伴い平成12年度に発掘調査を実施したが、県内最大級の横穴式石室を有する円墳を確認し、協議の結果、県道の設計変更による現地保存が決定された。

一方の谷部は東九州自動車道建設予定地であり、同じく平成12年度に確認調査に着手したが、杉の伐採後に竹木が繁茂して立ち入りが困難な状況であったため、遺跡の南端部（野首第２遺跡の隣接地）に５箇所のトレンチを設定、縄文時代の包含層を確認した。また県道整備事業に伴う調査の結果や、谷の開口部付近に石垣が残存することから、谷部全域に何らかの遺構が分布すると予測されていた。

その後、平成13年12月より小丸川橋Ａ２橋台建設予定地から調査に入り、建設工事と平行しつつ調査区を順次拡張していった。

遺跡内には湧水点があり、その水は伏流して最終的には下位段丘の農業用水となっていた。このため水路に近い部分は掘削せず、また古墳保存に関わり盛土部分を一部擁壁とする設計変更がなされたため、保存区域についても調査を行っていない。

第２節　調査の組織

野首第１遺跡の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】　宮崎県教育委員会
　　宮崎県埋蔵文化財センター

平成12年度

所　長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地　茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
調査第一課長	
兼調査第一係長	面高　哲郎
総務課総務係長	亀井　縄子
調査第一課調査第二係長	長津　宗重

平成13年度

所　長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地　茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
調査第一課長	面高　哲郎
総務課総務係長	亀井　縄子
調査第一課調査第一係長	谷口　武範
調査第二係長	長津　宗重

平成14年度

所　長	米良　弘康
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
調査第一課長	児玉　章則
総務課総務係長	野邊　文博
調査第一課調査第一係長	谷口　武範
調査第二係長	長津　宗重

平成15年度

所　長	米良　弘康
副所長兼総務課長	大薗　和博

副所長兼調査第二課長　岩永　哲夫
調査第一課長　児玉　章則
総務課主幹兼総務係長　石川　恵史
調査第一課調査第一係長　谷口　武範
調査第二係長　長津　宗重

平成16年度
所　長　宮園　淳一
副所長兼総務課長　大薗　和博
副所長兼調査第二課長　岩永　哲夫
調査第一課長　高山　富雄
総務課主幹兼総務係長　石川　恵史
調査第一課調査第一係長　谷口　武範
主幹兼調査第二係長　長津　宗重

平成17年度
所　長　宮園　淳一
副所長兼調査第二課長　岩永　哲夫
総務課長　宮越　尊
調査第一課長　高山　富雄
総務課主幹兼総務係長　石川　恵史
調査第一課調査第一係長　谷口　武範
主幹兼調査第二係長　長津　宗重

平成18年度
所　長　清野　勉
副所長　加藤　悟郎
副所長兼調査第二課長　岩永　哲大
総務課長　宮越　尊
調査第一課長　高山　富雄
総務課主幹兼総務担当リーダー　高山　正信
調査第一課
主幹兼調査第一担当リーダー　長津　宗重
主幹兼調査第二担当リーダー　菅付　和樹

［調査担当］
平成12年度（確認調査）
調査第一課第一係　主　査　外山　宏幸
第二係　主　査　福松　東一
第一係　主任主事　阿部　直人
調査員　松尾　有年

平成13年度（確認調査）
調査第一課第二係　主　事　堀田　孝博
調査員　安楽　哲史

平成14・15年度（一次～二次調査）
調査第一課第二係　主　査　永田　和久
主　査　吉本　正典
主　事　堀田　孝博
調査員　安楽　哲史
調査員　可児　直典
調査員　松元　一浩
調査員　大野　義人
調査員　黒木　修

平成16年度（三次調査）
調査第一課第二係　主　事　堀田　孝博

平成17・18年度（整理作業・報告書作成）
調査第一課第二担当　主任主事　堀田　孝博

【東九州自動車道発掘調査指導委員】
泉　拓良（京都大学）
小畑　弘己（熊本大学）
田崎　博之（愛媛大学）
広瀬　和雄（国立歴史民俗博物館）
本田　道輝（鹿児島大学）
柳沢　一男（宮崎大学）
（五十音順，敬称略）

【調査協力】
文化庁
高鍋町教育委員会

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

宮崎県は南北に長い県土を有し、西側は九州山地に画され、東側は日向灘に向かい開けている。宮崎平野は県域の中央付近に長い海岸線に沿うように広がるが、南部から北部へ向かうにつれ徐々に幅を狭めるため、略三角形を呈している。

児湯郡高鍋町はその宮崎平野の北部にあり、九州山地に源を発し北西から南東に向けて貫流する小丸川の下流域にあたる。町域の東半部には沖積平野が広がり、その周縁部には洪積台地がひかえている。

野首第１遺跡は高鍋町大字上江字野首にあり、小丸川右岸に展開する青木段丘の端部および段丘裾の開析谷に位置する。今回の調査区は北東方向に向かってド谷部斜面と谷底にあたるが、斜面にはほぼ全面にわたって段違い状の平場が認められる。標高は20~30ｍを測り、遺跡内での高低差が大きい。

第２節　歴史的環境

本遺跡の所在する小丸川下流域では近年、東九州自動車道関連調査を中心として多くの発掘調査が実施され、旧石器時代から近世に至るまで様々な成果があがっているが、ここでは本遺跡と関連の深い時代・遺跡を中心として概観しておきたい。

【旧石器時代】

本遺跡の南側丘陵上にある野首第１遺跡（県道整備事業：以下、県道と略す）および野首第２遺跡で、始良Ｔｎ火山灰（AT）層下位の黒色土層（MB2・MB３）から霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む層前後にかけて複数の文化層が確認されている。

【縄文時代】

全時期を通じて豊富だが、特に早期の成果が顕著である。集石遺構が多数検出された遺跡についてまとめると、野首第１遺跡（県道）51基、野首第２遺跡100基以上、崩戸遺跡５基、南中原第１遺跡14基、老瀬坂上第３遺跡34基、下耳切第３遺跡32基、大戸ノ口第２遺跡45基となり、本遺跡の検出数34基を加えると、その総数は実に300基を上回る。

このように従前は小丸側右岸の高鍋町域が卓越していたが、対岸の川南町域においても近年の調査で尾花坂上遺跡34基、尾花Ａ遺跡100基以上など、同様の密度で展開していることが判明した。

宮崎県下で見た場合、前期の事例は著しく少ないため、早期の様相とのギャップが際立っているが、当地域付近では野首第１（県道）・崩戸遺跡などで轟Ｂ式や船土に滑石を含む曽畑式土器がまとまった量で出土しており、注目される。

また中期では下耳切第３遺跡、後期では野首第２遺跡に集落が確認されている。

【弥生時代】

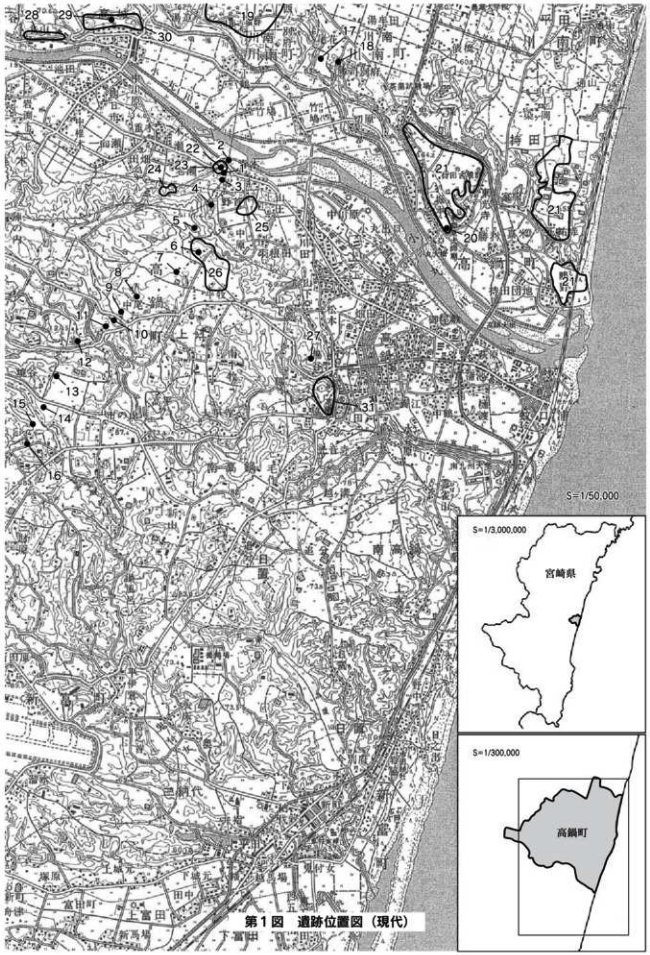
中期後半から後期頃にかけて洪積台地上の至るところで集落が展開するが、一方でそれに先立つ集落がほとんど確認できないという問題がある。

その中において、本遺跡より小丸川を隔て東方約３kmの距離にある高鍋町持田中尾遺跡は、前期末から中期初頭にかけての集落と推定された希少な事例である。住居跡のうち１軒は松菊里型住居の可能性があり、また遺物として大陸系磨製石器・朝鮮半島系無文土器などとともに、頸部内面に刻みを施した突帯を有する壺形土器などが出土した。

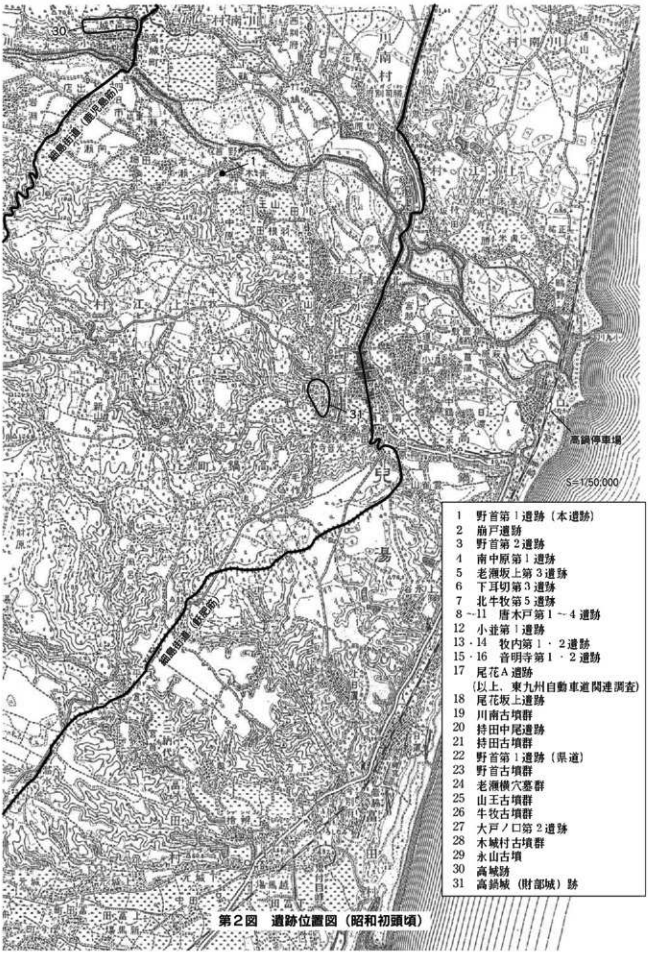
【古墳時代】

小丸川左岸域には川南古墳群・持田古墳群、右岸域には山王古墳群・牛牧古墳群など前方後円墳を擁する古墳群が多く出現する。また後期頃には木城村古墳群（高塚・横穴）・野首古墳群（高塚）・老瀬横穴墓群（横穴）などの群集墳が新たに営まれ、立地を古墳に規制されたかのような集落（下耳切第３遺跡）も見られる。野首古墳群は主体部に自然石の横穴式石室を採用しているが、対岸の木城町永山古墳（後述する高城の範囲内に現存する）も類似した構築法を採っている。

また尾花Ａ遺跡では前期頃をピークとする大規模な集落が、野首第２遺跡でも中期の集落が確認されている。



第１図　遺跡位置図（現代）



第２図　遺跡位置図（昭和初頭頃）

【古代】

都農町の名貫から小城町の市街地及び茶臼原を抜け西都市に至るルートは、児湯郡内における推定官道の一つである。この道からはやや外れるが、現在の県道木城高鍋線から南に入り老瀬坂を上って牛牧原に至るルート上で行われた発掘調査でも、当該期の遺構・遺物が確認され、枝道の一つであった可能性がある。

それらの成果について列記すると、野首第2遺跡では布目瓦や緑釉陶器が、下耳切第3遺跡では円面硯が出土している。老瀬坂上第3遺跡では8世紀後半頃の火葬墓が見つかっている。

【中世】

本遺跡の位置する丘陵は青木段丘の中でも小丸川に向かってひときわ突出しており、まさに「野首」である。このため中世山城の存在も想定されていたが、調査の結果、野首第1遺跡（県道）で掘立柱建物跡2棟・石塔群が、崩戸遺跡でも掘立柱建物跡2棟・土坑墓が検出され、小丸川に面した水陸交通の要所と目されている。

ここから川を隔てて指呼の距離にある高城は、天正6（1578）年に島津氏と大友氏との間で勃発した「高城・耳川の合戦」の舞台として著名で、大友方は川南町側の段丘、島津方は高鍋町側の段丘を中心に陣取っている。『宮崎県史』通史編中世に掲載されている絵図（「高城陣構図」）では、この野首の丘陵及びその先端部を切り通して高城と高鍋方面を結ぶ道が描かれており、丘陵の所々には松の木の表現も見受けられる。

こうした絵図の内容がどの程度まで写実的であるかについては検討が必要だが、少なくともこれまでの調査成果とはよく符合するようである。

【近世】

高鍋城（財部城）は近世には高鍋藩の藩庁となり、秋月氏が長く居城した。ちなみに当時、遺跡の周辺は上江村に含まれていた。

幕藩体制の中、特に厳しく維持された制度の一つに参勤交代があるが、佐土原・飫肥藩及び鹿児島藩でも東目と呼ばれる日向国内通行の一行が用いた細島街道（日向路）が藩領を貫いており、茶臼原から延びてくる鹿児島筋と佐土原から続く飫肥筋とが都農町で合流していた（永井2006）。これら街道脇には松の並木があったようだが、飫肥筋では明治に至っても高鍋城より南側の台地上に並木が残っていたようである。地図にも表現されている。

本遺跡は飫肥筋と鹿児島筋とを連絡する道（一説には木城街道とされる）に接しているほか、北方の高城町（現木城町）は元和2（1616）年にいち早く宿場町として整備されており、文物の往来も活発であったと推定される。

【近代】

近世飫肥藩の家老であった平部嶠南が編纂した『日向地誌』によると、遺跡付近に「宿阪」という小規模な集落が存在したとされる。また県道木城高鍋線が野首の丘陵をめぐる付近は現在でも「宿の坂」と呼ばれている。

明治10（1877）年には国内最後の内戦となった西南戦争が勃発し、高鍋城下は8月2日に戦場となったため、遺跡付近の穴に隠れて難を逃れた人々もいたようである。また後述するように遺跡内にあった建物が昭和30年代までは現存していたが、柱に当時の刀傷が残されていたとの話もある。

大正12（1923）年8月、児湯郡高鍋町・上江村・木城村の三か町村公営事業として高鍋～木城間に鉄道敷設経営計画が議決された。

この路線は高鍋停車場（現JR高鍋駅）から遺跡付近を通り木城へと向かう計画であったが、野首第1遺跡（県道）の乗る丘陵およびその南側の丘陵を切り通そうとしたかのような大規模な掘削が3箇所確認できる。野首第1遺跡（県道）の報告書ではこれを鉄道事業と関連するものと推定しているが、後述するように本遺跡の調査結果からも概ね同様の結論が導きだされる。

※なお本書における基本層序や火山灰の呼称は以下の文献に基づいている。

宮崎県　1997『宮崎県史』通史編　原始・古代1

宮崎県埋蔵文化財センター　2006『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

調査対象地が10,600㎡と広大で、後述するように高速道建設工事と調整しつつ分割調査を行ったため、谷あいの里道から北側をＡ区、里道南側は湧水点付近の段差を境界として南西をＢ区、北東をＣ区とした。またＡ区には斜面部に段違い状の平場が５箇所存在したため、これらについて東側からそれぞれ平場Ａ～Ｅと呼称した。

上記した調査区等の名称はあくまで調査上の便宜を図るためのものであり、それ以上の意味を有さないが、各種記録類や調査区内一括採集遺物の注記に使用しているため第３図に提示しておきたい。

また国土座標に基づき10ｍ間隔のグリッド杭を設置したが、谷筋に対して45度近く斜行することから測量の基準点として用いるに留め、遺物の取り上げや土層観察のためには、地形に沿った任意のグリッドを設定した。

実測や写真撮影は基本的に各調査員が行ったが、石垣や平場Ａ・Ｃの土塁周辺地形については調査の効率化を図るため写真測量を実施した。

その他に近世墓の人骨についても、土居ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に現地での実測・取り上げおよび分析を委託した。

第２節　調査の経過

測量図や現地の地表観察による限り、調査対象地の大部分が何らかの改変を受けていることが推測されたが、平成12年度の確認調査ではごく一部の状況しか把握できておらず、調査区全体について土層堆積状況を確認する必要があった。

ところが小丸川Ａ２橋台の建設予定地について調査終了後ただちに引き渡す必要があったため、調査区全体のトレンチ調査を一度に実施することは難しく、結果としてある程度まとまった面積ごとにトレンチを先行して設定し、内容を確認後にそれを拡張していくという方法を採った。トレンチの配置は第４図に、それらの設定目的については第１表にまとめたので参照されたい。以下では調査の経過を調査区ごとに記しておく。

【Ａ区】

石垣があったことから近世遺構の存在が予見された。先行トレンチの結果、緩斜面を切り盛り造成して平場を作り出したことが判明したが、盛土部分での遺構確認に苦戦した。最終的には建物跡をはじめ、廃棄坑と推定される土坑等を多数検出し、屋敷地の全容が明らかとなった。

平場Ｃは近世の削平により、古い遺構がほとんど消滅していたが、平場Ｄ・Ｅには古墳時代以前の遺構が残存していた。特に平場Ｄには縄文時代早期の包含層が良好に堆積しており、集石遺構とともに多量の遺物が出土した。

【Ｂ区】

畑として使っていたとの話であったが、耕作土を除去すると野首第２遺跡側の緩斜面には鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積が見られ、やや下った地点からは谷筋に沿って低湿地層が広がっていた。

先行トレンチで低湿地層から中世遺物とともに木製品の破片らしきものが出土したため、人力で掘り下げを行った。土は軟弱で粘性が高く掘削には困難を極めたが、多数の遺物・自然木等が出土し、座標を記録しつつ取り上げた。地表下約１～1.7ｍで河床礫に到達したが、その下層は重機で掘り下げたところ、段丘礫や砂層が露出したため調査を終了した。

【Ｃ区】

調査当初に事務所や駐車場を設置したため、最後に調査を行った。重機を併用したトレンチ調査の結果、水田跡を検出したほか、最深部では地表より約2.5ｍ下に低湿地層を確認したが、安全や水利上の問題を考慮して、水田跡の部分のみ調査を実施した。

第３節　調査日誌抄

【確認調査】

2000.08.7～08.21　確認調査に着手するが、現況は深い藪。南端の５箇所のみトレンチ掘削。

2001.12.11　曇り。Ａ区東半部（橋台建設工事箇所）の現況確認。

12.17　雨。調査開始。

12.18　晴れ。Ａ区平場Ａ～Ｄや斜面にトレンチ設定・掘削。

12.20　晴れ。平場Ｃで造成土上に遺構を検出。

12.26　晴れ。10トレンチにて石垣最下部を確認。隅部では２ｍ以上の高さを有する。

12.27　晴れ。調査終了。

【一次調査】

2002.01.15　曇り。調査開始。

01.25　晴れ。３トレンチ周辺を掘削中に近世墓の台座と人骨を検出。

02.15　晴れ。平場Ｃにて遺構確認。造成土上に掘り込まれており作業難航。

02.19　晴れ。16トレンチの二次堆積K-Ah層下から縄文時代遺物が多数出土。散漫検出。

03.04　晴れ。平場Ｃに立っていた墓標を移設。

03.12　晴れ。平場Ｅ上の斜面にトレンチ設定・掘削。石室探し。

05.02　曇り。平場Ａ・Ｃ間の尾根状部分を断ち切ったトレンチで地山を確認。これにより土塁であることが判明。

05.07　曇り時々雨。近世墓台座の付近で黒色土のプランを確認。

05.08　晴れ。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏による人骨の実測・取り上げ。

05.09　曇り。平場Ｃのピットに配列を確認。建物跡が残存していると認識。

05.29　曇りのち晴れ。近世屋敷の空撮。モニター上で遺構記置を再確認。

06.03　晴れ。石垣の写真測量。

06.13　曇り。土塁の裾に巨礫の配列を検出。３～４段程度の石列が巡っていたものと推測。

06.19　晴れのち曇り。平場Ｄ・Ｅ間でも一部に石積を確認。橋台工事部分を引き渡し。

07.01　晴れ。平場Ｅ上部斜面の掘削。湿度が高く消耗激しい。

07.08　晴れ。谷部（Ｂ区）の伐採開始。

07.29　晴れ。Ｂ区斜面部の精査。石室探し。

08.05　晴れ。平場Ｄ遺構検出。二次堆積K-Ah層の広がりを確認。

08.07　晴れ時々雨。平場Ｄにて竪穴建物跡（ＳＡ１）を検出。

08.26　曇り。平場Ｃの近世造成土をトレンチ掘削。下層より集石遺構を検出。

09.10　晴れ。Ｂ区谷底のトレンチ調査開始。

09.11　晴れ。ＳＡ１調査中に鉄鏃・ガラス玉出土。

09.19　晴れ。ＳＡ１の北東部に新たなプラン（ＳＸ２）を確認。

10.04　晴れ。平場Ｄの空撮。

10.28　晴れ。平場Ｃのトレンチ調査にて局所的にKr-Kbの堆積を確認。

10.30　曇り。調査終了

【二次調査】

2002.11.06　晴れ。調査開始。

11.13　曇り。ＳＸ２の埋土掘削中に焼土を含むピットを確認。

11.19　晴れ。Ｂ区南半の表土除去、遺構確認。

12.05　晴れ。表土除去後の地形を平板測量。

12.09　晴れ。人力掘削に備えベルトコンベア設置。

2003.01.20　晴れ。Ａ区平場Ｃ・Ｄにて集石遺構を順次確認。

01.30　晴れ。Ｂ区低湿地層を掘削し、土器・木製品等を検出・取り上げ。

02.13　晴れ。低湿地の先行トレンチで礫層（旧河床）を確認。

02.24　雨のち晴れ。雨がちな季節で低湿地の調査がはかどらず。

02.27　雨のち晴れ。高鍋町役場農業振興課による湧水点の視察。

03.07　晴れ。日本道路公団および施工業者と水利関係の協議。

第3図　調査区・グリッド配置図

03.12　晴れ。ベルトコンベアを撤去。
03.14　曇り。B区南半にも集石遺構の分布を確認。
04.09　晴れ。A区平場Eにて馬骨を多量に含む土坑群を検出。
05.12　曇りのち雨。B区南半の集石遺構検出状況を写真撮影。
06.03　晴れ。B区低湿地の木製品等について乾燥防止のため濡れタオルで保護。
06.12　曇り。微細遺物検出のためTP1~3を設定。排土を土嚢に詰めて保管する。
06.23　曇りのち雨。降雨時の作業中断を利用してTP1～3排土の洗浄を開始。
07.02　曇り。平場Eの土器集中部にてミニチュア土器等が出土。
07.24　晴れ。A区の集石遺構は掘り込み・配石を有することが判明。
08.06　晴れ。当センター職員による調査状況の検討会実施。台風10号に備えて現場の養生。
08.11　曇りのち晴れ。7～9日にかけての台風通過で倒れ込んでいた枯木の撤去。
08.27　晴れ。田崎委員・広瀬委員による調査指導。
09.11　曇り時々雨。耐風養生。
09.19　晴れ。B区北半に先行トレンチ設定。低湿地層が広がることを確認。
09.25　晴れ。A区集石遺構の実測・写真撮影を継続。数種類のタイプに分かれる模様。
10.03　晴れ。平場Eにて検出していたプラン（SX5）にサブトレンチを掘削。
10.22　晴れ。平場C近世廃棄坑（SC14）実測。複数回の堆積を確認。
11.05　雨。土砂降りの中、泉委員による調査指導。瀬戸内系の縄文土器などについて御教示。
11.14　晴れ。A区平場D土層断面の実測と並行して谷部の堆積過程について検討。
11.25　晴れ。B区南半の河床礫層を重機で掘削。その下に砂層を確認。
2004.01.06　晴れ。平場E上方の斜面に溝状のプランや据えられたかのような礫を検出（SX4）。墓道の可能性も想定。
01.08　晴れ。日本道路公団・東九州自動車道用地事務所・文化課・当センター・高鍋町教育委員会による古墳保存に関する協議。
02.03　晴れ。野首2号墳前の包含層掘削。石室の構築材と思われる巨礫や土師器片を検出。
02.04　晴れ。B区北半も礫層を重機で掘り抜き、下に砂層を確認。
02.06　晴れ。低湿地層は湧水著しく、全面掘削は断念。トレンチ調査に切り替える。
02.09　曇り。平場Eにてさらにピット中に伏せた甕を確認（SX9）。
02.17　晴れ。SX5で口縁部を欠く土師器壺出土。
02.19　曇りのち晴れ。C区事務所駐地を重機にて掘削。地表下2.5mに低湿地層を確認。
02.25　曇り。SXに関する文化課・当センターの協議。
03.23　曇り。SX等の実測・写真撮影を継続。
03.29　曇り時々雨。調査終了。

【二次調査】
2004.06.01　晴れ。調査開始。
06.03　曇り時々雨。A区古墳周辺の遺構確認。溝状のプラン（SX6～8）を検出。
06.07　晴れ。C区遺構確認。前年度確認されていた畦畔の続きを検出。
06.09　晴れ。SX8精査中、礫と共に近世陶磁器が出土。解釈に悩む。
06.14　晴れ。C区畦畔の検出と並行して、造成土の堆積を確認するトレンチ設定。
06.22　晴れ。A区のSX周辺ピットを精査。想像以上に深い。
07.09　晴れ時々雨。SX6～8の遺存状況等について文化課と協議。
07.21　晴れ。A区空撮に向けて精査中、新たなプランを確認。SX10とする。
07.26　晴れ。出土瓦の計量。C区埋め戻し。
07.27　晴れ時々曇り。A区空撮。天候不安定につき苦戦。
08.04　晴れ。SX8精査中に近世遺構の切り合いを確認。SX11とする。
08.06　晴れ。調査終了。

第4図　確認トレンチ配置図

第４節　整理作業および報告書作成

整理作業は平成14年度から調査事務所に整理作業所を設置し、遺物水洗・注記を開始した。

ほとんどの遺物は注記が終了したものからコンテナへ詰め、調査終了時に埋蔵文化財センターに搬送したが、例外としてＡ区平場Ｃを中心に1.8ｔ近く出土した近世～近代の瓦については、その膨大な量に鑑み、現地で調査と平行して計量し、持ち帰り分を選別した後に廃棄した。

また34基検出された縄文時代早期の集石遺構についても、残存状態が比較的良好と判断したもののうち、形態差等を考慮しつつ選択した11基について構成礫を計量した後、特徴的な組成を示すと考えられる１基分（５号集石遺構）のみ持ち帰り、残りは廃棄した。

その他、後述するように二次堆積K-Ahを中心として微細な砕片が多数含まれていたため、３箇所を選択して土をサンプリングし、現地の湧き水を利用して洗浄選別を試みた。抽出された砕片については、金属顕微鏡を用いた肉眼選別で石材・サイズごとに集計を行っている。

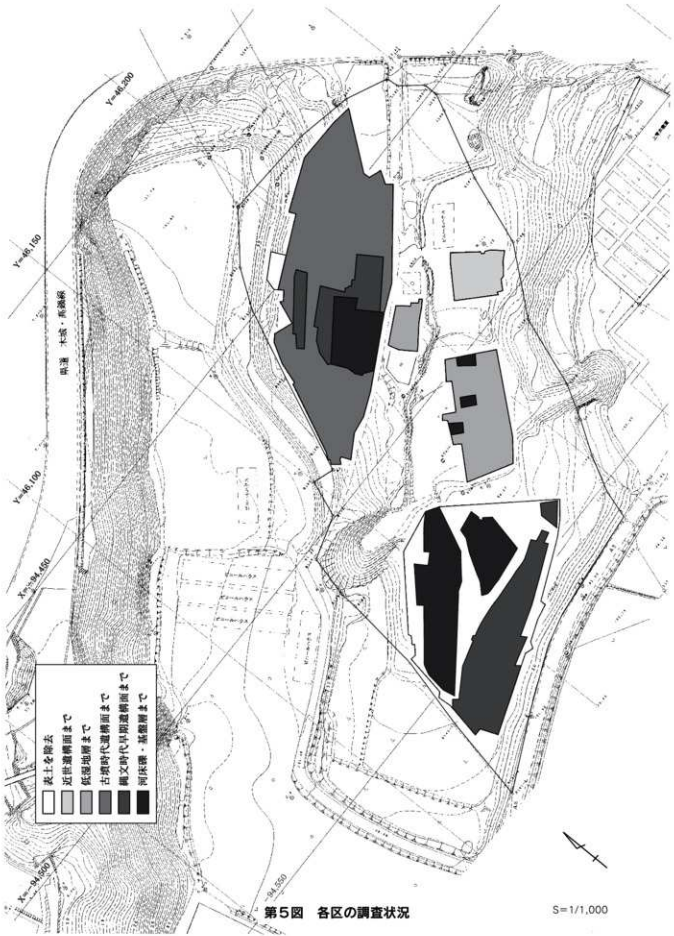
埋蔵文化財センターでの整理作業は平成16～18年度にかけて実施し、特に近世陶磁器類については破片全点の分類を行い集計した。その際には組成等の比較を容易にするため、都城市八幡遺跡で使用した分類法（宮崎県埋蔵文化財センター2001）を基本的に踏襲している。

また石鏃をはじめ表面が微細な剥離面で埋め尽くされる石器117点については、整理作業の効率化を図るため実測を、木製品のうち比較的残存良好な15点については保存処理（糖アルコール法）と実測を委託した。

報告書作成は平成17年～18年にかけて、図表の作成と本文執筆、遺物写真撮影を行った。

No.	場　所	目的等
H12T1～5	B区南西端	遺物包含層の有無
1	A区平場A・B間斜面	石室の有無・土層堆積状況
2･3	A区平場A上部斜面	〃
4～6	A区平場C	近世遺構の有無
7	A区平場D	〃
8	A区平場C	〃
9	A区平場A・B間斜面	石室の有無・土層堆積状況
10･11	A区石垣裾部	石垣下部構造・谷部堆積状況
12	A区平場C	土層堆積状況
13･14	A区平場B	近世遺構の有無
15	A区平場C・E間斜面	石室の有無・土層堆積状況
16･17	A区平場D	土層堆積状況
18	A区石垣裾部	石垣下部構造・谷部堆積状況
19	A区平場C・E間斜面	近世墓付近の状況
20～22	A区平場E上部斜面	石室の有無・土層堆積状況
23	A区平場E	土層堆積状況
24	A区平場C・E間斜面	石室の有無・土層堆積状況
25	A区平場C	近世遺構の有無
26	〃	造成土の堆積状況
27	A区石垣裾部	石垣下部構造・谷部堆積状況
28	〃	18と連結
29	A区平場C	25と同一箇所、下層の確認
30	〃	造成土下層の確認
31	〃	造成土の堆積状況
32～34	A区平場D・E間斜面	石室の有無・土層堆積状況
35～37	A区平場E上部斜面	〃
38･39	欠番	
40	A区平場C	造成土下層の確認
41～44	B区南半	土層堆積状況
45～47	B区南端斜面	町道下部の土層堆積状況
48～52	B区南半	土層堆積状況
53～55	B区西端斜面	〃
56～63	B区南半	〃
64～69	B区北半	〃
70～73	B区東端斜面	石室の有無・土層堆積状況
74･75	B区北端斜面	石室の有無・土層堆積状況
76	平場E上部斜面	段切りの状況
77	平場C・E間斜面	〃
78	平場E上部斜面	〃
79～83	B区北半	旧地形確認
84～90	C区	近世遺構の有無・土層堆積状況
91	A区平場A	土層堆積状況

第１表　確認トレンチ一覧表



第5図　各区の調査状況　　S=1/1,000

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　基本層序

本遺跡の層序は各時代における改変が著しい上、地形の影響により本来の堆積状態も不安定である。よって両丘陵上の野首第１遺跡（県道）・野首第２遺跡の基本層序に比定することはおろか、遺跡内での対応を取ることも難しい。

上述したような状況を受けて、旧地形や堆積の経過を推定可能とするため、谷の傾斜に平行あるいは直行する８本の長いトレンチを設定し、その壁面で土層観察を行った（第６～８図）。

それぞれのトレンチにおける堆積は様々だが、大枠でとらえるならば第２・３表のように９層に整理できると考えている。

この中で確認できた最も古いテフラはKr-Kb（Ⅶ層中に存在）であり、本遺跡の存在する谷はその降灰直前に離水したと推定される。特にＡラインではKr-Kbを含む層の直下に水の影響を受けたと見られる層（Ａライン21層）が堆積していることも、それを裏付けるであろう。ただしⅦ層の存在は局所的で谷筋に溜まったような状況であること、Ｂ区ドラインではⅦ層と近い時期に土石流のような堆積（ドライン９層）があることから、安定した環境ではなかったと推測される。

続く縄文時代早期の包含層（Ⅵ層）は非常に厚く、Ａラインの西側では最大130㎝を測る。これをⅥa～eの５層に細別したが、Ａ区のⅥb層は散礫を多量に含む層であり、集石遺構はこの層下位ないし直下（Ⅵc層上面）で検出された。第Ⅴ章で触れるが、これらの層を形成するかなりの量の土砂は人為に由来する可能性がある。

またＡ区平場Ｄの35号集石遺構付近（Ａライン西側周辺）で、桜島薩摩テフラ（Sz-S）を確認したが、小さな窪地のみに溜まったかのような極めて局所的な堆積で、帰属する層序が確認できなかった。よって基本層序には含めていない。

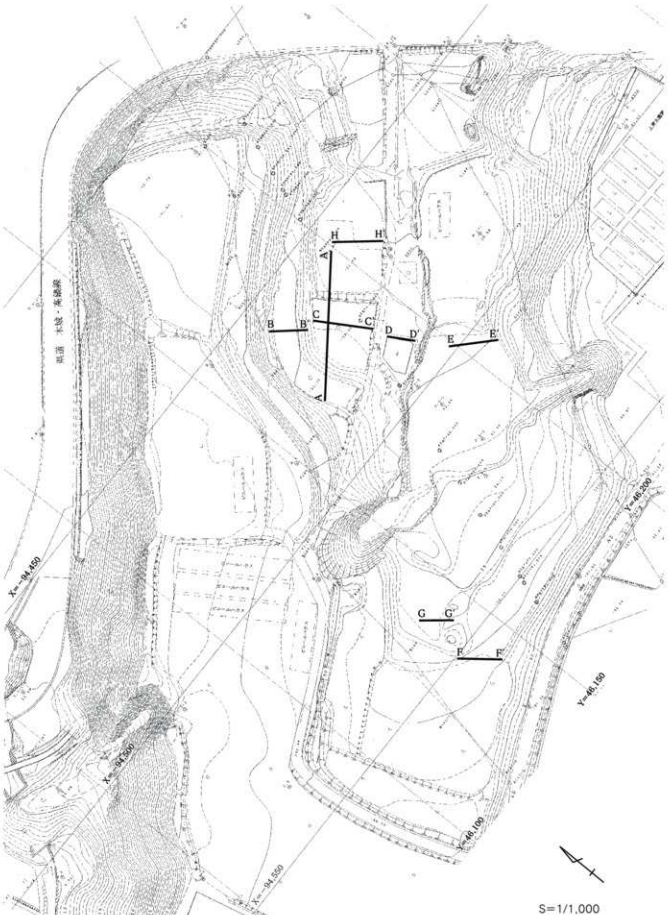
Ⅳ層にはK-Ah（Ⅴ層）降灰後の自然堆積を一括した。Ⅳb～d層は低湿地に由来する層で、特に地下水位の高かったＢ区で良好な堆積が見られた。

この層からは多量の木製品・自然木が出土したが、それらの放射性炭素年代測定及び周辺から出土した遺物より、古代～中世を中心に堆積したものと

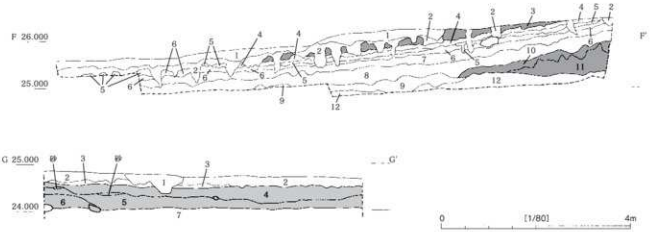
層	A区平場C・D・E（Aライン）	A区平場E（Bライン）	A区平場D（Cライン）	A区平場C（Hライン）
Ⅰ	01　表土	01　表土		
Ⅱ				
Ⅲ	02　近世遺成土１ 03　近世遺成土２ 04　近世遺成土３ 05　近世遺成土４ 06　近世遺成土５ 07　近世遺成土６ 08　近世遺成土７ 09　近世遺成土８	02　近世遺成土１ 03　近世遺成土２ 04　近世遺成土３ 05　近世遺成土４		01　近世遺成土１ 02　近世遺成土２ 03　近世遺成土３ 04　近世遺成土４ 05　近世遺成土５ 06　近世遺成土６ 07　近世遺成土７ 08　近世遺成土８
Ⅳ	a 10　クロボク	a 06　クロボク		
Ⅴ	a 11　K-Ah（二次）１ b 12　K-Ah（二次）２ c 13　K-Ah（二次）３ d 14　K-Ah（二次）４	a 07　K-Ah（二次）１ b 08　K-Ah（二次）２	a 01　K-Ah（二次）１ c 02　K-Ah（二次）２	a 09　K-Ah（二次）
Ⅵ	a 15　縄文早期１ b 16　縄文早期２ ● c 17　縄文早期３ ● d 18　縄文早期４ e 19　縄文早期５	a 09　縄文早期１ b 10　縄文早期２ c 11　縄文早期３ d 12　縄文早期４ e 13　縄文早期５	a 03　縄文早期１ b 04　縄文早期２ ● c 05　縄文早期３ ● d 06　縄文早期４ e 07　縄文早期５	a 10　縄文早期１ b 11　縄文早期２ ●
Ⅶ				
Ⅷ	20　Kr-Kb 21　暗褐色土		08　Kr-Kb	12　Kr-Kb
Ⅸ	22以下　礫層・砂層		09　礫層	13以下　礫層・砂層

第２表　基本層序（Ａ区）

※●は集石遺構検出層



第６図　土層断面実測位置図



【B区斜面（Fライン）】

1 黒色土（7.5YR2/1） 1mm以下のK-Ah粒子を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
2 黒色土（7.5YR2/1） 1層とほぼ同質の土の中に、3cm以下のK-Ahブロック・粒子を多量に含む。しまりやや弱く、粘性弱い。K-Ah堆積以後の浸食に伴う。
3 明褐色土（7.5YR5/8） K-Ah層。不純物少なく土色は鮮やかだが、粒径は揃っておらず、一次堆積ではない可能性がある。しまりやや弱く、粘性無し。
4 黒褐色土（7.5YR2/2） 3mm以下のK-Ah粒子・白色粒子を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。MB0。
5 黒褐色土（7.5YR2/2） 1mm以下の黄橙色・白色粒子を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。MB0。
6 極暗褐色土（7.5YR2/3） 5層の土と7層の土が混じり合い、土色やや明るい。しまりやや強く、粘性やや弱い。漸移層。
7 褐色土（7.5YR4/6） 5mm以下の黄褐色粒子・礫をごく微量含む。しまり強く、粘性やや強い。
8 暗褐色土（7.5YR3/3） 3cm以下の褐色土ブロックを少量含み、斑状。1cm以下の礫・3mm以下の黄褐色粒子を少量含む。しまり強く、粘性やや強い。ML1に相当する可能性が高い。
9 褐色土（7.5YR4/4） 50cm以下の礫を多量に含む。しまり強く、粘性弱い。土石流の痕跡か？
10 暗褐色土（7.5YR3/4） 11層のブロックをまばらに含む。しまりやや強く、粘性弱い。
11 黒褐色土（7.5YR3/2） Kr-Kb粒子をごく多量に含む。しまり強く、粘性弱い。
12 明褐色土（7.5YR5/8） 30cm以下の礫をごく多量に含む。しまり・粘性弱い。

【B区南半低湿地（Gライン）】

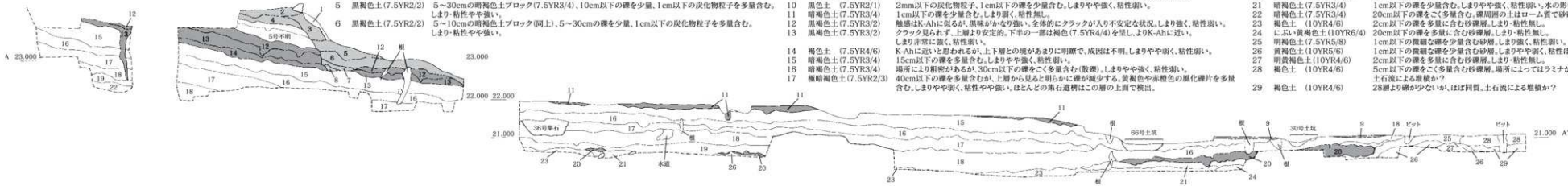
1 Aライン1層と同じ。
2 Eライン2層と同じ。
3 Eライン3層と同じ。
4 Eライン4層と同じ。
5 Eライン7層と同じ。
6 Eライン8層と同じ
7 Eライン12層と同じ

第7図　土層断面図（1）

層	B区斜面（Dライン）	B区北半低湿地（Eライン）	B区斜面（Fライン）	B区南半低湿地（Gライン）
Ⅰ	01 里道	01 表土		01 表土
Ⅱ	02 現代造成土	02 近・現代耕作土1		02 近・現代耕作土1
	03 現代貯水漕関連	03 近・現代耕作土2		03 近・現代耕作土2
Ⅲ	04 近世造成土1			
	05 近世造成土2			
	06 近世造成土3			
Ⅳ	b07 低湿地1	b04 低湿地1	a01 クロボク	b04 低湿地1
	c08 低湿地2	〃05 低湿地2	02 浸食痕	c05 低湿地2
	d09 低湿地3	c06 低湿地3		〃06 低湿地3
		〃07 低湿地4		
		〃08 低湿地5		
		〃09 低湿地6		
		d10 低湿地7		
Ⅴ			c03 K-Ah（二次）	
Ⅵ			04 MB01	
			05 MB02	
			06 MB03 ●	
			07 褐色土 ●	
Ⅶ			08 ML1相当	
			09 土石流？	
Ⅷ			10 Kr-Kb 1	
			11 Kr-Kb 2	
Ⅸ	10 礫層	11 河床礫（以下礫層）	12 礫層	07 河床礫（以下礫層）

第3表　基本層序（B区）

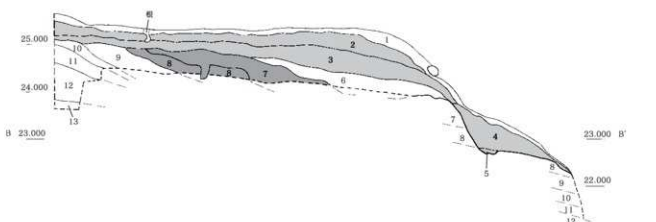
※●は集石遺構検出層



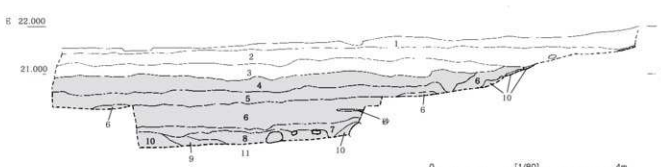
【A区平場C・D・E（Aライン）】
1　黒褐色土（7.5YR2/2）　竹根が入り込みフカフカ，しまり・粘性なし。
2　黒褐色土（7.5YR2/2）　5mm以下の焼土・炭化物粒子，1cm以下の礫を少量含む。しまり強く，粘性弱い。
3　黒褐色土（7.5YR2/2）　暗褐色土（7.5YR3/4）が混じり，やや赤みがかる。5～30cmの礫を少量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
4　黒褐色土（7.5YR2/2）　5～20cmの礫を少量含む。しまり・粘性やや強い。
5　黒褐色土（7.5YR2/2）　5～30cmの暗褐色土ブロック（7.5YR3/4），10cm以下の礫を少量、1cm以下の炭化物粒子を多量含む。しまり・粘性やや強い。
6　黒褐色土（7.5YR2/2）　5～10cmの暗褐色土ブロック（同上），5～30cmの礫を少量，1cm以下の炭化物粒子を多量含む。しまり・粘性やや強い。

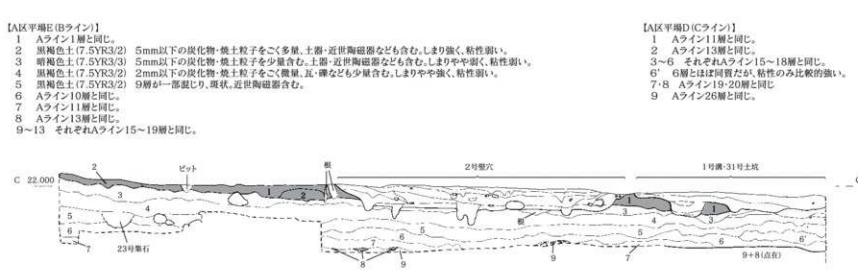
7　暗褐色土（7.5YR3/3）　K-Ah（二次）ブロックが西端に混じるほか、5mm以下の炭化物粒子を少量含む。しまり・粘性弱い。
8　黒褐色土（7.5YR2/2）　全体的に13・14層の土が混じり斑状，しまり・粘性やや弱い。
9　暗褐色土（7.5YR3/4）　5cm以下の礫，1mm以下の白色・黄色粒子・炭化物粒子を少量含む。しまり強く，粘性弱い。
10　黒色土　（7.5YR2/1）　2mm以下の炭化物粒子，1cm以下の礫を少量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
11　暗褐色土（7.5YR3/4）　1cm以下の礫を少量含む。しまり弱く，粘性無し。
12　黒褐色土（7.5YR3/2）　触感はK-Ahに似るが，黒味がかなり強い。全体的にクラックが入り不安定な状況，しまり強く，粘性弱い。
13　黒褐色土（7.5YR3/2）　クラック見られず，上層より安定的。下半の一部は褐色（7.5YR4/4）を呈し，よりK-Ahに近い。しまり非常に強く，粘性弱い。
14　褐色土　（7.5YR4/6）　K-Ahに近い土思われるが，上下層との境があまりに明瞭で，成因は不明。しまりやや弱く，粘性弱い。
15　暗褐色土（7.5YR3/4）　15cm以下の礫を多量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
16　暗褐色土（7.5YR3/4）　場所により粗密があるが，30cm以下の礫をごく多量含む（散礫）。しまりやや強く，粘性弱い。
17　極暗褐色土（7.5YR2/3）　40cm以下の礫を多量含むが，上層から見ると明らかに礫が減少する。黄褐色や赤橙色の風化礫片を多量含む。しまりやや弱く、粘性やや強い。ほとんどの集石遺構はこの層の上面で検出。

18　黒褐色土（7.5YR2/2）　全体的に見ると左記の色調であるが，ムラがあり数種類の土が混ざっている印象。しまり強く，粘性やや弱い。
19　黒褐色土（7.5YR2/2）　土質は18層とほぼ同じだが，やや黒味強く，粘性も強い。
20　極暗褐色土（7.5YR2/3）　50%程度はKr-Kbを含むブロックが入ってより，ムラが大きい。しまり非常に強く，粘性無し。
21　暗褐色土（7.5YR3/4）　1cm以下の礫を少量含む。しまりやや強く，粘性弱い。水の影響で土質が変質しているように見える。
22　暗褐色土（7.5YR3/4）　20cm以下の礫をごく多量含む。礫周囲の土はローム質で砂礫層ではない。しまり・粘性やや強い。
23　褐色土　（10YR4/6）　2cm以下の礫を多量に含む砂礫層。しまり・粘性無し。
24　にぶい黄褐色土（10YR6/4）　20cm以下の礫を多量に含む砂礫層。しまり・粘性無し。
25　明褐色土（7.5YR5/8）　1cm以下の微細な礫を少量含む砂層。しまり強く，粘性弱い。
26　黄褐色土（10YR5/6）　1cm以下の微細な礫を少量含む砂層。しまりやや弱く，粘性はとんど無し。
27　明黄褐色土（10YR4/6）　2cm以下の礫を多量に含む砂礫層。しまり・粘性無し。
28　褐色土　（10YR4/6）　5cm以下の礫をごく多量含む砂礫層，場所によってはラミナが顕察される。しまり・粘性無し。土石流による堆積か？
29　褐色土　（10YR4/6）　28層より礫が少ないが，ほぼ同質。土石流による堆積か？

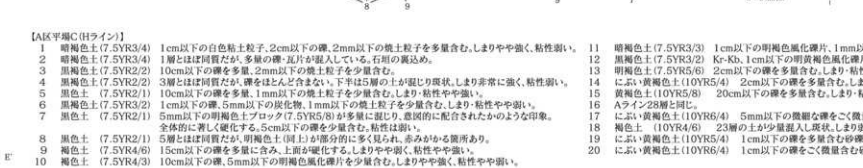


【B区北半低湿地（Eライン）】
1　Aライン1層と同じ。
2　黒褐色土（7.5YR2/2）　1層よりやや暗い色調。10cm以下の礫を少量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
3　黒褐色土（7.5YR2/2）　鉄・マンガンの析出が見られるほか，下部に黒色土ブロック（10YR2/2）が混じり，斑状。10cm以下の礫を少量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
4　黒褐色土（7.5YR2/2）　3層より弱いが，鉄・マンガンの析出あり。しまり・粘性やや強い。
5　黒色土　（7.5YR2/1）　土質は4層に似るが，土色やや暗く，粘性が非常に強い。
6　黒色土　（7.5YR1.7/1）木質を含む低湿地層。しまり・粘性やや強い。
7　黒色土　（7.5YR1.7/1）全体的に砂混じりでざらつく。土色は黒味強い。土器や多量の木質を含む。しまりやや強く，粘性やや弱い。
8　黒色土　（7.5YR2/1）　土色やや明るく，黄味がかる。土器や多量の木質を含む。しまりやや弱く，粘性非常に強い。
9　黒褐色土（7.5YR2/2）　5～50cmの礫をまばらに含む。場所によってはローム質を呈する。縄文～古墳時代の遺物を含む。しまりやや強く，粘性強い。
10　黒褐色土（7.5YR2/2）　9層とほぼ同質だが，粘性が非常に強い。
11　5～50cmの周縁礫，この下には礫層があり，さらに下は砂層が確認できる。



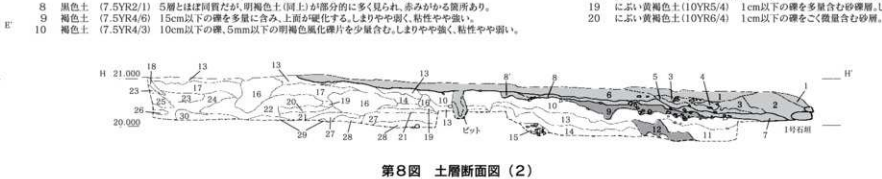


【A区平場D（Cライン）】
1　Aライン11層と同じ。
2　Aライン13層と同じ。
3～6　それぞれAライン15～18層と同じ。
6'　6層とほぼ同質だが，粘性のみ比較的強い。
7・8　Aライン19・20層と同じ
9　Aライン26層と同じ。



【A区平場E（Bライン）】
1　Aライン1層と同じ。
2　黒褐色土（7.5YR3/2）　5mm以下の炭化物・焼土粒子をごく多量、土器・近世陶磁器なども含む。しまり強く，粘性弱い。
3　暗褐色土（7.5YR3/3）　5mm以下の炭化物・焼土粒子を少量含む。土器・近世陶磁器などを含む。しまりやや弱く，粘性弱い。
4　黒褐色土（7.5YR3/2）　2mm以下の炭化物・焼土粒子をごく微量、瓦・礫なども少量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
5　黒褐色土（7.5YR3/2）　9層が一部混じり，斑状，近世陶磁器含む。
6　Aライン10層と同じ。
7　Aライン11層と同じ。
8　Aライン13層と同じ。
9～13　それぞれAライン15～19層と同じ。

【A区平場C（Hライン）】
1　暗褐色土（7.5YR3/4）　1cm以下の白色粘土粒子，2cm以下の礫，2mm以下の焼土粒子を多量含む。しまりやや強く，粘性弱い。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　1層とほぼ同質だが，多量の礫・瓦片が混入している。石垣の裏込め。
3　黒褐色土（7.5YR2/2）　10cm以下の礫を多量，2mm以下の焼土粒子を少量含む。
4　黒褐色土（7.5YR2/2）　3層とほぼ同質だが，礫をほとんど含まない，下半は5層の土が混じり斑状，しまり非常に強く，粘性弱い。
5　黒色土　（7.5YR2/1）　10cm以下の礫を多量，1mm以下の焼土粒子を少量含む。しまり・粘性やや強い。
6　黒褐色土（7.5YR3/2）　1cm以下の礫，5mm以下の炭化物，1mm以下の焼土粒子を少量含む。しまり・粘性やや弱い。
7　黒色土　（7.5YR2/1）　5mm以下の明褐色土ブロック（7.5YR5/8）が多量に混じり，意図的に配置されたかのような印象。全体的に著しく硬化する。5cm以下の礫を少量含む。粘性は弱い。
8　黒色土　（7.5YR2/1）　5層とほぼ同質だが，明褐色土（同上）が部分的に多く見られ，赤みがかる箇所あり。
9　褐色土　（7.5YR4/6）　15cm以下の礫を多量に含み，上面が硬化する。しまりやや弱く，粘性やや強い。
10　褐色土　（7.5YR4/3）　10cm以下の礫，5mm以下の明褐色風化礫片を少量含む。しまりやや強く，粘性やや弱い。
11　暗褐色土（7.5YR3/3）　1cm以下の明褐色風化礫片，1mm以下の炭化物粒子を少量含む。しまり強く，粘性やや強い。
12　黒褐色土（7.5YR3/2）　Kr-Kb，1cm以下の明黄褐色風化礫片を含む。しまり強く，粘性やや強い。
13　明褐色土（7.5YR5/6）　2cm以下の礫を多量含む。しまり・粘性やや強い。
14　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　2cm以下の礫を多量含む。しまりやや強く，粘性強い。
15　黄褐色土（10YR5/8）　20cm以下の礫を多量含む。しまり・粘性やや強い。
16　Aライン28層と同じ。
17　にぶい黄褐色土（10YR6/4）　5mm以下の微細な礫をごく微量含む砂層。しまりやや強く，粘性無し。
18　褐色土　（10YR4/6）　23層の土が少量混入し斑状。しまり弱く，粘性やや強い。
19　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　1cm以下の礫を多量含む砂礫層。しまり弱く，粘性無し。
20　にぶい黄褐色土（10YR6/4）　1cm以下の礫をごく微量含む砂層。
21　褐色土　（10YR4/4）　1cm以下の礫をごく多量含む砂礫層。しまりやや強く，粘性無し。
22　Aライン29層と同じ。
23　にぶい黄褐色土（10YR7/4）　礫を全く含まない砂層。しまり弱く，粘性無し。
24　にぶい黄褐色土　（10YR6/4）　1cm以下の礫をごく微量含む砂層。しまりやや強く，粘性無し。
25　黄褐色土（10YR5/6）　2cm以下の礫をごく多量に含む，礫の隙間に土がある印象。しまり非常に強く，粘性無し。
26　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　1cm以下の礫を多量含む。しまりやや弱く，粘性無し。
27　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　1cm以下の礫をごく微量含む砂層。しまり弱く，粘性無し。
28　黄褐色土（10YR5/6）　2cm以下の礫をごく多量含む。しまりやや強く，粘性無し。
29　明褐色土（10YR5/8）　2cm以下の礫をごく多量含む。しまり非常に強く，粘性無し。
30　明褐色土（10YR5/8）　29層とほぼ同質だが，礫がやや少ない。



【B区斜面（Dライン）】
1　暗褐色土（7.5YR3/4）　現在の里道の土，しまり非常に強く，粘性やや強い。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）と黒褐色土（7.5YR3/1）の互層，しまり非常に強く，粘性やや強い。
3　1・2層の土が混ざり，斑状，貯水槽構築時の掘削・埋め戻しに伴う。
4　黒褐色土（7.5YR2/2）　暗褐色土ブロック（7.5YR3/4）を少量含み，斑状，しまり・粘性やや強い。
5　Aライン6層と同じ。
6　黒褐色土（7.5YR2/2）　2mm以下の炭化物・焼土粒子を多量含む。しまり強く，粘性やや弱い。
7　黒褐色土（7.5YR3/1）　全体的には左記の色調だが，黒褐色土（7.5YR2/2）が混じり，色ムラあり。部分的に鉄ないしマンガンの析出が確認できる。しまり弱く，粘性強い。
8　Eライン6層と同じ。
9　Eライン9層と同じ。
10　褐色土（7.5YR4/4）　30cm以下の礫を多量含む。しまり強く，粘性やや弱い。

第8図　土層断面図（2）

第２節　旧石器時代の遺物

１．概要

前節で触れたように少なくとも谷の斜面部についてはKr-Kb降灰直前に陸地化していたようであるが，礫群などの遺構は全く確認できず，遺物もごく少数しか出土していない。

遺物の出土状況を見ても散漫で，いずれも単独出土である。谷を挟んだ両丘陵上の野首第１遺跡（県道）・野首第２遺跡には姶良Tn火山灰（AT）降灰以前から生活の痕跡が認められるため，これらの場所から斜面を流れ落ちてきた可能性が高い。

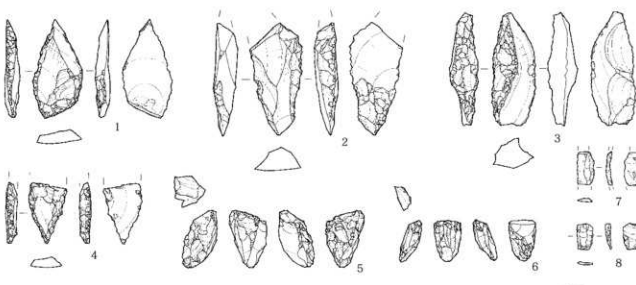
２．遺物（第９図）

取り上げた石器について全点観察したにもかかわらず，旧石器に属すると判断しえた遺物は以下の８点のみである。石材は桑ノ木津留・腰岳産の黒曜石がやや目立つが，全体としては８点の石器で５種の石材が確認でき，ばらついている印象が強い。

１～３はナイフ形石器である。３は形態がかなり歪であるが，唯一横長剥片を素材としたことが明らかであり注目される。

５・６は細石刃核だが，いずれも礫面が確認できることから，当初より小さな原礫を用いたことが分かる。打面調整は行わず，打面と作業面とがなす角度はかなり鋭角になっている。

７・８は主剥離面が押圧剥離によると判断されることや，形態から細石刃の可能性があるとみた。ただし５・６の作業面に残されたネガ面から想定される細石刃のサイズよりかなり大きく，また石材が異なるという問題があり，縄文時代以降の石器（例えば石鏃の調整剥片）である可能性も残されている。



第９図　旧石器実測図

No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
1	B4	ナイフ形石器	チャート	3.85	2.00	0.60	4.5	素材打面を基部とする。二側縁加工。
2	C6	ナイフ形石器	流（白）	4.45	2.00	1.95	8.3	先端部を欠損。二側縁加工。
3	B区	ナイフ形石器	流（黒）	4.50	1.75	1.15	7.1	歪な横長剥片素材。取り上げNo.2198。
4	52トレンチ	台形石器	黒（桑）	2.45	1.55	0.45	1.5	先端部は欠損の可能性あり。
5	4トレンチ	細石刃核	黒（桑）	2.30	1.50	1.40	3.5	打面調整なし。礫面を残す。
6	I5	細石刃核	黒（桑）	1.60	1.05	0.70	1.3	打面調整なし。礫面を残す。
7	B5	細石刃？	黒（腰）	1.30	0.70	0.20	0.1	両端を欠損。
8	D6　Ⅵb	細石刃？	黒（腰）	1.00	0.60	0.20	0.1	下端部に微細な調整あり。

第４表　旧石器観察表　※最大長・幅・厚の単位はcm，重量はg
石材の「流」は流紋岩，「黒」は黒曜石を表す

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１．概要

調査区のうち、Ａ区の西半（平場Ｃの一部及び平場Ｄ・Ｅ）及びＢ区南半の斜面に当該期の包含層が残存していた。前者は野首第１遺跡（県道）、後者は野首第２遺跡の隣接地である。遺物は草創期以外の時期を通じて出土しているが、特に早期・前期・後期の出土量が目立ち、総量と比較して多様性に富むのが特徴となっている。遺構はいずれも早期に属するものであった。特に集石遺構について、野首第１遺跡（県道）・崩戸遺跡も合わせて平面分布をプロットしたのが第10図である。これを見る限り、集石遺構の分布には粗密があり、幾つかのまとまりとして存在しているかのような印象を受ける。

【Ａ区西半】

ほぼ全面に二次堆積のK-Ah層（Ⅴ層）が堆積していた。この層は野首第１遺跡（県道）から流れ込んで堆積したものと考えられ、第Ⅴ章で触れるように多量の微細遺物を包含していた。

Ⅵａ層を掘削し始めると一面に赤化礫が広がる状態であったが、先行トレンチでの堆積状況や平面分布を検討した結果、流れ込んできた礫がほとんどであると判断し、分布状況等の実測は行わずにⅥａ層を「散礫を含む層」として記録することとした。これらの礫を取り除くと、集石遺構が検出されはじめた（第11図）。集石遺構は全て平場Ｃ・Ｄに残存しており、平場Ｅには１基も無かった。平場は近世以降に造成されたものであり、集石遺構が構築された当時、平場Ｅは斜面地であったためと推測される。

最終的に24基を認定したが、上述の散礫が特に密集していた平場Ｄ北西隅（35～39号集石遺構付近）では集石遺構に伴う礫を少なからず除去してしまい、礫の平面分布が明らかでないものがある。

集石遺構は３～４箇所のまとまりを作って分布しているようにも見え、その空白地には当初認識していなかったが、地山の乾燥とともにピットのプランが浮かび上がってきた。ピットの埋土はK-Ahブロックを含み、粘性がわずかに弱いという点で地山と区別できると判断し、掘りあげた。ただしこれらが全て人為によるものかは不明とせざるを得ない。

第１節で述べたように早期包含層は最大で130cmも堆積するなど、周辺遺跡と比較しても異例の厚さであった。これを５層に細別して（Ⅵａ～Ⅵｅ層）掘り下げた。集石遺構のほとんどはⅥｂ層下位からⅥｃ層上面にかけて検出されたが、遺構および包含層の出土遺物中には流れ込みと考えられる土器も多く、層位と出土土器の型式が対応するかどうか問題を孕んでいた。最終的にはⅥｃ層から粗大な楕円押型文・原体条痕を施すⅣｂ類土器が出土することが判明した。これら堆積や遺物出土の状況と放射性炭素年代測定結果を合わせて第Ⅴ章で検討する。

前期・中期・後期の土器も比較的多量に出土し、特に後期の土器はバリエーションが豊富な一方で、ⅩⅠ類土器はほとんど出土しておらず、後述するＢ区の様相とは著しい対照をみせる。

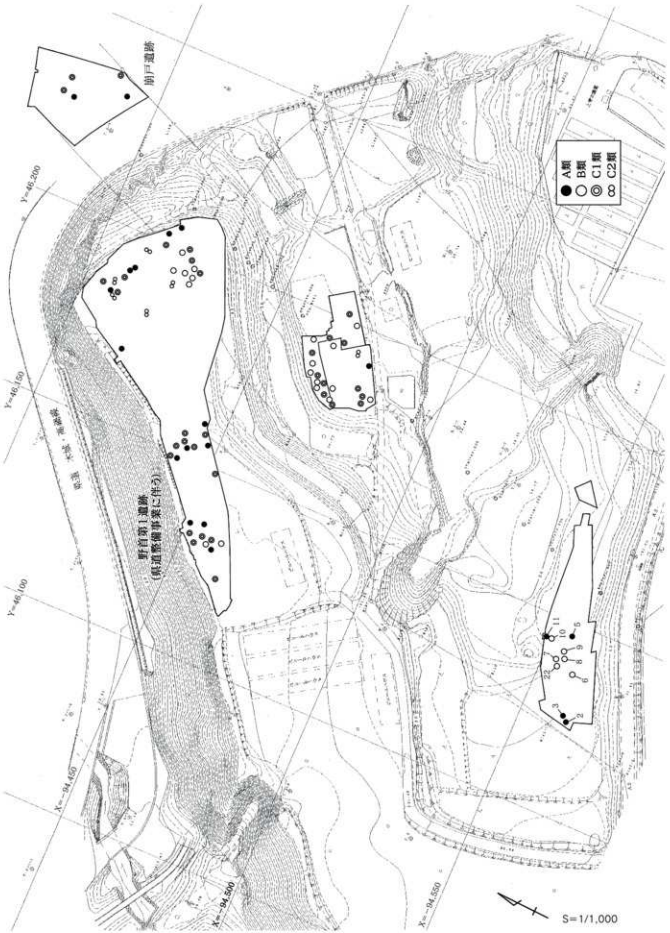
【Ｂ区南半】

調査区の中では堆積が比較的安定しており、一部の層を除くと丘陵上の層序と対比が可能であった。

Ⅴ層（K-Ah）上面で遺構確認を行ったところ、全面に黒色のシミが広がっていた。当初はピット群と考えて精査を行っていたが、遺物はほとんど出土せず、また土層断面で確認したところ、最終的には侵食痕の可能性が高いと判断した。

Ⅳ層中ではほぼⅪ類土器ばかりが数百点出土したが、平面分布状況や遺存度より野首第２遺跡側からの流れ込みの可能性が高い。現段階では１点のみだが、本遺跡の土器（第22図101）が野首第２遺跡の資料と接合しており、その傍証となるであろう。

Ⅲ層（MB０）は散礫を含まず、堆積も丘陵上で通有に見られるよりやや厚い程度であった。この層の下位からⅦ層上面にかけて集石遺構10基を検出したが、配石を有するものは確認していない（第10図）。また土層観察ベルトにかかり、炭化材が出土した集石遺構があったため（８号集石遺構など）、第Ⅴ章で構築面と検出面の問題について検討した。



第10図　集石遺構分布図

2．集石遺構（注記記号：SI）

集石遺構の掲載にあたり、野首第１遺跡（県道）との比較を容易にする意味で同じ分類を採用することとした。その各タイプは以下のとおりである。

A類：掘り込み、配石をともに持たない。
B類：掘り込みはあるが、配石を持たない。
C類：掘り込み、配石をともに持つ。
　C１類：単独で検出されたもの。
　C２類：２基が切り合って（または非常に近接）検出されたもの。

また比較的残存良好と判断した集石遺構のうち、形態差等も加味して11基を選択し、構成礫の石材・サイズ別に計量を行った（第６・７表）。

A類：

２・３・５・11・31号集石遺構が該当する。ほとんどがB区で検出された。小規模で礫の破砕や埋土中の炭化物は確認できていない。

【２・３号集石遺構】（第12図）

B区の最南端で近接して検出された。規模や礫の形状も似通っており、時期や用途が同じである可能性は高い。

【５号集石遺構】（第12図）

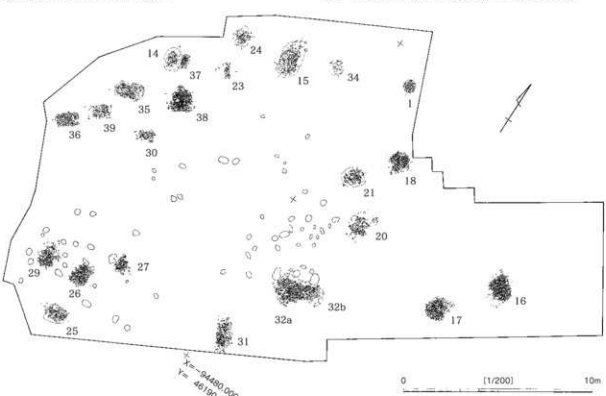
B区南半斜面の中腹で単独検出された。２・３号集石遺構と比較すると礫が際だって大きい。北西側に向けて礫が散らばっているが、傾斜に沿って礫が流れている可能性がある。

【11号集石遺構】（第12図）

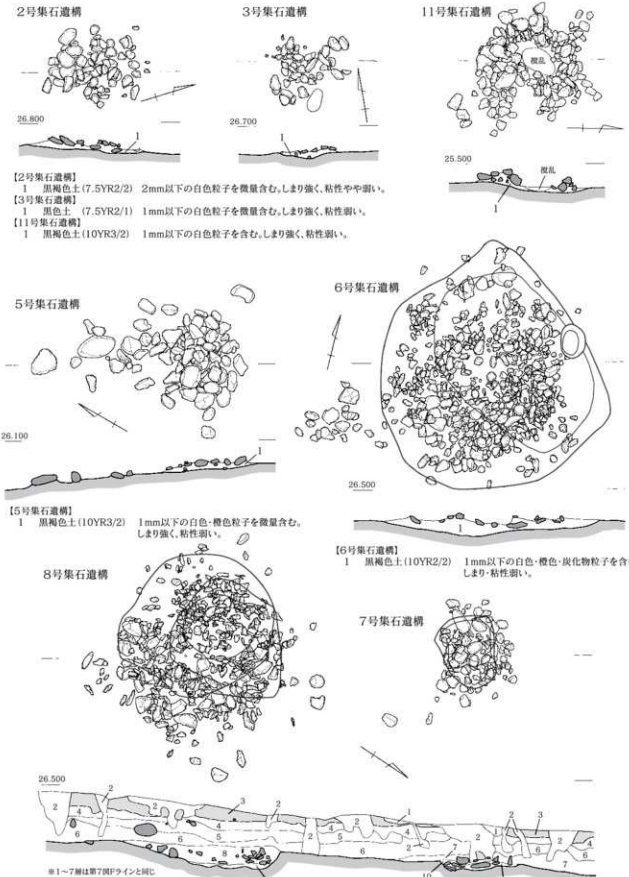
B区南半では検出レベルが最も低く、低湿地のすぐ際で検出された。中央部を後世に攪乱されているため、構造に一部不明な部分があるが、礫の形状・サイズはよく揃い、密集している印象を受ける。

【31号集石遺構】（第17図）

A区の谷筋寄りで検出された。土層確認のトレンチにかかっており、西側の礫が一部欠損している。比較的小さな角礫が目立つ中、中央付近にひときわ大きな扁平礫が入っている。配石とまでは言えないが、何らかの意図で置かれた可能性もある。



第11図　A区縄文時代早期遺構分布図



第12図 集石遺構実測図（1）

B類：

1・6～10・14・15・17・21・22・24・25・30・37・39号集石遺構が該当する。本遺跡の集石遺構で最も多く見られるのがこのタイプである。特にB区南半ではこのタイプだけの集中域がある。

【1号集石遺構】（第13図）

A区西半で検出された集石遺構中では最も北東に位置する。小規模な平面形の割には深く、はっきりとした掘り込みを伴い、礫の形状・サイズもばらつきが大きい。陶磁器等が混入している訳ではないが、周辺は段切り造成の後に近世遺構が分布しており、後世の遺構である可能性も残している。

【6号集石遺構】（第12図）

B区南半斜面で検出。直径2m弱の掘り込みを伴う比較的大型の集石遺構である。特筆されるのは礫の平面分布で、中央付近がまばらなドーナツ状を呈している。礫がばらけている部分についても、斜面の傾斜とは逆方向で自然に流れたとは考えづらい。埋土一括の炭化材で放射性炭素年代を測定した。

【7・8号集石遺構】（第12図）

2基とも土層観察ベルトにかかって検出された。

7号集石遺構はⅦ層の土にパックされており、B区の集石遺構の中では最も古いと考えている。かなり小規模で、掘り込みの中に扁平な礫を敷き詰めるような構造である。

8号集石遺構はやや不明瞭ながら6号と同じ構造をとるようで、やはり礫のばらけ方が傾斜とは一致しない。土層で確認する限りⅦ層最下面で検出したことになるが、第Ⅴ章で触れるように放射性炭素年代測定の結果を勘案すると検討の余地がある。

【9号集石遺構】（第13図）

B区で7・8・22号集石遺構などと近接して検出された。角礫が比較的多く、かなり散乱した状況である。掘り込みも不整形であり、人為とは断定しづらいものである。

【10号集石遺構】（第13図）

B区南半で11号集石遺構と近接して検出された。礫は比較的大きさが揃い、平面的にもまとまって出土しているが、掘り込みの規模の割には数が少ない。

【14号集石遺構】（第13図）

A区平場Dの北側斜面直下で検出された。掘り込みの規模の割には礫が少なく、しかも礫のサイズ・形状にもばらつきが大きい。後述する37号集石遺構の上に重なっており、同一遺構の可能性もある。

【15号集石遺構】（第13図）

A区平場D北側斜面直下で検出。やはり礫が少なく、サイズ・形状もばらついている。

【17号集石遺構】（第13図）

A区西半の中で最も低い位置に検出された。16号集石遺構と近接する。礫のサイズはばらばらで、破砕した小礫がかなり含まれている。

【21号集石遺構】（第13図）

A区西半で18・20号集石遺構と近接して検出された。礫は破砕が進み、サイズが小さいものが目立つ点は3基とも共通しているが、この集石遺構の礫のみかなり少ないという違いが認められる。

【22号集石遺構】（第13図）

B区南半で7～9号集石遺構と近接して検出された。一部に撹乱を受けており構造に不明な部分があるが、掘り込みはやや不整形で、礫の破砕もかなり進んだ状態である。

【24号集石遺構】（第13図）

A区平場Dの北側斜面直下に検出された。礫は非常に少ない上、形状・サイズにもばらつきが大きい。掘り込みも極めて不整形で、意図的に掘られたとは考えづらいものである。

【25号集石遺構】（第14図）

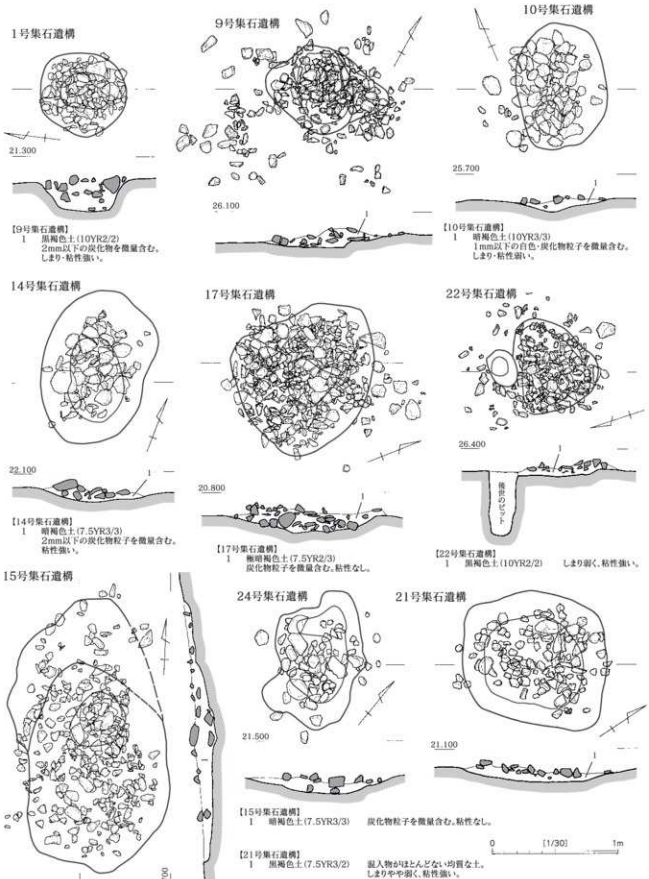
A区西半の中では最も南端に検出された。26・27・29号集石遺構と近接しており、一連の遺構という可能性があるが、この集石遺構のみが配石を備えず、礫の数もかなり少ない。

【30号集石遺構】（第17図）

A区西半の北側斜面付近、35～39号集石遺構などと近接して検出された。浅い掘り込みの中に扁平礫を敷き詰める点で7号集石遺構と類似している。

【37号集石遺構】（第14図）

A区平場Dの北側斜面下、14号集石遺構の直下に検出された。掘り込みの外にばらけた礫は14号の掘り込みプラン内にあり、2基が同一遺構の可能性も



第13図　集石遺構実測図（2）

ある。礫の形状・サイズは14号同様ばらつきがあるが，密集度は高い。

【39号集石遺構】（第14図）

A区平場Dの北側斜面下で、35・36号集石遺構の間に検出された。土層観察ベルト内にあったため，両端が失われた状態である。礫の形状・サイズは比較的揃っており35・36号と似るが，数はかなり少なく対照的である。

C1類：

16・18・20・23・26・27・29・34～36・38号集石遺構が該当する。野首第2遺跡で多数確認されているにもかかわらず，隣接するB区には1基も存在しない。配石には花弁状などいくつかのバリエーションが認められるほか，礫・埋土の堆積，炭化材の遺存状況にも複数のパターンがある。

【16号集石遺構】（第15図）

A区西半で17号集石遺構と近接して検出された。不整形な掘り込みに、やはり不整形な形状の配石を備える。礫は破砕がかなり進行して小ぶりである。

【18号集石遺構】（第15図）

A区西半で20・21号集石遺構と近接して検出された。比較的明瞭な掘り込みを持ちながら，配石が北西に偏っている。礫は16号集石遺構ほどではないが，破砕が進行して角ばっている。

【20号集石遺構】（第14図）

A区西半で検出された。検出面の礫は比較的密集して見えたが，配石や掘り込みは極めて不整形で他に類を見ない。配石は掘り込み下場の周縁に巡らされたようにも見えるが，断定はしづらい。北東方向に礫が散らばるが，地形の傾斜とは反対方向である。

【23号集石遺構】（第15図）

A区平場D先行トレンチ中で検出したため，散礫とともに大半の礫と掘り込みを掘削してしまった。よって本来の形状は不明だが掘り込みのプラン確認時には，炭化物を多量に含んだ土坑のように見えたため，掘り込みの中に礫が隙間なく詰まっているという状況ではない。配石は掘り込みの最下部へ花弁状に敷き詰められていた。トレンチ壁面の観察からは，Ⅵb層上位かさらに上から構築されていたと推測される。配石直上の炭化材で年代測定を実施した。

【26号集石遺構】（第15図）

A区西半で25・27・29号集石遺構と近接して検出された。配石は二重になっている可能性があるが，それらが新旧を表すものかは判別できない。配石の直上から比較的小ぶりの礫が密に詰まっている。これら礫の間に炭化材が混じっていたが，その中に樹木の冬芽と考えられるものが2点確認された。これらの炭化材・炭化物から2点を選び年代測定した。

【27号集石遺構】（第15図）

26号集石遺構と比較すると掘り込みがかなり浅いが，礫の広がりからみて本来的に深度が異なる可能性が高い。しっかりした花弁状の配石を備え，その直上から礫が密に入る，礫の数は少ないが，散礫とともに除去してしまった可能性がある。

【29号集石遺構】（第16図）

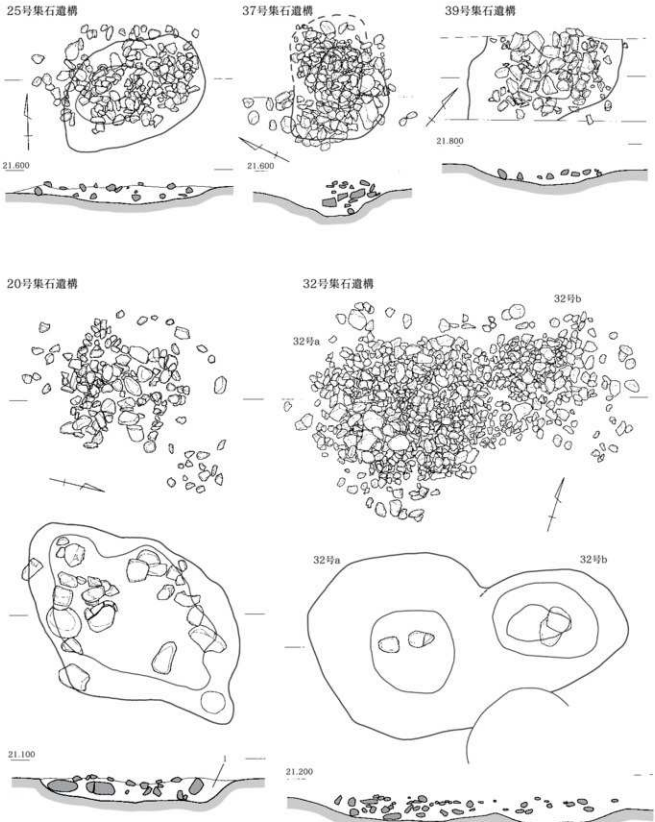
27号集石遺構と同じく浅い掘り込みと精美な花弁状の配石を備える。やはり配石の直上から礫が密に入る。礫は北方向にやや散乱するが，地形の傾斜とは逆方向である。

【34号集石遺構】（第17図）

認識した時点では配石のみの状態となっていたが，その他の礫は散礫とともに除去してしまった可能性がある，掘り込みの埋土は炭化物を多量に含み，周囲の土よりも黒っぽく見えた。

【35号集石遺構】（第16図）

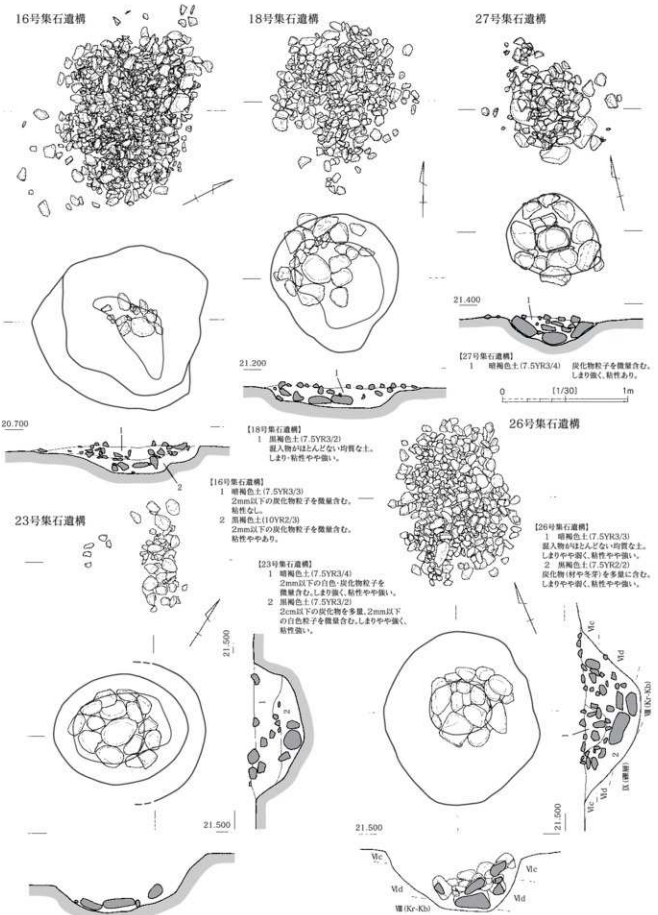
A区西半でも散礫の集中する北西部で検出された。散礫とともに多数の礫を除去してしまい，当時の平面形や礫の使用量は不明である。掘り込みは確認できた部分のみで60cmを超え，礫のレベルからすると本来は1m前後の深さを有していた可能性がある。配石は直径30～40cmにも達する大型の扁平礫を用いているが，置き方は精美とは言いがたい。配石とその他の礫の間に土のみの間層があり，配石直上で大きな炭化材が出土している。約30cmのレベル差を有する炭化材2点について年代測定を行ったところ，500年以上の開きが出たが，うち1点は配石上の大きな材（SI35-8）であり，その年代（7670±40年BP）が構築時期に近いと判断される。



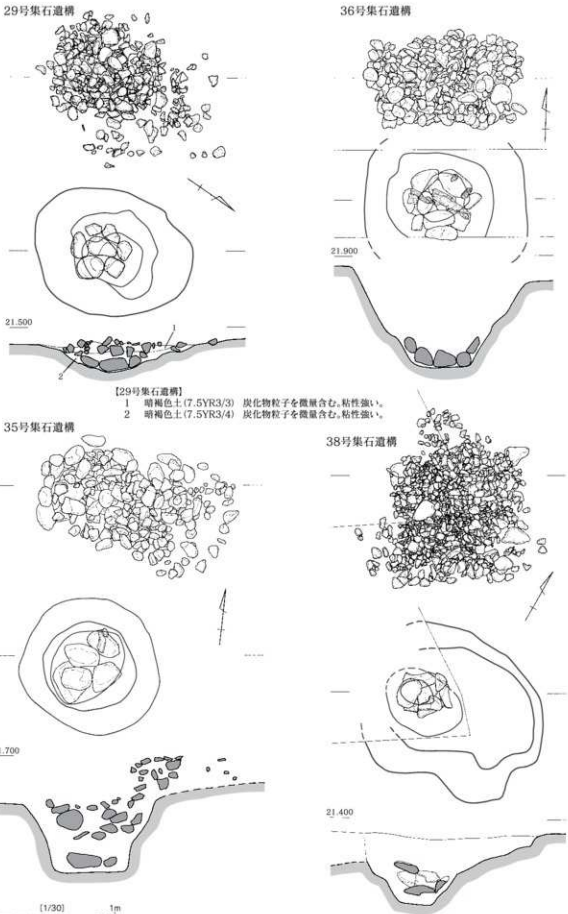
【20号集石遺構】
1　黒褐色土(7.5YR3/2)　混入物がほとんどない均質な土。しまりやや弱く，粘性強い。

第14図　集石遺構実測図（3）

0　[1/30]　1m

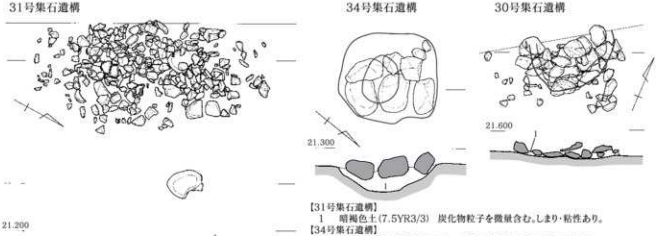


第15図　集石遺構実測図（4）



【29号集石遺構】
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭化物粒子を微量含む。粘性強い。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　炭化物粒子を微量含む。粘性強い。

第16図　集石遺構実測図（5）



第17図　集石遺構実測図（6）

No.	地区	分類	検出高（m）	礫範囲（m）		礫（配石以外）		配石		掘り込み（m）			出土遺物	炭化物	補正C14年代（年BP）	備　考
				長径	短径	総数	重量（kg）	総数	重量（kg）	長径	短径	深さ				
1	A	B	21.200	0.7	0.6	計量せず		0	0	0.7	0.7	0.25	縄文土器・剥片	少		
2	B	A	26.700	0.8	0.7	計量せず		0	0	−	−	−	縄文土器	無		
3	B	A	26.500	0.7	0.6	計量せず		0	0	−	−	−		無		
5	B	A	26.000	1.7	1.2			0	0	−	−	−		無		
6	B	B	26.400	2.4	1.8	867	81.65	0	0	1.8	1.7	0.2	縄文土器・剥片	少	7530±50	
7	B	B	25.900	0.9	0.7	135	26.50	0	0	0.6	0.5	0.1		無		
8	B	B	26.000？	2.0	2.0	722	90.98	0	0	1.4	1.2	0.2	縄文土器・石斧	少	7800±50	礫範囲一部破損か
9	B	B	26.000	1.9	1.8	計量せず		0	0	1.0	0.7	0.2		少		
10	B	B	25.500	1.1	1.0	131	33.96	0	0	1.0	0.7	0.1		少		
11	B	A	25.500	1.4	1.0	計量せず		0	0	−	−	−	剥片	無		礫範囲一部破損
14	A	B	22.000	0.9	0.8	計量せず		0	0	1.2	0.9	0.1	縄文土器	少		
15	A	B	21.700	2.2	1.2	計量せず		0	0	2.2	1.2	0.2	縄文土器・磨石・剥片	無		
16	A	C1	20.600	1.9	1.2	計量せず		10	計量せず	1.4	1.4	0.2	縄文土器	少		
17	A	B	20.700	1.3	1.2	計量せず		0	0	1.2	1.1	0.2	縄文土器・磨石	少		
18	A	C1	21.100	1.4	1.2	計量せず		25	計量せず	1.1	1.0	0.2	縄文土器・磨石	無		
20	A	C1	21.000	1.9	1.3	431	64.23	27	計量せず	2.2	1.4	0.2	縄文土器・剥片	少		
21	A	B	21.000	1.3	0.9	計量せず		0	0	1.3	1.1	0.1	縄文土器	無		
22	B	B	26.300	1.3	1.1	計量せず		0	0	0.8	0.7	0.1	縄文土器	無		礫範囲一部破損
23	A	C1	21.700	0.9	0.3	計量せず		16	計量せず	1.2	1.1	0.5	縄文土器	多	8260±50	礫範囲一部破損
24	A	B	21.400	1.0	1.0	計量せず		0	0	1.1	0.8	0.1	縄文土器	無	8630±50	
25	A	B	21.500	1.3	0.9	計量せず		0	0	1.3	0.8	0.1		無		
26	A	C1	21.500	1.4	1.0	1279	153.16	10	74.99	1.4	1.2	0.5		多	8280±40 8340±50	
27	A	C1	21.300	1.1	1.1	計量せず		14	計量せず	0.8	0.6	0.2		少		礫範囲一部破損か
29	A	C1	21.400	1.7	1.1	499	101.10	7	21.89	1.3	1.0	0.2	縄文土器	少		礫範囲一部破損か
30	A	B	21.500	1.1	0.7	計量せず		0	0	0.6	−	0.1		無		礫範囲一部破損
31	A	A	21.200	1.9	0.9	計量せず		1？	計量せず	−	−	−	縄文土器	少		礫範囲一部破損
32a	A	C2	21.100	2.6	1.9	1250	198.03	2	4.51	1.5	1.3	0.2	縄文土器・剥片	少		
32b	A	C2	21.100	上に含む		523	62.31	2	20.65	1.1	0.9	0.2	縄文土器	少	8660±40	
34	A	C1	21.300	0.7	0.6	−	−	8	計量せず	0.8	0.7	0.2		多		礫範囲一部破損
35	A	C1	21.700	1.6	1.2	計量せず		5	計量せず	1.1	1.1	0.6	縄文土器	多	8220±50 7670±40	礫範囲一部破損
36	A	C1	21.800	1.2	0.8	1219	279.74	10	53.91	1.3	0.8	0.7	縄文土器・石器	多	8290±40	礫範囲一部破損
37	A	B	21.500	1.2	1.0	計量せず		0	0	1.0	0.8	0.2	縄文土器・剥片	不明		礫範囲一部破損か
38	A	C1	21.400	1.5	1.4	計量せず		9	計量せず	1.5	1.3	0.5	縄文土器	少		礫範囲一部破損
39	A	B	21.600	1.0	0.8	計量せず		0	0	1.4	0.8	0.1	縄文土器	少		礫範囲一部破損

第5表　集石遺構一覧表

5号集石遺構

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	9	0.08	15	0.23	8	0.20	0	0
5.1~10.0	9	0.48	12	2.11	17	2.81	2	0.29
10.1~15.0	16	11.02	12	6.91	13	6.87	0	0
15.1~20.0	9	13.66	3	3.29	3	4.71	0	0
20.1~25.0	1	5.06	1	3.25	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	1	8.81	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	44	30.30	44	24.60	41	14.59	2	0.29

総点数 131 総重量 69.78

10号集石遺構

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	4	0.15	14	0.32	13	0.19	2	0.06
5.1~10.0	10	2.65	28	4.46	23	1.90	2	0.18
10.1~15.0	10	10.70	14	5.70	8	4.45	0	0
15.1~20.0	1	1.50	1	0.90	1	0.80	0	0
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	25	15.00	57	11.38	45	7.34	4	0.24

総点数 131 総重量 33.96

6号集石遺構

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	34	0.91	227	4.90	103	1.71	31	0.70
5.1~10.0	77	13.42	156	15.63	167	16.90	20	2.20
10.1~15.0	12	5.09	19	6.23	13	5.95	2	0.59
15.1~20.0	0	0	2	1.33	3	2.10	0	0
20.1~25.0	0	0	1	3.99	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	123	19.42	405	32.08	286	26.66	53	3.49

総点数 867 総重量 81.65

20号集石遺構（配石以外）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	22	0.58	39	1.00	24	0.32	6	0.10
5.1~10.0	85	11.75	110	9.82	89	9.65	0	0
10.1~15.0	15	6.40	19	8.69	16	6.13	1	0.28
15.1~20.0	2	2.16	1	2.95	2	4.40	0	0
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	124	20.89	169	22.46	131	20.50	7	0.38

総点数 431 総重量 64.23

7号集石遺構

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	5	0.09	5	0.12	8	0.10	0	0
5.1~10.0	36	6.75	25	2.80	32	4.30	4	0.45
10.1~15.0	6	2.55	4	1.69	6	1.70	0	0
15.1~20.0	4	5.95	0	0	0	0	0	0
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	51	15.34	34	4.61	46	6.10	4	0.45

総点数 135 総重量 26.50

26号集石遺構（配石以外）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	85	2.55	240	6.22	180	2.86	28	0.40
5.1~10.0	125	17.62	350	41.30	143	17.82	9	1.30
10.1~15.0	35	20.31	63	25.53	11	4.05	1	0.34
15.1~20.0	4	7.47	4	4.25	0	0	1	1.14
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	249	47.95	657	77.30	334	24.73	39	3.18

総点数 1279 総重量 153.16

8号集石遺構

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	23	0.85	157	4.10	71	1.46	25	0.50
5.1~10.0	86	12.79	190	18.90	107	13.58	0	0
10.1~15.0	21	11.24	13	4.59	24	11.29	0	0
15.1~20.0	2	4.35	1	2.32	2	5.01	0	0
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	132	29.23	361	29.91	204	31.34	25	0.50

総点数 722 総重量 90.98

26号集石遺構（配石）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	0	0	0	0	0	0	0	0
5.1~10.0	0	0	0	0	0	0	0	0
10.1~15.0	0	0	0	0	0	0	0	0
15.1~20.0	0	0	0	0	0	0	0	0
20.1~25.0	6	28.39	1	1.74	0	0	0	0
25.1~30.0	3	44.86	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	9	73.25	1	1.74	0	0	0	0

総点数 10 総重量 74.99

第6表　集石遺構礫集計表（1）

29号集石遺構（配石以外）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	42	1.25	43	1.15	29	0.60	4	0.15
5.1~10.0	82	14.45	119	16.90	84	10.15	11	1.05
10.1~15.0	36	25.20	20	9.60	17	7.80	1	0.30
15.1~20.0	5	7.55	1	0.70	4	3.20	1	1.05
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	165	48.45	183	28.35	134	21.75	17	2.55

総点数 499 総重量 101.10

32号ｂ集石遺構（配石以外）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	31	1.00	64	1.8	37	0.85	1	0.01
5.1~10.0	88	12.75	145	15.75	105	10.45	8	0.8
10.1~15.0	11	5.85	16	5.6	14	3.8	0	0
15.1~20.0	1	1.60	1	0.35	0	0	0	0
20.1~25.0	0	0	1	1.7	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	131	21.20	227	25.20	156	15.10	9	0.81

総点数 523 総重量 62.31

29号集石遺構（配石）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	0	0	0	0	0	0	0	0
5.1~10.0	0	0	0	0	0	0	0	0
10.1~15.0	0	0	0	0	0	0	0	0
15.1~20.0	4	7.63	0	0	0	0	0	0
20.1~25.0	3	14.26	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	7	21.89	0	0	0	0	0	0

総点数 7 総重量 21.89

32号ｂ集石遺構（配石）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	0	0	0	0	0	0	0	0
5.1~10.0	0	0	0	0	0	0	0	0
10.1~15.0	0	0	0	0	0	0	0	0
15.1~20.0	0	0	0	0	0	0	0	0
20.1~25.0	0	0	0	0	1	5.15	0	0
25.1~30.0	1	15.50	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	15.50	0	0	1	5.15	0	0

総点数 2 総重量 20.65

32号ａ集石遺構（配石以外）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	107	2.85	77	2.10	65	1.55	20	0.65
5.1~10.0	275	43.24	252	32.88	300	32.04	8	0.55
10.1~15.0	59	33.54	23	9.90	53	24.84	2	0.56
15.1~20.0	4	9.71	1	0.65	4	2.97	0	0
20.1~25.0	0	0	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	445	89.34	353	45.53	422	61.40	30	1.76

総点数 1250 総重量 198.03

36号集石遺構（配石以外）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	45	0.87	181	3.90	123	1.79	20	0.31
5.1~10.0	96	16.65	256	34.43	167	19.20	36	4.06
10.1~15.0	93	64.01	88	41.45	63	29.35	12	6.22
15.1~20.0	11	14.90	9	12.72	10	9.93	0	0
20.1~25.0	9	19.95	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	254	116.38	534	92.50	363	60.27	68	10.59

総点数 1219 総重量 279.74

32号ａ集石遺構（配石）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	0	0	0	0	0	0	0	0
5.1~10.0	0	0	0	0	0	0	0	0
10.1~15.0	0	0	0	0	0	0	0	0
15.1~20.0	0	0	0	0	1	2.25	0	0
20.1~25.0	1	2.26	0	0	0	0	0	0
25.1~30.0	0	0	0	0	0	0	0	0
30.1~35.0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	2.26	0	0	1	2.25	0	0

総点数 2 総重量 4.51

36号集石遺構（配石）

石材 / 大きさ (cm)	尾鈴山酸性岩類		砂岩		ホルンフェルス		その他	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
~5.0	0	0	0	0	0	0	0	0
5.1~10.0	0	0	0	0	0	0	0	0
10.1~15.0	0	0	0	0	0	0	0	0
15.1~20.0	2	4.86	0	0	1	0.96	0	0
20.1~25.0	3	16.66	1	5.65	0	0	0	0
25.1~30.0	1	5.76	1	9.72	0	0	0	0
30.1~35.0	1	10.30	0	0	0	0	0	0
計	7	37.58	2	15.37	1	0.96	0	0

総点数 10 総重量 53.91

第７表　集石遺構礫集計表（２）

【36号集石遺構】（第16図）

土層観察ベルトの中に入っていたため、南北両端を欠損している。掘り込みは1m前後で、立ち上がりは配石の上端付近でやや広がり、段掘りのようになっている。配石は35号集石遺構より若干小ぶりな礫を敷き詰めているが、やはり花弁状とまではいえない。掲載した断面図では土層を提示できなかったが、他の断面で見ると配石の直上には礫がほとんど入らない土の層があり、配石に乗るように炭化材が検出された。炭化材の残存状況は本遺跡で最も良好であり、最大で直径約7cm、長さ約40cmの材が確認されたほか、それぞれの木目の方向から井桁状に配置されていたとの推測が可能である。これらの炭化材から1点を選び年代測定した。

【38号集石遺構】（第16図）

35号集石遺構と同じく散礫とともにかなりの礫を除去してしまった。掘り込みの下場は北西方向に大きく偏っており、深い掘り込みを有する集石遺構の中でも特異な構造をとっている。配石もほとんどが割れた扁平礫であり、雑然と詰め込んだ印象が強い。礫は破砕が進行しており、35・36号と比較するとかなり小さなものが多く、ばらつきも大きい。

C2類：

32号集石遺構が唯一該当する。

【32号集石遺構】（第14図）

A区西半の中央南寄りに検出された。礫の平面分布で見る限り、2基の集石遺構が切りあっているようだが、新旧を判断する手がかりはほとんどない（それぞれa・bと呼称）。またこれほどの距離で近接している集石遺構は本遺跡で他にない一方、野首第1遺跡（県道）にも複数基存在しており、単なる偶然とは言いがたい。配石は2点の扁平礫からなる貧弱なもので、十分に機能したとは考えられない。32号bの構成礫間から出土した炭化材を年代測定した。

3．遺物

先述したように長期間に由来する遺物が出土している。土器では特に早期後半の押型文系の出土量が突出しており、早期前半や後期、前期がそれに続き、中期に属する可能性のあるものが少量ながら認められる。石器は次第手に欠けるが、やはり早期後半頃のものが多数で、石斧・石錘などはほとんどが後期の所産と推測される。石材は石鏃など小型の剥片を素材とする石器がチャートや各地の黒曜石を用いており、特に姫島産黒曜石の使用量が注目される。

一方、石斧・石錘・磨石など比較的大型の石器はホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類・砂岩を用いている。

集石遺構から出土した遺物もあるが、伏況・遺存度から見て伴うと断定できるものは皆無と判断した。

なお縄文土器については、15類に分類して報告するが、その分類基準は第8表に記したとおりである。

A．縄文土器

【Ⅰ類土器】（第18図9～18）

9は横位の貝殻条痕文の後、口縁部直下に縦位の貝殻腹縁刺突文を一列施している。口縁部の小さな破片であるが、縦長の穿孔が1箇所見られる。

11は大きな平底の底部であり、内面は放射状、外面は一定方向の貝殻条痕文を施している。

それぞれ前平式の口縁部・底部と推定される。

10は口縁端部とその直下に縦位の貝殻腹縁刺突文を施しており、岩本式に属する可能性がある。

12～15は加栗山式（知覧式）で、貝殻条痕文の上に貝殻腹縁刺突文・クサビ形貼付文を施している。12は薄手で精美、その他は厚手でやや粗製である。また15は角筒形、12も波状口縁であり口径のカーブがあまり認められないため角筒形の可能性がある。

16は内湾器形をとるが、口縁部に横位の貝殻腹縁刺突文、胴部に貝殻押引文を施すことから吉田式の範疇に含まれるか。

17・18は同一個体の可能性があるが、不明瞭ながら斜位の貝殻腹縁刺突文があり、下剥峯式であろう。

【Ⅱ類土器】（第18図19～第19図25）

19・20は口縁部がやや外反し、縦位の貝殻腹縁刺突文を施しており、風化が著しいが器面は平滑であ

ったと推測される。中原Ⅱ式に属するか。

21・22も口縁部がやや外反するが，22は口縁部に，21は胴部に至るまで貝殻条痕文が施されている。22は中原Ⅳ式，21は中原Ⅴ式の可能性がある。

23は口縁部に横位の燃糸文を施す。位置付けには不明な部分が大きいが，この類の範疇に含まれると推定した。

24・25はやや外側に開く器形を呈し，外面に斜位の貝殻条痕文を施す。別府原3式（前原西3式）に属すると考えられる。

【Ⅲ類土器】（第19図26・27）

26は口縁部が直線的に大きく開く，口縁部直下に焼成後の穿孔がある。一方の27は26より急に立ち上がる。これにも穿孔が施されるが，内面側に粘土の盛り上がりが認められ，焼成前に穿孔されたことが明らかである。

【Ⅳa類土器】（第19図28～33）

28・29は同一個体の可能性があるが，卜剥峯式と類似する器形に細かな山形押型文を施す。胴部外面は横位の帯状に施文し，口縁端部にも見られる。

30は粗大な山形押型文を，胴部外面は縦位，口縁端部及び口縁部内面は横位に施している。口縁部は弱く外反する。

31も粗大な山形押型文で，胴部外面は縦位，口縁部内面は横位に施している。口縁部の外反は強い。

32・33は底部である。32は丸底，33はやや大きめの平底で，いずれも粗大な山形押型文を横位に施している。

【Ⅳb類土器】（第19図34～第20図44）

34・35は小粒の楕円押型文を胴部・口縁部内面とも横位に施している。34は帯状の施文が明瞭であり，古手の様相を呈している。

36は直線的に大きく開く口縁で，内外面とも横位の楕円押型文を施している。また外面は不明瞭ながら帯状施文の可能性がある。稲荷山式に属する。

37は直線的に立ち上がる口縁部で，外面・内面・端部にそれぞれ横位の楕円押型文を施している。

38は口縁部の外反が弱く，外面は横位・斜位の楕円押型文，口縁部内面は1段の原体条痕の下に横位の楕円押型文を施しており，早水台式に属する。

39・40は口縁が緩く外反し，粗大な楕円押型文を斜位ないし縦位に施す，口縁部内面には2段の原体条痕がみられ，出村式に属する。40は集石遺構検出面よりも下層（Ⅵc層）から出土した。

41は外反の強い口縁に，外面縦位・口縁部内面横位の楕円押型文を施す。

42は口縁部内面に横位の燃糸文を施している。

43・44は底部である，43は尖底，44は小さな平底だが，いずれも粗大な楕円押型文を縦位に施す。

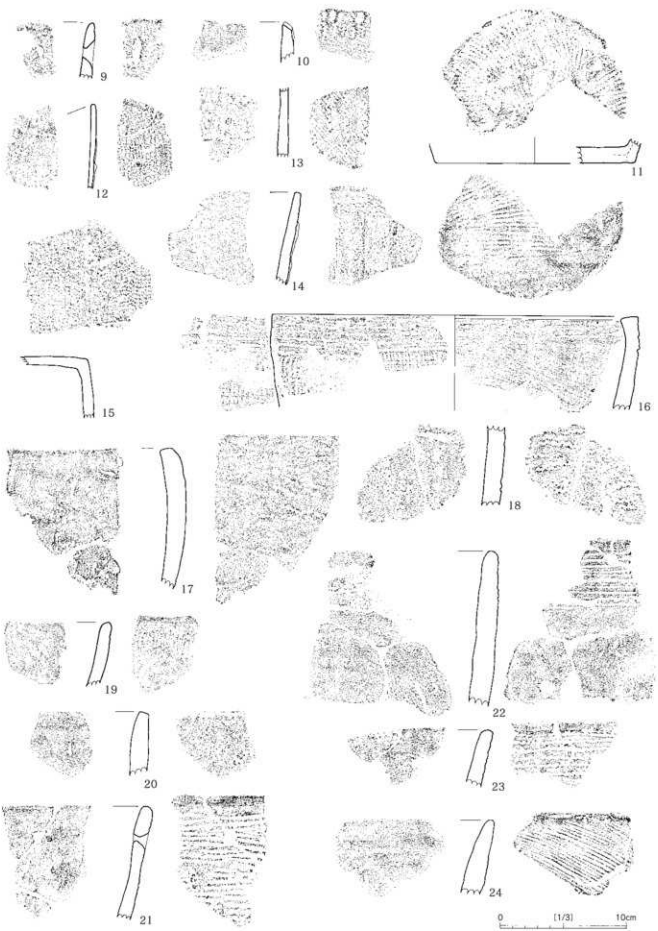
【Ⅳc類土器】（第20図45～48）

45・46は体部外面に変形燃糸文を施している。

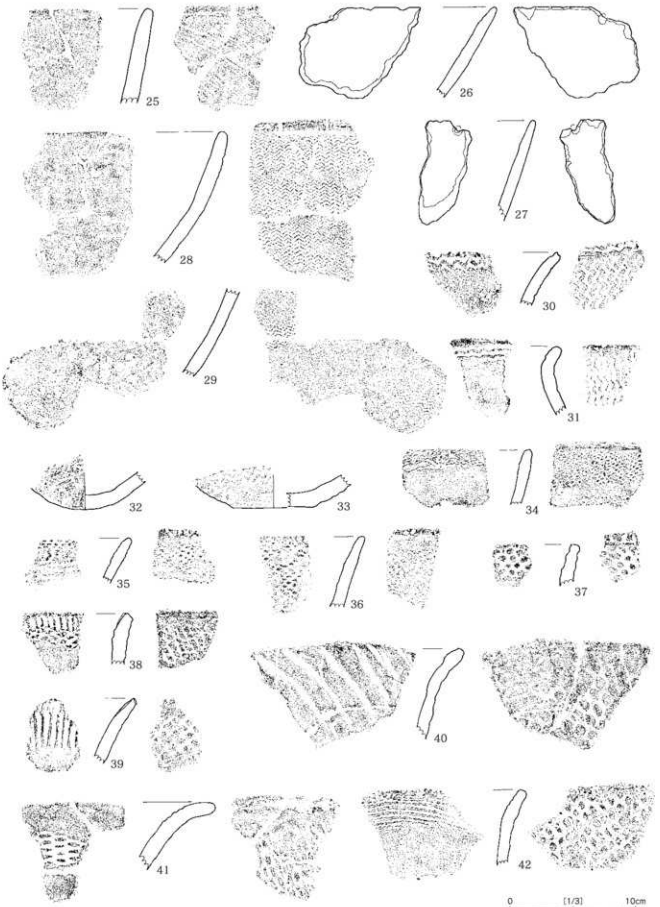
47・48は同一固体の可能性があるが，体部外面に

分類	特徴	確認された型式
Ⅰ	円筒形を基調とし，貝殻条痕文・刺突文を施す。南九州貝殻文系土器の系譜に連なるもの	加栗山式など
Ⅱ	Ⅰ類と同様に貝殻条痕文・刺突文を施すが，南九州貝殻文系土器の範疇からは外れるもの	中原式など
Ⅲ	無文で砲弾形の器形を呈すると考えられるもの	
Ⅳ	押型文を主文様とする	
a	山形押型文を施すもの	田村式など
b	楕円押型文を施すもの	
c	その他の押型文を施すもの（格回転文・変形燃糸文など）	
Ⅴ	底部から胴部にかけてやや張った後に屈曲し，大きく外反して口縁部にいたる器形を呈するもの。押型文・燃糸文・沈線文・ミミズばれ文などを施す。	手向山式
Ⅵ	平底・円筒形の胴部から屈曲し，ラッパ状の口縁を有する	塞ノ神式
Ⅶ	表裏に条痕文を施すもの	
Ⅷ	表裏とも条痕調整の後，粘土紐を貼り付けて数条の隆帯とするもの	轟B式
Ⅸ	棒状工具による列点や沈線で幾何学的な文様を施す	
a	胎土に滑石を含み，比較的薄手のもの	曽畑式
b	胎土に滑石を含まず，厚手のもの	
Ⅹ	前期末から中期に属すると考えられるもの	
Ⅺ	表裏とも条痕調整の後，口縁部付近に貝殻刺突文を施すもの	市来式
Ⅻ	器面にヘラミガキ調整を施し，黒色磨研系土器の系譜に連なるもの	三万田式など
ⅩⅢ	その他の後期に属する可能性がある土器	
ⅩⅣ	口縁部付近に孔列文を施すもの	
ⅩⅤ	その他の晩期に属する可能性がある土器	

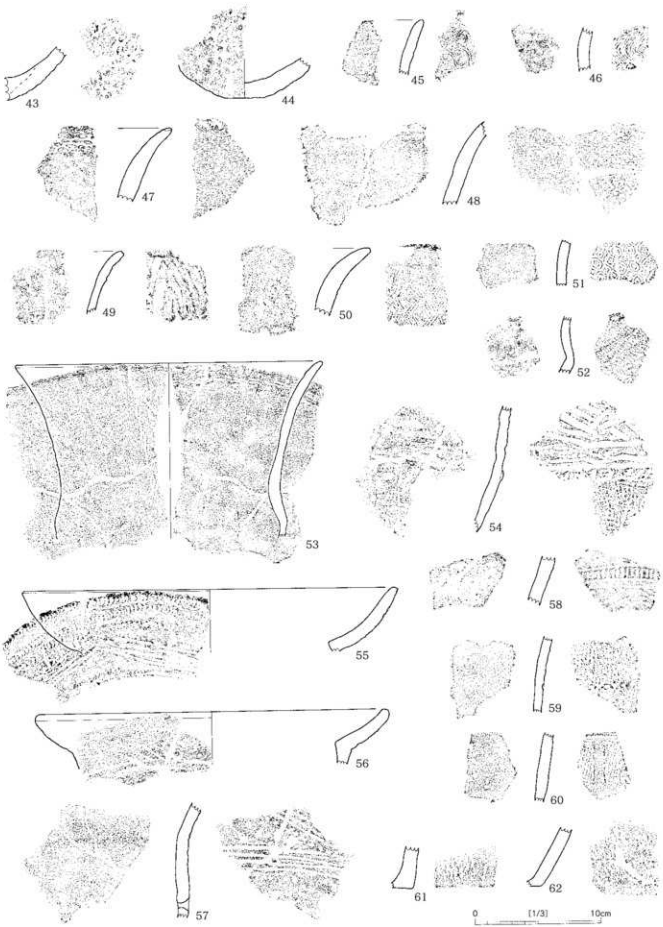
第8表　縄文土器分類表



第18図　縄文土器実測図（1）



第19図　縄文土器実測図（2）



第20図　縄文土器実測図（3）

横位の枝回転文，口縁端部には刻目，内面には楕円押型文を施している。

【Ⅴ類土器】（第20図49～54）

49は口縁部外面にミミズばれ文を，50・51は口縁部外面に押型文，52は風化により断定しづらいが単節縄文を施している。このうち単節縄文については手向山式土器の文様要素には含まれないようであるが，52は6号集石遺構中から出土しており確実にK-Ah降灰以前の資料といえること，器形が類似することなどからこの類に含めている。

53は上半の器形が推定可能な破片であった。くの字形の屈曲から上が残存し，風化が激しいながら外面に縦位・口縁部内面に横位の撚糸文が確認できる。

54は連続刻目を施した突帯文を境として，上半に沈線文，下半は風化によりかなり不明瞭ではあるが押型文らしき痕跡が確認される。

【Ⅵ類土器】（第20図55～62）

55・56はラッパ状に開く口縁部，57・58は屈曲がやや緩い頸部付近と推定される。列点文や山形をなす沈線文が施されている。

59～62は縦位の綱目状撚糸文を施している。59は列点文が重ねられる。61・62は底部片だが，傾きから61は円筒形，62は比較的張った胴部になると考えられる。

【Ⅶ類土器】（第21図63～67）

63～65は条痕を地文とし，その上からさらに条痕文で文様を描いている。63・65は波状であり，64は直線状である。63・64は口縁端部に刻目を施す。

66・67は表裏とも斜位ないし縦位の条痕文を施す。67は白色鉱物や雲母を多く含む独特の胎土である。

【Ⅷ類土器】（第21図68～72）

68・69は条痕文の上に粘土紐を貼り付け，さらに指で摘むことで断面形の尖った隆起線文を作り出している。口縁端部には刻目を有する。

70～72は条痕文が前者ほど深くなく，貼り付けた粘土紐も摘まずにナデつけている。

【Ⅸａ類土器】（第21図73～77）

いずれも胎土に滑石の粉末が混入してあり，独特の触感を持つ。口縁部には列点が散条施され，胴部には横位や斜位の沈線を組み合わせて幾何学的な文様を描いている。列点の形状から施文具は半截竹管と推定される。

【Ⅸｂ類土器】（第22図78～82）

胎土に滑石を含まず，器壁もⅨａ類と比較して厚い。文様構成は基本的にⅨａ類と同じであるが，78・79は列点の形状を見ると，ヘラ状の施文具を用いた可能性が高い。

【Ⅹ類土器】（第22図83～95）

前期末から中期頃と推定されるが，単独で分類を設けがたい資料について一括している。

84・85はD字状の刺突文（擬似爪形文）が施されている。これは管外側圧痕と考えられ，近畿・瀬戸内系の北白川下層式土器に通じる土器である。

83は文様の単位が小さいが，施文方法は前二者と類似している。

86は内外面ともにⅢ類土器のような深い条痕が認められるが，形状は尖底である。

87～89は二条一単位の沈線と押引状列点文を多用する。87・88は同一個体と考えられる。

90・92は口縁端部に刻目，外面に細い沈線文を施す。沈線は90が直線状，92は曲線を多用する。

91は内外面に条痕，口縁端部と突帯上に刻目を有する。

93・94は同一個体の可能性があるが，口縁部付近に粘土紐を貼り付けて4～5条程度の隆起線文を作り出している。これは胎土に黒曜石の破片を混入した特異な土器であるが，分析の結果，姫ノ木津留産黒曜石を用いた可能性を指摘しうる（附編参照）。

95は口縁端部で極端に内湾する器形である。粘土紐を貼り付け，それを固着させるためか，一定の間隔をおいて上から工具で押さえつけ，結果として刻目突帯のようになっている。

【Ⅺ類土器】（第22図96～第23図99・102・103）

96～98は内外面とも条痕文で，さらに96・98は外面，97は内面に貝殻腹縁刺突文を施している。

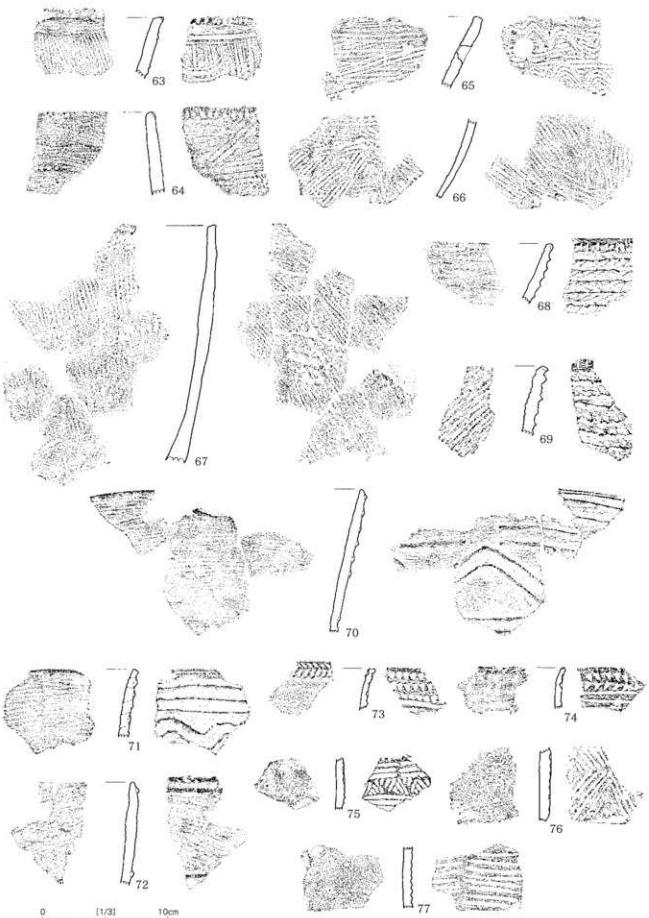
99は波状口縁で，刺突文は見られない。

102は底部で，外面に網代状の圧痕が残る。

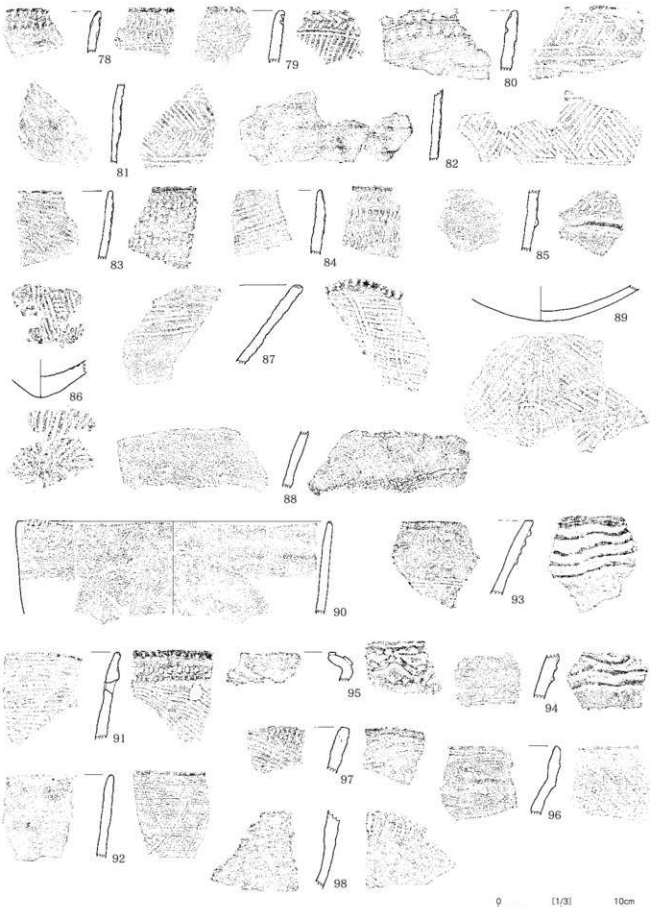
103はこの類の胴部片を用いた土器片錘である。

【Ⅻ類土器】（第23図117～119）

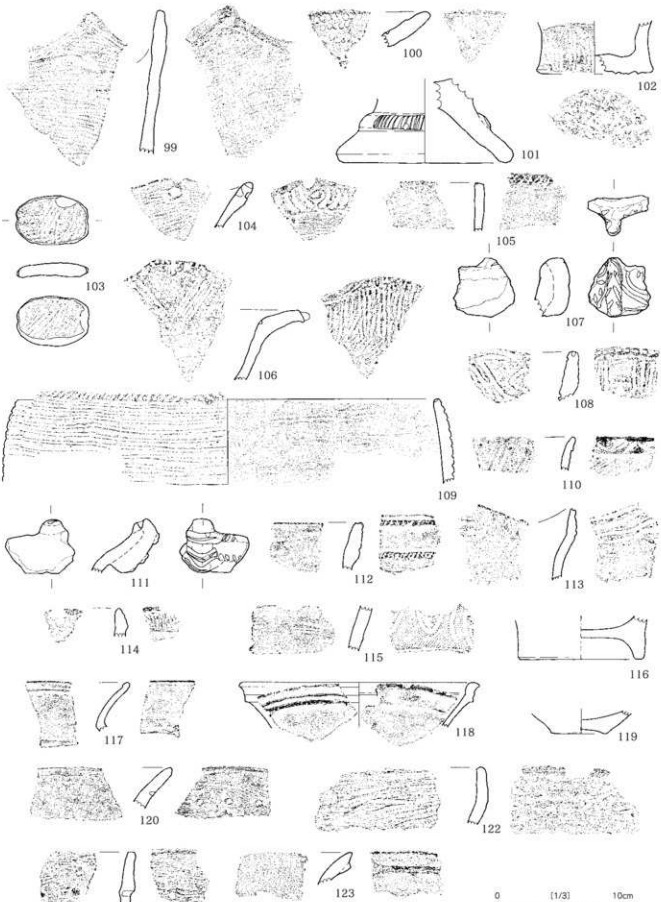
117・118は口縁部で，くの字状に屈曲する頸部から大きく外反すると推定される。



第21図　縄文土器実測図（4）



第22図　縄文土器実測図（5）



第23図　縄文土器実測図（6）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
9	平D Ⅵc	Ⅰ	深鉢	口縁		貝殻条痕文→貝殻腹縁刺突文	ナデ	縦長の穿孔。取り上げNo.3858	35
10	E6	Ⅰ	深鉢	口縁		貝殻腹縁刺突文（端部も）	ナデ		35
11	平D Ⅵc	Ⅰ	深鉢	底	底：(15.8)	貝殻条痕文	貝殻条痕文	取り上げNo.3941・4003	35
12	平D Ⅵc	Ⅰ	深鉢	口縁		条痕文→貝殻腹縁刺突文＋クサビ形貼付文	ナデ	波状口縁。角筒形か。取り上げNo.4325	35
13	平D Ⅵc	Ⅰ	深鉢	胴		条痕文→貝殻腹縁刺突文	ナデ	取り上げNo.4398	35
14	平D Ⅵc	Ⅰ	深鉢	口縁		条痕文→貝殻腹縁刺突文＋クサビ形貼付文、口縁端部刻み	ナデ	取り上げNo.3802	35
15	平D Ⅵb・c	Ⅰ	深鉢	胴		貝殻腹縁刺突文	ナデ	角筒形。取り上げNo.3058・3499	35
16	平D Ⅵb・c	Ⅰ	深鉢	口縁	口：(28.9)	貝殻腹縁刺突文＋貝殻押引文	ナデ	取り上げNo.3455・3480・3792	35
17	平D Ⅵa・b	Ⅰ	深鉢	口縁		貝殻腹縁刺突文	ナデ	取り上げNo.2767・3081	35
18	平D Ⅵb	Ⅰ	深鉢	胴		貝殻腹縁刺突文	ナデ	取り上げNo.3052。17と同一個体か	35
19	平D Ⅵc	Ⅱ	深鉢	口縁		貝殻腹縁刺突文	ナデ	取り上げNo.4540	35
20	平D Ⅵc	Ⅱ	深鉢	口縁		貝殻腹縁刺突文	ナデ	取り上げNo.3796	35
21	平D Ⅵc	Ⅱ	深鉢	口縁		条痕文（横）	ナデ	円形の穿孔。取り上げNo.3282	35
22	平D Ⅵc・d	Ⅱ	深鉢	口縁		条痕文（横）	ナデ	取り上げNo.4081・4313・4314	35
23	平D Ⅵb	Ⅱ	深鉢	口縁		撚糸文（横）	ナデ	取り上げNo.3667	35
24	平D Ⅵc	Ⅱ	深鉢	口縁		条痕文（斜）	ナデ	取り上げNo.3808	35
25	平D Ⅵc	Ⅱ	深鉢	口縁		条痕文（斜）	ナデ	取り上げNo.3782	36
26	平D Ⅵb	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ	ナデ	円形の穿孔	36
27	C7 Ⅵc	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ	ナデ	円形の穿孔（焼成前）	36
28	D6 Ⅵc	Ⅳa	深鉢	口縁		山形押型文（横・端部も横）	ナデ	取り上げNo.3059	36
29	平D Ⅵc	Ⅳa	深鉢	胴		山形押型文（横）	ナデ	取り上げNo.3830・3837。28と同一個体か	36
30	平D Ⅵb	Ⅳa	深鉢	口縁		山形押型文（縦・端部は横）	山形押型文（横）	取り上げNo.3628	36
31	B区	Ⅳa	深鉢	口縁		山形押型文（縦）	山形押型文（横）	取り上げNo.B-663	36
32	平D Ⅵc	Ⅳa	深鉢	底		山形押型文（横）	ナデ	丸底。取り上げNo.3259	36
33	G3／G4	Ⅳa	深鉢	底	底：(6.2)	山形押型文（横）	ナデ	平底	36
34	平D Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（横）	楕円押型文（横）	取り上げNo.3557	36
35	B7 Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（横）	楕円押型文（横）		36
36	平D Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（横）	楕円押型文（横）	取り上げNo.3500	36
37	C5 Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（横・端部も横）	楕円押型文（横）		36
38	平D Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（横）	楕円押型文（横）・原体条痕（一段）	取り上げNo.3593	36
39	平D Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（横）・口縁端部刻み	原体条痕（二段）	取り上げNo.3535	36
40	平D Ⅵc	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（縦）	原体条痕（二段）	取り上げNo.4536	36
41	平D Ⅵa	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（縦）	楕円押型文（横）	取り上げNo.2581	36
42	C6 Ⅵb	Ⅳb	深鉢	口縁		楕円押型文（縦）	撚糸文（横）		36
43	F6	Ⅳb	深鉢	底		楕円押型文（縦）	ナデ	尖底か	37
44	E6	Ⅳb	深鉢	底	底：(3.0)	楕円押型文（縦）	ナデ	小さな平底	37
45	AB6	Ⅳc	深鉢	口縁		変形撚糸文	ナデ		37
46	D5 Ⅵb	Ⅳc	深鉢	胴		変形撚糸文	ナデ		37

第9表　縄文土器観察表（1）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
47	15号集石	Ⅳc	深鉢	口縁		枝回転文・口縁端部刻み	楕円押型文（横）	取り上げNo.SI15-13	37
48	平D Ⅵb	Ⅳc	深鉢	口縁		枝回転文	楕円押型文（横）	47と同一個体か。取り上げNo.2948・3038・3073	37
49	D6 Ⅵb	Ⅴ	深鉢	口縁		ミミズばれ文	ナデ		37
50	平D Ⅵa	Ⅴ	深鉢	口縁		入子菱状押型文	ナデ	取り上げNo.2709	37
51	D5	Ⅴ	深鉢	胴		同心円押型文	ナデ		37
52	6号集石	Ⅴ	深鉢	胴		単節縄文	ナデ	取り上げNo.SI6-7	37
53	平D Ⅵb	Ⅴ	深鉢	口縁	口：（24.2）	撚糸文・突帯文・押型文？	ナデ	取り上げNo.3511	37
54	平D Ⅵb	Ⅴ	深鉢	胴		沈線文・突帯文・押型文？	ナデ	取り上げNo.2997	37
55	D6	Ⅵ	深鉢	口縁	口：（29.1）	沈線文・列点文	ナデ		37
56	平D ML1	Ⅵ	深鉢	口縁	口：（27.8）	沈線文	ナデ	取り上げNo.2235	37
57	平D ML1	Ⅵ	深鉢	胴		沈線文・列点文	ナデ	取り上げNo.1899	37
58	平D MB0	Ⅵ	深鉢	胴		沈線文・列点文	ナデ	取り上げNo.2344	37
59	A14 Ⅳc	Ⅵ	深鉢	胴		網目撚糸文（縦）・列点文	ナデ	取り上げNo.4901	37
60	B区	Ⅵ	深鉢	胴		網目撚糸文（縦）・沈線文	ナデ	取り上げNo.B-870	37
61	D5	Ⅵ	深鉢	底		網目撚糸文（縦）	ナデ	平底	37
62	B区	Ⅵ	深鉢	底		網目撚糸文（縦）	ナデ	平底。取り上げNo.B-626	37
63	C3	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文・口縁端部刻み	条痕文		39
64	46号土坑	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文・口縁端部刻み	ナデ	後世遺構への流れ込み	39
65	3号不明	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文	条痕文	円形の穿孔。後世遺構への流れ込み	39
66	C5・B6	Ⅶ	深鉢	胴		条痕文	条痕文		39
67	C7・AL8	Ⅶ	深鉢	口縁～胴		条痕文	条痕文		39
68	C6	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文→隆起線文＋口縁端部刻み	条痕文		39
69	D5	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文→隆起線文＋口縁端部刻み	条痕文		39
70	平E MB0	Ⅶ	深鉢	口縁～胴		条痕文→隆起線文	条痕文	取り上げNo.1777	39
71	平E ニツアカ	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文→隆起線文	条痕文	取り上げNo.2318	39
72	A4・AA5	Ⅶ	深鉢	口縁		条痕文→隆起線文	条痕文		39
73	AC6	Ⅸa	深鉢	口縁		列点文・幾何学文	列点文	胎土に滑石混入	39
74	A5	Ⅸa	深鉢	口縁		列点文・幾何学文・口縁端部刻み	ナデ	胎土に滑石混入	39
75	C8	Ⅸa	深鉢	胴		幾何学文	ナデ	胎土に滑石混入	39
76	AB5	Ⅸa	深鉢	胴		幾何学文	ナデ	胎土に滑石混入	39
77	平D・E クロ	Ⅸa	深鉢	胴		幾何学文	ナデ	胎土に滑石混入。取り上げNo.5453	39
78	AB7	Ⅸb	深鉢	口縁		列点文・幾何学文	列点文		40
79	AC6	Ⅸb	深鉢	口縁		列点文・幾何学文	列点文		40
80	5号不明	Ⅸb	深鉢	口縁		幾何学文	列点文	後世遺構への流れ込み	40
81	A4	Ⅸb	深鉢	胴		幾何学文	ナデ		40
82	平D クロ	Ⅸb	深鉢	胴		幾何学文	ナデ	取り上げNo.1119・1131	40
83	C4	Ⅹ	深鉢	口縁		擬似爪形文？	条痕文		40
84	A6	Ⅹ	深鉢	口縁		擬似爪形文	条痕文		40

第10表　縄文土器観察表（2）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
85	B3	X	深鉢	胴		擬似爪形文・突帯文	ナデ		40
86	D7	X	深鉢	底		条痕文	条痕文	尖底	40
87	2号竪穴	X	浅鉢	口縁		二条一単位の沈線文・列点文	沈線文	後世遺構への流れ込み	40
88	C7	X	深鉢	胴		条痕文→二条一単位の沈線文・押引列点文	ナデ		40
89	平D クロ	X	浅鉢	底		条痕文→二条一単位の沈線文・押引列点文	ナデ	87と同一個体か。取り上げNo.1133・1185	40
90	E3 クロ	X	深鉢	口縁～胴	口：(24.6)	沈線文・口縁端部刻み	ナデ	取り上げNo.5509	40
91	平D 二次アカ	X	深鉢	口縁		条痕文・突帯文・列点文	条痕文	円形の穿孔。取り上げNo.1179	40
92	5号不明	X	深鉢	口縁		沈線文・口縁端部刻み	ナデ	後世遺構への流れ込み	40
93	B4	X	深鉢	口縁		隆起線文	条痕文	胎土に黒曜石混入	40
94	5号不明	X	深鉢	胴		隆起線文	条痕文	胎土に黒曜石混入。後世遺構への流れ込み	40
95	A8	X	深鉢	口縁		突帯文・刺突文	ナデ		40
96	B区一括	XI	深鉢	口縁		条痕文→貝殻腹縁刺突文（二段）	ナデ		40
97	AA6	XI	浅鉢	口縁		条痕文	条痕文→貝殻腹縁刺突文		40
98	AA14 Ⅳc	XI	深鉢	胴		条痕文→貝殻腹縁刺突文	条痕文	取り上げNo.5026	40
99	A14 Ⅳc	XI	深鉢	口縁		条痕文	条痕文	波状口縁。取り上げNo.4942	41
100	1号竪穴	XIII	台付皿	口縁		ナデ	刺突文	後世遺構への流れ込み	41
101	AN15	XIII	台付皿	脚	底：(12.9)	突帯文	ナデ	野首第2遺跡の資料と接合	41
102	A6	XI	深鉢	底	底：(8.6)	条痕文・網代状の圧痕	ナデ		41
103	D5	XI	土器片錘		長：5.7 幅3.9 厚：1.1	条痕文	条痕文		41
104	D4	XIII	浅鉢？	口縁		条痕文→沈線文・刺突文	条痕文→刺突文		41
105	F3	XIII	深鉢	口縁		口縁端部刻み	ナデ		41
106	B区一括	XIII	浅鉢	口縁		条痕文	条痕文→沈線文・列点文		41
107	AA6	XIII	深鉢	口縁		沈線文・刺突文	ナデ		41
108	平E 二次アカ	XIII	浅鉢？	口縁		沈線文・列点文	沈線文・列点文	取り上げNo.2056	41
109	平E クロ	XIII	深鉢	口縁～胴	口：(33.4)	沈線文・口縁端部刻み	ナデ	取り上げNo.5454・5458	41
110	C5	XIII	深鉢	口縁		条痕文→突帯文＋沈線文	条痕文		41
111	D5	XIII	浅鉢	口縁		沈線文・突帯文・刺突文	ナデ		41
112	D5	XIII	深鉢	口縁		沈線文・刺突文	ナデ		41
113	平E 二次アカ	XIII	深鉢	口縁		沈線文	ナデ	取り上げNo.1732	41
114	64号土坑	XIII	深鉢	口縁		擬縄文（巻貝施文）	ナデ	後世遺構への流れ込み	41
115	A区一括	XIII	深鉢	胴		沈線→縄文	ナデ		41
116	B区	XIII	深鉢	底	底：(9.6)	ナデ	ナデ	取り上げNo.B-238	41
117	2号竪穴	XIII	深鉢	口縁		ヘラミガキ・沈線文	ヘラミガキ・沈線文	後世遺構への流れ込み	41
118	47号土坑	XIII	深鉢	口縁	口：(18.4)	ヘラミガキ・突帯文	ヘラミガキ	後世遺構への流れ込み	41
119	54号土坑	XIII	深鉢	底		ヘラミガキ	ナデ	後世遺構への流れ込み	41
120	1号竪穴	XIV	浅鉢	口縁		孔列文	ナデ	後世遺構への流れ込み	41
121	AB6	XIV	浅鉢	口縁		孔列文	ナデ		41
122	AN14	XV	浅鉢	口縁		ナデ	ナデ		41
123	AA14 Ⅳc	XV	浅鉢	口縁		突帯文	ナデ	取り上げNo.5043	41

第11表　縄文土器観察表（3）

119は上げ底の底部である。

【XIII類土器】（第23図100・101・104～116）

後期頃と推定されるが，単独で分類を設けがたい資料について一括している。

100・101は台付皿である。101はB区で出土したが，野首第2遺跡の資料と接合している。

106・111は浅鉢，104・108も浅鉢の可能性があるが，その他は深鉢と考えられる。粘土貼付文・沈線・列点文などを多用している。114は巻貝による擬縄文，115は一見すると磨消縄文だが，沈線を境に縄文の施文方向が目まぐるしく変わっており，沈線で設けた区画に合わせて縄文を転がした可能性がある。沈線は半截竹管を用いている。

116は高台を持つ底部である。位置付けは難しいが，胎土や調整が後期の土器と類似することから，この類に含めた。

【XIV類土器】（第23図120・121）

120は口縁が外反し，断面がやや細長い形状の工具を用いて孔列文を施している。

121は口縁が直立し，端部を折り返すことで一部が肥厚している。孔列文は折り返した端部の直下に並んでいる。

いずれも調整は粗いナデだが，120の方が若干平滑に仕上げられている。

【XV類土器】（第23図122・123）

122は口縁部直下でやや屈曲し，123は外反口縁に突帯を有する。いずれも粗いナデ調整である。

B. 小型石器

【チャート製石器群】（第24図124～144）

小型石器の中では最も多数を占める一群である。器種は石鏃・異形石器・楔形石器・石匙・スクレイパーなどがある。

124～135は石鏃，136・140は未成品と考えられるものである。比較的加工が容易なようで，様々な形態が認められる。特にU字形の長い脚を持つ124や細かな鋸歯状の調整を行う131などはこの石材に顕著である。

138・139は側縁が刃部のスクレイパーである。

141・142は異形石器。141は研磨の痕跡が認められ，いわゆるトロトロ石器である。

143・144は石匙だが，144はかなり大型である。

掲載した石器21点のうち，半数の11点が早期包含層からの出土であり，128・133・136は集石遺構検出面よりも下層から出土した。

【西北九州産黒曜石製石器群】（第24図145～163）

小型石器の中でも特に小さな石器が多く，供給された素材のサイズを示唆する。

チャートより加工しづらいようで，形状が整っていないものも目立つ。

145～151は長崎県針生島産黒曜石を用いたと推定される一群で，石鏃と石錐がある。

148は本遺跡で最も小さい石鏃で，欠損した先端部を復元しても長さ1cm程度になると推定される。

152～163は佐賀県腰岳産黒曜石を用いたと推定される一群で，石鏃・異形石器などがある。

161はいわゆるトロトロ石器であるが，黒曜石を素材としたものは稀である。

160は剥片の縁辺を刃部とした石器の可能性がある。現時点では類例を知り得ていないがスクレイパーの一種と捉えておきたい。

掲載した石器19点のうち，6点が早期包含層からの出土であり，その他に1点（153）が36号集石遺構に流れ込んでいた。

【姫島産黒曜石製石器群】（第25図164～179）

遠隔地からもたらされた石材では，数量ともに最も卓越する。器種は石鏃・石錐・スクレイパー・石匙などがある。

164～168，170・171，173は石鏃で，169・172・174は未成品と考えられる。

172は薄い剥片の周縁に細かな調整を入れながら形を作っていく過程が明瞭である。

石匙は179のように縦長のタイプも見られ，形態が多様である。

掲載した石器16点のうち，3点が早期包含層からの出土であり，167は集石遺構検出面よりも下層から出土した。

この他に後述する近世の11号土坑から，本遺跡で最も大きい石核が出土している（第91図837）。

【桑ノ木津留産黒曜石製石器群】（第25図180～186）

産地としては比較的近距離でありながら、出土量はそれほど多くない。器種は石鏃・異形石器程度に限られる。

186は石核であるが礫面が残存しており、元から小さな礫であったことが判明する。

186は集石遺構検出面よりも下層から出土した。

【安山岩製石器群】（第26図192～203）

加工が雑しいためか、細かな調整はあまり見られない。器種は石鏃・尖頭器・石匙などがある。

199は尖頭状石器であろうか。200は尖頭器だが、形態が歪である。先端部・基部ともに折り取られた可能性がある。石匙は両面ないし片面の縁辺のみ調整を加えるものが多い。掲載した12点のうち3点が早期包含層からの出土である。

【ホルンフェルス製石器群】（第26図204～208）

安山岩と同様、入念な調整を加えたものは少ない。器種は石鏃・尖頭器・石匙がある。

207は横長剥片を素材とした尖頭器で、これのみ早期包含層から出土した。

208は礫面を大きく残す石匙である。

【その他の石材製石器群】

（第25図187～191・第26図209～212）

187～189は黒色流紋岩製の石器である。石鏃・石匙の2種がある。

190・191は水晶製石器である。190は石鏃、191は楔形石器である。

209～211は玉髄製石器で、石鏃・異形石器・石匙がある。石匙は表面の一部がオパール化している。

212は黒曜石製の異形石器であるが、産地を明確にしえなかった。

C．大型石器

【ホルンフェルス製石器群（石斧類）】

（第27図213～第28図232）

213は局部磨製石斧であるが、本来はより大きな石斧が破損したために再生した可能性がある。

214は丸みを帯びた短冊形で、片側に礫面を残す。

215・216も丸みを帯びた短冊形ないし楕円形と言えそうだが、礫面を全く残しておらず、石材もむしろ後述する撥形などの石斧に類似するようである。

217・218は大ぶりの有肩打製石斧、219・220は撥形の打製石斧である。

221・222は元から板状の礫を素材として、周縁に調整を加えたものである。厳密には石斧と分離すべきかもしれないが、今回は形態的な類似点からこの群に含めている。

223はかなり小さいが撥型の打製石斧である。

224・225は環状石斧である。

226～231は磨製石斧及びその未成品と考えられる。226・227は粗割り段階、228は敲打による調整途中と判断される。

232は十字（X字）形石器であるが、石斧の破損品を転用した可能性がある。

これらのうち早期包含層から出土したのは214・225のみで、この他に8号集石遺構の周辺から213が出土している。一方、B区の低湿地層から出土したのは218・222・231の3点である。低湿地層やその周辺からは後期の土器が多数出土しており、これらの石器も同時期の可能性は高い。

よって早期に属する石斧は礫面を残す短冊形石斧、局部磨製石斧や環状石斧など一部に限られ、その他大多数の石器は後期に属するものと考えられる。

【蛇紋岩製石斧】（第28図233）

撥形を呈する磨製石斧である。刃部に細かな剥離が見られ、使用に伴う破損の可能性がある。

【尾鈴山酸性岩類・ホルンフェルス製石器群

（スクレイパー類）】（第29図234～238）

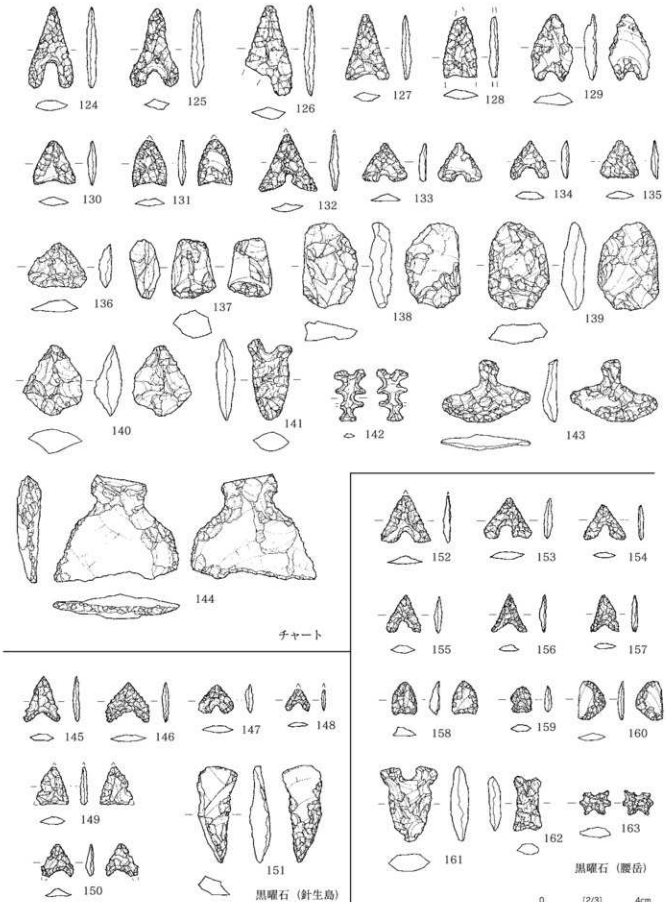
234・235はサイドスクレイパー、236～238はラウンドスクレイパーである。

数が少ないため断定はできないが、234・235がいずれも集石遺構検出面より下層から出土しており、より古手の形態という可能性もある。

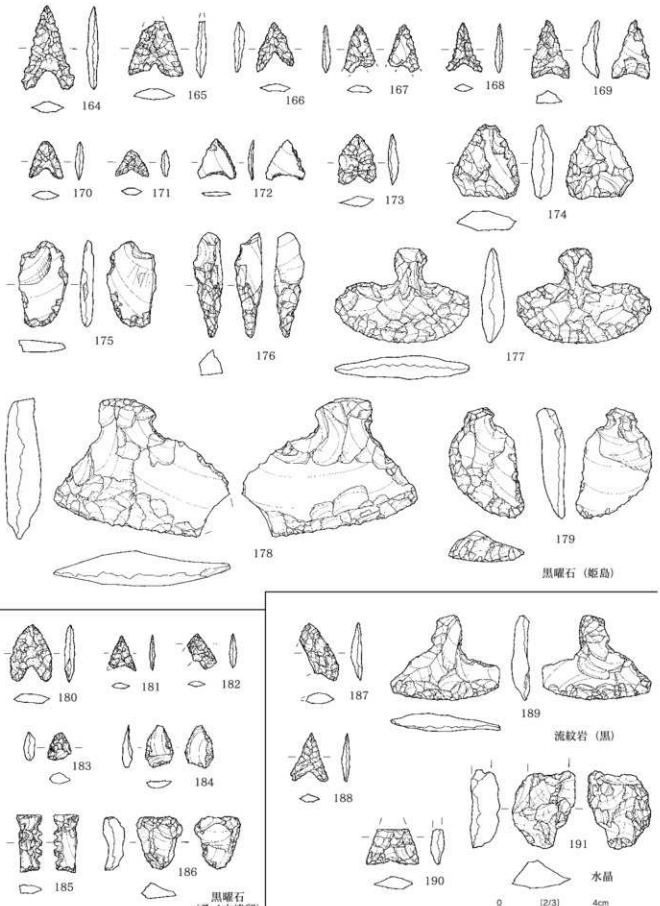
【尾鈴山酸性岩類・砂岩製石器群（磨石・敲石類）】

（第30図239～250）

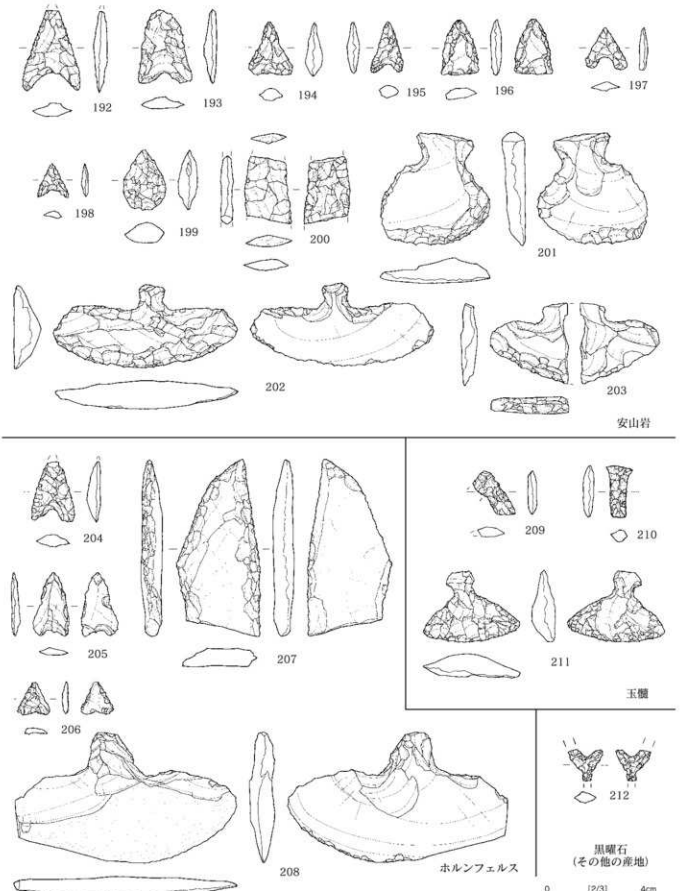
磨石はほとんど早期に属すると考えられる。一方の敲石は249・250のように小振りで丸みの強いものが早期包含層から、247・248のように細長く、側縁に敲打痕を持つものが低湿地層から出土しており、ある程度時期的な差異を認めうる。



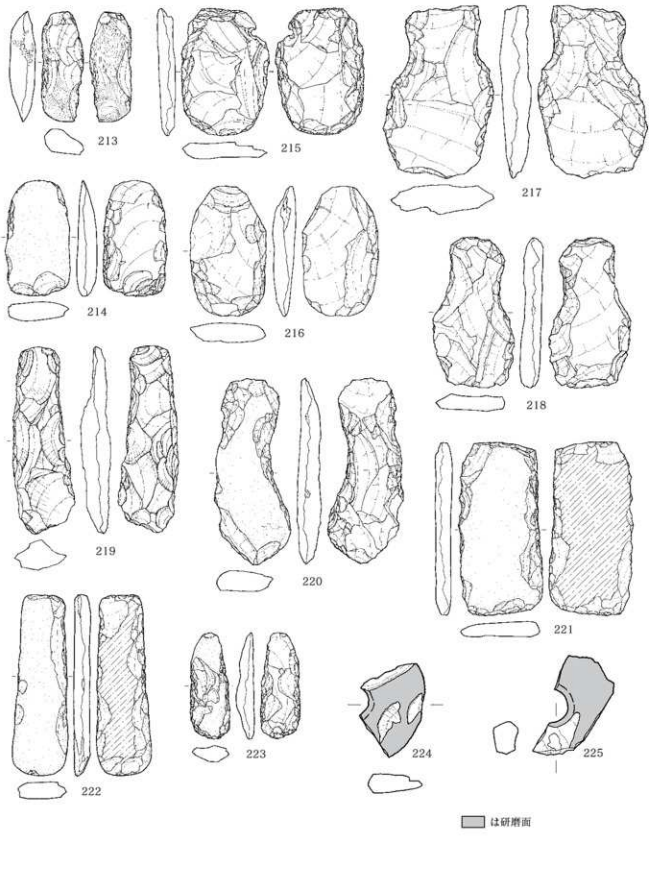
第24図　縄文石器実測図（1）



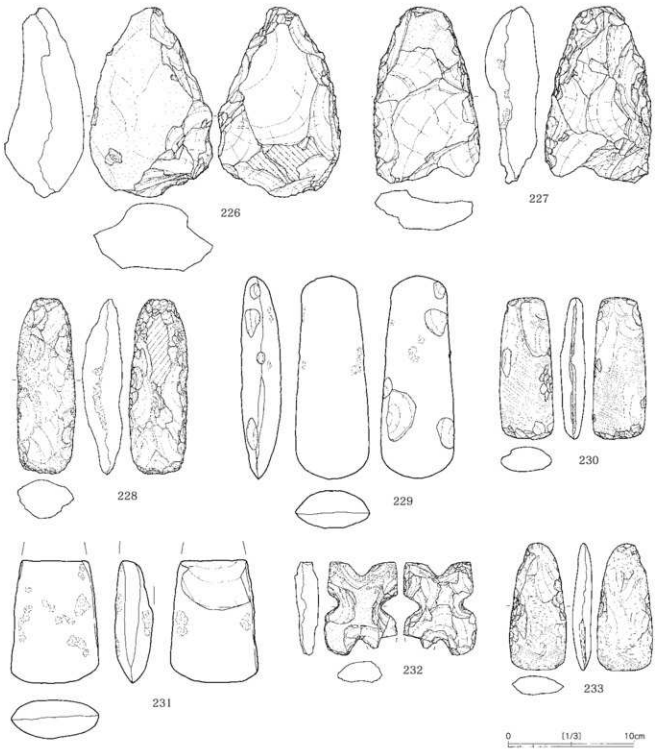
第25図　縄文石器実測図（2）



第26図　縄文石器実測図（3）



第27図　縄文石器実測図（4）



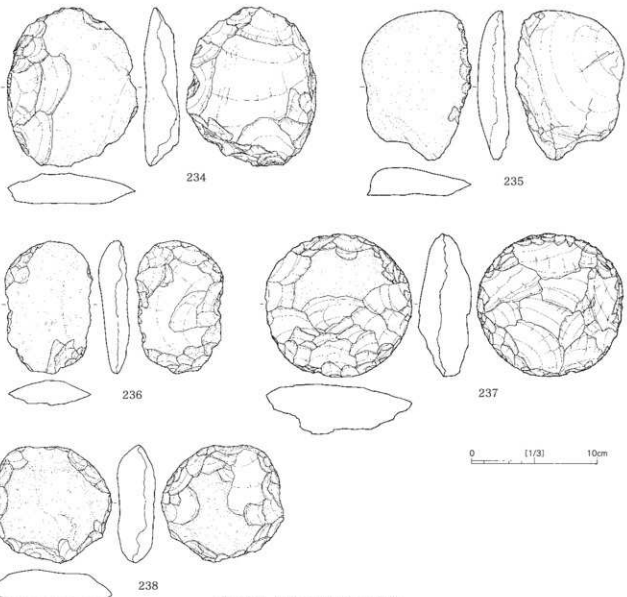
第28図　縄文石器実測図（5）

No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	掲載頁
124	7号不明	石鏃	チャート	3.20	1.80	0.45	1.8	古墳時代遺構への流れ込み	47
125	平D Ⅵb	石鏃	チャート	3.10	1.90	0.50	1.8	取り上げNo.5300	47
126	D5 Ⅵb	石鏃	チャート	3.55	1.85	0.40	1.9		47
127	平D Ⅵb	石鏃	チャート	2.55	1.75	0.35	1.2	取り上げNo.4450	47
128	平D Ⅵc	石鏃	チャート	2.40	1.30	0.35	1.2	取り上げNo.3798	47
129	1号竪穴	石鏃	チャート	2.60	1.65	0.45	1.9	古墳時代遺構への流れ込み	47
130	B5 Ⅵa	石鏃	チャート	1.75	1.65	0.35	0.8		47
131	D7	石鏃	チャート	1.80	1.35	0.30	0.7		47
132	平D Ⅵa	石鏃	チャート	2.25	2.30	0.35	1.0	取り上げNo.4446	47
133	平D Ⅵc	石鏃	チャート	1.50	1.75	0.30	0.7	取り上げNo.5419	47
134	平D Ⅵc	石鏃	チャート	1.50	1.50	0.30	0.6	取り上げNo.3834	47
135	A4	石鏃	チャート	1.50	1.50	0.30	0.6		47
136	平D Ⅵc	石鏃	チャート	1.75	2.35	0.50	1.8	未成品。取り上げNo.4283	47
137	C7	楔形石器	チャート	2.30	1.75	1.05	4.9		47
138	平D Ⅵb	スクレイパー	チャート	3.40	2.15	0.90	7.6	取り上げNo.4260	47
139	D5	スクレイパー	チャート	3.50	2.40	0.90	9.4		47
140	2号竪穴	石鏃	チャート	2.80	2.35	1.10	4.9	未成品。古墳時代遺構への流れ込み	47
141	平D ML1	異形石器	チャート	3.25	1.80	0.75	3.7	いわゆるトロトロ石器。取り上げNo.2402	47
142	平D Ⅵb	異形石器	チャート	2.00	1.30	1.50	0.5	取り上げNo.3211	47
143	D5	石匙	チャート	2.45	3.50	0.60	2.9		47
144	A4	石匙	チャート	4.25	5.00	0.90	15.3		47
145	C6	石鏃	黒（針）	1.80	1.45	0.25	0.5		47
146	D5	石鏃	黒（針）	2.05	1.80	0.30	0.5		47
147	C6	石鏃	黒（針）	1.10	1.40	0.25	0.3		47
148	C7	石鏃	黒（針）	0.80	0.95	0.15	0.1		47
149	B6	石鏃	黒（針）	1.50	1.30	0.30	0.4		47
150	1号竪穴	石鏃	黒（針）	1.30	1.30	0.30	0.3	古墳時代遺構への流れ込み	47
151	C7 Ⅵb	石鏃	黒（針）	3.80	1.60	0.80	3.1		47
152	C5	石鏃	黒（腰）	1.80	2.00	0.30	0.7		47
153	36号集石	石鏃	黒（腰）	1.60	1.85	0.30	0.6	取り上げNo.SⅠ36-12	47
154	D5	石鏃	黒（腰）	1.90	1.70	0.25	0.3		47
155	平D Ⅵb	石鏃	黒（腰）	1.50	1.40	0.30	0.4	取り上げNo.4168	47
156	平D ML1	石鏃	黒（腰）	1.50	1.40	0.25	0.3	取り上げNo.2437	47
157	A区一括	石鏃	黒（腰）	1.45	1.15	0.20	0.3		47
158	D5	石鏃	黒（腰）	1.30	1.00	0.40	0.5		47
159	C8 Ⅵb	石鏃	黒（腰）	1.00	0.90	0.30	0.2		47
160	平D Ⅵa	スクレイパー?	黒（腰）	1.55	1.10	0.20	0.3	取り上げNo.2711	47
161	B6	異形石器	黒（腰）	3.00	2.30	0.75	3.9	いわゆるトロトロ石器	47
162	65号土坑	異形石器	黒（腰）	2.15	1.10	0.45	1.2	近世遺構への流れ込み	47
163	C5 Ⅵa	異形石器	黒（腰）	0.95	1.20	0.40	0.3		47
164	A区一括	石鏃	黒（姫）	3.30	2.15	0.50	1.8		48
165	C5	石鏃	黒（姫）	2.20	2.15	0.40	1.6		48
166	C7	石鏃	黒（姫）	1.90	1.45	0.40	0.6		48
167	平D Ⅵc	石鏃	黒（姫）	1.90	1.30	0.35	0.5	取り上げNo.4102	48
168	C6	石鏃	黒（姫）	1.90	1.40	0.35	0.4		48
169	D8	石鏃	黒（姫）	2.30	1.50	0.70	1.3		48
170	D8 Ⅵb	石鏃	黒（姫）	1.45	1.35	0.30	0.4		48
171	D6	石鏃	黒（姫）	1.05	1.30	0.35	0.2		48
172	平D 二次アカ	石鏃	黒（姫）	1.55	1.55	0.20	0.3	未成品。取り上げNo.1194	48
173	2号竪穴	石鏃	黒（姫）	1.95	1.45	0.40	0.8		48
174	A区一括	石鏃	黒（姫）	2.90	2.65	0.85	5.7	未成品	48
175	B7	スクレイパー	黒（姫）	3.45	1.95	0.50	3.6		48
176	7号不明	石錐	黒（姫）	4.15	1.15	1.10	4.0		48
177	62トレンチ	石匙	黒（姫）	3.80	5.25	0.90	12.5		48
178	平D Ⅵb	石匙	黒（姫）	5.50	7.00	1.40	37.2	取り上げNo.3100	48
179	C4	石匙	黒（姫）	4.30	3.00	0.90	10.3		48
180	C5	石鏃	黒（桑）	2.25	1.65	0.40	1.3		48
181	B区	石鏃	黒（桑）	1.40	1.10	0.20	0.2	取り上げNo.B-1108	48
182	A4	石鏃	黒（桑）	1.40	1.15	0.20	0.3		48
183	AD6	石鏃	黒（桑）	1.10	0.90	0.40	0.4		48
184	D7	石鏃	黒（桑）	1.70	1.10	0.40	0.6	未成品	48
185	C5	異形石器	黒（桑）	2.30	1.00	0.40	0.9		48
186	C5 Ⅵc	石核	黒（桑）	2.10	1.80	0.85	2.4		48
187	H8	石鏃	流（黒）	2.30	1.55	0.40	1.1		48
188	7トレンチ	石鏃	流（黒）	1.95	1.50	0.40	0.6		48
189	C7	石匙	流（黒）	3.40	4.35	0.70	6.1		48
190	C5 Ⅵb	石鏃	水晶	1.40	2.05	0.50	1.4		48
191	B4	楔形石器	水晶	3.10	2.50	1.00	8.4		48

第12表　縄文石器観察表（1）　※最大長・幅・厚の単位はcm、重量はg

No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	掲載頁
192	A区一括	石鏃	安山岩	3.20	2.30	0.50	2.8		49
193	C5	石鏃	安山岩	2.90	2.10	0.50	2.5		49
194	C6 Ⅵa	石鏃	安山岩	2.10	1.75	0.70	1.6	取り上げNo.4873	49
195	C6	石鏃	安山岩	2.00	1.30	0.50	0.8		49
196	G7	石鏃	安山岩	2.20	1.50	0.40	1.5		49
197	C6	石鏃	安山岩	1.65	1.65	0.30	0.5		49
198	D5 Ⅵb	石鏃	安山岩	1.35	1.25	0.30	0.3		49
199	D8	尖頭状石器？	安山岩	2.40	1.70	0.75	2.8		49
200	D7	尖頭器	安山岩	2.65	1.85	0.50	2.6		49
201	C7	石匙	安山岩	4.45	4.35	0.90	14.4		49
202	平D Ⅵb	石匙	安山岩	3.30	7.35	1.10	19.2	取り上げNo.3101	49
203	16トレンチ	石匙	安山岩	3.15	3.15	0.65	5.9		49
204	A区一括	石鏃	ホルン	2.40	1.70	0.55	1.9		49
205	G8	石鏃	ホルン	2.55	1.45	0.35	1.1		49
206	AA6	石鏃	ホルン	1.30	1.30	0.25	0.3		49
207	D5 Ⅵb	尖頭器	ホルン	7.00	2.35	0.80	22.7		49
208	A5	石匙	ホルン	5.20	8.80	1.00	37.8		49
209	F6	石鏃	玉髄	1.70	1.70	0.35	0.4		49
210	B4	異形石器	玉髄	2.05	1.05	0.45	0.8		49
211	B区 Ⅳb	石匙	玉髄	2.85	3.85	0.90	6.0	取り上げNｏ. 2547	49
212	C4	異形石器	黒（他）	1.20	1.40	0.40	0.4		49
213	8号集石	石斧	ホルン	8.55	3.35	2.00	73.5	取り上げNo.SI8-1。破損品の再生か	50
214	B7 Ⅵb	石斧	ホルン	9.10	5.15	1.60	100.8		50
215	AA7	石斧	ホルン	10.05	7.00	1.20	113.2		50
216	J5	石斧	ホルン	10.35	6.05	1.80	146.4		50
217	B区一括	石斧	ホルン	13.60	8.70	2.35	315.7		50
218	B区 Ⅳc	石斧	ホルン	11.90	6.45	1.55	151.9	取り上げNo.Ⅳc-434	50
219	M6	石斧	ホルン	14.80	4.85	2.40	170.1		50
220	AC7	石斧	ホルン	14.75	6.05	1.85	191.1		50
221	AA15	石斧？	ホルン	13.80	6.65	1.20	188.2		50
222	AB15 Ⅳc	石斧？	ホルン	13.40	4.35	1.35	129.3	取り上げNo.5110	50
223	AA13	石斧	ホルン	8.40	4.20	1.40	44.0		50
224	B6	環状石斧	ホルン	7.50	5.20	1.60	63.8		50
225	C5 Ⅵc	環状石斧	ホルン	8.00	6.40	2.50	80.4		50
226	F8	石斧	ホルン	14.90	9.70	6.20	911.7	未成品	51
227	B15	石斧	ホルン	13.90	8.45	4.20	473.8	未成品	51
228	AK14	石斧	ホルン	13.90	4.70	3.10	253.2	未成品	51
229	C3	石斧	ホルン	16.00	5.80	3.10	414.8		51
230	B区一括	石斧	ホルン	11.20	4.30	2.00	141.1		51
231	AA12 Ⅳb	石斧	ホルン	9.80	7.00	3.10	316.6		51
232	K8	十字形石器	ホルン	7.35	5.80	1.70	91.4	石斧の破損品を転用？	51
233	C8	石斧	蛇紋岩	10.05	4.45	1.45	103.1		51
234	平D Ⅵc	スクレイパー	ホルン	12.60	10.35	2.45	445.2	取り上げNo.3846	54
235	平D Ⅵc	スクレイパー	ホルン	11.85	8.70	2.85	304.9	取り上げNo.3825	54
236	D3	スクレイパー	尾鈴	10.60	6.95	2.20	172.8		54
237	F8	スクレイパー	ホルン	11.30	11.60	5.10	548.9		54
238	C7 Ⅵb	スクレイパー	尾鈴	9.20	9.70	3.00	362.0		54
239	D8 Ⅵb	磨石	尾鈴	7.10	6.60	4.50	292.6		55
240	A6 Ⅵa	磨石	尾鈴	7.30	8.00	4.60	406.2		55
241	B6 Ⅵb	磨石	尾鈴	10.90	9.70	4.50	640.1		55
242	A7 Ⅵc	磨石	尾鈴	9.50	9.20	5.10	539.6		55
243	AA6	磨石・敲石	尾鈴	8.10	7.90	3.10	241.8		55
244	K6	敲石	尾鈴	9.20	8.00	4.20	454.0		55
245	C7 Ⅵb	磨石・敲石	砂岩	10.90	10.90	5.80	1000.9		55
246	C6 Ⅵb	磨石・敲石	砂岩	11.70	8.90	4.20	651.8		55
247	B区 Ⅳb	敲石	砂岩	15.40	5.00	3.70	434.6	取り上げNo.Ⅳb-242	55
248	B区一括	敲石	砂岩	15.10	4.40	3.60	351.6		55
249	D8 Ⅵb	敲石	砂岩	11.40	5.60	3.70	353.8		55
250	B6 Ⅵc	敲石	砂岩	5.80	4.50	3.50	130.5		55
251	平E 二次アカ	打欠石錘	尾鈴	8.30	8.90	2.90	301.1	取り上げNo.5346	56
252	E3 クロ	打欠石錘	尾鈴	7.90	8.20	2.50	226.5	取り上げNo.5467	56
253	B区	打欠石錘	尾鈴	7.30	8.80	2.20	214.1	取り上げNo.B-528	56
254	AA14 Ⅳc	打欠石錘	砂岩	8.40	10.80	2.80	394.1	取り上げNo.5017	56
255	平E 二次アカ	打欠石錘	尾鈴	5.70	7.50	2.10	115.8	取り上げNo.2526	56
256	平E クロ	打欠石錘	尾鈴	5.80	6.80	2.20	105.9	取り上げNo.1207	56
257	B区	打欠石錘	尾鈴	5.50	6.90	2.30	131.4	取り上げNo.B-995	56
258	AA14 Ⅳc	打欠石錘	砂岩	5.00	9.80	1.40	103.2	取り上げNo.4696	56
259	平E 二次アカ	打欠石錘	尾鈴	4.00	6.60	1.50	60.1	取り上げNo.5338	56
260	E3 クロ	打欠石錘	尾鈴	4.30	5.00	1.50	46.3	取り上げNo.5466	56

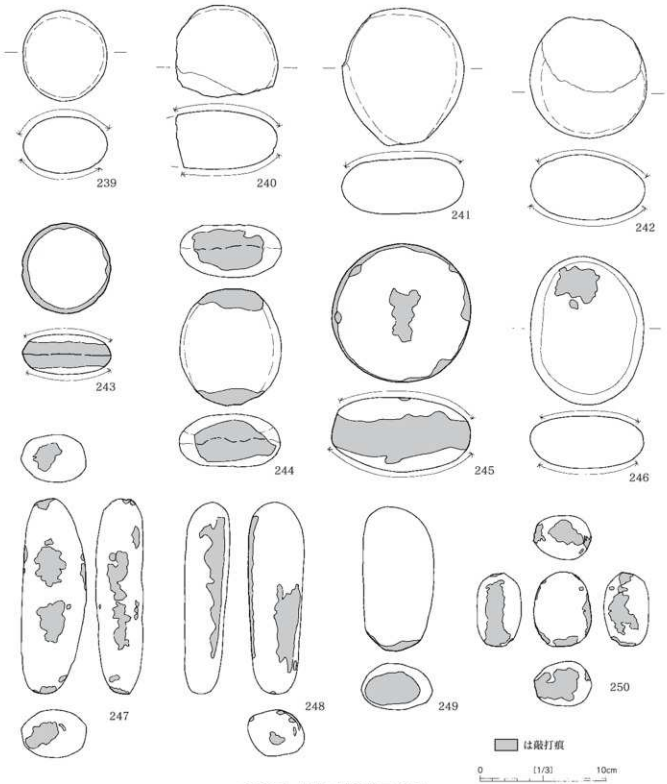
第13表　縄文石器観察表（2）　※最大長・幅・厚の単位はcm、重量はg



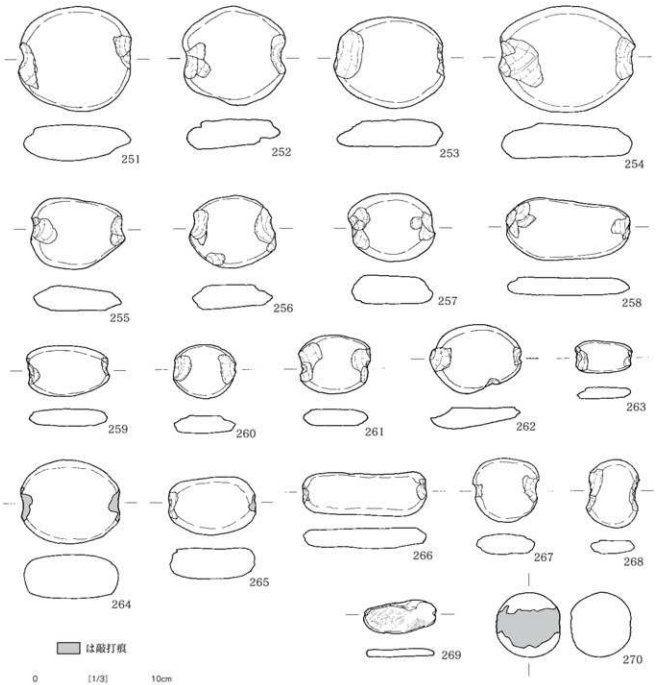
第29図　縄文石器実測図（6）

No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	掲載頁
261	B区	打欠石錘	尾鈴	4.60	5.70	1.40	54.5	取り上げNo.B-532	56
262	A13　Ⅳb	打欠石錘	ホルン	5.50	7.20	1.80	86.4	取り上げNo.4680	56
263	B区　Ⅳc	打欠石錘	ホルン	2.60	4.60	0.90	15.8	取り上げNo.Ⅳc-545	56
264	AL8	打欠石錘	砂岩	6.10	7.80	3.40	262.7		56
265	A13	打欠石錘	ホルン	4.60	5.90	2.40	121.8	取り上げNo.4679	56
266	H8	打欠石錘	ホルン	3.50	9.80	1.60	99.7		56
267	AL8	打欠石錘	チャート	5.10	5.20	1.70	64.5		56
268	D6	打欠石錘	尾鈴	5.50	4.30	1.10	35.9		56
269	AA6	切目石錘	ホルン	2.70	5.70	7.00	14.3	研磨の痕跡あり。	56
270	A5	有溝石錘	尾鈴	5.10	5.10	4.70	178.1		56

第14表　縄文石器観察表（3）　※最大長・幅・厚の単位はcm、重量はg



第30図　縄文石器実測図（7）



第31図　縄文石器実測図（8）

【尾鈴山酸性岩類・砂岩ほか製石器群（石錘）】
（第31図251～270）

掲載した20点のうちV層以下より出土したものは皆無で、B区の斜面及び低湿地層から後期の土器とともに出土したものが半数を占める。よってこれらの石器が後期の所産である可能性は極めて高い。

重量が用途に関連すると推測されるが、300ｇ以上・200ｇ前後・100ｇ前後・50ｇ前後・20ｇ以下などの種類がありそうで、100ｇ前後が最も多い。扁平礫の長軸方向を2箇所打ち欠くものがほとんどである。269は切目石錘だが、表面を研磨したかのような痕跡があり、270は敲打による溝が巡る。

第４節　弥生時代の遺物

１．概要

遺構は検出されず、遺物も数十片程度にとどまるが、内容は前期から後期まで揃っている。

いずれも流れ込みの様相を呈し、前期末頃の西瀬戸内的な土器はＡ区平場Ｄ周辺、やや下る下城式の甕がＢ区にまとまっているが、野首第２遺跡でも本遺跡寄りの調査区からは該期の遺物がほとんど出土せず、野首第１遺跡（県道）では後期後半の土器集中・土坑が各１箇所あるのみで、明らかな関連は見出しがたい。

２．遺物（第32図271～283）

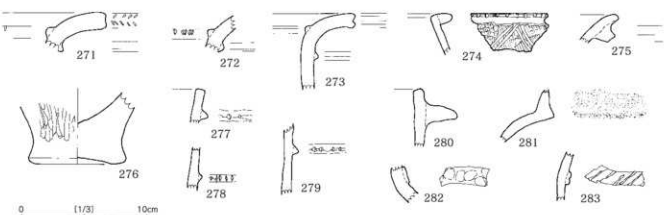
271・272は西瀬戸内的な特徴を有するとされる前期末頃の壺で、同一個体の可能性がある。273は胎土や作りが粗いが、形態から同時期と考えられる。

274はやや下る中期初頭頃、亀の甲式の甕である。

277～279も下城式の甕であり、274と同時期であろう。これらは持田中尾遺跡と同じ様相である。

281は複合口縁の壺であり、後期後半頃に属する可能性が高い。

282・283などは古墳時代に入る可能性もある。



第32図　弥生土器実測図

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考
						外面	内面	
271	２号竪穴	弥生	壺	口縁～頸		口縁端部羽状刻目・突帯・赤彩	刻目突帯・赤彩	取り上げNo.SX2-541。西瀬戸内的な様相を持つ。
272	Ｄ５	弥生	壺	頸		突帯	刻目突帯・赤彩？	271と同一個体か。
273	平Ｄ	弥生	壺	口縁～頸		口縁端部凹線・突帯	突帯	取り上げNo.2439。271・272より胎土粗い。
274	１号竪穴	弥生	甕	口縁		刻目突帯・ハケメ・沈線	ナデ	亀の甲式
275	ＡＬ15	弥生	壺	口縁		突帯	ハケメ	
276	Ｃ８	弥生	壺	底	底：(7.6)	ヘラミガキ	ナデ・指頭圧痕	内面に微量の炭化物？
277	ＡＳ13	弥生	甕	口縁		刻目突帯	ナデ	下城式
278	ＡＮ14	弥生	甕	口縁		刻目突帯	ナデ	下城式
279	平Ｅ	弥生	甕	口縁		刻目突帯・ハケメ	ナデ	下城式。取り上げNo.2285。
280	Ｂ区一括	弥生	甕	口縁		突帯・ハケメ	ナデ	
281	ＡＤ６	弥生	壺	口縁		櫛描波状文	ナデ	複合口縁壺
282	ＡＡ６	弥生？	壺	頸		突帯	ナデ	
283	ＡＡ６	弥生？	甕	頸		刻目突帯	ナデ	

第15表　弥生土器観察表

第５節　古墳時代の遺構と遺物

１．概要

本遺跡における調査の大きな目的であった横穴式石室を有する古墳群は、野首第１遺跡（県道）と本遺跡に跨るように存在している。

また野首第１遺跡（県道）調査時には丘陵上に９軒の「竪穴住居跡」が検出されていた。これらのうち６軒は中期後半から後期初頭頃に属すると考えられており、それらと古墳との関連は薄いようであるが、SA10・11・13については後期後半から終末期とされ、まさに古墳と同時期である。

そうした状況において、本遺跡でも谷の斜面下に同時期と考えられる「竪穴建物跡」が２軒検出された。両遺跡の遺構を周辺地形にプロットしたのが第33図である。この図によると「竪穴建物」は２基の古墳を取り巻くように存在していたことになる。後述するように本遺跡の２号竪穴建物跡は自然埋没の過程で二次利用された可能性が高く、これら建物の性格について示唆的である。

また古墳直下の斜面に浅い溝状の遺構を４条検出した。当初はこれらを「性格不明遺構（ＳＸ）」として調査を進めていたが（６～８・10号性格不明遺構）、①古墳との位置関係、②安置されたか流れ込んだと推定される副葬品が少なからず出土した、③遺構周辺で検出したピットが非常に深く、その中にも副葬品が流れ込んでいる、などの点から溝状の窪みそのものが人為であるかは不明ながら、「墓道」的な役割を果たしていた可能性があると判断した。

またＡ区西端の調査区壁面でＵ字形を呈する黒色土層の堆積が認められたが、野首１号墳直下で確認された黒色土層の堆積（12号性格不明遺構）と類似することや、その直下に土師器を安置したピットが検出されたことから同種の遺構であると推測している（４号性格不明遺構）。

Ａ区ではその他にも東端付近で土師器の集中域を検出している。

Ｂ区の低湿地でも、Ⅳｄ層を中心に中期頃の土器がまとまって出土しており、野首第２遺跡で検出された集落との関わりが想定される。

２．遺構と遺物

竪穴建物跡が２軒、溝状の性格不明遺構あるいはそれに類すると考えられるものが８基、土師器集中を１箇所検出した。全てＡ区に存在する。

Ａ．竪穴建物跡

当センターの報告書では古墳時代の竪穴を備えた建物について、従来「竪穴住居跡」と呼称しており、野首第１遺跡（県道）の報告もそれを踏襲している。

ただし本遺跡では先述したように古墳の直下に存在することや、埋没過程での二次利用が想定されることなどから、居住の用に供したとは考えづらいため「竪穴建物跡」として報告する。

【１号竪穴建物跡（ＳＡ１）】

規模・形態（第34図）：

平面形は5.2×4.4ｍの隅丸方形であった。近世以降の削平を受けた可能性が高く、南側では検出時に貼床面が露出していた。そのため埋土は残存良好な箇所でも深さ20cm程度しかなかった。土器埋設炉は中央に１基、南に約１ｍの所にもう１基が設置されていた。主柱穴は４基である。

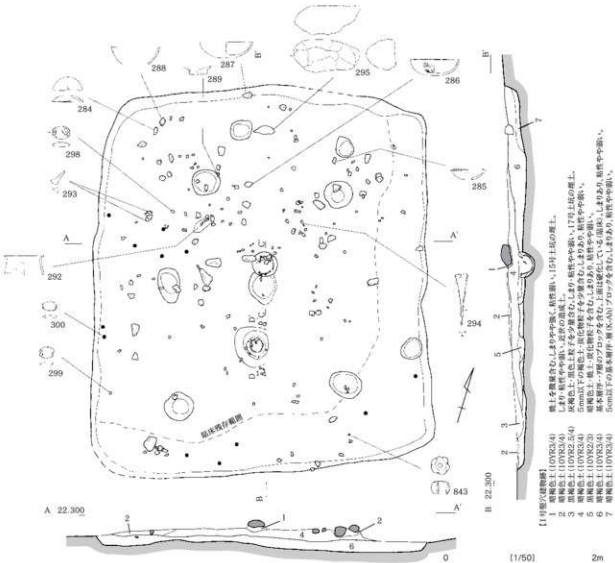
土器埋設炉（第34・35図290・291）：

290は中央の土器埋設炉に使用されていたやや大型の甕で、炉の直径を調整するために胴部最大径付近より上を打ち欠いている。打ち欠き後の直径は、内径で約21cmである。外面には工具ナデ、内面は指ナデを施すが、輪積み痕を残すなど作りがやや粗い。底部も打ち欠かれているが丸底気味で、６世紀末～７世紀初頭の中でも新しい様相を備えている。

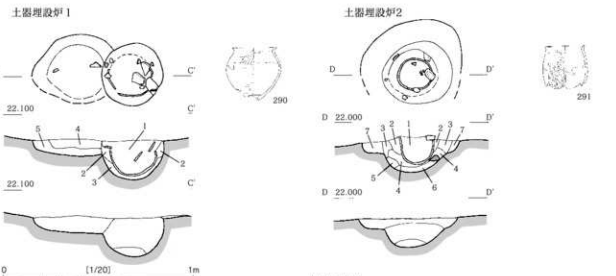
291は南側の土器埋設炉に使用された中型甕で、やはり口縁部及び底部を打ち欠いている。打ち欠き後の直径は内径で約17cmである。やはり輪積み痕を残すが、290と比較すると長胴化の傾向が認められ、７世紀前半でも中頃寄りの年代が想定される。

これら土器埋設炉のピットを精査したところ、２基とも北側壁面と甕との間に扁平礫が挟み込まれていることが判明した。甕を据える際の微調整に用いたものであろうか。

第33図　古墳時代遺構分布図



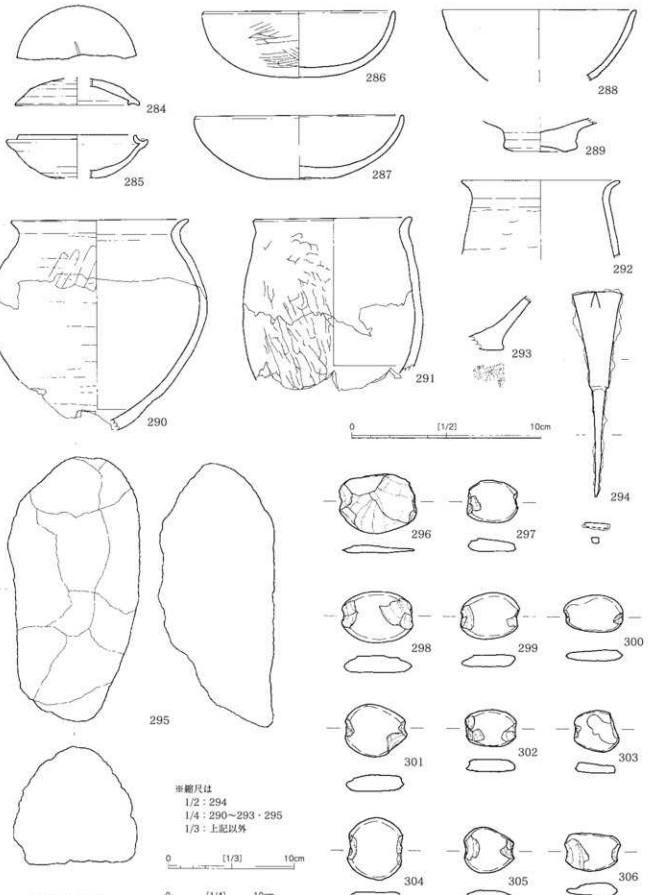
[1号竪穴建物跡]
1 暗褐色土(10YR3/4) 焼土を斑状に含む。粘性強い。
2 黒褐色土(10YR3/4) 焼土を多量に含む。粘性やや強い。
3 暗褐色土(10YR3/4) 焼土ブロック(5cm以上)を多量に含む。粘性やや強い。
4 暗褐色土(10YR3/4) 焼土・炭化物粒子を少量含む。粘性やや強い。
5 黒褐色土(10YR2/3) 焼土・炭化物粒子を含む。粘性やや強い。
6 暗褐色土(10YR3/4) 焼土・炭化物粒子を含む。粘性やや強い。
7 暗褐色土(10YR3/4) 5cm以下の焼土・黒ボクブロックを含む。粘性やや強い。



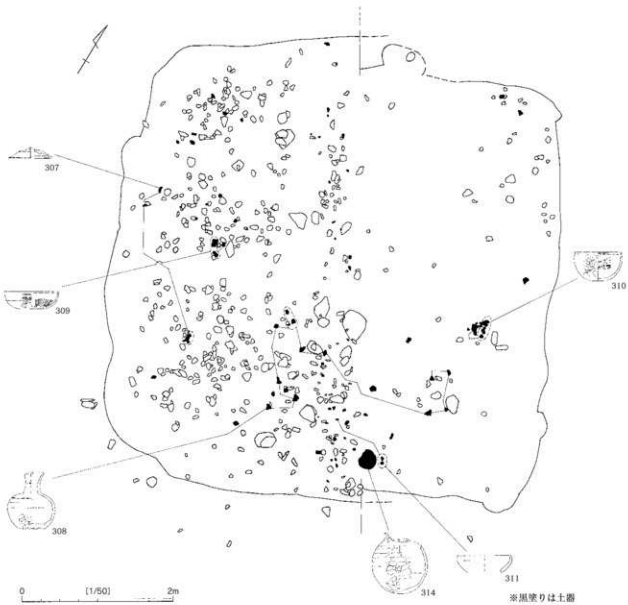
【土器埋設炉1】
1 建物跡4層の土に類似。
2 褐色土 (7.5YR4/4) 焼土ブロックが礫の周囲に点在する。粘性なし。
3 褐色土 (10YR4/4) この層中で数点の扁平礫が礫の下に入っていた。粘性強い。
4 褐色土 (7.5YR4/4) 2層より土色暗く、炭化物粒子を多量に含む。
5 褐色土 (10YR4/4) 礫に近い上面に焼土粒子を、中央付近に炭化物粒子を含む。

【土器埋設炉2】
1 建物跡4層の土に類似。
2 暗赤褐色土(5YR3/3) 焼土を多量に含む。粘性なし。
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土ブロック(5cm以下)の小礫を多量含む。粘性なし。
4 褐色土 (7.5YR4/3) 3cm以下の小礫を多量含む。粘性やや強い。
5 褐色土 (10YR4/4) 4cm以下の小礫を少量含む。粘性強い。
6 暗褐色土(7.5YR3/3) 2cm以下の小礫を少量含む。しまり強く、粘性やや強い。
7 褐色土 (7.5YR4/4) 焼土・炭化物・1cm以下の小礫を少量含む。粘性やや強い。

第34図　1号竪穴建物跡実測図



第35図　古墳時代遺物実測図（1）



第36図　2号竪穴建物跡実測図（1）

出土遺物（第35図284～306）：

上述したような遺存状況であったため、ほとんど全ての遺物が床面直上での出土となる。ただし遺構に伴うか否かを判別するためには、それぞれの遺存状況を勘案する必要がある。

287は2／3以上残存しており、伴う可能性が高いものである。また286も1／2以上の残存である。

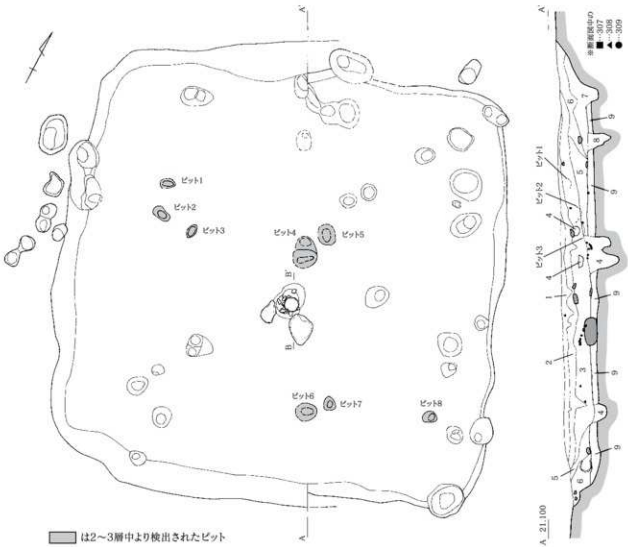
これに対して284・285は時期決定に有力な須恵器杯でありながら1／2ないしそれ以下の残存で、他の土器はそれ以上に遺存度が低い。

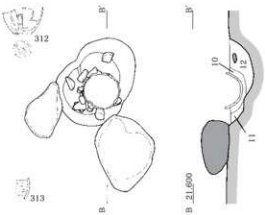
ただし287・286を中心に眺めてみると、概ね7世紀代の様相と判断され、須恵器も単上りⅡ～Ⅲ型式の杯Hや杯G蓋であることから、建物に伴う土器埋設炉の年代観ともほぼ符合する。

294は方頭鏃であり中央付近で出土した。茎に木質らしき部分もあるが、遺存度が悪いため矢柄に装着されていたかは不明である。

295は北壁中央付近の床面に埋め込まれるような形で出土した軽石である。用途は明らかではない。

296～306は石錘である。石材や形態は縄文時代のものと区別がつかないが、重量が20～30ｇ程度の小さなものばかりであり、建物跡以外から出土した石錘にはこのサイズがほとんど見られないことから伴う可能性が高いと判断した。





【2号竪穴建物跡】

1	暗褐色土(7.5YR3/4)	1cm以下の黒色土ブロック(7.5YR2/1)を多量含み、斑状を呈する。1cm以下の基本層序・層(K-Ah)ブロック、2cm以下の小礫・炭化物・焼土粒子も多量含む。しまりやや強く、粘性弱い。近世の造成土。
2	黒色土 (7.5YR2/1)	上部を中心に暗褐色土(7.5YR3/4)を5%程度含み斑状。最下部で20cm以下の礫を多量に検出。土師器・須恵器も含む。最下部ないし3層中で4層に類似する埋土のピット検出。しまりやや強く、粘性やや強い。
3	黒褐色土(7.5YR3/2)	10cm以下の礫を少量、2mm以下の炭化物・焼土粒子を微量含む。土師器・須恵器も含む。しまり・粘性やや強い。
4	暗褐色土(7.5YR3/3)	焼土を20～30%程度含む。2mm以下の炭化物粒子を微量含む。しまり・粘性弱い。
5	黒色土 (7.5YR2/1)	5cm以下の礫を少量、1mm以下の焼土粒子をごく微量含む。しまりやや弱く、粘性やや強い。
6	暗褐色土(7.5YR3/3)	10cm以下の礫、1mm以下の炭化物・焼土粒子を少量含む。土師器を含む。しまり・粘性やや強い。
7	暗褐色土(7.5YR3/4)	2cm以下の小礫、1mm以下の炭化物粒子を少量含む。しまり強く、粘性やや弱い。
8	黒褐色土(7.5YR3/2)	5cm以下の礫を少量含む。しまり・粘性ともに弱い。
9	褐色土 (7.5YR4/4)	基本層序・層(K-Ah)の土を50%程度含み斑状。粘床と考えられる。しまりやや弱く、粘性やや強い。

【土器埋設炉】

10	黒褐色土(7.5YR3/1)	2mm以下の焼土粒子を多量、3cm以下の小礫を少量含む。しまり・粘性やや強い。
11	黒褐色土(7.5YR3/2)	下位を中心として2mm以下の焼土粒子が混じる。しまり・粘性やや強い。
12	暗褐色土(7.5YR3/4)	1cm以下の焼土ブロックをまばらに含む。しまり・粘性やや弱い。

第37図　2号竪穴建物跡実測図（2）

843は空色を呈するガラス製の棗玉である。風化の具合から古墳時代の所産である可能性は十分想定できるが、貼床の削平された箇所で出土したため建物跡に伴うとの断定には至らなかった。よって第8節で報告している。

この他に外面に炭化物の付着した甕の口縁部片が出土したため、放射性炭素年代測定を実施したが、2070±40年ＢＰとの結果が出た。流れ込んだ弥生土器であるか、何らかの要因で測定結果が古く出ているかのいずれかと考えられるが、小破片であるため断定は控えたい。

【２号竪穴建物跡（SX2）】

調査当初は先行トレンチにかかっており建物跡と認識できなかったが、調査の最終段階で土層観察ベルト中より土器埋設炉が検出された。この時点で遺構名を振り替えたが、遺物取り上げや写真撮影がかなり進んだ段階であったため、注記や諸記録との整合を図るため、遺構記号は変更していない。

規模・形態（第36・37図）：

平面形は5.9×5.9ｍの隅丸方形で、１号建物跡よりも若干大きい。また１号とは同時存在が雛しいほど近接するが、主軸方向はほとんど同じである。

主柱穴が明瞭に認定できなかったが、貼床があり中央に土器埋設炉が備わるなど、建物としての要素を有している。ただし平面図でアミをかけた８基のピットについては、２基が土層断面にかかるほか、西半の３基についても断面図に投影したが、そこに表されているように２～３層を精査中に検出したものである。これらのピットは埋土中に多量の焼土粒子を含み、周囲の土より赤みがかって見えた。

また遺物のうち第38図307～309についても破片の出土レベルを投影したが、これも３層中に散乱しているようである。307の破片が１点のみ貼床直上にあるように見えるが、実はピットの埋土中に入っていたものである。よってこれらを総合すると、建物としては廃絶後に窪地化しつつある段階で、二次的に利用された可能性を想定しうる。

ちなみに西壁周辺にある６基のピットは、後世の攪乱であることが判明している。

土器埋設炉（第37・38図312・313）：

312が設置されていた中型の甕で、胴部上半から口縁部を打ち欠いている。打ち欠き後の直径は内径で約16cmである。底部は完存し、平底に木葉痕が残る。７世紀前半頃の年代が想定される。

また313は312の下に散乱していたものであり、作り替えられた炉の残滓とも考えられるが、確定的ではない。いずれにしても胴部の張りが強い点などで312より古手の可能性がある。破片はその他の礫とともに312の底部周辺に集中しており、やはり甕を据える際の微調整に用いられたようである。

炉に接して長径30～40cm程度の扁平礫２点が平置きの状態で検出された。これらは台石などとして意図的に置かれた可能性もあるが、それを裏付ける痕跡は認められなかった。

出土遺物（第38図307～314）：

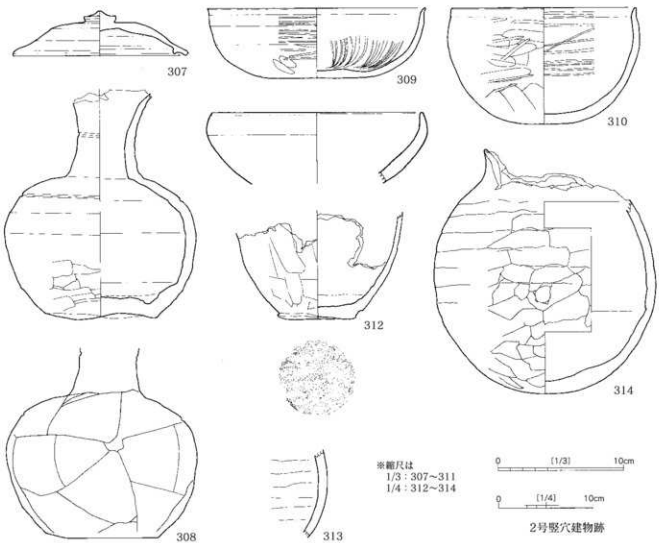
307～309は先述したように３層中に散乱した状態で出土した。307は口縁部の一部、308も口縁部と胴部の一部を欠くのみで、遺存度は非常に高い。309も１／２程度残存している。第36図で黒塗りしたのが土器であるが、このように数少ない土器が接合し、完形に近いところまで復元されている点は１号竪穴建物跡の様相とやや異なっている。

この中で注目されるのは、308が胴部の一点に受けた加撃で破砕したと考えられることである。口縁部のみが全く残存しないのも、意図的に打ち欠かれた可能性があるだろう。装飾が簡略化されている点などからＴＫ217型式ないしＴＫ46型式に属する可能性があり、概ね７世紀代の所産と考えられる。

なお307の杯蓋は口径や擬宝珠状の摘みが付くことなどからＴＫ46型式の杯Ｂに該当し、７世紀後半代の所産と考えられる。

また309は体部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文を有する杯である。このような資料は西都市の国府推定地（寺崎遺跡など）周辺に見られる程度で、県内では稀少な事例である。

310は内外面をヘラミガキ調整し、赤彩を施す深手の椀である。底部外面はヘラケズリである。やはり１／２以上残存しており、伴う可能性は高い。出土位置は貼床直上ないしやや浮いたレベルの可能性



第38図　古墳時代遺物実測図（2）

があるが、先行トレンチの中で掘り上げたため確定できない。

311は高杯の杯部と考えられるが、口縁1／4程度の残存であり、伴う可能性は低い。

314は南壁付近の床面に転がっていた中型壺であり、三角堆積中に埋没していたことから307～309とは明確な新旧関係が成立する。口縁部はほとんど残存しないが、短く付け根にしまりがないという特徴は看取できる。胴部は工具ナデを施すが、輪積み痕を残す。底部は丸底気味で、これらの形態的特徴から7世紀前後頃と考えるのが妥当であろうか。

この土器も308と同じように口縁部を欠き、胴部中位に穿孔が認められた。土師器であったため破砕には至っていないが、これも加撃の痕跡であろう。

この痕跡が真下になって検出されたことと、内部に詰まった土の中に飛び散った破片がそのまま残っていたことから、この加撃の直後にそのまま安置された可能性が高いと判断しうる。

また埋土中より出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、1250±40年ＢＰとの結果を得た。

これまでの内容を総合すると、7世紀の早い段階に構築された建物の中で土器の破砕行為があったこと、さらに建物が廃絶し数十年かけて窪地化していく途上で、再び土器の破砕や火を必要とした何らかの行為がなされたことが推定される。

B．性格不明遺構（注記記号：ＳＸ）

6～8・10号について、調査当初は不整形のプランから土師器・須恵器が集中して出土するという認識であり、遺構の性格を特定しづらかったため上記の名称を用いた。

精査を進めるうちに、それらが極めて浅い溝状の形態をとることが分かってきたが、その他にも①古墳の石室開口部下に位置する、②器種から見て副葬品の可能性が高い須恵器片が多数出土する一方、後世の遺物はそれぞれ数片程度しか見られない、③周囲で検出されたピットは、当時の地表面を失っているにも関わらずかなりの深さを保っている（第43図・第16表）、などの共通点が認められた。

また5号も位置的にはやや外れるが、ピットを伴う浅い溝状の形態をとる可能性が高く、口縁部を欠く土師器壺やミニチュア土器などが安置されたかのような状況で出土しており、やはり同種の遺構ではないかと思われた。

その他にも野首1号墳の右室開口部直下と推定される部分に断面U字形を呈する黒色土の堆積があり、石室に由来すると思われる巨礫が落ち込んだような状態で入っていた。この巨礫の隙間からも須恵器が出ており、開口部に伴う溝状の掘り込みと判断し、12号性格不明遺構とした。

このようなU字状を呈する黒色土層の堆積はA区西端の壁にも検出されており、その底面とみられる箇所に土師器甕を安置したと考えられるピットがあった。当初はピットの部分のみを4号性格不明遺構と認定していたが、調査区外の様相が不明ではあるものの、12号との形態的類似から黒色土層の堆積もこれに含めた。

4号の下にはもう一つ土師器甕の安置されたピットが検出された。このピットは土層観察ベルトの中に残っていたため不明な点が多いが、4号のピットとの形態的類似から9号性格不明遺構とした。

これら8箇所の遺構については概要でも述べたように、谷底の建物側から古墳石室開口部へ至るための通路（墓道）として機能した可能性があるのではないかと想定した。

ただし溝状の部分が人為的な掘削によるとまでは断定できていない。

その一つ目の理由としては古墳と溝状の部分とが一対一の対応をしていないという問題があり、二つ目の理由としては旧地形の復元結果があげられる。A区平場Cの北側斜面寄りの部分は、近世段階で基盤の宮崎層群に達する段切りを受けているが、カット面に見える土層の平面的な広がりからは、野首1号墳東側に小さな尾根が張り出していたと復元され、現況よりも斜面が入り組む谷であったようである。こうした起伏を利用して古墳開口部まで登っていた可能性があり、そこにピットが掘られたとも考えられる。よって現段階ではあえて墓道とは限定せずに、性格不明遺構という名称のまま報告しておきたい。

【4号性格不明遺構】

規模・形態（第39図）：

近世以降と推定される削平を受けており、平面的にはほとんど原形をとどめていない。ただし調査区壁に残る断面を見ると、幅3.5ｍ以上、深さが1ｍ以上の浅いU字形を呈する溝状の掘り込みであったらしい。その底面中央部分に直径約30cm、深さ約15cmのピットが掘られ、その中に土師器甕がつぶれた状態で検出された。

出土遺物（第39・41図315・316）：

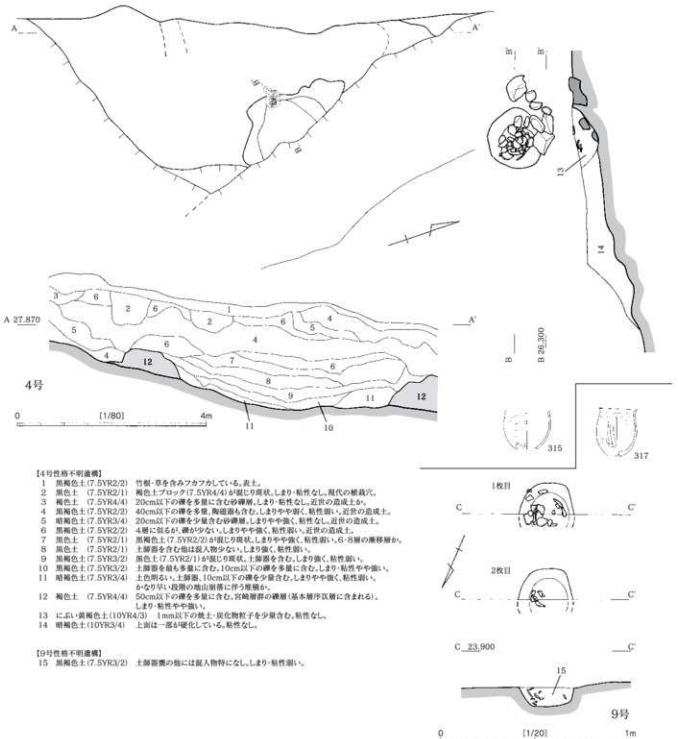
315はピットから出土した中型の甕である。口縁部・底部を欠くが、それ以外の部分は1／2以上残存しており、遺構に伴う可能性が高い。胴部の張りが弱く長胴化の傾向があることから、7世紀前半でも中頃寄りの年代が想定されようか。

316は底面直上から出土した高杯であるが、脚部のみであり、伴う可能性は低い。

【5号性格不明遺構】

規模・形態（第40図）：

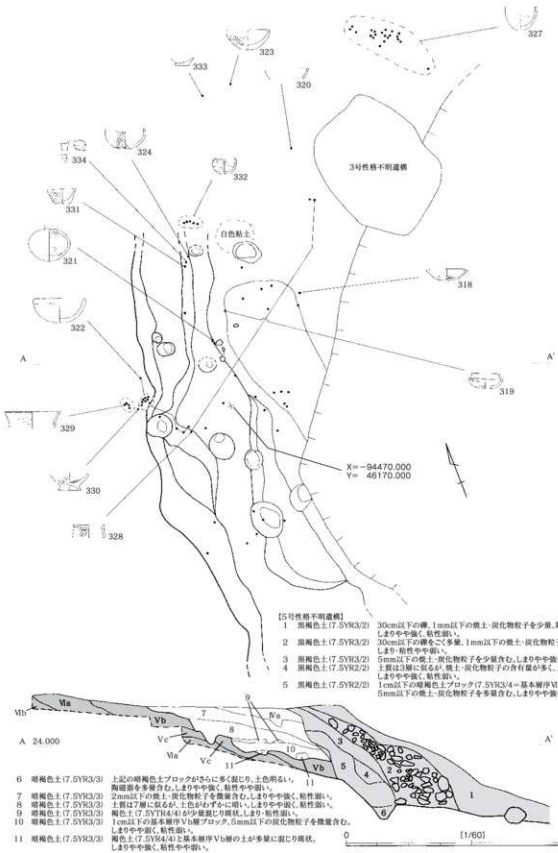
東半の大部分を近世以降の段切りで失っており、不明な点の方が多いが、段掘りされた浅い溝のような形態で段掘りのラインに沿ってピットが並んでいるかのように見える。幅は現存部分で約3ｍを測り、本来は5ｍ以上であったと推定される。底面の一部は硬化していた。また底面中央と考えられる部分に



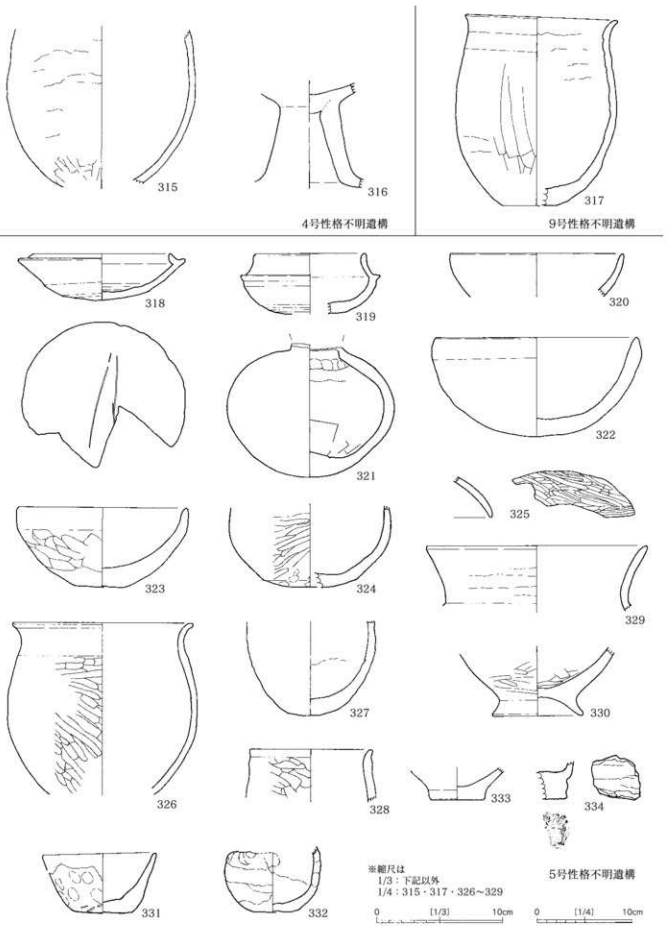
【4号性格不明遺構】
1 黒褐色土（7.5YR2/2） 竹根・草を含みフカフカしている。表土。
2 黒色土（7.5YR2/1） 褐色土ブロック（7.5YR4/4）が混じり斑状。しまり・粘性なし。現代の植栽穴。
3 褐色土（7.5YR4/4） 20cm以下の礫を多量に含む砂礫層。しまり・粘性なし。近世の造成土か。
4 黒褐色土（7.5YR2/2） 40cm以下の礫を多量、陶磁器も含む。しまりやや弱く、粘性弱い。近世の造成土。
5 暗褐色土（7.5YR3/4） 20cm以下の礫を少量含む砂礫層。しまりやや強く、粘性なし。近世の造成土。
6 黒褐色土（7.5YR2/2） 4層に似るが、礫が少ない、しまりやや強く、粘性弱い、近世の造成土。
7 黒色土 （7.5YR2/1） 黒褐色土（7.5YR2/2）が混じり斑状。しまりやや強く、粘性弱い。6・8層の撹拌層か。
8 黒色土 （7.5YR2/1） 土師器を含む他は混入物少ない、しまり強く、粘性弱い。
9 黒褐色土（7.5YR3/2） 黒色土（7.5YR2/1）が混じり斑状。土師器を含む、しまり強く、粘性弱い。
10 黒褐色土（7.5YR3/2） 土師器を最も多量に含む。10cm以下の礫を多量に含む。しまり・粘性やや強い。
11 暗褐色土（7.5YR3/4） 土色照合へ。土師器、10cm以下の礫を少量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
かなり早い段階の地山崩落に伴う堆積か。
12 褐色土 （7.5YR4/4） 50cm以下の礫を多量に含む、宮崎層群の礫層（基本層序区層に含まれる）。
しまり・粘性やや強い。
13 にぶい黄褐色土（10YR4/3） 1mm以下の焼土・炭化物粒子を少量含む。粘性なし。
14 暗褐色土（10YR3/4） 上面は一部が硬化している。粘性なし。

【9号性格不明遺構】
15 黒褐色土（7.5YR3/2） 土師器片の他には混入物特になし。しまり・粘性弱い。

第39図　4・9号性格不明遺構実測図



第40図　5号性格不明遺構実測図



第41図　古墳時代遺物実測図（3）

直径約50cmの円形を呈する白色粘土が検出されたが，これは浅い窪みに充填されたかのような状況であった。

出土遺物（第41図318～334）：

ブランを明瞭に検出する前から土師器・須恵器が多数出土しているが，そのほとんどは野首第1遺跡（県道）からの流れ込みの可能性が高い。

ここではブラン検出後に取り上げた遺物のうちでも器形の推定可能なものを中心に16点掲載したが，これらについてもさらに出土レベルや遺存度を検討する。

318の杯身は集上りⅠ型式に該当し，2／3以上残存するが埋土中位からの出土であり，遺構に伴うか否かは判断しづらい。

319の杯身はTK47型式に該当し，5世紀代に遡る資料だが，埋土の上位に1／4以下の破片が入っていたのみで，明らかな流れ込みと判断しうる。

320の杯は小破片で伴う可能性はほとんどないが，ヘラミガキを施した外面のほぼ左半分のみが黒褐色を呈している。これは黒色処理かもしれないが，赤褐色の部分にもヘラミガキはきれいに残り，摩滅により表層が欠われた訳ではない。あくまで一つの可能性ではあるが，油煙の付着を想定しておきたい。

321は土師器の小型甕であるが，口縁部のみを失っている。遺構の底面脇に安置されたかのような状態で出土しており，口縁部は意図的に打ち欠かかれた可能性が高い。

322は土師器鉢で，掘り込みの肩の部分につぶれたかのような状態で検出された。ほぼ完形に復元できており，原位置を保っていると判断しうる。

甕のように小石を多量に含んだ胎土であり，器壁は極めて厚く，丸みを帯びた形状である。その特徴から7世紀代の所産と考えられる。

323は322と類似する鉢，324も鉢，325は高杯の裾部，326・328・329は甕であるが，いずれも埋土の中位以上あるいは遺構周辺から出土した1／2以下の破片であり，伴う可能性は薄い。

327は現存する遺構の範囲からはかなり外れた場所で出土しているが，甕の胴部下半がつぶれたかのような状態で出土しており，ほとんど原位置を保っていると判断される。遺構の延長上にあたるため，何らかの関連があるものと考えておきたい。丸底長胴の小型甕であり，7世紀前半でも中頃寄りか。

330は合付甕の底部のみである。埋土の中位から出土しており，伴うものとは考えづらい。

331～334はミニチュア土器と考えられる。このうち333・334はいずれも1／2以下の破片で伴う可能性は薄いが，331・332は口縁部を一部欠くのみである。331は底部から直線的に開く器形で，体部外面には指頭圧痕，底部外面には工具の痕跡が残る。332は丸みの強い器形で，輪積み痕を明瞭に残している。いずれも段掘りされた立ち上がりの部分に安置されたかのような状態で出土している。

上記の所見を総合すると，須恵器には比較的古手のものが見られるが流れ込みの可能性が高く，7世紀代に属する土器が目立つようである。

【6・7号性格不明遺構】

規模・形態（第42・43図）：

野首1号墳の石室開口部及び12号性格不明遺構の直下に位置する。近世以降の段切りにより削平されていた上に，調査時にも先行トレンチではⅥ層上面に至ってようやくブランを認識したため，結果的に段違い状の調査をせざるをえず，平面形は掴みづらくなっている。ただし残存部分の形状や遺物・礫の分布状況を検討すると，末広がりの浅い溝状をなしていたと想定される。礫の中には石室あるいは閉塞に由来する可能性のあるものが含まれている。7号の南端部にある礫の集中域は須恵器を少なからず含んでおり，後述する8号の礫集中とは形成時期が異なるようである。

また6号では底面の一部に硬化面を検出した。

出土遺物（第44図335～336・338～343・345）：

335は提瓶である。鉤状の把手を有している。破片は6・7号双方にかけて散乱し，手のひら大程度の破片が311号ピットにも入っていた。全てを合わせると1／2程度の残存となるが，かなり離れたG7グリッド出土の破片も接合しており，破損後に野首1号墳から流れ込んできた可能性が高い。

336は須恵器杯身であるが，底部の調整が手持ちヘラケズリという点が特異である。ほとんどの破片

第42図　6・7・8・10号性格不明遺構実測図

【5・7・8・10号性格不明遺構】

1	暗褐色土 (7.5YR3/4)	100cm以下の塊を多量、1mm以下の黄橙色土・炭化物粒子を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
2	暗褐色土 (7.5YR3/4)	土質は1層に似るが、塊は含まず著しく硬化した箇所がある。しまり強く、粘性弱い。
3	暗褐色土 (7.5YR3/3)	ぶどろに腐植の部分があり、地山ブロックと考えられる。しまりやや弱く、粘性弱い。
4	黒褐色土 (7.5YR2/2)	やわらかく、ツカツカしている。40cm以下の塊を含む。しまり・粘性弱い。
5	極暗褐色土 (7.5YR2/3)	暗褐色土 (7.5YR3/4) と黒褐色土 (7.5YR2/2) とが混じりあい斑状を呈する。しまり弱く、粘性やや弱い。
6	黒褐色土 (7.5YR2/2)	5mm以下の暗褐色土ブロック (7.5YR3/4) を少量含む。しまり・粘性やや弱い。
7	黒褐色土 (7.5YR2/2)	極暗褐色土 (7.5YR2/3) が多量混じり鉄、陶磁器が少量入る。しまり・粘性弱い。
8	暗褐色土 (7.5YR3/3)	5mm以下の黄橙色土・炭化物粒子を少量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
9	暗褐色土 (7.5YR3/4)	5mm以下の黄橙色土粒子を多量、炭化物粒子を少量含み、土色黒みがかる。しまり強く、粘性弱い。
10	黒褐色土 (7.5YR2/2)	2cm以下の礫、5mm以下の炭化物・褐土粒子を少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
11	極暗褐色土 (7.5YR2/3)	2cm以下の礫を少量含む。土師器も入る。しまりやや強く、粘性弱い。
12	極暗褐色土 (7.5YR2/3)	5mm以下の炭化物、竹葉を多量に含む。しまりやや強く、粘性弱い。現代の撹り込みか。

は6・7号双方に入っていたが、位置的に離れたA5・C7グリッド出土の破片が接合しており、335と同様の状況である。口径は11.7cmであり、その点では隼上り1型式と通じるものがある。

338は7号の礫集中付近で出土した短頸壺であるが、1／2以下の破片である。

339は平瓶である。破片の量は1／2以下だが、一部は6号の底面直上から出土しており、部位も口縁部から胴部下位までは認められることから、遺構との関連はあると判断される。ただし近世石垣脇の10トレンチで出土した破片が接合しており、335と同様の状況とみなしうる。

340の須恵器蓋、341の土師器杯はいずれも7号の底面直上出土だが、遺存度は1／4～1／3程度であり遺構との関係は不明瞭である。341は内外面にヘラミガキ調整、さらに外面には黒色処理を行っている。

342の赤彩土師器杯は底部を欠くものの口縁部から体部は2／3程度残存している。6・7号双方から出土している。

343の土師器鉢は口縁部1／2前後が7号の埋土中位から出土したのみであり、伴う可能性は低いだろう。小石を多く含んだ粗い胎土である。

345の須恵器壺は胴部片のみが7号の埋土中位から出土している。やはり伴う可能性は低い。

このように野首1号墳の副葬品と推定される須恵器が多数含まれている。1号墳は右室内に須恵器・鉄製品などの副葬品が残されていたが、片付けられたかのように壁際に寄せられた状態であった。副葬された製品の時期は、石室内の須恵器が隼上りⅠ～Ⅱ型式、周溝内出土の提瓶は把手がボタン状に痕跡化しており、335より新しい様相である。

つまり6・7号出土の須恵器は石室・周溝内出土のそれとほぼ同時期か、やや古手の年代観を示していることになる。よって最終埋葬時の片付け行為に伴い掻き出された破片の一部が流れ込んだと推定しておきたい。

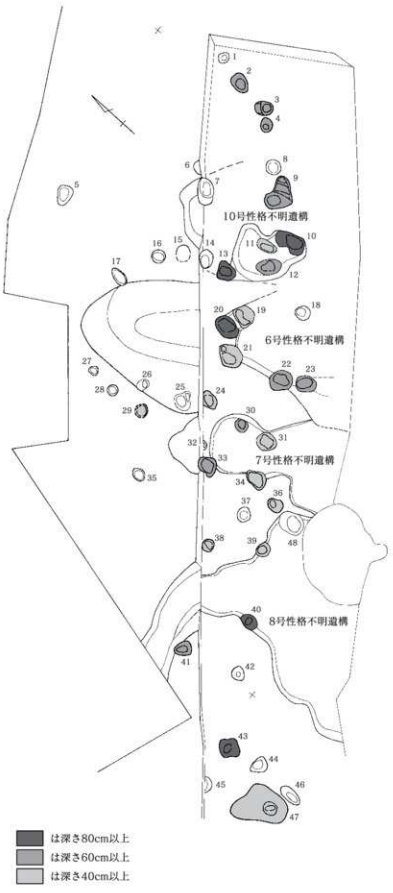
【8号性格不明遺構】

規模・形態（第42・43図）：

4基の中では遺存状況が最も良好で、階段状に幅を広げていく浅い溝に、ハの字状のピット列が伴うかのような配置をしている。後述するようにピットの一つからは須恵器が出土した。位置的には野首2号墳の推定開口部に近接し、関係を窺わせる。

遺構の検出時、南東端部と北端部付近にそれぞれ巨礫にせき止められたかのような礫集中が検出されたため、巨礫は石室に由来し、礫の集積も古墳時代になされたものと考えていた。ところが、いずれも礫の間から中・近世の陶磁器が出土し（第47図412など）、遺構そのものが中世以降に下るかと思われたが、精査が底面近くに至ると須恵器甕片が多数散乱しており、少なくとも古墳時代には溝状をなしていたことが明らかとなった。南東端部の礫集中部分は、掘り下げていくとカマド状の施設を備えた掘り込みとなり、ここを11号性格不明遺構として分離した。近世陶磁器が出土したため、第7節で報告している。

様相が複雑であり解釈に苦しむが、古墳時代に溝



第43図　古墳群前ピットの深度

No.	確認面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	Ⅵ層上面	25	20	30
2	Ⅵ層上面	44	32	66
3	Ⅵ層上面	40	30	68
4	Ⅵ層上面	30	26	68
5	Ⅴ層上面	42	31	12
6	Ⅴ層上面			
7	Ⅴ層上面	55	32	30
8	Ⅵ層上面	32	30	16
9	Ⅵ層上面	68	57	77
10	Ⅵ層上面	67	41	107
11	Ⅵ層上面	43	25	40
12	Ⅵ層上面	54	34	69
13	Ⅵ層上面	40	39	85
14	Ⅵ層上面	41	27	26
15	Ⅴ層上面			
16	Ⅴ層上面	30	29	23
17	Ⅴ層上面	42	22	14
18	Ⅵ層上面	31	30	25
19	Ⅵ層上面	45	38	47
20	Ⅵ層上面	55	38	86
21	Ⅵ層上面	69	58	45
22	Ⅵ層上面	52	42	66
23	Ⅵ層上面	44	35	68
24	Ⅵ層上面	42	29	43
25	Ⅴ層上面	37	35	32
26	Ⅴ層上面	26	21	23
27	Ⅴ層上面	19	17	13
28	Ⅴ層上面	22	20	11
29	Ⅴ層上面	30	25	50
30	Ⅵ層上面	30	30	69
31	Ⅵ層上面	42	40	48
32	Ⅵ層上面			
33	Ⅵ層上面	41	39	63
34	Ⅵ層上面	43	39	40
35	Ⅴ層上面	30	24	23
36	Ⅵ層上面	35	26	54
37	Ⅵ層上面	33	27	10
38	Ⅵ層上面	26	24	43
39	Ⅵ層上面	30	26	51
40	Ⅵ層上面	37	28	114
41	Ⅴ層上面	39	31	65
42	Ⅵ層上面	28	26	15
43	Ⅵ層上面	40	40	81
44	Ⅵ層上面	45	35	13
45	Ⅵ層上面	32		32
46	Ⅵ層上面	50	24	25
47	Ⅵ層上面	119	77	51
48	Ⅵ層上面	55	44	20

第16表　ピット一覧表

状をなしていたものが自然埋没しつつあったところ，いずれかの時点で窪地に礫を詰め，一気に埋め戻したと想定している。埋め戻しの時期については，第71図に示したように11号も壕を充填されて埋め戻されたようであることから，近世以降のある時点とすることができよう。

出土遺物（第44図337・344・346～348）：

337は須恵器短頸壺で，口縁部約1／6と残存状態は良くないが，312号ピットに入っていたため遺構とは何らかの関わりがあると思われる。

344は須恵器杯Gの身であるが，口縁部が全く残っておらず，埋土中位からの出土である。

346は須恵器壺の肩部から胴部にかけての破片である。破片の一部は底面直上の出土であるが，残存状態が悪い。

347は鉢の口縁部片である。やはり底面直上だが，大部分は遺構外から出土した破片であり，流れ込みと判断される。

348は須恵器甕片であるが，焼成不良で断面は橙色が灰色にサンドイッチされたかのような独特の色調を呈する。このため同一個体の識別が容易で，掲載した3片の接合資料以外にも8号周辺を中心に70片ほどが散乱していた。第42図では接合できていないが同一個体と考えられる破片のうち，位置を記録して取り上げたものについて破線で結んでいる。この他に8号の南西端に散らばっている遺物（黒塗り）のほとんどがこの甕であった。ただし口縁部は確認できていないなど，残存状況は不良である。

このように337・348を除くと，いずれも遺構との関連はほとんど認められない。

【9号性格不明遺構】

規模・形態（第39図）：

直径約30cm，深さ約10cmのピット中に土師器甕がつぶれて出土した。甕は口縁部を下にしており，倒位で安置されたようである。

土層観察ベルト中の中に入っており，調査の最終段階で認識されたこと，また周囲は近世以降の大規模な削平を受けていたことなどから，ピット以外の構造については不明とせざるをえないが，4号性格不明遺構との類似点があるためここで取り扱う。

出土遺物（第39・41図317）：

土師器の中型甕で，ほぼ完形に復元されている。外面は工具ナデ，内面も工具ナデを施すが，いずれも輪積み痕が明瞭に残される。底部は平底気味で胴部も長胴化しつつあることから，7世紀中頃の所産と考えられる。

【10号性格不明遺構】

規模・形態（第42・43図）：

平面形はほとんど分からないが，ピットの配置や遺物の出土状況からすると，他の遺構同様に末広がりの浅い溝状を呈すると推測される。

出土遺物（第44図349・350）：

349はいわゆる須恵器模倣杯であり，底面直上より1／2程度が出土した。350は土師器甕片である。6片が接合しているが，埋土上位の出土であり遺構との関係ははっきりしない。

【12号性格不明遺構】

規模・形態：

表土を除去したところでU字状の断面形を観察したのみで，詳細は不明である。野首1号墳の石室に由来する可能性のある巨礫が落ち込んでおり，その隙間から須恵器が出土している。位置関係や断面形からは石室開口部に至る溝状の掘り込みと考えられる。保存区域内であり位置のみ第33図に提示した。

出土遺物（第44図351・352）：

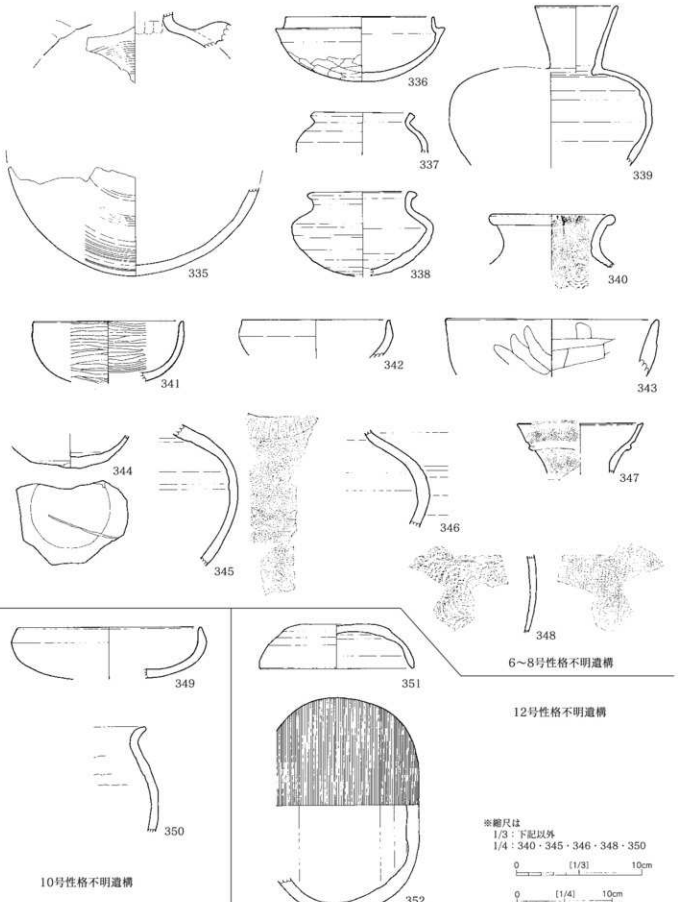
351の須恵器杯蓋は約1／6，352の提瓶は1／2程度の残存で，かならずしも残存状態は良くない。ただし351は庫上りI型式に該当し，提瓶は1号墳の周溝および6・7号性格不明遺構から出土していることなどから，同じく副葬品の可能性が高い。

C．その他

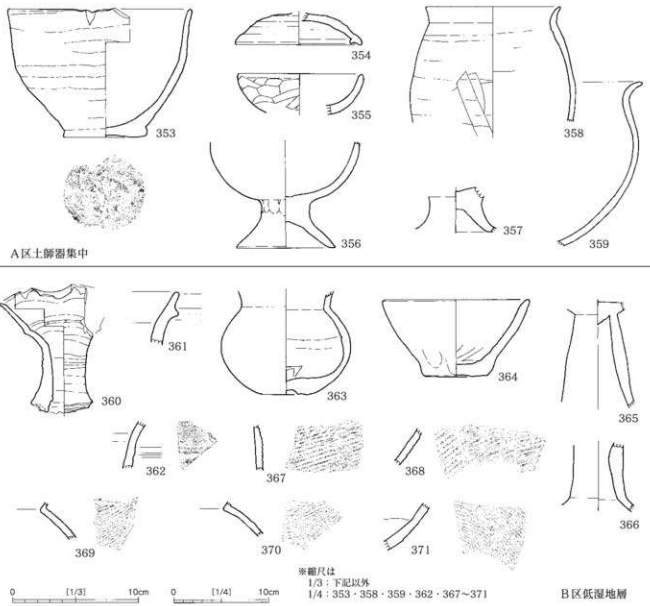
【土師器集中】（第45図353～359）

A区平場A上部斜面，3トレンチ付近にて検出された。傾斜がかなり強い斜面の中腹で破片が密集して出土したが，土器がその場所でつぶれたようには見えず，周囲を精査しても関連遺構は存在しなかった。ところが整理の過程でいくつかの土器はほぼ完形にまで復元されたため，ここで報告しておく。

353は平底の鉢で，ほぼ完形である。輪積み痕を



第44図　古墳時代遺物実測図（4）



第45図　古墳時代遺物実測図（5）

明瞭に残している。354は脚部には3トレンチ出土の杯G蓋である。355は外面に工具ナデを施す杯。

356・357は小型の高杯。358・359は甕である。いずれも7世紀代に収まるとみられる。

【低湿地層】（第45図360～371）

B区北半のⅣd層から古墳時代の土器が出土している。特に谷部南側斜面（野首第2遺跡～上青木霊園の下）に多数の土器が溜まっていた。

360は甕の上半であるが、口縁部が大きく焼け歪んでおり、流通する可能性の低いものである。

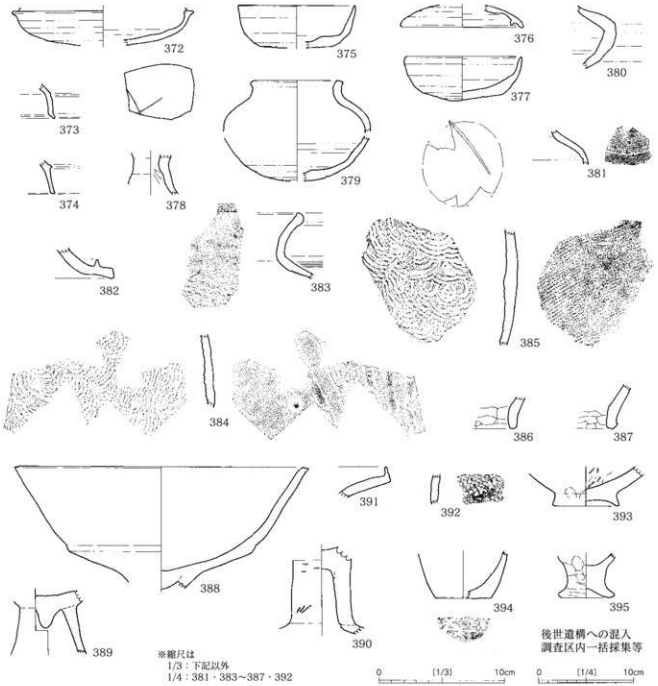
361・362は須恵器甕、363は土師器小型壺、364は小型の鉢か、365・366は高杯の脚である。

367～371は平行タタキ目を残す土師器甕である。野首第2遺跡で検出された中期の集落に関わるものであろう。

【調査区内一括採集遺物等】（第46図371～395）

372～385は須恵器である。

杯では372～374のように比較的古手とみられる杯



第46図　古墳時代遺物実測図（6）

H、375~377のような杯Gがある。379は27号土坑に混入した短頸壺であるが、内面に漆のような付着物が残る。382は脚部とみたが、器種が特定できていない。須恵器甕の383・384は同一個体と考えられる。

388～395は土師器である。

386・387はいずれも単孔の甑である。孔の内壁は横位のヘラケズリを施す。

388は杯部の中ほどで屈曲する大型の高杯である。389も同じタイプの脚であろうか。

391は複合口縁壺で弥生時代に遡るか。392は外面に格子目タタキ痕を残す甕である。394・395はいずれもミニチュア土器である。

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
284	1号竪穴	須恵	杯蓋	天井～口縁	口：(9.8)	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	天井部にヘラ記号あり。取り上げNo.SA1-1	61
285	1号竪穴	須恵	杯身	口縁～底	口：(9.2) 高：3.4	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	取り上げNo.SA1-7	61
286	1号竪穴	土師	杯	口縁～底	口：(15.0) 高：5.2	ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	取り上げNo.SA1-5	61
287	1号竪穴	土師	杯	口縁～底	口：(16.3) 高：5.0	ヘラミガキ→赤彩	風化により不明	取り上げNo.SA1-95	61
288	1号竪穴	土師	鉢	口縁～体	口：(15.2)	ナデ→ヘラケズリ？	ナデ	取り上げNo.SA1-16	61
289	1号竪穴	土師	甕？	底	底：(4.4)			風化著しい。取り上げNo.SA1-4	61
290	1号竪穴	土師	甕	口縁～胴	口：(18.6)	輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→ナデ	口縁部・底部を打ち欠き、土器埋設炉に利用	61
291	1号竪穴	土師	甕	口縁～胴	口：(16.2)	輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→ナデ	口縁部・底部を打ち欠き、土器埋設炉に利用	61
292	1号竪穴	土師	甕	口縁～胴	口：(16.6)	輪積み痕→ナデ	輪積み痕→ナデ	取り上げNo.SA1-28	61
293	1号竪穴	土師	甕	底		輪積み痕→ナデ・木葉痕	ナデ	取り上げNo.SA1-17・31	61
307	2号竪穴	須恵	杯蓋	天井～口縁	口：13.6	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	取り上げNo.SX2-128・345・351・413～417	65
308	2号竪穴	須恵	長頸壺	頸～底	底：8.8	回転ナデ→ヘラケズリ	回転ナデ	口縁部欠。胴部への加撃で破砕。No.SX2-47など16点以上	65
309	2号竪穴	土師	杯	口縁～底	口：(17.3) 高：5.6	ナデ→ヘラミガキ	ナデ→暗文	取り上げNo.339～344・361・362	65
310	2号竪穴	土師	鉢	口縁～底	口：(14.4) 高：9.2	ナデ→ヘラケズリ＋ヘラミガキ	ナデ→ヘラミガキ	取り上げNo.388・389・443～446	65
311	2号竪穴	土師	高杯	口縁～体	口：(16.5)			風化著しい。取り上げNo.SX2-438・542～544	65
312	2号竪穴	土師	甕	胴～底	底：8.3	工具ナデ・木葉痕	ナデ	口縁部を打ち欠き、土器埋設炉に利用	65
313	2号竪穴	土師	甕	胴		輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ	土器埋設炉に利用したものか	65
314	2号竪穴	土師	甕	頸～底		輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ	口縁部欠損。胴部への穿孔	65
315	4号不明	土師	甕	胴		輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ	取り上げNo.SX4-1・2・4～14・28～32	69
316	4号不明	土師	高杯	脚		ナデ	ナデ		69
317	9号不明	土師	甕	口縁～底	口：(15.7) 底：5.5 高：21.5	輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ	取り上げNo.5347・SX9-1～28	69
318	5号不明	須恵	杯身	口縁～底	口：10.9 高：3.7	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	取り上げNo.4830。底部にヘラ記号あり	69
319	5号不明	須恵	杯身	口縁～底	口：(8.7) 高：4.8	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	取り上げNo.4732	69
320	5号不明	土師	杯	口縁	口：(12.7)	ナデ	ヘラミガキ	取り上げNo.1916。一部が黒変	69
321	5号不明	土師	壺	胴～底		ナデ	工具ナデ・指頭圧痕	取り上げNo.2009・SX5-27～31。口縁部欠損	69
322	5号不明	土師	鉢	口縁～底	口：(15.9) 高：7.8		ナデ	取り上げNo.1006～1014・1029・1033・1952・1968	69
323	5号不明	土師	鉢	口縁～底	口：(13.5) 底：(3.9) 高：6.3	工具ナデ	ナデ	取り上げNo.2314	69
324	5号不明	土師	鉢	体～底	底：(3.1)	工具ナデ	工具ナデ	取り上げNo.1264・SX5-32	69
325	5号不明	土師	高杯	脚		ヘラミガキ	ナデ		69
326	5号不明	土師	甕	口縁～胴	口：(19.0)	工具ナデ	ナデ	取り上げNo.4605・4725・SX5-21	69
327	5号不明	土師	甕	胴～底	底：2.0	輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ	取り上げNo.1330・1345・1362～1372など21点	69
328	5号不明	土師	甕	口縁	口：(12.7)	工具ナデ	ナデ	取り上げNo.1847・1848・1970	69
329	5号不明	土師	甕	口縁	口：(23.3)	輪積み痕→ナデ	輪積み痕→ナデ	取り上げNo.1001～1004	69
330	5号不明	土師	台付甕	底	底：(7.0)	ヘラミガキ	工具ナデ	取り上げNo.1005	69
331	5号不明	土師	ミニチュア	口縁～底	口：(8.9) 底：3.3 高：4.8	指頭圧痕	ナデ	取り上げNo.1925	69
332	5号不明	土師	ミニチュア	口縁～底	底：3.0	輪積み痕→指頭圧痕	輪積み痕→指頭圧痕	取り上げNo.1257・1258・1260・1261・1819	69
333	5号不明	土師	ミニチュア	底	底：4.2	ナデ	ナデ	取り上げNo.1797	69
334	5号不明	土師	ミニチュア	底		木葉痕？	指頭圧痕	取り上げNo.1924	69

第17表　古墳時代土器観察表（1）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
335	6・7号不明 311号ピット	須恵	提瓶	肩～底		把手（鉤手状）・カキメ	回転ナデ	取り上げNo.5501・5524・SX6-1・SX7-5・11・17	75
336	6・7号不明	須恵	杯身	口縁～底	口：11.7 高：5.1	回転ナデ→手持ちヘラケズリ	回転ナデ	取り上げNo.5512・5513・5517・5527	75
337	8号不明	須恵	短頸壺	口縁～肩	口：（7.6）	回転ナデ	回転ナデ	312号ピットに入っていた	75
338	6・7号不明	須恵	短頸壺	口縁～底	口：（7.6）	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	取り上げNo.5518	75
339	6・7号不明	須恵	平瓶	口縁～胴	口：（6.4）	回転ナデ	回転ナデ	取り上げNo.SX6-2	75
340	6・7号不明	須恵	壺	口縁	口：（12.6）	回転ナデ	同心円当て具痕	取り上げNo.5525・SX7-14	75
341	6・7号不明	土師	杯	口縁～体	口：（11.7）	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ	取り上げNo.SX7-21	75
342	6・7号不明	土師	杯	口縁	口：（11.8）	ナデ→赤彩	ナデ→赤彩		75
343	6・7号不明	土師	鉢	口縁	口：（16.5）	工具ナデ	工具ナデ		75
344	8号不明	須恵	杯身	底	底：6.3	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ	底部にヘラ記号あり	75
345	6・7号不明	須恵	壺	肩～胴		カキメ	回転ナデ	取り上げNo.5463・5474	75
346	8号不明	須恵	壺	肩～胴		回転ナデ	回転ナデ		75
347	8号不明	須恵	甕	口縁	口：（9.9）	櫛描波状文	ナデ	取り上げNo.1754・SXB-28	75
348	8号不明	須恵	甕	胴		平行タタキ痕→カキメ	同心円当て具痕	取り上げNo.SX8-11	75
349	10号不明	土師	杯	口縁～体	口：（14.4）			風化著しい。取り上げNo.SX10-1・6	75
350	10号不明	土師	甕	口縁～胴		輪積み痕→ナデ	輪積み痕→ナデ	取り上げNo.5423・5486・5519	75
351	12号不明	須恵	杯蓋	天井～口縁	口：（11.8） 高：3.5	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ		75
352	12号不明	須恵	提瓶	胴～底		カキメ	回転ナデ		75
353	A区土師集中	土師	鉢	口縁～底	口：（19.1） 底：8.8 高：13.5	輪積み痕→ナデ・木葉痕	輪積み痕→ナデ	取り上げNo.1・5・15・17・24・27・60・65	76
354	A区土師集中	須恵	杯蓋	天井～口縁	口：（9.8）	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	3トレンチと土壁の接合資料	76
355	A区土師集中	土師	杯	口縁～体	口：9.8	工具ナデ	ナデ	取り上げNo.23・28・30・32・33・35	76
356	A区土師集中	土師	高杯	体～脚	底：（7.8）	ナデ・指頭圧痕	ナデ	取り上げNo.44・57	76
357	A区土師集中	土師	高杯	脚				風化著しい	76
358	A区土師集中	土師	甕	口縁～胴	口：（14.0）	輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ		76
359	A区土師集中	土師	甕	口縁～胴		輪積み痕→工具ナデ	輪積み痕→工具ナデ	取り上げNo.14・21・26・38・70～72・76・77・79・81	76
360	B区低湿地	須恵	甕	口縁～頸		回転ナデ	回転ナデ	焼成時の歪み著しい	76
361	B区低湿地	須恵	甕	口縁		回転ナデ	回転ナデ		76
362	B区低湿地	須恵	甕	頸		突帯・櫛描波状文	回転ナデ		76
363	B区低湿地	土師	壺	頸～底	底：（3.6）	ナデ	工具ナデ	取り上げNo.5053～5056・5059・5060	76
364	B区低湿地	土師	鉢	口縁～底	口：（11.3） 底：5.1 高：6.1	工具ナデ・指頭圧痕	工具ナデ	取り上げNo.4998	76
365	B区低湿地	土師	高杯	脚		ナデ	ナデ	取り上げNo.5160	76
366	B区低湿地	土師	高杯	脚		ナデ	ナデ		76
367	B区低湿地	土師	甕	胴		平行タタキ痕	ナデ	様子不明。取り上げNo.5336・5337	76
368	B区低湿地	土師	甕	胴		平行タタキ痕	ナデ	取り上げNo.4911	76
369	B区低湿地	土師	甕	肩		平行タタキ痕	ナデ	取り上げNo.31-2-28P	76
370	B区低湿地	土師	甕	肩		平行タタキ痕	ナデ	取り上げNo.B-872・911	76
371	B区低湿地	土師	甕	胴		平行タタキ痕	ナデ	取り上げNo.5321	76

第18表　古墳時代土器観察表（2）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
372	平D・E クロ	須恵	杯身	受け～底		回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	底部にヘラ記号あり。取り上げNo.5451	77
373	D8	須恵	杯蓋	口縁		ナデ	ナデ		77
374	D5	須恵	杯蓋	口縁		ナデ	ナデ		77
375	J7	須恵	杯身	口縁～底	口:(9.2) 底:(5.8) 高:3.3	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ		77
376	A4	須恵	杯蓋	体～口縁	口:(9.5)	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ		77
377	L5／N6	須恵	杯身	口縁～底	口9.1 底:6.3 高:3.5	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	底部にヘラ記号あり。	77
378	H7	須恵	高杯	脚		ナデ	絞り痕		77
379	23号土坑	須恵	短頸壺	口縁～底	口:(6.3)	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	内面に漆のような付着物あり。後世遺構への流れ込み	77
380	D5	須恵	甕	胴		回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ		77
381	D5	須恵	甕	肩		櫛描波状文	回転ナデ		77
382	46号土坑	須恵	不明	脚		回転ナデ	回転ナデ	後世遺構への流れ込み	77
383	I5	須恵	甕	口縁～肩		回転ナデ→カキメ	同心円当て具痕		77
384	I8	須恵	甕	胴		平行タタキ痕	同心円当て具痕	傾き不明。384と同一個体か	77
385	C4	須恵	甕	胴		平行タタキ痕	同心円当て具痕	傾き不明	77
386	AA7	土師	甑	底		工具ナデ	手持ちヘラケズリ	単孔	77
387	AA6	土師	甑	底		工具ナデ	手持ちヘラケズリ	単孔	77
388	42号土坑 ほか	土師	高杯	口縁～体	口:(22.4)	ナデ・ヘラミガキ?	ナデ	46・47・49・53号土坑など。後世遺構への流れ込み	77
389	3号不明	土師	高杯	脚		ナデ	ナデ	取り上げNo.5X3-12。古い遺構へ落ち込んだか?	77
390	A区一括	土師	高杯	脚		工具ナデ	ナデ		77
391	AA5	土師	壺	口縁		ハケメ・沈線	ハケメ	弥生時代か	77
392	AB5	土師	甕	胴		格子目タタキ痕	ナデ		77
393	平E	土師	台付甕	底	底:(5.1)	ナデ・指頭圧痕	工具ナデ	取り上げNo.4591	77
394	AA4	土師	ミニチュア	底	底:(4.2)	ナデ・木葉痕	ナデ		77
395	AC6	土師	ミニチュア	底	底:(3.8)	指頭圧痕	ナデ		77

第19表　古墳時代土器観察表（3）

No.	出土位置	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	掲載頁
294	1号竪穴	鉄鏃	鉄	11.0	2.7	0.9		方頭鏃。鏃身部長5.3cm	61
295	1号竪穴	不明	軽石	28.2	14.0	12.4	987.1	床面直上。取り上げNo.SA1-112	61
296	1号竪穴	石錘	ホルン	4.7	6.2	0.7	23.0	貼床下から出土	61
297	1号竪穴	石錘	ホルン	3.4	4.0	1.2	21.1	貼床下から出土	61
298	1号竪穴	石錘	尾鈴	4.0	5.7	1.4	45.3	床面直上。取り上げNo.SA1-19	61
299	1号竪穴	石錘	尾鈴	3.7	4.6	1.1	27.1	床面直上。取り上げNo.SA1-48	61
300	1号竪穴	石錘	尾鈴	3.0	4.7	1.0	18.1	床面直上。取り上げNo.SA1-113	61
301	1号竪穴	石錘	尾鈴	4.2	4.9	1.3	36.4		61
302	1号竪穴	石錘	尾鈴	2.9	4.1	1.0	18.0		61
303	1号竪穴	石錘	ホルン	3.3	(3.3)	0.8	13.0		61
304	1号竪穴	石錘	尾鈴	4.9	4.4	1.1	32.4		61
305	1号竪穴	石錘	ホルン	4.6	4.9	0.9	20.0		61
306	1号竪穴	石錘	ホルン	3.0	4.4	1.1	17.0		61

※最大長・幅・厚などの単位はcm、重量はg

第20表　古墳時代鉄器・石器観察表

第6節　古代～中世の遺物

1．概要

古代に属する遺構は検出されず、確実に当該期の所産としうる土器も数点の出土にとどまった。ただし少数ながら奈良～平安にかけての様相を呈する。

中世の遺構も検出されなかったが、土器・陶磁器は比較的多く見られた。陶磁器は遺跡内から散漫に出土し、中国産・国産とも数の割に多様である。13世紀後半頃から16世紀にかけての年代幅を有する。古代末から中世の所産と考えられる土師器杯・小皿はほとんどがB区低湿地からの出土であった。

同じくB区低湿地から出土した炭化材2点・木製品2点について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正C14年代で炭化材が680±40と920±40、木製品が1020±50，980±40（いずれも年BP、附編参照）との結果を得た。また低湿地層からはマツの種子が10点程度出土している。

ここで周辺遺跡について概観するならば、野首第2遺跡では中世遺物はほとんど無いが、緑釉陶器や布目瓦が出土した。

野首第1遺跡（県道）では掘立柱建物跡の柱根が残存しており、これの測定結果がそれぞれ335±30，345±30年BPとなっている。

崩戸遺跡では本遺跡と類似する土器・陶磁器類が比較的多量に出土しているほか、洪武通寶（1368年初鋳）を副葬した土坑墓も検出されている。

これらについて総合すると、本遺跡の存在する谷部は遅くとも古代頃には湿地化しており、あまり生活に密接した場所ではなかったらしい。ただし木製の用具類がよどみに流れ溜まっているので、おそらくは野首第2遺跡の乗る南側の丘陵上に、何らかの施設あるいは集落が存在したと考えられる。

低湿地はその後、数百年にわたりゆっくりと埋没していく。周囲にはマツの木が生えていたようである。15世紀後葉から16世紀頃になると丘陵の先端部あるいは一段下の段丘に数棟の建物が並ぶようになる。折しも南九州は九州諸大名の覇権争いが熾烈を極めており、天正6（1578）年には対岸の高城を巡る合戦が勃発する。

2．遺物

【古代の土器】（第47図396～398）

396・397は須恵器の高台付杯である。底径が大きく、低く角張った高台を有することから8世紀代の所産と考えられる。

398は土師器の高台付杯である。全体の器形は不明ながら、高台が高く、下方が外に向かって広がることから、9世紀代に属するか。

この他に1点のみであるが、内面に布目圧痕を残す製塩土器片を確認した。状態が悪く、実測・拓本に耐えなかったため、巻末の図版17－4に掲載した。

【中世の陶磁器】（第47図399～424）

399～401は中国産青磁碗である。

399は外面に片彫りの蓮弁文・内面にスタンプの花文を施す。上半の様相が不明ながら、蓮弁の幅が狭いこと、釉が高台内面途中までかかることなどから、上田分類のB－Ⅲ－a類の可能性がある。

400は無文端反の碗で上田分類D－Ⅱ類、401は細線の線描蓮弁文を持つ上田分類B－Ⅳ類である。

402～404は中国産白磁である。

402は口縁端部が無釉のいわゆる口禿皿である。大宰府分類Ⅸ類、森田分類A群にあたる。

403は皿で内底面と外部外面下半から外底面にかけて露胎となる。釉薬は漬けがけのようであるが、形態的には新垣・瀬戸分類のF類皿に似るか。

404は皿で挟入高台を有し、内底面にはそれに対応する目跡が残る。森田分類D群、新垣・瀬戸分類D類皿Ⅰにあたる。

405～411は中国産青花である。

405・407は端反の皿である。小野分類皿B1群にあたる。406は内面に牡丹文？、外面に「大千太平」がみえる。小野分類皿B2群か。

408は口縁部付近で折れ、稜花状に作る皿である。内面に四方禅文・外面に唐草文？を描く。

409～410は玉壺春形の瓶と推測される。肩部にラマ式蓮弁、胴部に花文？がみられる。

411は壺の胴部か。簡略化され線状になった蓮弁文が描かれている。

412はタイ産の黒褐釉短頸四耳壺の可能性がある。

413～416は東播系の片口鉢である。口縁はいずれも肥厚し、くの字状を呈している。底部は右回転糸切り痕を残す。

417～419は備前焼の擂鉢である。

417は口縁の上方への立ち上がりが著しく、口縁端部は尖らせて内面に段を有することから乗岡編年の中世６ｂ期.418・419は交差擂目が施されており、また口縁部の形態から近世１ａないし１ｂ期に該当する。

420～424は備前焼の壺・甕である。

420・423は同一個体の壺と考えられる。口縁部の折り返しが小さく、肩部に櫛描の条線を巡らせる。乗岡編年の中世３期にあたるか。421も同時期とみられる。

422・424は甕である。422はやはり口縁部の折り返しが小さく中世３期ないし４期に該当する可能性がある。

【古代末～中世の土器】（第47図425～第49図467）

425～427は土師器擂鉢である。425・426は口縁端部が平坦で断面長方形を呈し、内面に一単位９条の擂目を交互して施している。外面は比較的平滑だが、内面は指頭圧痕と細かなシワが目立ち外型により成形された可能性がある。427は口縁端部を内側に折り返している。一単位８条の擂目を施す。

428は土師器鍋である。外面の口縁端部直下に低い突帯が巡る。外面は粗いナデ、内面は横位のハケメを施している。

429～431は土師器椀である。断面が二角形ないし低い台形を呈する小さな高台を貼り付けている。作りは非常に粗く、焼成も軟質である。

432～452は土師器杯である。452のみが糸切り底で、その他はヘラ切り底である。胎土についても452のみが赤褐色でややざらつくような触感であるのに対し、その他は明褐色単一あるいは明褐色と赤褐色を混合しており粉質である。

形態的には、底部が厚く下方へ突出し体部が内湾するもの（432～434・436）、体部が僅かに内湾しつつ立ち上がり逆台形を呈するもの（435・437・441・442）、体部が外反して立ち上がり逆台形を呈するもの（438）、体部が極端に広がりながら立ち上がるもの（439・440）など多様なあり方を示す。

ヘラ切り底の中には、ハケメ状の調整痕を残すものが少なからず見受けられる。

453～467は土師器小皿である。杯と同様466・467のみが左回転糸切り底で、その他はヘラ切り底である。

胎土も466・467は赤褐色を呈し、ややざらつくような触感であるのに対し、その他は明褐色が多く赤褐色の強いものでも粉質である。

形態は体部が直線的なもの、内湾するもの、外反するものなど様々であるが、466・467は底部と体部の境が不明瞭な点で異質である。

このようにヘラ切り底と糸切り底との間に大きな差異が認められる。その他にも先述したような形態的多様性が看取されるが、これらについては、数百年の間に堆積した層からの出土であり、その要因（時期的・地域的など）については特定できない。

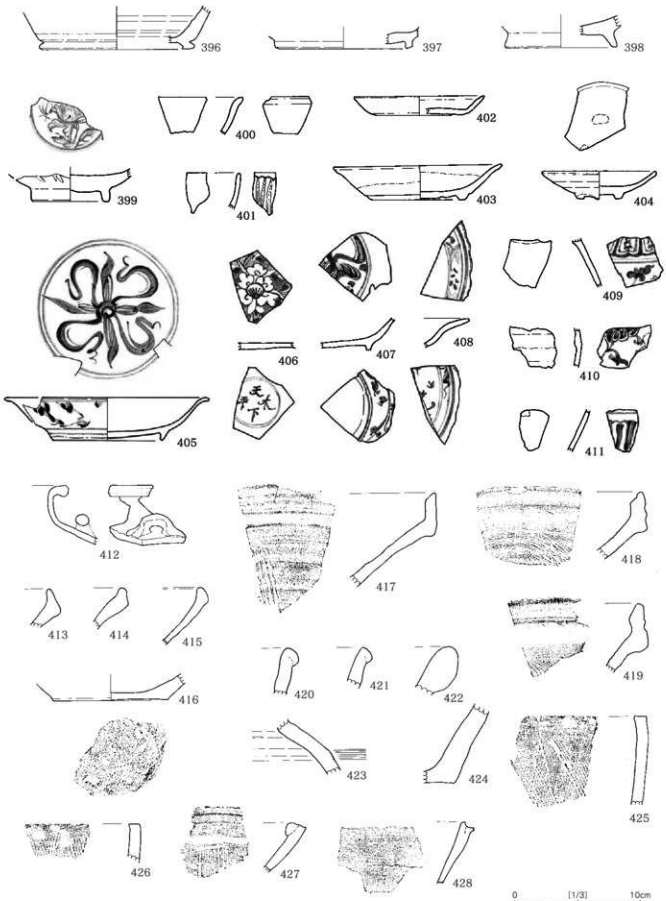
【木製品】（第51図468～482）

Ｂ区のⅣｂ・Ⅳｃ層を中心として1030点の木質が出土した。多くは自然木であったが、その中に加工材や木製品の部品が含まれていた。第50図に示したように平面分布は粗密な極端で、水の流れのよどんだところに流れ集まったかのように見える。

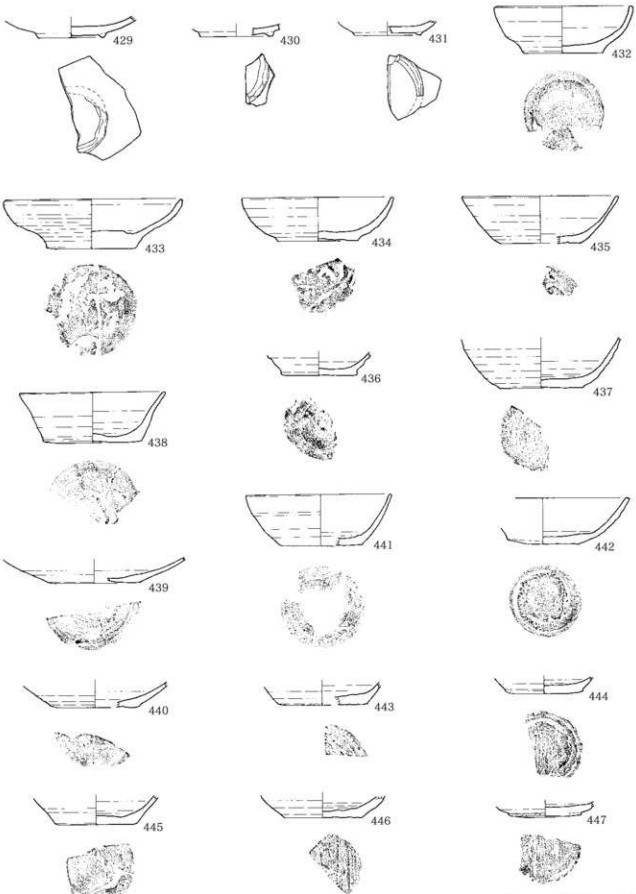
先述した炭化材は、前者が検出されはじめたレベルで取り上げたもの（NK1W－894）、後者が河床礫付近で取り上げたもの（NK1W－945）で、両者は約30cmのレベル差を有している。これらの年代が約250年開くことから、数百年にわたり湿地であったと推定される（附編参照）。

468・471は第50図右下のような位置関係で出土している。468には尖った一端の側に木製の目釘が打ち込んであり、先端と目釘との間は471の直径とほぼ一致する。また471には薄い側板片が貼り付いており、曲物の底板と判明した。このため本来は桶約であった可能性が高い。

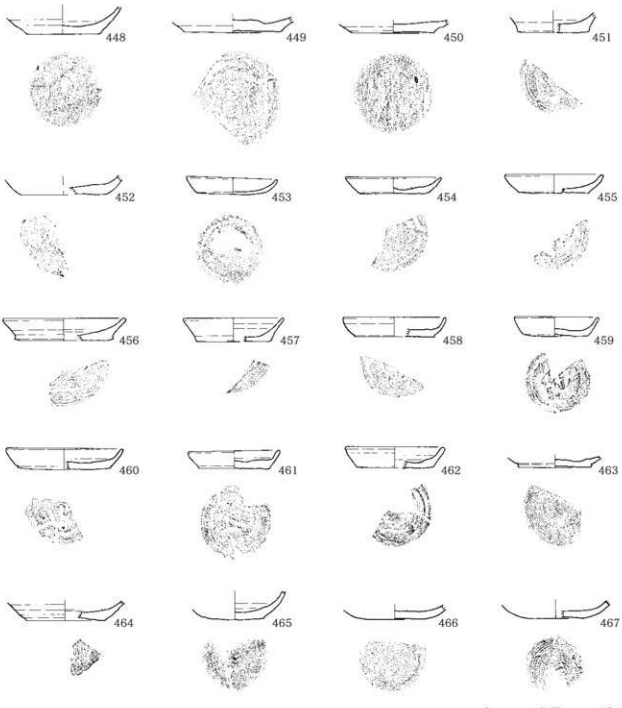
473～475は３枚が貼り付いて出土しており（巻頭図版６－１参照）、サイズや形態から扇の要部分と思われる。476は挽物の碗と考えられるが、漆は塗られていない。480・481は幅約２cm、厚さ１～２



第47図　古代～中世土器・陶磁器実測図（1）



第48図　古代～中世土器・陶磁器実測図（2）



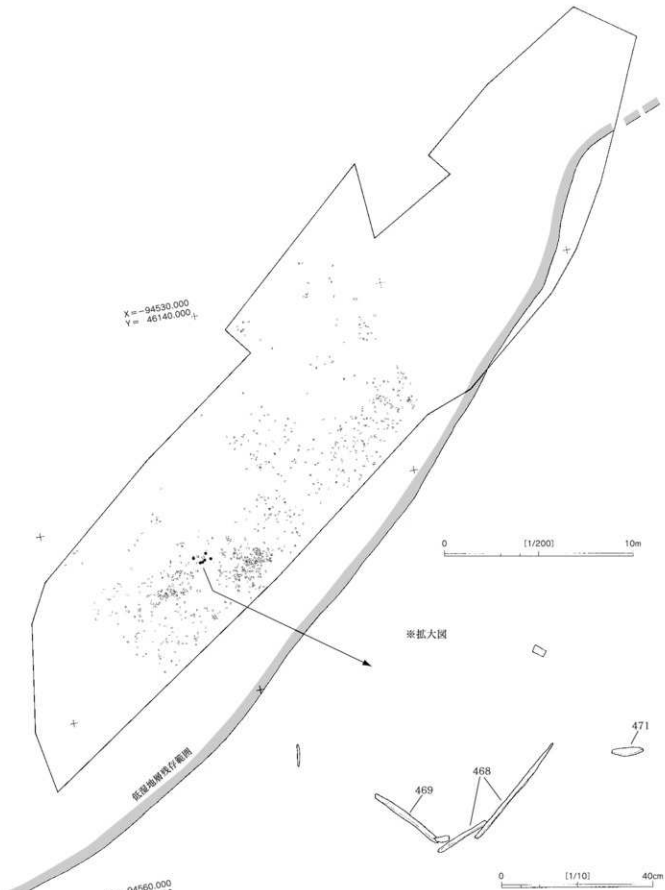
第49図　古代～中世土器・陶磁器実測図（3）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
396	B12	須恵	杯	体～底	底：(11.6)	回転ナデ→回転ヘラケズリ→貼り付け高台	回転ナデ		83
397	G13	須恵	杯	体～底	底：(10.1)	回転ナデ→回転ヘラケズリ→貼り付け高台	回転ナデ		83
398	A4	土師	杯	体～底	底：(9.4)	回転ナデ→貼り付け高台	回転ナデ		83
399	D4	青磁	碗	体～底	底：(6.0)	蓮弁文（片彫り）	花文（スタンプ）・圏線（片彫り）	上田分類B－Ⅱ－a類か	83
400	A5	青磁	碗	口縁				上田分類D－Ⅱ類	83
401	63トレンチ	青磁	碗	口縁		線描蓮弁文		上田分類B－Ⅳ類	83
402	B13	白磁	皿	口縁～底	口：(10.2) 底：(6.6) 高：1.5	口縁部露胎、底部施釉		大宰府分類区類、森田分類A群	83
403	L5	白磁	皿	口縁～底	口：13.4 底：8.8 高：2.7	体部下半～底部露胎	底部露胎	新宿・瀬戸分類F類皿に似る	83
404	A113	白磁	皿	口縁～底	口：(9.8) 底：(3.5) 高：2.2	抉入高台	目跡（4箇所と推定される）	森田分類D群、新宿・瀬戸分類D類皿。	83
405	E3ほか	青花	皿	口縁～底	口：15.5 底：8.7 高：3.4	唐草文・圏線	十字花文・圏線	小野分類皿B1群	83
406	H4	青花	皿	底		「天下太平」・圏線	牡丹文？	小野分類皿B2群か	83
407	B7・K8	青花	皿	体～底		唐草文・圏線	玉取獅子文・圏線	小野分類皿B1群	83
408	B区 Ⅳb	青花	皿	口縁		唐草文？・圏線	四方禅文・圏線	口縁部稜花状。取り上げNo.2544	83
409	AC13	青花	瓶	肩		ラマ式蓮弁文・花文？			83
410	C12 Ⅳb	青花	瓶	胴		花文？		取り上げNo.4665	83
411	B14	青花	瓶	胴		線状の蓮弁文			83
412	8号不明	陶器	耳壺	口縁～肩				タイ産東南亜窯跡群四耳の可能性あり。取り上げNo.SX8-19	83
413	A区一括	須恵	鉢	口縁		口縁部黒変	ナデ	東播系	83
414	B区 Ⅳc	須恵	鉢	口縁		口縁部黒変	ナデ	東播系。焼成は甘い	83
415	AB14 Ⅳb	須恵	鉢	口縁		口縁部黒変	ナデ	東播系。 取り上げNo.5149	83
416	B区 Ⅳc	須恵	鉢	底	底：(9.1)	右回転糸切り痕	摩滅	東播系。 取り上げNo.Ⅳc-825	83
417	E4	陶器	擂鉢	口縁		ナデ	一単位4条以上の擂目	備前焼	83
418	H12	陶器	擂鉢	口縁		ナデ	一単位7条以上の擂目（一部で交差する）	備前焼	83
419	K6	陶器	擂鉢	口縁		ナデ	一単位4条以上の擂目	備前焼	83
420	H14	陶器	壺	口縁		ナデ	ナデ	備前焼	83
421	H4	陶器	壺	口縁		ナデ	ナデ	備前焼	83
422	C8	陶器	甕	口縁		ナデ	ナデ	備前焼	83
423	J8	陶器	壺	肩		一単位6条の沈線	ナデ	備前焼。 420と同一個体か	83
424	J8	陶器	甕	底		ナデ	ナデ	備前焼	83
425	AB5	土師	擂鉢	口縁		ナデ	指頭圧痕→一単位9条の擂目（一部で交差する）	内面のみ黒変	83
426	10トレンチ	土師	擂鉢	口縁		ナデ・細かいシワ	指頭圧痕→一単位9条以上の擂目（一部で交差する）		83
427	B13	土師	擂鉢	口縁		ナデ	突帯・一単位8条以上の擂目		83
428	B区 Ⅳc	土師	鍋	口縁		突帯・指頭圧痕	ハケメ（横）	取り上げNo.Ⅳc-515	83
429	B区 Ⅳc	土師	椀	体～底	底：(5.2)	回転ナデ→貼り付け高台	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-331	84
430	B区 Ⅳc	土師	椀	体～底	底：(5.7)	回転ナデ→貼り付け高台	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-444	84
431	B区 Ⅳc	土師	椀	体～底	底：(5.2)	回転ナデ→貼り付け高台	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-482	84

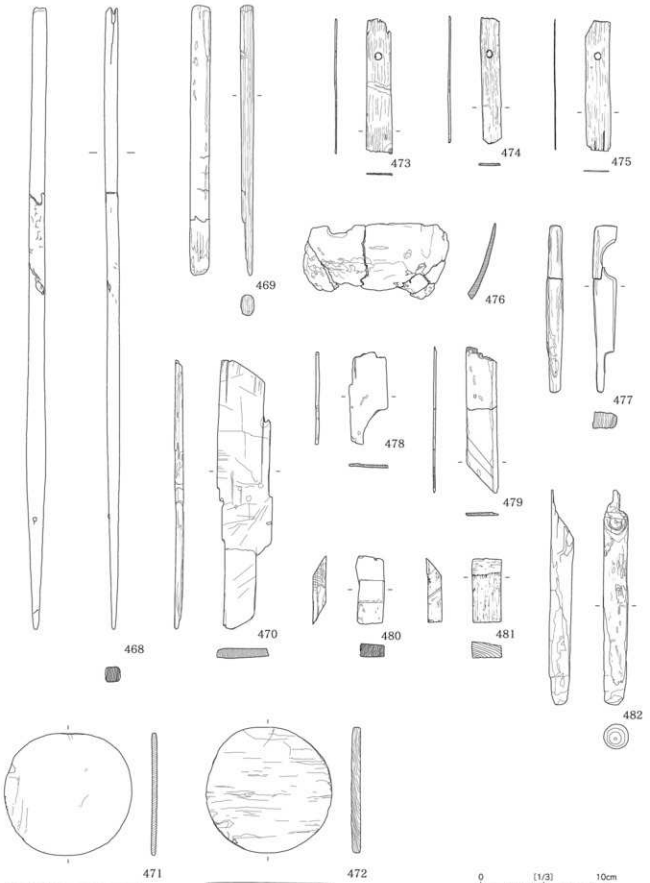
第21表　古代～中世土器・陶磁器観察表（1）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
432	B区 Ⅳb	土師	杯	口縁～底	口：(11.0) 底：6.3 高：3.7	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.1533・1539・2554・Ⅳb-312	84
433	A13 Ⅳc	土師	杯	口縁～底	口：14.2 底：7.1 高：3.9	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.4687・5170～5173	84
434	B区 Ⅳc	土師	杯	口縁～底	口：(12.0) 底：(6.4) 高：3.5	回転ヘラ切り痕	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-570	84
435	B区 Ⅳc	土師	杯	口縁～底	口：(12.2) 底：(6.2) 高：3.8	回転ヘラ切り痕	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-294・318	84
436	A C14ほか	土師	杯	体～底	底：(6.0)	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.5143	84
437	AC5・AJ12	土師	杯	口縁～底	底：(6.7)	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	口縁端部を欠損	84
438	A12	土師	杯	口縁～底	口：(11.6) 底：(7.8) 高：4.0	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ	赤・白二色の粘土がマーブル状を呈する	84
439	B区 Ⅳb	土師	杯	体～底	底：(7.4)	回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.Ⅳb-217	84
440	B区 Ⅳb	土師	杯	体～底	底：(6.2)	回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.1594・1597	84
441	B区 Ⅳc	土師	杯	口縁～底	口：(11.6) 底：(6.6) 高：4.1	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-654・674・675・676・677・678・679・2115	84
442	B区 Ⅳb・c	土師	杯	口縁～底	底：5.8	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	器形復元ができない。取り上げNo.1464・2161・2188・2558	84
443	B区 Ⅳb	土師	杯	体～底	底：(7.1)	回転ヘラ切り痕→工具による渦巻き状の調整？	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳb-187	84
444	G12	土師	杯	体～底	底：(6.2)	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ		84
445	A N12	土師	杯	体～底	底：(6.6)	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ		84
446	A A13	土師	杯	体～底	底：(6.0)	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ		84
447	F12	土師	杯	体～底	底：(5.8)	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ		84
448	B区 Ⅳc	土師	杯	体～底	底：5.9	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.Ⅳc-682	85
449	B区 Ⅳc	土師	杯	体～底	底：(7.8)	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.Ⅳc-320	85
450	B区 Ⅳb	土師	杯	体～底	底：6.5	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.2185	85
451	B区 Ⅳc	土師	杯	体～底	底：(5.6)	回転ヘラ切り痕→工具による渦巻き状の調整？	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-425	85
452	B区 Ⅳc	土師	杯	体～底	底：(6.7)	回転糸切り痕	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳc-641	85
453	A J12	土師	小皿	口縁～底	口：7.1 底：5.5 高：1.3	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ		85
454	B区 Ⅳb	土師	小皿	口縁～底	口：(7.6) 底：(5.3) 高：1.3	回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.Ⅳb-152	85
455	A E13	土師	小皿	口縁～底	口：(7.5) 底：(5.5) 高：1.5	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ		85
456	B区 Ⅳc	土師	小皿	口縁～底	口：(9.6) 底：(7.8) 高：1.8	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.2561	85
457	B区 Ⅳb	土師	小皿	口縁～底	口：(7.9) 底：(5.8) 高：1.8	回転ヘラ切り痕	回転ナデ	取り上げNo.Ⅳb-178	85
458	A14	土師	小皿	口縁～底	口：(8.1) 底：(6.3) 高：1.5	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ		85
459	1号不明	土師	小皿	口縁～底	口：6.5 底：5.2 高：1.6	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	焼成きわめて良好。自然釉がかかる	85
460	B区 Ⅳb	土師	小皿	口縁～底	口：(9.1) 底：(7.4) 高：1.7	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.Ⅳb-34	85
461	B区 Ⅳc	土師	小皿	口縁～底	口：7.1 底：5.5 高：1.5	右回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.Ⅳc-342・374・381	85
462	B区 Ⅳc	土師	小皿	口縁～底	口：(7.2) 底：(6.0) 高：1.7	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	取り上げNo.1466・Ⅳc-372	85
463	B区 Ⅳc	土師	小皿	体～底	底：(5.8)	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	赤・白二色の粘土がマーブル状を呈する。取り上げNo.Ⅳc-819	85
464	A J12	土師	小皿	体～底	底：(6.2)	回転ヘラ切り痕→ハケメ状の調整痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ		85
465	G12	土師	小皿	体～底	底：4.2	右回転ヘラ切り痕	回転ナデ→指頭による横位のナデ	赤・白二色の粘土がマーブル状を呈する	85
466	3トレンチ	土師	小皿	体～底	底：(4.4)	左回転糸切り痕	回転ナデ		85
467	H3	土師	小皿	体～底	底：4.3	左回転糸切り痕	回転ナデ		85

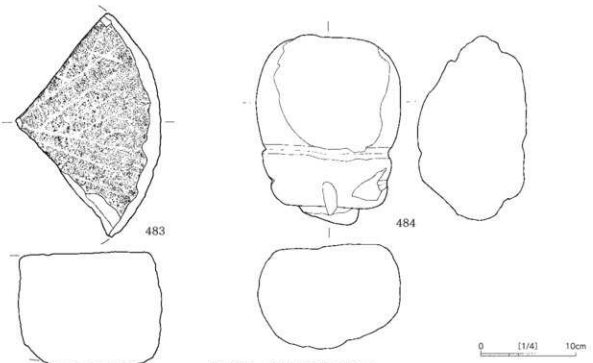
第22表　古代～中世土器・陶磁器観察表（2）



第50図　B区低湿地木製品等出土状況



第51図　古代～中世木製品実測図



第52図　中世石製品実測図

No.	出土位置	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	備考
468	B区低湿地	柄杓（柄）	コウヤマキ	50.0	1.6	1.1	取り上げNo.NK1W-838・839。出土状況は第50図参照。
469	B区低湿地	柄杓（柄）？	コウヤマキ	21.1	1.5	1.1	取り上げNo.NK1W-1003。
470	B区低湿地	曲物？	コウヤマキ	21.0	4.4	0.8	取り上げNo.NK1W-836。
471	B区低湿地	柄杓（曲物）	コウヤマキ	10.0	9.5	0.5	取り上げNo.NK1W-1006。出土状況は第50図参照。側板の破片が付着。
472	B区低湿地	曲物	コウヤマキ	9.8	9.8	0.7	取り上げ名称ノクビ1－2。
473	B区低湿地	扇？	コウヤマキ	10.6	2.0	0.2	取り上げNo.NK1W-464-3。473～475が重なって出土。
474	B区低湿地	扇？	コウヤマキ	9.8	1.5	0.2	取り上げNo.NK1W-464-2。
475	B区低湿地	扇？	コウヤマキ	10.2	2.0	0.1	取り上げNo.NK1W-464-1。
476	B区低湿地	箆？	ケヤキ	11.3	6.0	0.6	取り上げ名称ノクビ1－1。
477	B区低湿地	不明	コナラ属	13.0	1.9	1.3	取り上げNo.NK1W-390。
478	B区低湿地	不明	ヒノキ	7.1	3.0	0.3	取り上げNo.NK1W-520。板状。
479	B区低湿地	不明	ヒノキ	11.5	2.5	0.2	取り上げNo.NK1W-870。板状。
480	B区低湿地	クサビ？	コウヤマキ	5.3	2.2	1.0	取り上げNo.NK1W-718。
481	B区低湿地	クサビ？	コウヤマキ	5.0	2.3	1.2	取り上げNo.NK1W-715。
482	B区低湿地	燃えさし	マツ属	16.8	2.0	1.9	取り上げNo.NK1W-181。一端が炭化、もう一端は切断面。
483	B区低湿地	石臼	凝灰岩	(23.7)	(15.3)	12.3	取り上げNo.Ⅳb-239。粉挽き臼の下臼。四分割されている。
484	A5	石塔	凝灰岩	(20.3)	15.3	11.5	

第23表　古代～中世木製品・石製品観察表

cmの直方体をした木片の一端ないし両端を斜めに切り落としたもので、木製品中に一定量含まれている。形態的特徴から「クサビ？」としたが、用途は特定できていない。

なお樹種については482がマツ属、477がコナラ属、478・479がヒノキである他は全てコウヤマキで、古代～中世頃の木工技術を考える上で興味深い（附編参照）。

【石製品】（第52図483・484）

483はB区低湿地から出土した粉挽き臼の下臼である。ほぼ1／4の破片であり、廃棄に際して意図的に割られた（いわゆる魂抜き）可能性がある。

484は五輪塔の空風輪。風化が著しく不明瞭な部分もあるが、横断面が円形でないなど形態的にも崩れており、中世末～近世前半頃か、野首第1遺跡（県道）で検出された石塔群の一部と考えられる。

第７節　近世～近代の遺構と遺物

１．概要

第Ⅰ章で触れたように、調査前からＬ字形を呈する石垣の存在が知られていたが、これがいつ・何のために作られたのかは全くの不明であった。

そのため石垣周囲及び上面の平場Ｃにトレンチを入れて調査を進めていったが、結果として大規模な切り盛り造成により平場を作り出し、縁辺を石垣・土塁で取り巻く屋敷の存在が明らかになった。また屋敷の居住者に関わると思われる墓も２基検出されている。

土坑は約30基を検出した。そのうちの２基は石組を有するもので、また他の１基は内面が壁土で塗られているなど特異な形態であった。多くの土坑が廃棄坑として掘られたあるいは転用されたと見え、多数の陶磁器・瓦類が出土しており、１基は埋土を洗浄した結果、炭化した種実類が検出された。

野首第１遺跡（県道）の調査でも丘陵の南側縁辺へ並ぶように６基の土坑が検出されていたが（第53図SC１～６）、これらも屋敷と関連するものとして捉えることができる。

また丘陵端部に切り通されていた道は近代以前の木城街道で、街道沿いに開口した谷の北側斜面を用いた屋敷地の全域をほぼ調査したことになる。

水田は谷底の低湿地を大規模に埋め立てて作られていた。調査区内で最低３枚の水田を確認したが、各面にレベル差があり棚田の状態になっている。

これら近世～近代遺構に関わる遺物は、遺構出土のものはもちろん遺構外出土の遺物も、可能な限り第３図に示した５ｍグリッドに基づいて取り上げ、全破片について分類・計量を行っている。

こうした遺物の分析と遺構調査時の所見、近隣住民からの聞き取りを総合すると、当初は何らかの前身的な建物が存在していたが、土塁・石垣を巡らせた屋敷としては19世紀前葉に成立したようで、廃絶は明治10年から20年代頃までの間、水田はその直後に作られ、昭和初め頃に埋め立てられてしまったと推測される。こうした分析の内容については、第Ⅴ章で改めて詳述したい。

２．遺構

屋敷地を構成する各要素について、種別ごとに報告する。

Ａ．石垣・土塁・石列・屋敷入口

石垣は平場Ｃの南辺・東辺の一部を画する１号石垣と平場Ｅの南辺と里道を画する２号石垣、平場Ｄ・Ｅ間に繰り返し積まれた３～５号石垣がある。

１号と２号は大規模で構築法も類似しており、ある程度の専門知識を持った石工の関わりも想定できるが、３～５号については小規模かつ積み方も稚拙で、屋敷の関係者が土留めのため自前で積んだ可能性がある。

土塁は１号石垣と対応するように平場Ｃの東辺を画している。断ち割って土層を確認したところ、平場Ｃの盛土造成と同時進行で構築されたとの結論に達した。

屋敷入口は１号石垣と土塁の間である。本来の地形を一部利用しつつスロープ状を呈していた。

【１号石垣】（第54・55・59・60図）

平場Ｃの南辺及び東辺の一部を画しており、調査前から存在が知られていたものである。調査前には下部が埋没していたが、精査の結果、隅部で高さが約2.5ｍに達する大規模なものであることが判明した。長さは東辺が約６ｍ、南辺が約16ｍである。

石材は尾鈴山酸性岩類の巨礫であり、山石を利用した可能性がある。野面積みだが①横目地を通し、②隅部は算木積みになっている、③石の隙間には栗石を入れるなど、石垣の積み方を踏まえた構造となっている。

ただし断面ｆの部分を中心としてＶ字形に小さな礫が入っており、この部分に関しては後世に積み直したようである。また断面ｇの部分は石がいわゆる重箱積みで右側には大きな鏡石が入っていることや、第59図の右端付近には基部の礫が疑に数個並び、その西側から横置きで目地も通るようになっていることなどから、この部分も積み直したあるいは当初は石垣が無かった部分に自前で石を積んだという可

能性がある。

東辺の石垣は基部が急激に上っていくため，石垣の正面観は三角形を呈している。これは自然地形を利用しつつスロープ状の入口を作ったことによる。

【2号石垣】（第57・61図）

平場Eと里道とを画する石垣である。長さ約4m，高さが約0.8mとかなり小規模だが，使用している石材や積み方は1号と共通する。

【3号石垣】（第57・61図）

平場E東縁の落ち際に積まれている。使用している礫も小さく，積み方にも規則性は認められない。

延長22m程度の間に断続的に残されていたが，図化した部分以外は礫が1段のみで縁石のような状態であった。

土留めあるいは区画程度の意味で，石垣の知識が無い人間が積んだと考えられる。

【4号石垣】（第57・61図）

平場D西縁の斜面下に積まれている。積み方は3号とほぼ同じであり，同時期に作られた可能性が高い。里道の脇から約5.5m延びて途切れていた。

【5号石垣】（第57・61図）

4号石垣が斜面上からの流入土により埋没した後，新たに積まれたものである。積み方は最も粗雑で，単に一時的な土留めを目的としたものであろう。2m程度はかろうじて石を積んでいるように見えたが，その先は礫が散乱しており，認識できなかった。

【土塁】（第54・55図）

1号石垣と対応するように平場C東辺を画しており，長さ約12m，幅が基底部で約4m，高さ1.5mを測る。当初は自然地形と考えていたが，トレンチによる断面観察の結果，基底部にK-Ah層が露出し，大規模な盛土の存在が判明した。

第54図に示したBラインの断面図によると，平場Cの盛土造成がある程度進んだ時点で土塁の構築が始まっている。また土塁の下半部をパックするかのように平場Cの盛土がなされるが，土塁の土が崩落した形跡が認められなかったことから，これらの作業は一連のものとして行われた，すなわち平場Cの造成と土塁構築は同時進行であったと判断しうる。土塁の構築土からは多数の土器・陶磁器類が出土したが，後述するようにその中には端反碗・湯呑碗なども含んでおり，一部は27・30号土坑と接合する。

【石列】（第54・55図）

土塁の基底部及び段切り際の一部に巡り，土留めと区画の目的を兼ねて設けられたようである。よって土塁と一体をなすものである。

1号石列は屋敷入口から鉤状に折れ，平場B際の斜面まで延びている。尾鈴山酸性岩類の巨礫を用いており，総延長は約8mである。

2号石列は使用している礫がかなり小さいが，1号石列と軸が揃っており，平場Aと土塁を画している。総延長は約2mである。

【屋敷入口】（第54・55図）

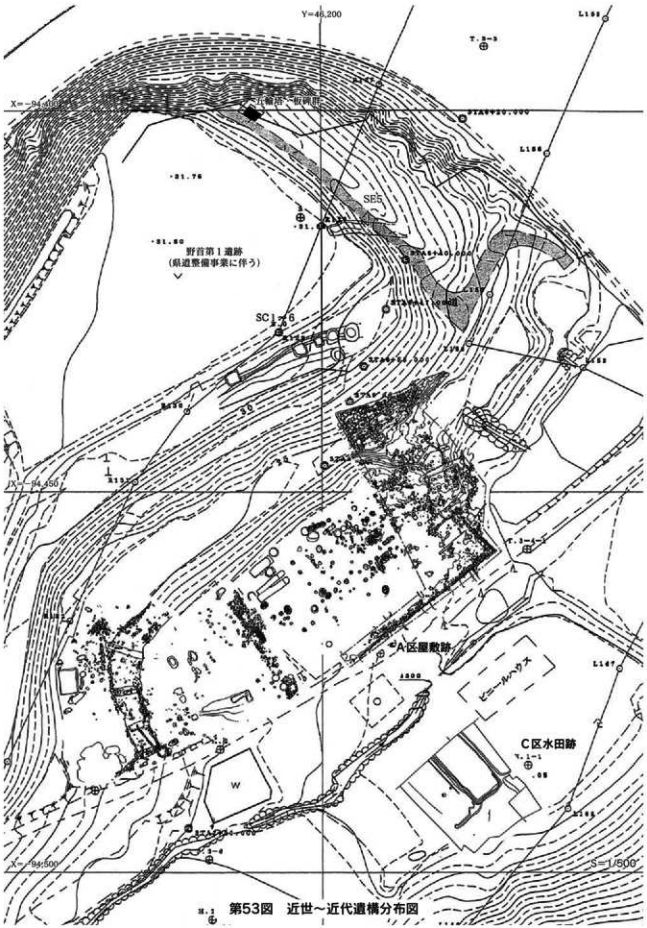
1号石垣と土塁との間には約1mの隙間があるが，第54図に示したCラインの断面図によると，この部分について地山の傾斜を利用しつつ若干の盛土を行って入口としていたようである。

B．建物跡（第56・100図）

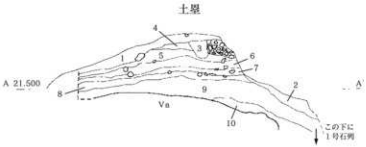
平場Cのほぼ中心に検出された。屋敷地唯一の建物跡である。礎石建物であったと推測されるが，礎石は全て失われており，礎石の基礎とでもいうべきピットの配列として検出された。ピットは浅い皿状に掘り窪め，その壁面に複数種類の土を混ぜたものを貼った後，さらに同様な土を礫と混合して充填するなど入念な工程をとっていた。掘立柱と異なり，ピットの場所＝柱とは限らないので復元困難な部分はあるが，桁行6間，梁間3間で東面と南面の一部に半間の庇あるいは縁側が取り付いている。身舎部分で約11.6m（尺貫法の6間）×7.2m（同4間）を測り，宮崎市高岡町の高岡麓遺跡で検出された屋敷遺構（第101図）と概ね同規模である。

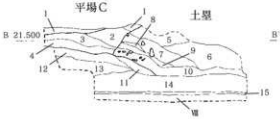
周囲の土坑や包含層から1.8tもの瓦が出土していることから総瓦葺きの建物であったと推定される。

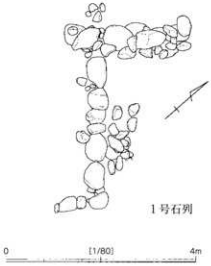
地元住民からの聞き取りでは，明治年間に建物が当時の庄屋宅へ移築されたとのことで，庄屋の子孫の方を訪ねて話をうかがったところ，建物は昭和30年代まで残っていたが，老朽化により解体されてしまったそうである。



第53図　近世～近代遺構分布図







【土塁Aライン】

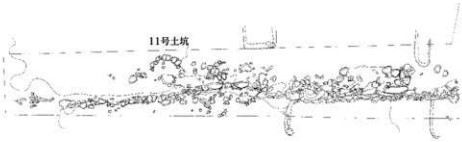
1 黒褐色土(10YR2/3) 1cm以下の小礫・褐色土粒子を少量含む。しまり・粘性弱い。表土。
2 暗褐色土(10YR3/4) 1cm以下の小礫、2mm以下の炭化物粒子を微量含む。しまりややあり、粘性なし。土塁の崩落土か。
3 黒褐色土(10YR2/2.5) 1cm以下の小礫、2mm以下の炭化物粒子・褐色土粒子を含む。しまり弱く、粘性なし。
4 黒褐色土(10YR2.5/3) 1層と似るが、灰黒褐色土ブロックを少量含む。しまりやや弱く、粘性あり。
5 黒褐色土(10YR2/3.5) 2層とはぼ同質だが、2cm以下の小礫を含む。しまりやや弱く、粘性あり。
6 暗褐色土(7.5YR2.5/4) 1cm以下の小礫、1mm以下の褐色土・黒褐色土・炭化物粒子を含む。しまりやや弱く、粘性やや強い。
7 暗褐色土(10YR3/4) 明黄褐色土(K-Ahか)・黒褐色土ブロック、1mm以下の炭化物粒子を含む。しまりやや弱く、粘性あり。
8 暗褐色土(10YR3/4) 5mm以下の褐色土・灰白色土・橙色土・炭化物粒子、小礫を少量含む。しまりあり、粘性弱い。
9 暗褐色土(10YR3/4) 2mm以下の褐色土・灰白色土・炭化物粒子、小礫を少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。
10 黒褐色土(10YR2/2.5) 2mm以下の黄褐色土ブロック(10YR4.5/6:K-Ah)を微量含む。しまりやや弱く、粘性あり。

【土塁Bライン】

1 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや弱く、粘性弱い。表土。
2 暗褐色土(10YR3.5/4) 5mm以下の小礫を少量、2mm以下の褐色土・炭化物粒子を微量含む。しまり・粘性やや弱い。
3 暗褐色土(10YR3/4.5) 5mm以下のKr-Kbを含む褐色土ブロック・褐色土粒子を少量含む。しまり・粘性やや弱い。平場Cの造成土。
4 暗褐色土(10YR3/4.5) 一部にKr-Kbを含む褐色土ブロック入る。黒褐色・褐色土粒子を少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。平場Cの造成土。
5 暗褐色土(10YR3/4) 1cm以下の小礫・黒褐色土粒子を少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。土塁の盛土。
6 黒褐色土(10YR2/3) 1cm以下の小礫・褐色土粒子を少量含む。しまり・粘性弱い。土塁の盛土。
7 黒褐色土(10YR2.5/3.5) 5cm以下の礫、5mm以下の褐色土・炭化物粒子を少量含む。しまりあり、粘性なし。土塁の盛土。
8 黒褐色土(10YR2.5/4) 1cm以下の小礫・褐色土粒子を少量含む。しまりやや弱く、粘性なし。土塁の盛土。
9 黒褐色土(10YR2.5/4) 2cm以下の褐色土ブロック、2mm以下の褐色土・炭化物粒子を少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。土塁の盛土。
10 黒褐色土(10YR2/2) 明黄褐色土・炭化物粒子、陶磁器を少量含む。しまりやや強く、粘性あり。土塁の基底土か。
11 黒褐色土(10YR2.5/3) 橙色土・黒褐色土粒子を少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。屋敷入口の盛土。
12 暗褐色土(10YR3.5/4.5) 5mm以下の小礫、褐色土・暗褐色土・炭化物粒子を少量含む。一部にKr-Kbを含む褐色土ブロックが入る。しまりあり、粘性やや弱い。屋敷入口の盛土。
13 黒褐色土(10YR3/2) 5mm以下の小礫、褐色土・黒褐色土・明黄褐色土・炭化物粒子を少量含む。しまり・粘性あり。屋敷入口の盛土。
14 黒褐色土(10YR2.5/3.5) 褐色土・橙色土・炭化物粒子を少量含む。しまり・粘性あり。屋敷入口の盛土。
15 褐色土(7.5YR4/6) 1cm以下のK-Ahブロックを多量、炭化物粒子を微量含む。しまり強く、粘性やや弱い。

【屋敷入口】

1 黒褐色土(7.5YR3/2) 5cm以下の小礫や新しい木片を多量に含み、フカフカしている。しまり・粘性なし。表土。
2 暗褐色土(7.5YR3/3) 10cm以下の礫・瓦片、2mm以下の焼土・炭化物粒子を少量含む。しまり弱く、粘性やや弱い。
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 白色粘土を少量含む箇所があり、土色は2層より明るい。30cm以下の礫・瓦片をごく多量、2cm以下の炭化物、5mm以下の焼土粒子を多量含む。しまり・粘性弱い。屋敷廃絶後の整地に伴う層か。
4 暗褐色土(7.5YR3/4) 上下層より土色赤みがかる。1cm以下の小礫、2mm以下の炭化物粒子を微量含む。しまり・粘性なし。
5 暗褐色土(7.5YR3/3) 10cm以下の礫・瓦片、5mm以下の炭化物・焼土粒子を多量含む。しまり・粘性やや強い。
6 暗褐色土(7.5YR3/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒子を少量含む。しまり非常に強く、粘性やや強い。この断面ではほぼ水平に広がっており、硬化面を形成している可能性高い。
7 暗褐色土(7.5YR3/3) 6層とはぼ同質だが、しまり・粘性弱い。
8 黒褐色土(7.5YR3/2) 10cm以下の礫を多量、1cm以下の炭化物を少量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
9 黒褐色土(7.5YR3/2) 2cm以下の黒褐色土ブロック、2mm以下の黄橙色土粒子を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
10 暗褐色土(7.5YR3/4) 1cm以下の小礫を多量、1mm以下の黄橙色土粒子を微量含み、フカフカしている。根痕か。しまり・粘性なし。
11 褐色土 (7.5YR4/6) 土色赤味を帯び、1mm以下の黄橙色土粒子を微量含む。色調は基本層序V層に似るが、土質やや異なる。30cm以下の礫を多量含む。しまり・粘性やや弱い。
12 黒褐色土(7.5YR3/2) 20cm以下の礫をごく多量、2mm以下の黄橙色土粒子を微量含む。礫の隙間に土が入るような状態。しまり・粘性弱い。
13 明褐色土(7.5YR5/6) 宮崎層群の砂礫層(基本層序IX層に含まれる)。50cm以下の礫と砂で構成される。



第54図　A区近世～近代遺構分布図（1）

第55図　A区近世～近代遺構分布図（2）

C．近世墓（第55・62図）

平場Cの一角に近世墓標が2基あることは調査前から知られていた。そのため墓標の現況を記録した後、地権者の協力を得て近在する神社の宮司に依頼し、調査区外への移設を行った。

その後に墓標直下にトレンチを設定して精査したが、予想された墓坑は見つからなかった。ところが調査が進むと、一段高い平場Eの東端部に礫の下から墓の台座2基分（うち1基分は砕けていた）が検出された。この精査の過程において背後の斜面より人骨が出土し、墓坑の存在が確定的となった。平成13年度の確認調査時に設定した3トレンチから銭貨が6枚出土していたが、このトレンチは墓坑の一部にかかっており、これを六道銭と判断した。

斜面地で土が判別しづらく、また多量の礫に阻まれ、墓坑は1基のみしか検出できなかったが、見通しBラインに示したように台座付近で礫が落ち込んでおり、ここにもう1基の墓坑が存在した可能性がある。ただしここから人骨は出土していない。

位置的には土墨の直上で屋敷地の北東隅にあたる上、移築した墓標も平場Cの北東隅であり、屋敷墓としての意識があったと考えられる。

人骨については土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に調査を委託し、分析結果を寄稿いただいたが、壮年男性の極めて限られた部分の骨であり、改葬された可能性があるという（附編参照）。

よって他の場所から人骨の一部を移動して改葬し、さらに台座部分が埋没した頃に墓標のみを移動したと推測される。

向かって左側の墓標は、正面「春須信子」、右側面「弘化三午年」、左側面「二月二日　庄太郎」と、右側の墓標には正面「空自運信士」、右側面「弘化四未年」、左側面「十一月十二日」と刻されていた。弘化3・4年はそれぞれ西暦1846・47年となり、19世紀前半頃に存命の人物である。

D．土坑（注記記号：SC）

先述したように近世から近代に属する可能性のある土坑は約30基である。この中には廃棄坑・建物関連（基礎など）をはじめ様々な用途をもって掘られた穴が含まれており、また当初とは異なる用途に転用されたものも多いと考えられ、全ての土坑についてそれぞれ性格を特定することは困難である。

ここでは遺構そのものの概要を中心に触れることとし、出土遺物については次項、計測値ほかの基礎的なデータは第24表として掲載した。

【3号土坑】（第56・63図）

平場Cの南西隅、建物と1号石垣とのほぼ中間地点で検出された。円柱形に掘られた穴で、廃棄坑として掘られた可能性が高い。埋土の下半は炭化物と焼土を多量に含んでおり、この中で火を焚いた可能性が高い。固化は行っていないが、炭化物層中に瓦片が入っていた。

【4号土坑】（第56・63図）

建物跡の柱筋に位置しており、柱穴の一つという可能性もあるが、底面に焼土層があり、その上面で何らかの使用状況（火床か？）にあったと推測されたため単独の遺構として扱った。建物の一部として機能していた可能性もある。薩摩苗代川系の土瓶片など数点が出土した。

【8号土坑】（第58・63図）

平場Dの北西部で検出された。南半を中心に多量の炭化材が検出されている。壁面の一部が赤化しており、ここで炭を焼いた可能性がある。

【9・10号土坑】（第58・63図）

いずれも平場Dで検出された。9号土坑には2頭分、10号土坑には1頭分の馬骨が入っていたが、いずれも骨盤から下が失われた状態であった。

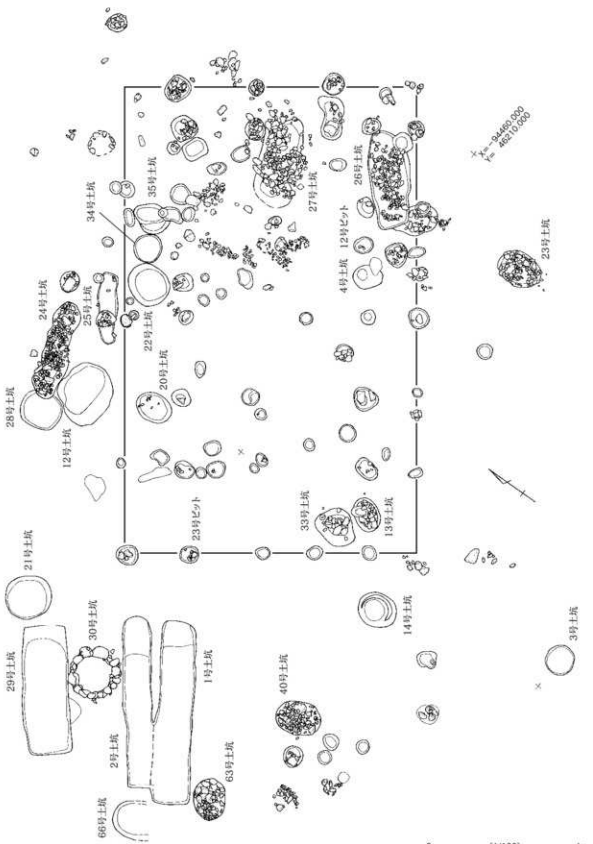
9号からは端反碗の破片など、10号からは擂鉢（近代か？）などが出土している。

【11号土坑】（第54・64図）

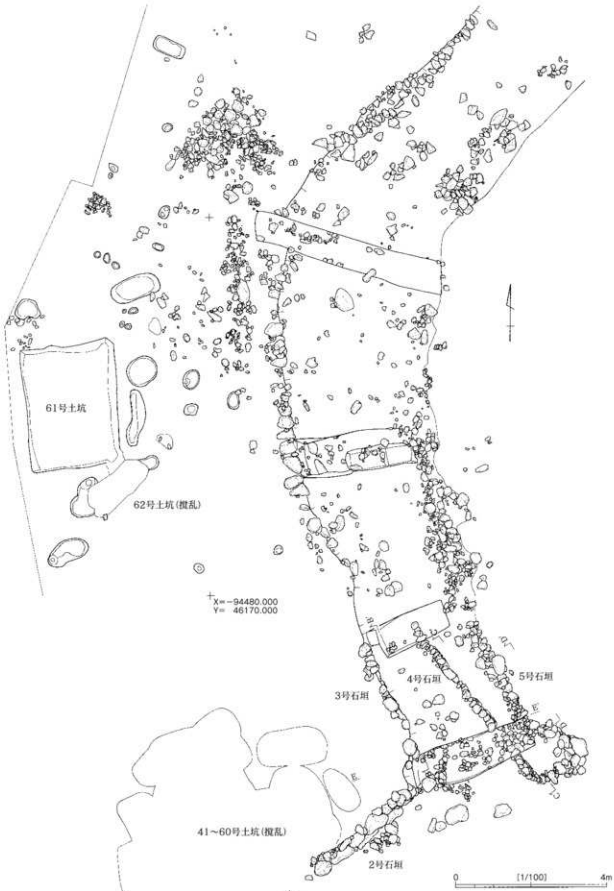
1号石垣の延長上に位置する。5～20cm程度の円礫を用いた石組で壁面が覆われていた。石組は南側（里道側）の一部が開いている。多量の炭化材を含む層（2～4・6層）で大半が埋まっており、この中で火を焚いた可能性が高い。廃棄物を焼却したとも考えられる。

いずれにしても最終的には廃棄坑として埋没したようで上層には礫・瓦・陶磁器などが含まれていた。

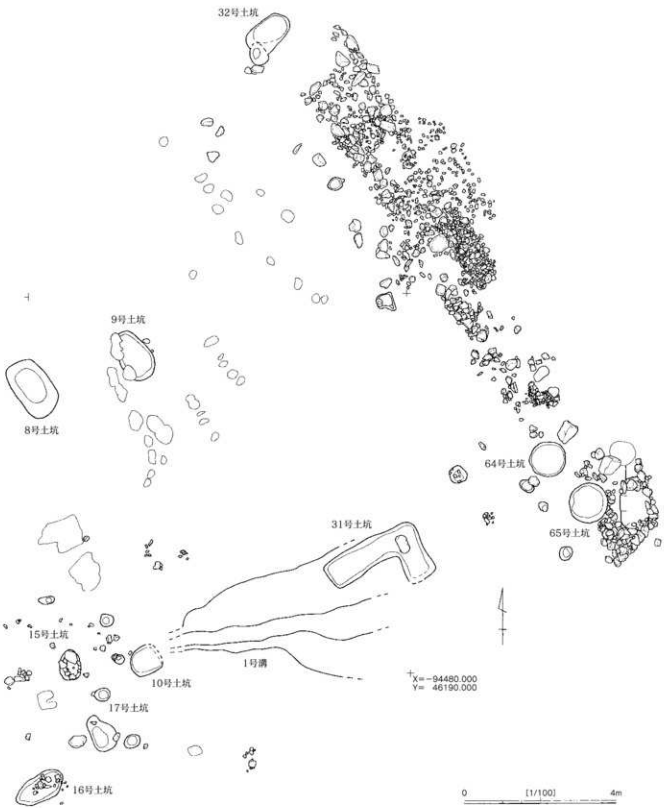
一つ問題となるのは、4層中に出土した姫島産黒



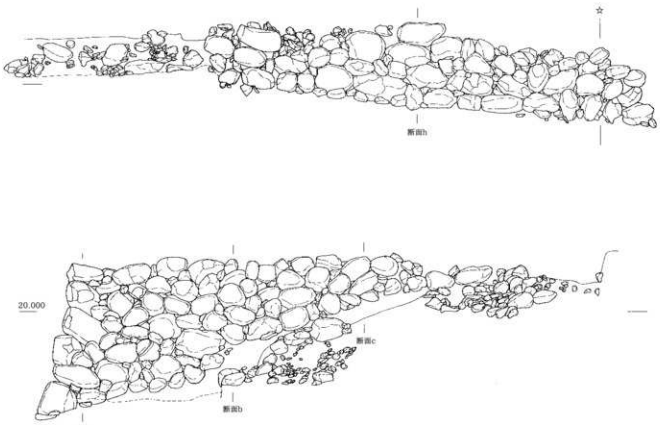
第56図　A区近世～近代遺構分布図（3）



第57図　A区近世～近代遺構分布図（4）



第58図　A区近世～近代遺構分布図（5）



第59図　近世石垣実測図（1）

瞳石の石核（837）である。この石核は4層と接触していた面が熱で発泡しており、少なくとも近世人によってこの中へ投棄されたことは間違いない。ただしその石核が元々は屋敷地に広がる縄文時代の包含層に埋もれており、何らかの要因で人目に付いたのか、近世になって姫島からこの地にもたらされたのか、その判定は容易でない。

陶磁器は広東碗などが出土している。

【12号土坑】（第56・63図）

建物跡の北隣で検出された。楕円基調だがやや不整形を呈する。これは周辺が平場Cの造成時に切り土され、土坑が宮崎層群の砂層に掘り込まれているためで、ある程度の期間開口しているうちに壁面の砂層が浸食されたことに関係するようである。2層には炭化物・焼土粒子が含まれ、3層は特に密であることから、この中で火を焚いた可能性が高い。

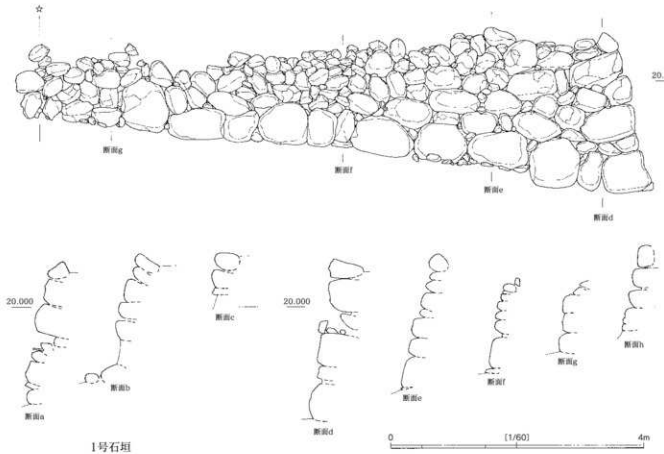
最終的には廃棄坑として埋没したようで、薩摩苗代川系の土瓶蓋などが出土している。

【13号土坑】（第56・64図）

建物の基礎（断面図の1層）に切られており、前身の施設に関係する土坑である。最下層が炭化物からなっており、中で火を焚いた可能性が高い。

【14号土坑】（第56・64図）

建物の西隣に位置する。検出時より多量の礫や陶磁器類が見られた。それらの位置を記録しながら掘り下げていくと、中心部分に円柱状の堆積があり、そこを外れると礫や陶磁器がほとんど出土しないことが判明した。また2・3層の境に板状の木質あるいは木質の付着した鉄片が数点横たわっており、これらの木目が一方向に揃っていたため、土層や掘り方の観察結果と総合すると、中央に直径70cm程度の桶が埋め込んであり、そこに瓦礫が廃棄されたとの想定が可能であった。よって当初より廃棄を目的として設けられた「専用廃棄坑」と判断している。瓦礫の堆積には複数枚の単位が認められるほか、1・2層を中心に多量の炭化材が出土しており、何



第60図　近世石垣実測図（2）

回かの廃棄と焼却を繰り返した後に廃絶したようである。コバルトを用いた陶磁器は見られない。

【15～17号土坑】（第58図）

平場D南西隅に集中して検出された。いずれも楕円基調だがかなり不整形で、少量の礫・陶磁器類が入っていた。性格は不明である。

【20号土坑】（第56・65図）

建物跡の範囲内に含まれているが、柱筋からはやや外れており、少量の礫以外には出土遺物もない。性格について追求することは困難である。

【21号土坑】（第56・65図）

平場Cの北西隅、29号土坑と近接しており、建物の裏手にあたる。黒褐色土の単一土層で、遺物も出土していない。性格は不明である。

【22号土坑】（第56・65図）

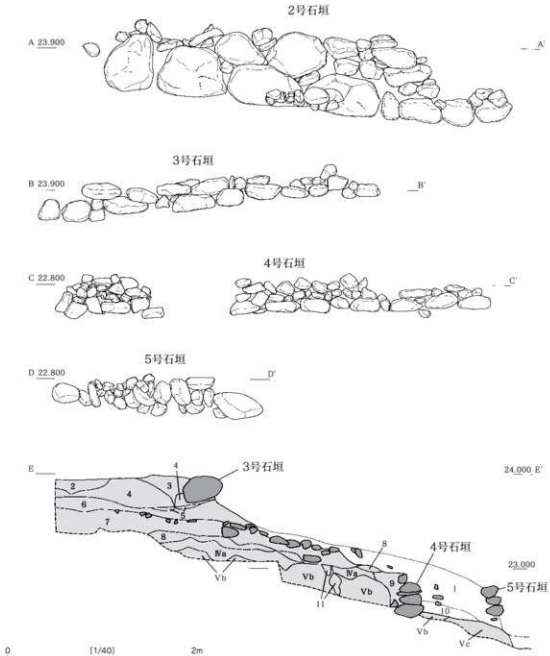
建物跡の範囲内に含まれており、34・35号土坑と並んでいる。ちょうど柱と柱の間に掘られた格好で、最下層には礫や陶磁器が入っており、ほとんど自然埋没した後、わずかな窪みが人為的に埋め戻されたようである。出土遺物は古手だが、26号土坑と接合しており、床下にあった何らかの施設に伴うものであろうか。

【23号土坑】（第56・65図）

平場Cの中央やや南寄り、建物と1号石垣との間に位置する。土よりも多い礫・瓦・陶磁器片が詰まっていた。ごく短期間で掘削・埋め戻された廃棄坑と考えられる。

【24号土坑】（第56・66図）

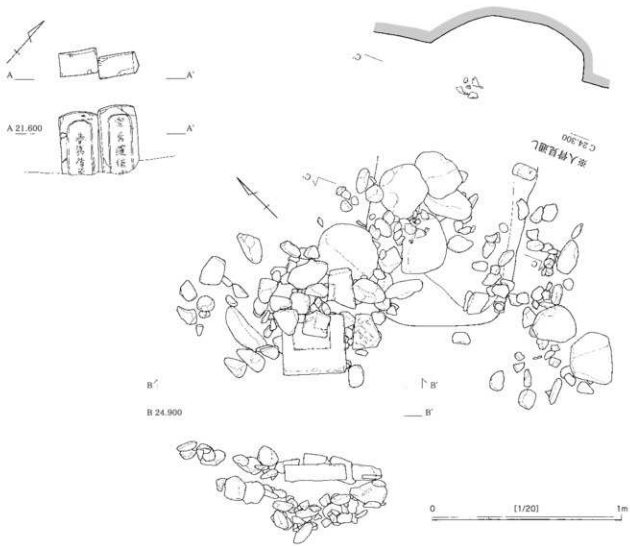
建物の北隣に位置するが、主軸は柱筋と比較するとかなり傾いている。平面形は不整な長楕円形で、掘り込みは非常に浅いが、多量の礫が充填されている。28号土坑を切っていること、コバルトを用いた型紙刷りの碗が出土したことなどから、比較的新しい掘り込みと考えられるが、性格は不明である。



【3～5号石垣】

1	黒褐色土(7.5YR3/2)	竹根が入り込み全体的にばさつく。20cm以下の礫や陶磁器を多量、5mm以下の炭化物粒子・黄橙色風化礫も含む。斜面下側を引き石で留められる。しまり・粘性なし。
2	暗褐色土(7.5YR3/4)	2mm以下の炭化物・焼土粒子を少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
3	暗褐色土(7.5YR3/4)	土質は4層に似るが、竹根が入り込みばさつく。しまり・粘性なし。植栽等に由来する可能性あり。
4	暗褐色土(7.5YR3/4)	2cm以下の焼土ブロック・小礫、2mm以下の炭化物粒子を少量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
5	黒褐色土(7.5YR3/2)	6層とほぼ同質だが、著しく硬化する。しまり非常に強く、粘性やや弱い。
6	黒褐色土(7.5YR3/2)	1cm以下の小礫を微量含む。しまり・粘性やや弱い。
7	黒褐色土(7.5YR2/2)	この層の上面に20cm以下の礫が据り付き、石敷状になっている。5mm以下の小礫を少量含む。しまり・粘性弱い。
8	黒褐色土(7.5YR2/2)	2mm以下の黄褐色風化礫を少量含み、著しく硬化する。しまり非常に強く、粘性弱い。
9	暗褐色土(7.5YR3/4)	5mm以下の小礫を微量含む。しまり・粘性やや弱い。4号石垣の裏込め。
10	極暗褐色土(7.5YR2/3)	5mm以下の黄褐色風化礫、2cm以下の礫を少量含む。4号石垣機能時の自然体積か。しまり・粘性やや弱い。

第61図　近世石垣実測図（3）



第62図　近世墓実測図

【25号土坑】（第56・66図）

24号土坑と形態的には類似するが，主軸は建物の柱筋と一致しており，位置的にも建物内に含まれる可能性がある。礫や陶磁器も非常に少なく，そうした点からも24号とは性格が異なる可能性はある。

【26号土坑】（第56・66図）

やや幅広だが，不整な平面形を呈し浅い掘り込みに瓦礫などが充填される点で24号土坑と類似する。ただし建物の範囲内で，柱と柱の間に掘られている点からは，建物と関係する掘り込みの可能性もある。

【27号土坑】（第56・66図）

規模や平面形は26号土坑と類似するが，深さが全く異なる。やはり瓦礫が充填されていた。陶磁器片は比較的多量に出土したが，湯呑碗は見られない。

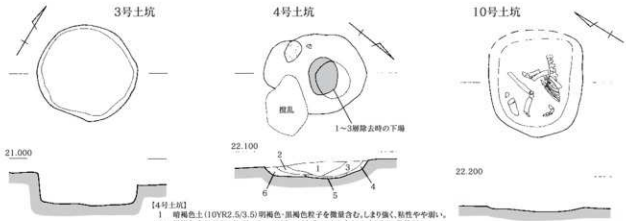
23号土坑や土壇との接合資料が認められる。

【28号土坑】（第56図）

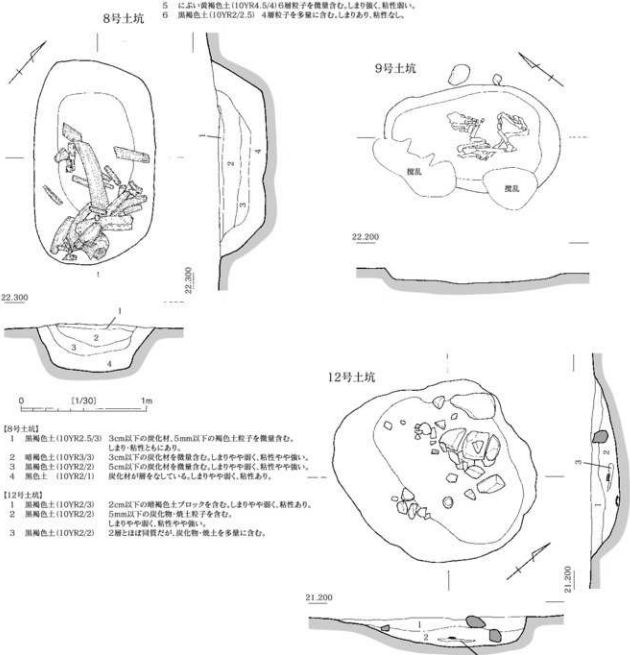
建物の北隣に位置し，24号土坑に切られている。規模・形態と遺物は全く出土しなかった点が21号土坑に類似し，同種の遺構と考えられる。

【30号土坑】（第56・67図）

平場C北西隅で2・29号土坑に両端を切られている。11号土坑同様に石組を有するが，中で火が焚かれた痕跡は認められない。内部には多量の礫・瓦・陶磁器が詰まっており，最終的には廃棄坑として利用されたようである。湯呑碗が一定量含まれているが，コバルトを用いた陶磁器は見られない。



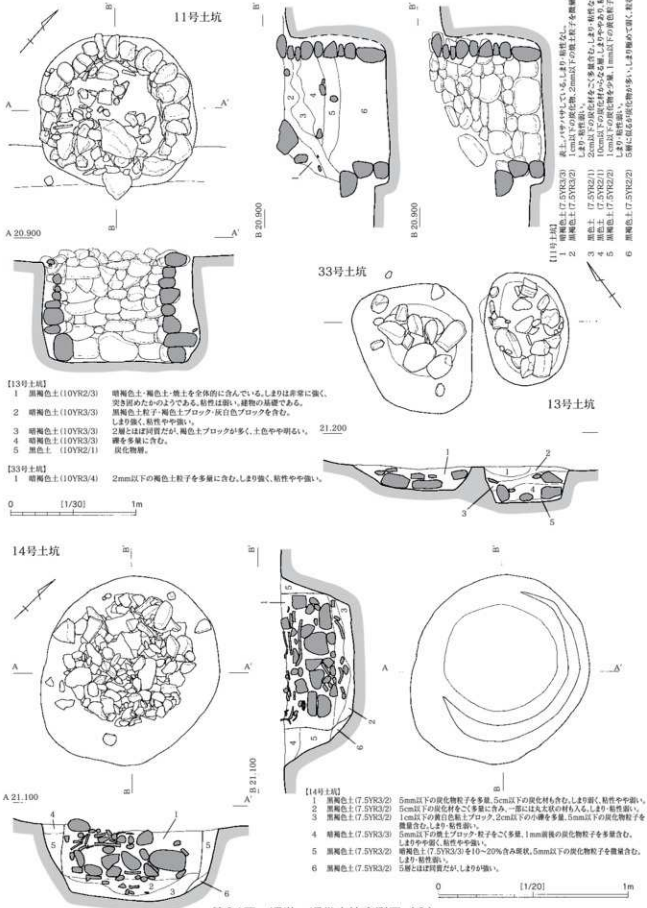
【4号土坑】
1　暗褐色土(10YR2.5/3.5)明褐色・黒褐色粒子を微量含む、しまり強く、粘性やや強い。
2　黒褐色土(10YR2/1.5)　2cm以下の4層ブロックを含む、しまりあり、粘性強い。
3　黒褐色土(10YR2/3)　1mm以下の褐色土粒子、5層粒子を微量含む、しまり強く、粘性強い。
4　赤褐色土(5YR4/8)　焼土層、しまり強く、粘性なし。
5　にぶい黄褐色土(10YR4.5/4)6層粒子を微量含む、しまり強く、粘性強い。
6　黒褐色土(10YR2/2.5)　4層粒子を多量に含む、しまりあり、粘性なし。



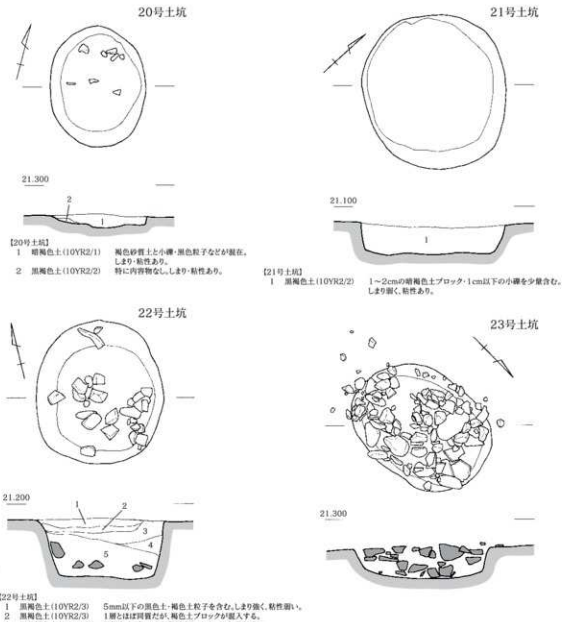
【8号土坑】
1　黒褐色土(10YR2.5/3)　3cm以下の炭化材、5mm以下の褐色土粒子を微量含む。
　しまり・粘性ともにあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　3cm以下の炭化材を微量含む、しまりやや弱く、粘性やや強い。
3　黒褐色土(10YR2/2)　5cm以下の炭化材を微量含む、しまりやや弱く、粘性やや強い。
4　黒色土　(10YR2/1)　炭化材が層をなしている、しまりやや弱く、粘性あり。

【12号土坑】
1　黒褐色土(10YR2/3)　2cm以下の暗褐色土ブロックを含む、しまりやや弱く、粘性あり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　5mm以下の炭化物・焼土粒子を含む。
　しまりやや弱く、粘性やや強い。
3　黒褐色土(10YR2/2)　2層とほぼ同質だが、炭化物・焼土を多量に含む。

第63図　近世～近代土坑実測図（1）



第64図　近世～近代土坑実測図（2）



第65図　近世～近代土坑実測図（3）

【31号土坑】（第58・67図）

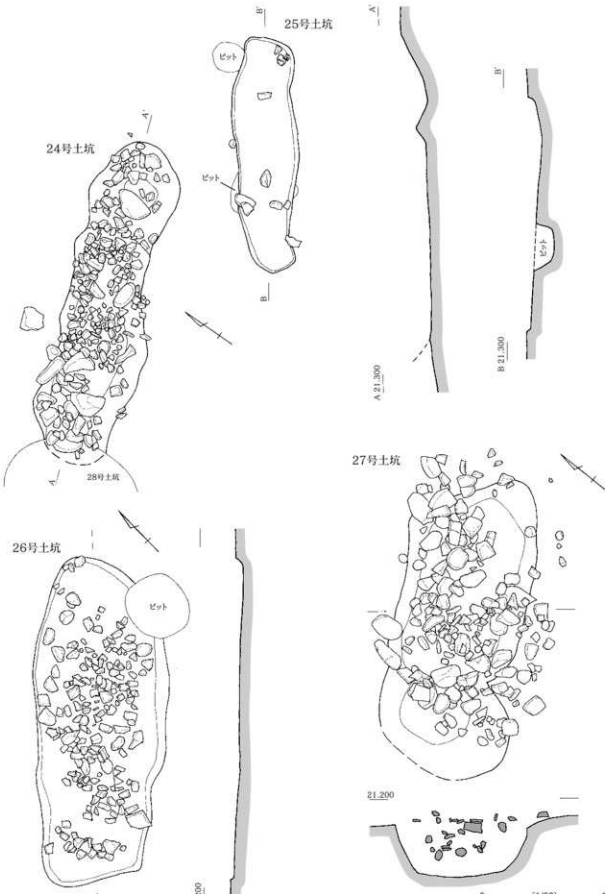
平場D南端で検出された，1号溝状遺構には切られている。平面L字形を呈し，掘り込み中位まで橙色の粘土？を充填した後，屈曲部にやや大きめの礫を平置きしてある。橙色の粘土は61号土坑の壁土とやや似ており，防水・あるいは地盤強化などの可能性があるが，周囲に関連する遺構が見られず，性格の特定には至らなかった。

【32号土坑】（第58・67図）

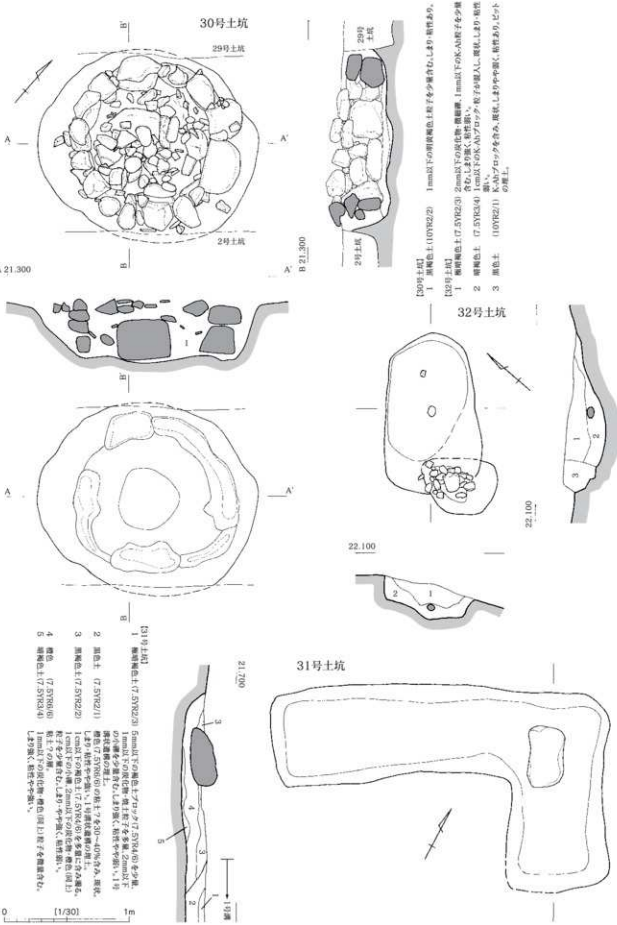
平場D北東隅に位置する。一角をピットに切られている。少量の礫以外に出土遺物がなく，埋土も自然堆没の様相を呈する，よって性格が不明である上に，他の時代に属する可能性も否定できない。

【33号土坑】（第56・64図）

建物の範囲内で13号土坑と隣接する。ちょうど柱と柱の間に掘られているが，単一土層であり長く開口していた様子は認められない。

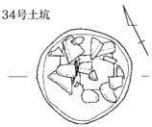


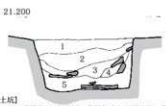
第66図　近世～近代土坑実測図（4）



第67図　近世～近代土坑実測図（5）

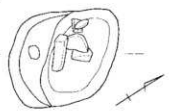
34号土坑

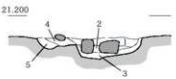




【34号土坑】
1 にぶい黄褐色(2.5YR/4)・黄褐色土(10YR5/6)・黒褐色土(10YR2/3)が混じり合い、斑状。しまりやや弱く、粘性なし。
2 1層とほぼ同質だが、黒褐色土の割合が著しく増加(全体の約60%)。
3 暗褐色土(10YR3/4) 5mm以下の黄褐色土・炭化物粒子を多量に含む。しまりやや弱く、粘性あり。
4 褐色土 (10YR4/4) ブロック、しまり・粘性あり。
5 暗褐色土(10YR3/3) 2mm以下の黄褐色土・炭化物粒子を含む、しまり弱く、粘性あり。

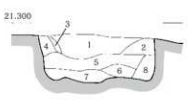
35号土坑



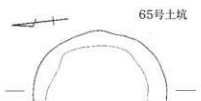


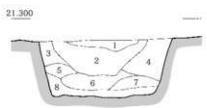
【35号土坑】
1 褐色土 (10YR4/4) 1cm以下の焼土ブロック、3mm以下の炭化物粒子を微量含む、しまり強く、粘性やや強い。
2 暗褐色土(10YR3/4) 1mm以下の炭化物粒子、2cm以下の褐色土ブロックを微量含む、しまり強く、粘性やや強い。
3 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物・焼土ブロック含む。
4 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物・焼土ブロック含む、しまり強く、粘性やや強い。
5 暗褐色土(10YR3/4) 2層とほぼ同質だが、焼土粒子を微量含む。

64号土坑

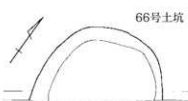


65号土坑





66号土坑

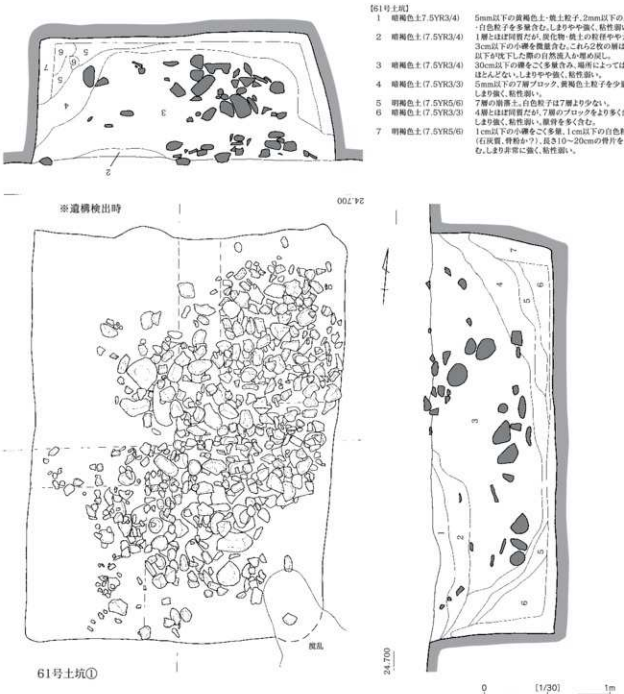


※見通し

【64号土坑】
1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 礫を数個含む、しまり強く、粘性なし。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1層とほぼ同質だが、1mm以下の白色・黒色・褐色粒子を含み、やや粘性がある。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) やわらかく、フカフカしている。
4 褐色土 (10YR4/4) 2層とほぼ同質だが、土色やや暗い。
5 暗褐色土(10YR3/3) 細かい地山のブロックを多量に含む、しまり強く、粘性なし。
6 褐色土 (10YR4/4) 黒色・褐色粒子を含む、しまり弱く、粘性なし。
7 暗褐色土(10YR3/4) 5層とほぼ同質だが、土色やや暗い。
8 暗褐色土(10YR3/3) 1mm以下の黒色・褐色粒子を少量含む、しまり・粘性やや強い。

【66号土坑】
1 暗褐色土(10YR3/3) 近世陶磁器・瓦を含む、しまり・粘性なし。

第68図 近世～近代土坑実測図（6）



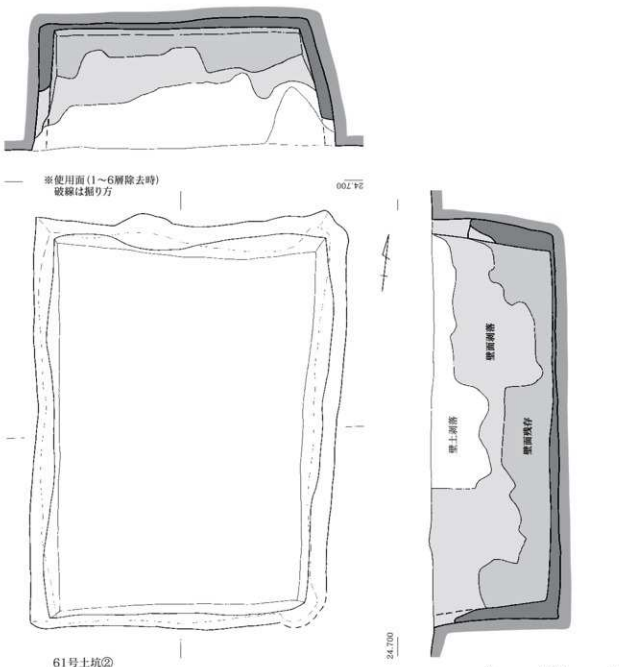
第69図　近世～近代土坑実測図（7）

【34号土坑】（第56・68図）

建物の範囲内で22・35号土坑ときれいに並んで検出された。1・2層と3・5層がそれぞれ類似しており、瓦などは3・5層に見られることから廃棄行為の後に埋め戻された可能性がある。埋土に炭化物を含むが、この中で火を焚いたか否かは判別しがたい。

【35号土坑】（第56・68図）

22・34号土坑と並んで検出されたが、これのみ不整形である。埋土中に焼土ブロックや炭化物が含まれており、この中で火を焚いた可能性があるが、そうした場合、建物との先後関係が問題となる。



第70図　近世～近代土坑実測図（8）

【40・63号土坑】（第56図）

平場C西端に位置する。いずれも規模・形状が23号土坑と類似しており、瓦礫が充填される点も同じである。やはり短期間の内に掘削・埋め戻された廃棄坑と考えられる。

【61号土坑】（第57・69・70図）

平場Eの西端に位置する。本遺跡で最も特異な構造の土坑である。平面規模3.1×2.4ｍ、確認面からの深さ0.9ｍの立方体を呈し、壁面には明褐色土が貼ってある。明褐色土には小礫や骨片？が配合されており、内面は平滑に塗られて土蔵の壁のようであった。柱穴など上屋を想定させるような施設は検出されなかったが、半地下式の貯蔵庫のような印象を持っている。

No.	地区	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物等	帰属年代の指標	備考	掲載頁
1	A区平C	長方形	4.8	1.0	0.4	陶磁器・炭化材		近世～現代の炭焼き	154
2	A区平C	長方形	4.5	0.8	0.4	陶磁器・炭化材		〃	154
3	A区平C	円形	0.8	0.8	0.2	瓦		近世の廃棄坑	104
4	A区平C	不整形	0.8	0.6	0.1	陶磁器・礫		近世建物関連（火床？）	104
5～7	A区平D							現代の攪乱	
8	A区平D	楕円形	1.6	1.0	0.4	炭化材		近世の炭焼きか	104
9	A区平D	楕円形	1.4	0.9	0.1	陶磁器・馬骨	端反碗	近世～近代の廃棄坑か	104
10	A区平D	楕円形	(0.9)	0.7	0.1	陶磁器・馬骨		〃	104
11	A区平C	半円形	1.3	1.2	0.9	陶磁器・瓦・礫・炭	広東碗	石組あり。近世の廃棄坑か	105
12	A区平C	不整形	1.5	1.4	0.2	陶磁器・礫	堺・明石系擂鉢	近世の廃棄坑	104
13	A区平C	楕円形	0.9	0.7	0.3	礫・炭	建物との切り合い	近世の廃棄坑か	105
14	A区平C	円形	1.0	0.9	0.4	陶磁器・瓦・礫	瀬呑碗	桶を用いた近世の廃棄坑	105
15	A区平D	楕円形	0.9	0.6		礫			99
16	A区平D	不整形	1.4	0.7		礫			99
17	A区平D	不整形	1.0	0.7		陶磁器・礫			99
18･19	A区平D							現代の攪乱	
20	A区平C	楕円形	1.0	0.8	0.1	礫			106
21	A区平C	円形	1.2	1.1	0.2				106
22	A区平C	円形	1.1	1.0	0.5	陶磁器・礫	堺・明石系擂鉢	近世建物関連か	106
23	A区平C	楕円形	1.2	0.8	0.3	陶磁器・瓦・礫	広東碗	近世の廃棄坑	106
24	A区平C	不整形	(2.6)	0.7	0.2	陶磁器・礫	コバルト型紙刷り碗	〃	107
25	A区平C	不整形	1.9	0.5	0.1	陶磁器・礫	広東碗	近世建物関連か	107
26	A区平C	不整形	2.5	1.1	0.1	陶磁器・瓦・礫	広東碗	〃	107
27	A区平C	不整形	2.4	1.0	0.5	陶磁器・瓦・礫	端反碗	〃	107
28	A区平C	円形							97
29	A区平C	長方形	3.4	1.3	0.3	陶磁器	一銭銅貨（明治10年）	近世～現代の炭焼きか	154
30	A区平C	楕円形	1.8	1.4	0.5	陶磁器・瓦・礫	瀬呑碗	石組あり。近世の廃棄坑か	108
31	A区平D	L字形	2.6	1.6	0.2	礫			108
32	A区平E	不整形	1.3	0.8	0.3	礫			108
33	A区平C	不整形	1.1	0.9	0.2	礫			105
34	A区平C	円形	0.7	0.7	0.4	陶磁器・瓦・礫・銅	丸碗３	近世の廃棄坑か	109
35	A区平C	不整形	1.0	0.8	0.2	礫		〃	109
36～39								欠番	
40	A区平C	楕円形	1.2	0.9		陶磁器・瓦・礫	端反碗	近世の廃棄坑	97
41～60	A区平E					陶磁器・馬骨		近代～現代の攪乱	98
61	A区平E	長方形	3.1	2.4	0.9	陶磁器・礫・銭貨	一銭銅貨（明治10年）	近世～近代の貯蔵庫か	110･111
62	A区平E					ガラス瓶・馬骨		近代～現代の攪乱	98
63	A区平C	楕円形	1.1	0.9		瓦・礫		近世の廃棄坑	97
64	A区平D	円形	1.0	0.9	0.4			〃	109
65	A区平D	円形	1.1	1.0	0.4	陶磁器・炭化種子	端反碗	〃	109
66	A区平C	楕円形か？	1.0	(0.6)		陶磁器	コバルト型紙刷り碗	近世の廃棄坑か	109

第24表　土坑一覧表

※長径・短径・深さの単位はm

床面直上から多量の獣骨（ウマ・イヌ・イノシシなどか）が無秩序に集積された状態で出土し、特にイノシシのものと見られる下顎の牙が10本以上出土している。これらの牙はことごとく付け根から鋭利な刃物で切断されており、いかなる事情によるものかは検討を要する。

獣骨の他にも床面からは、陶磁器類とともに明治10（1877）年鋳造の竜一銭銅貨が出土しており、埋没開始の上限年代が押さえられる。

次に埋没の過程であるが、６層は壁土（７層）のブロックを含む自然流入土であり、オーブンな状態のまま放置されていたらしい。その後のある時点で壁土上半が内側へと崩落し、さらにしばらくは放置された。最終的には多量の礫を投げ込んで埋め、その上から土を簡単に被せていたと推測される。

【64・65号土坑】（第58・68図）

平場Ｄの南東に近接して掘られている。規模・形状は酷似し、時期・用途を同じくする可能性は高い。

64号土坑は下場の周縁がひときわ掘り窪めてあり、その点は石組を有する30号土坑と通じるが、ここからは石組の痕跡は見いだせなかった。

埋土のうち５・７層などは、意図的な埋め土ないし被せ土と考えられ、後述する65号土坑のように有機物が廃棄されていた可能性がある。

65号土坑は埋土を８層に分けたが、それぞれの性格は第27表に示したとおりと推測している。有機物の廃棄・焼却・被せ土などを行っており、さらに掘り返しての再利用も想定される。

廃棄に関わると考えられた埋土（７・８層）についてフローテーションによる炭化物等の回収を試みた。その内容は次頁で詳しく触れる。

【66号土坑】（第56・68図）

平場Ｃの北西隅、１・２号土坑の西隣に近接する。

埋土が確認しづらく、土層確認トレンチの断面で確認し、残っていた半分について掘り上げた。コバルトを用いた型紙刷りの碗が出土している。

【65号土坑出土の炭化種実】

65号土坑については種実ほか自然遺物等の回収を企画し、フローテーションを実施した。フローテーション対象は土坑埋土のうち6層から16,450g・7層から11,750g・8層から17,520gとし、合計45,720gの埋土を水洗した。

種実は、全体でイネ1点・オオムギ7点（うち2点は裸性オオムギ）・コムギ5点・小粒の種実（現在同定中）がある。種実はすべて炭化しており、中には被熱により海綿状になったものもみられた。第26表のうち、（ ）括りにした数値は欠損例の計測値である。

出土位置	水洗土量	内訳（単位：点／破片も1とカウントしている）			
		イネ	オオムギ	コムギ	備考
SC65-6層	16,450g	1	3	2	裸性オオムギ1含む
SC65-7層	11,750g		1		
SC65-8層	17,520g		3	3	裸性オオムギ1含む

第25表　65号土坑出土の主要種実

種実名	出土層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）
オオムギ	SC65-6層	4.50	2.39	1.92
オオムギ	SC65-6層	(3.00)	(1.80)	(1.00)
オオムギ	SC65-7層	3.44	1.98	1.63
オオムギ	SC65-8層	(3.00)	1.70	1.46
オオムギ	SC65-8層	(3.10)	(2.00)	(1.00)
オオムギ（裸性）	SC65-6層	4.21	3.35	2.78
オオムギ（裸性）	SC65-8層	4.24	2.82	2.16
コムギ	SC65-6層	(3.80)	(2.00)	(1.80)
コムギ	SC65-6層	4.06	2.89	2.63
コムギ	SC65-8層	(2.80)	3.31	2.31
コムギ	SC65-8層	4.40	2.98	(2.40)
コムギ	SC65-8層	(2.80)	2.15	(1.80)
イネ	SC65-6層	4.27	2.24	2.10

第26表　65号土坑出土の主要種実計測値

写真1　6層出土イネ

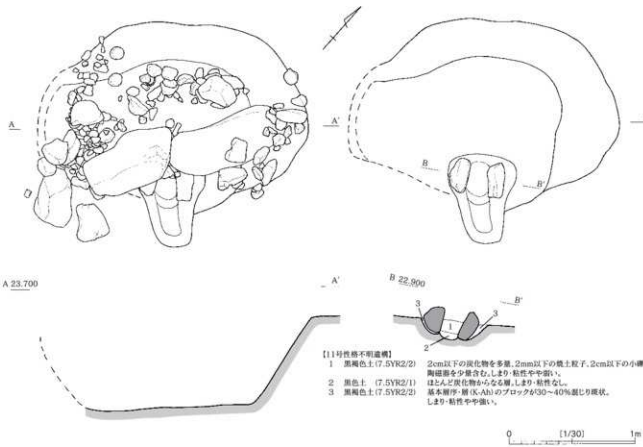
写真2　7層出土オオムギ

写真3　6層出土裸性オオムギ

写真4　6層出土コムギ

層	土色		粘性	しまり	粒子	内容物	炭	備考
1	暗褐色土	10YR3/4	無	強	細	にぶい黄褐色（10YR4/3）の10cm大	有	堀り返し①
2	暗褐色土	10YR3/3	無（1より有）	強（1より弱）	細	二次K-Ahの1cm大、褐色（7.5YR4/6）の2cm大	有	堀り返し②
3	暗褐色土	10YR3/4より やや明るい	やや有	強	細	褐色（7.5YR4/6）ブロックの5cm以下、暗褐色の2cm大	少	不明　埋め土？
4	暗褐色土	10YR3/3	やや有	弱	細	2に似るが、1mm程度の暗褐色・褐色粒子		不明　埋め土？
5	暗褐色土	10YR3/4	3より有	強		褐色（7.5YR4/6）ブロックの2cm大		不明　埋め土？
6	にぶい 黄褐色土	10YR3/3	やや有		細	褐色（7.5YR4/6）ブロック、中央でブロックと埋土が混合	やや多	焼却後の被せ土？
7	にぶい 黄褐色土	10YR3/3	6より有	6と同じ	細	無	多	焼却に伴う
8	暗褐色土	7.5YR3/4	最も強い		細	無。ただし地山の土が混ざっている印象	無	開口期間中の流入土、廃棄物に由来

第27表　65号土坑の埋土



第71図　11号性格不明遺構実測図

E．性格不明遺構（注記記号：ＳＸ）

【1号性格不明遺構】（第53図）

谷の入口付近，平場Ａ・Ｂ間の斜面にある横穴状の掘り込みである。天井部が崩れ落ちており，奥行きは不明であった。当初は防空壕と予測していたが，危険のない範囲で底面の精査を行ったところ，104点で約2.6kgもの陶磁器が出土した。これらの陶磁器にはコバルト染付以降の製品は一切入っておらず，近世~近代初頭の掘削である可能性も高い。

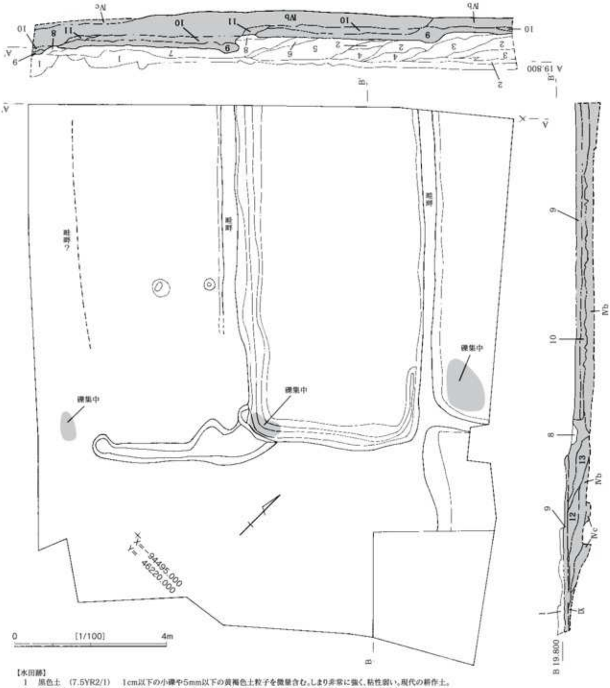
このように考えた場合に，高鍋史友会の『史友会報』に掲載された聞き取りとして，西南戦争時に北平原（高鍋西小学校の付近）の住民が「宿の坂のあたりに壕を掘って，そこに隠れていたこともあった」との記事があり（三隅1982），そうした待避壕の一つであったとも言えそうである。

【11号性格不明遺構】（第42・71図）

古墳時代の節で触れた８号性格不明遺構の精査中に認識した。掘り込みと礫集中の範囲がほぼ一致すること，精査中に陶磁器片が出土したことから，この遺構が８号性格不明遺構を切っていると判断した。

平面形は約2.2×1.8ｍの楕円形で，確認面からの深さは0.8ｍを測る。近世の段切りによる法面に接し，南側は斜面下に向かって大きく開いている。

底面の南辺やや東よりに30×10~15cmの礫を並列して安置していた。礫の間隔は約20cmで，礫はいずれも内側に煤が付き黒変する。礫の周囲は炭化物混じりのブランが検出されたため，穴を掘って礫を埋め込んだものと推測される。この部分で火を用いたようであるが，用途は明らかではない。



【水田跡】
1　黒色土　(7.5YR2/1)　1cm以下の小礫や5mm以下の黄褐色土粒子を微量含む。しまり非常に強く、粘性弱い。現代の耕作土。
2　黄褐色土(10YR5/8)　宮崎層群に由来するブロックからなる層。20cm以下の礫を少量含む。しまり弱く、粘性なし。
3　黒色土　(10YR2/1)　8層に入るブロック(20cm以下)・20cm以下の礫を多量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
4　黒色土　(10YR2/1)　ブロックをほとんど含まず、20cm以下の礫を少量含む。しまり強く、粘性弱い。
5　黒褐色土(10YR3/2)と黒色土(10YR2/1)のブロック(20cm以下)が半々程度混じり合い斑状。しまりやや強く、粘性弱い。急速な埋め戻しによるものか。
6　黒褐色土(10YR2/2)　5mm以下の黄褐色土粒子をごく微量含む。しまり非常に強く、粘性弱い。
7　黒褐色土(10YR2/2)　2cm以下の黒色土(10YR2/1)ブロックを少量含み、斑状。しまり強く、粘性弱い。
8　黒色土　(10YR2/1)　9層・10層の土が30〜40%混入。しまり・粘性やや弱い。
9　黒褐色土(10YR3/2)　1cm以下の焼土?・炭化物粒子を少量含む。水田の土か。しまり・粘性やや強い。
10　黒褐色土(10YR3/2)　1cm以下の灰白色粘土ブロックをごく多量に含む。水田の床土か。しまり・粘性やや強い。
11　Ⅳb層(低湿地層)と9・10層の混ざった土。しまり弱く、粘性やや強い。
12　黒色土　(10YR2/1)　10cm以下の焼土ブロック、1cm以下の焼土・炭化物粒子をごく多量に含み、斑状。30cm以下の礫と陶磁器・瓦類も多量に含む。しまり・粘性弱い。
13　黒褐色土(10YR2/2)　焼土はほとんど含まないが、10cm以下の礫や陶磁器・瓦類をごく多量に含む。それらが土よりも多い印象。しまり・粘性弱い。

第72図　近世〜近代水田跡実測図

F．溝状遺構（注記記号：SD）

【1号溝状遺構】（第58図）

平場D南半をほぼ東西方向に走っている。確認できた長さは約5mであるが，幅は西端が0.5m程度であるのに対し，東端では約3.5mと極端に末広がりの形状を取る。両端とも削平により失われている。

切り合いから31号土坑より新しいことが分かる（第8・67図）。

G．水田跡（第53・72図）

C区先行トレンチで黒褐色粘質土の広がりが確認された，このため拡張して精査を進めたところ，畦畔で区画された3枚の水田跡を検出した，

畦畔間の心々距離は約5.2mで，長辺は確認された範囲だけでも9.0m以上を測る。上下段のレベル差は約30cmあり，棚田のような状態であった。ただし最上段の水出は確認面からの深さがほとんど無く，西側・南側の立ち上がりは不明瞭である。一方，調査区南辺に沿って設定した先行トレンチでは，東半が後述する近世の埋め土，西半では地山が露出したため，水田は南側の斜面寄りには作られていないと判断した。

調査の関係上（水利の問題など），これ以上の拡張は難しく，調査区南東隅の部分や西端部が水田となるかについては確定できなかった。

畦畔の内側を巡るように浅いU字形の溝を検出し，その一角（南西隅）に礫の集中域が見られたが，礫の部分が水口で，溝は水の廻りを調節する機能を有していたと推測される。土層断面Aラインに見えるように，畦畔の下半は抉れてオーバーハングしており，畦畔をなぞるように水が流れていったことの傍証となる。

水田面の実測が終了した後に，黒褐色粘質土を断ち割ったところ，白色粘土ブロックを含む床土層があり，さらに下げると調査区南半には礫・瓦・陶磁器片をごく多量に含む黒色土が堆積していることが明らかとなった。この土から取り上げた陶磁器は屋敷地周辺出土のものと接合すること，また多量で土をあまり介在しないことなどから，屋敷の終焉にあたり廃材を利用して低湿地を一気に埋め立てたと考えられる。

また水田面の直上から黒色土と黄褐色土ブロックを含む土が互層をなして堆積していたが，このブロックは宮崎層群に由来するものであり，大規模な掘削と埋め立てが同時進行した可能性が高い。

この「大規模な掘削」は野首第1遺跡（県道）の報告書でも想定されていた高鍋鉄道敷設事業に関連するものと考えられる。

これを整理すると以下のような経過が復元される。

中世以来の湿地層 → （屋敷の廃絶） → 瓦礫を多量に含む黒色土で低湿地を埋め立て → 黒褐色粘質土で水田を形成 →（水田の使用）→ 鉄道事業に伴う排土で水田を埋め立て → 現代の畑

3．遺物

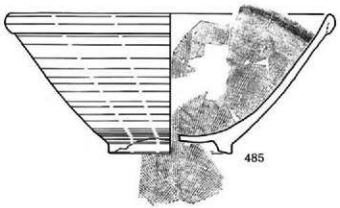
遺構の項で述べたように，本遺跡においては近世期の廃棄坑とみられる土坑を多数検出している。廃棄坑はその性格上，掘削から埋没までのスパンが比較的短いものと想定されるため，ここから出土した遺物を分析することで良好な，すなわち同時代性の高いセット関係を抽出できると期待される。

もちろん廃棄行為にも多様なあり方が存在し，必ずしも上述したような結果が得られるとは限らないが，報告書という性格上，まずは生のデータを提示することが重要であり，良好でない資料もそのままの形で出すべきと考える。

よって掲載にあたり，あまり偏りなく選択するよう心がけたつもりではある。それでも器形を復元可能な資料，あるいは小片だが注目される資料に寄っている可能性は否定できない。そこで土器・陶磁器類は全破片について分類・計量を行い，その集計データを掲載することで補完を図ることとする。

計量方法にも様々なものがあるが，本県では残存良好な資料にあまり恵まれない関係上，破片数と総重量の併用を採った，また分類についてはかつて都城市八幡遺跡で試みたものがあり，遺跡間の比較を容易なものとするため，これを踏襲することとした。

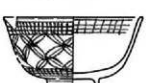
集計結果は第40・41表に掲載した。また分類の中で説明が必要と判断したものを中心に第28表へまと

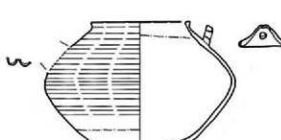


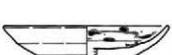
10号土坑

11号土坑

12号土坑







14号土坑

※縮尺は
1/3：下記以外
1/4：485・489・502～505

第73図　近世～近代陶磁器実測図（1）

めている。

その他の分類等については、八幡遺跡の報告書（宮崎県埋蔵文化財センター2001）も参照されたい。

A．陶磁器類

第40・41表を見ると、磁器碗の中では端反碗がピークとなっており、コバルト染付になると極端に減少している。また銅版転写以降のものはほとんど見えないと言ってよい。これは明治年間に建物が移築されて屋敷が廃絶したという聞き取りの内容と一致する傾向で、さらに陶磁器の内容からは明治20年代以前としてよさそうである。

陶器では瀬戸・美濃、関西、肥前、薩摩などの産地からそれぞれ特産品的な器種が流通してきているようだが、特に堺・明石系の擂鉢と、薩摩苗代川系の土瓶は圧倒的なシェアを確保していたようである。

【10号土坑】（第73図485）

擂鉢であるが、産地は明らかにし得ない。釉調などからは近代に下る可能性もあるが、この土坑からは明確に近代に下る遺物は出土していない。

【11号土坑】（第73図486～488）

広東碗・小丸碗などである。487は色絵碗。この他に土製品の笛（第85図735）などが出土している。

【12号土坑】（第73図489）

薩摩苗代川系の土瓶蓋である。

【14号土坑】（第73図490～505）

磁器碗では湯呑碗（494～498）が最も多く、広東碗（490）、端反碗（491・492）などが続く、コバルト染付は1点も確認できない。磁器皿は内面を蛇ノ目釉剥ぎにするもの（小皿7）が多い。

陶器では白神分類Ⅲ類の堺・明石系擂鉢（503）が見えるほか、薩摩苗代川系と推定される土瓶片が出土している。504・505はセットをなすと考えられる。関西系土瓶の可能性があるか。

【22号土坑】（第74図506～510）

磁器には広東碗以降の器種を全く含んでおらず、18世紀後半代の様相を呈している。また堺・明石系擂鉢は白神分類のⅡ類であり、これも年代的に符合している。509は算盤玉状の体部で溜め口を持つ土瓶である。胎土や釉調からは薩摩苗代川系の可能性がある。26号土坑との接合資料である。

【23号土坑】（第74図511・512・523）

511は蛇ノ目釉剥ぎを施す丸碗5、512は油壺である。23号土坑はこの他に広東碗を含むが、端反碗以降は見られない。523は27号土坑との接合資料。

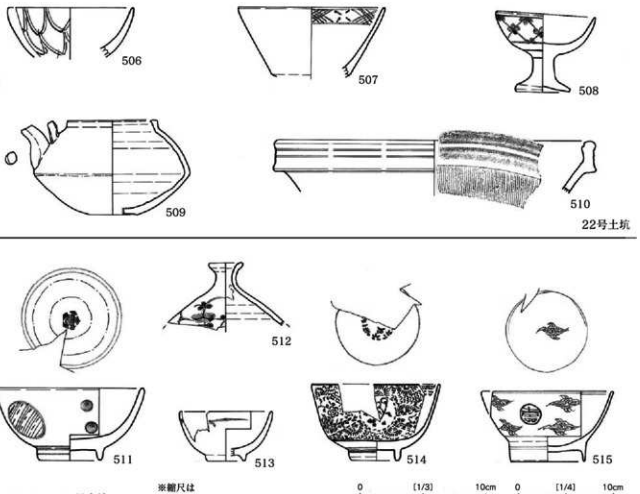
【24・25号土坑】（第74図513～515）

513は筒文を描く紅猪口、514はコバルト型紙刷りの碗である。24号土坑出土。

515は薄手だが、焼きが甘く呉須の発色が不良な広東碗。25号土坑はこれのみ（10点で91ｇ）出土。

分類名	特　徴	通　称
丸碗3	18世紀代を中心とする厚手粗製の碗	くらわんか手
丸碗4	外面に青磁釉をかける	青磁染付
丸碗5	粗製碗のうち、特に厚手で内面見込に蛇ノ目釉剥ぎを施すもの	くらわんか手
大皿	口径30cm前後のもの	尺皿
中皿	口径20cm強のもの	七寸皿
小皿	口径15cm前後のもの。以下のように細分する	五寸皿
2	口縁部を波打たせるもの	輪花皿
3	口縁部を波打たせ、高い蛇ノ目凹型高台を有する	輪花皿・蛇ノ目凹型高台（高）
4	平縁ないし玉縁口縁	
5	平縁ないし玉縁口縁で、低い蛇ノ目凹型高台を有する	蛇ノ目凹型高台（低）
6	平縁ないし玉縁口縁で、高い蛇ノ目凹型高台を有する	蛇ノ目凹型高台（高）
7	内面見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す	輪禿皿（本来は瀬戸・美濃系陶器の分類名）
手塩皿	口径10cm以下の小皿	
鉢1	型打ち成形による角鉢	八角鉢など
鉢2	その他の鉢。玉縁口縁・輪花・端反の鉢などを含む	
鉢3	蓋付鉢。段重なども含む	
瓶1	胴部の張りが強く、ラッキョウ形（玉壺春形）を呈するもの	
瓶2	胴部の張りが比較的弱く、頸部の細長いもの（鶴首形）。燗徳利もこれに含む	御神酒徳利など
瓶3	瓶子形のもの	御神酒徳利
瓶4	耳付で口縁部が大きく開くもの	仏花瓶
紅猪口	口径7～8cm程度のかなり小さな碗形で、染付は筒文など簡略な文様を描く	
近・現代	本遺跡の性格に基づき、銅版転写出現以降のものとする	

第28表　近世陶磁器分類表



第74図　近世～近代陶磁器実測図（2）

【26号土坑】（第75図516）

516は二重網目文を描く丸碗3である。この他に広東碗などが出土しているほか、509が22号土坑との接合資料である。

【27号土坑】（第75図517～534）

同種の遺構中では、比較的多量の陶磁器が出土した。筒形碗（517・518）、丸碗3（519）など古手のものも入るが、端反碗（522）まで含んでいる。

先述した23号土坑の他に、土量との接合資料（522）もある。

【30号土坑】（第76図535～558）

土坑としては最も多量の陶磁器が出土した。丸碗がほとんど見られない一方で、湯呑碗を一定量含んでおり（547～551）、19世紀中頃の様相を呈している。土瓶は薩代川系と推定される。

【34号土坑】（第78図581・582）

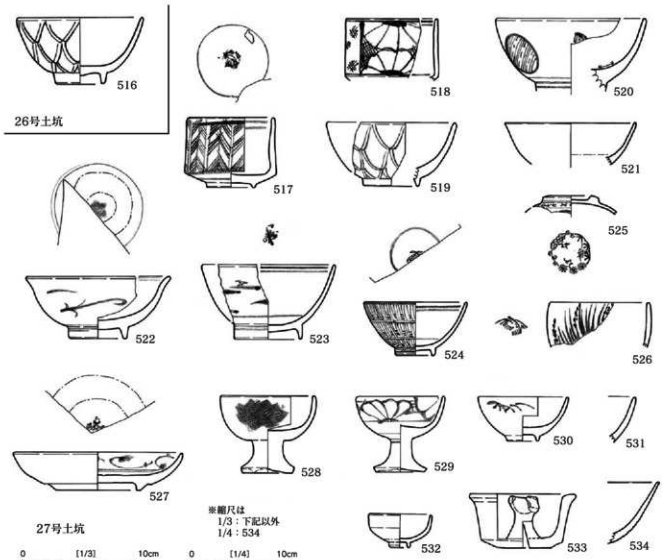
陶磁器の出土量はこれだけであり検討しづらいが、どちらも古手の様相ではある。また銅製の簪（第89図761）も出土している

【61号土坑】（第77図560～580）

丸碗・広東碗も少し入るが、主体は端反碗・湯呑碗で、コバルト型紙刷りの皿も含まれている。

また陶器では堺・明石系の擂鉢や薩摩薩代川系の土瓶・龍門司系の碗、関西系の徳利が見られる。

先述したように明治10（1877）年鋳造の一銭銅貨（第90図806）が底面にはりついていたので、およそ明治10年代の様相を示している可能性がある。ただし埋土の観察からは遺構の埋没速度が遅かったと推測されるため、遺物の帰属する時間幅も必然的に広く考えざるを得ない。



第75図　近世～近代陶磁器実測図（3）

【65号土坑】（第78図583～586）

出土数こそ少ないが、端反碗を主体とする段階、すなわち19世紀前葉頃の様相と捉えられそうである。その他に関西系の可能性がある土瓶の蓋が入っている。先に触れたように、炭化した穀物がここから検出されている。

【66号土坑】（第78図587）

図示したのは広東碗のみだが、端反碗・コバルト型紙刷り碗も入っている。

【近世墓】（第78図588～592）

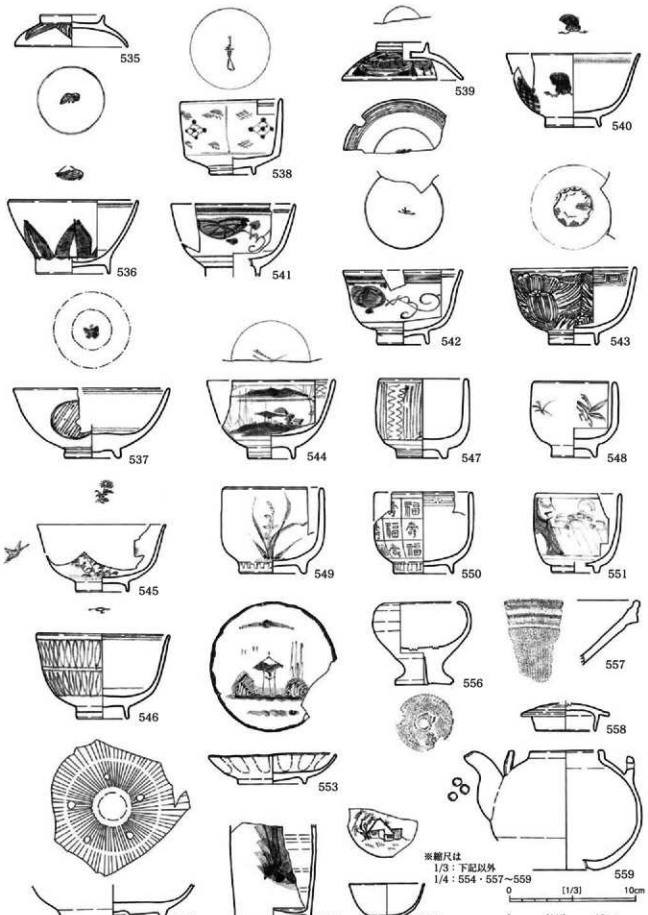
墓標が弘化３・４（1846・47）年銘であり、故葬の可能性もあることから、18世紀後半～19世紀の早い段階にかけての様相を表す可能性があるが、破片の遺存状況からみて、埋葬に伴うとは考えられず、資料としては良好ではない。朝顔形碗・小広東碗などが見える。

【１号溝状遺構】（第78図593～596）

溝という遺構の性格上、中世の陶磁器や銭貨（第90図780）なども入っており、年代幅は絞り込めない。ただ図化した陶磁器のみを見ると、18世紀後半頃の印象が強い。

【屋敷入口】（第78図597～605）

これも遺構の性格上、一括性には乏しい。色絵の段重や薄手の陶器片口が目を引く。



第76図　近世～近代陶磁器実測図（4）

第77図　近世～近代陶磁器実測図（5）

第78図　近世～近代陶磁器実測図（6）

【土壌】（第79図606～第80図649）

一つの遺構としては最も多量の陶磁器が出土している。盛土でパックしてしまうので，ある程度の一括性はあるが，盛土の中に過去の陶磁器が混入していた可能性は十分にある。

磁器碗は筒形碗・朝顔形碗から端反碗まで図化しているが，湯呑碗も少量含んでいる。また609の筒形碗は瀬戸・美濃系染付であり，19世紀代に下るものであろう。全体としては19世紀前半代の様相か。

その他の器種としては，皿・蕎麦猪口・灰吹・紅猪口などが見られる。

陶器では萩系と目される碗や瀬戸・美濃系の各器種が目に付く。灯火具には様々な産地・形態のものが含まれているようである。

堺・明石系擂鉢は642が白神分類Ⅱ類だが，643・644はⅢ類であり，やはり19世紀の色が強い。

また648・649のような土瓶以外の苗代川系製品が含まれていることは注目される。

647はいわゆる三島手の油器であるが，産地の特定には至らなかった。

【1号性格不明遺構】（第81図650～656）

遺構の項で触れたように，コバルト染付を含まず近世期の様相を呈している。

【11号性格不明遺構】（第81図657）

底面のカマド状の施設から出土した1点のみ図化したが，雪輪の崩れた染付碗で19世紀代の所産と考えられる。

なお後述する8号不明遺構出土陶磁器としたものは，実際にはこの11号に伴う可能性が高い。

【その他の遺構】（第81図658～第82図684）

後世の掘り込みに流れ込んだ可能性が高いもの，単独出土で遺構との関係が不明瞭なものを一括して掲載した。

664は小丸碗だが，高台内に紅の付着が確認できる。紅猪口・紅皿は乾燥を防止するのに伏せておくようであるが，同様な目的によるものであろう。

673は茶入と考えられるが，現代の土坑に流れ込んでおり，位置付けは不明とせざるを得ない。

678～681・683は8号性格不明遺構として取り上げたが，その後に認識された11号性格不明遺構に伴う可能性が高い。先述した657とあわせてみると，18世紀後半から19世紀前半頃の様相か。

【水田跡下層】（第82図685～第83図705）

低湿地の埋め土中に含まれていた陶磁器である。これらの下限が，水田構築の上限年代を表すことになる。

685は墨弾き技法を用いた中皿（七寸皿）である。高台内にはハリ支え痕が1箇所残る。

686は図中に二角で示した範囲の断面に焼継ぎの痕跡が認められる。高台内に焼きゴテで文字が書かれている。カタカナあるいは数字のような形状で，注文主を表すものと考えられるが，残念ながら判読・解釈は困難である。

687は蓋付で注口が付く可能性がある。酒器であろうか。688は上絵付を施して鵞を模した水滴と考えられる。

689は広東碗を模した瀬戸・美濃系の陶器碗である。690は萩系のビラ掛けの小碗，691は土器出土の647と雰囲気の似る三島手の碗である。692は関西系の小杯である。

693・694は雰囲気の類似する擂鉢であり，同一産地の可能性がある。擂目は密に施され，内面から体部外面上半に黒褐色の鉄釉を掛けている。

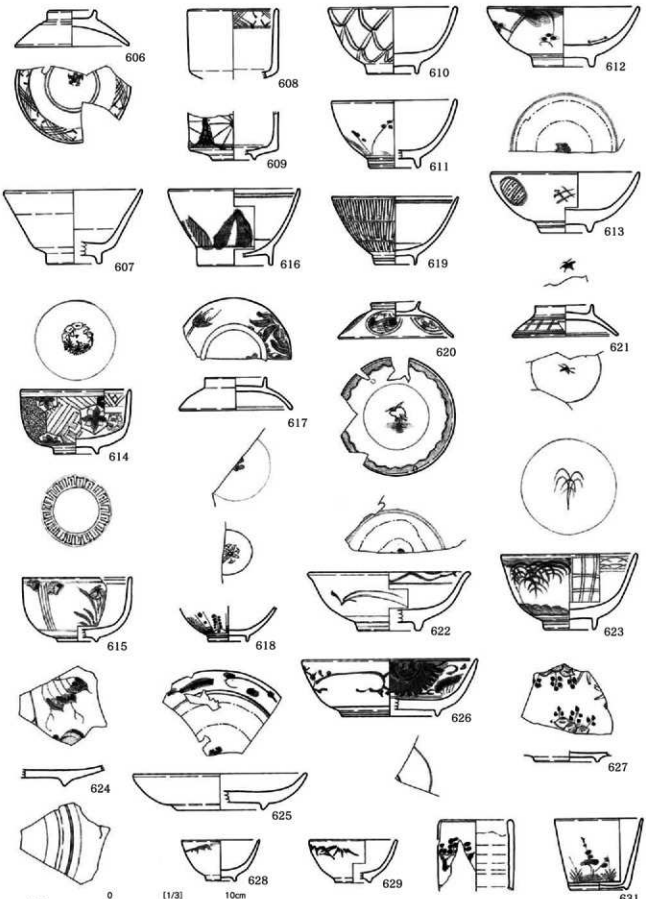
695は瀬戸・美濃系の水甕である。体部外面には灰釉の上から緑釉を流している。

697は徳利で，ヘラにより文字が書かれている。後述する725同様「本左衛門」であろうか。

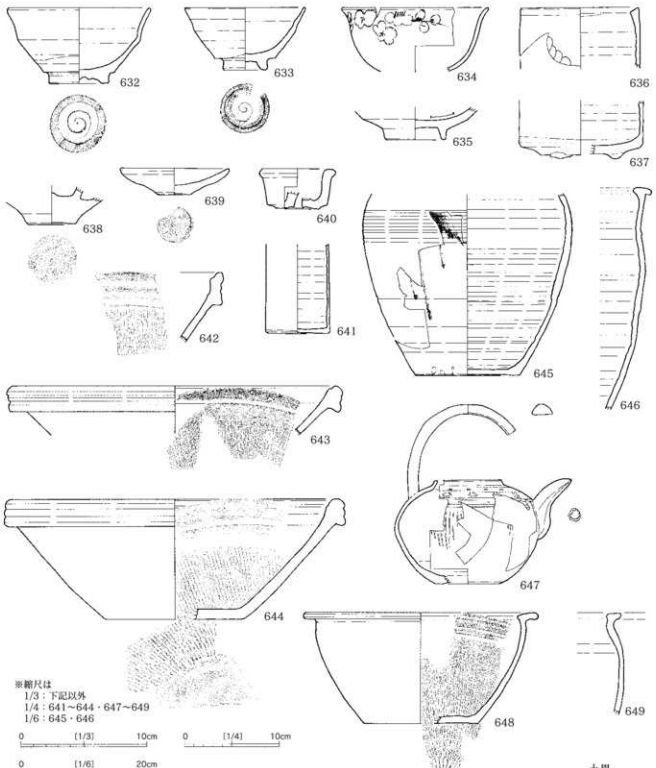
700は擂鉢で，高台内に「二十月吉日」の墨書がなされる。その右側には屋号らしきものが見える。

702・704は土瓶の窯詰め方法を示唆する資料である。704は底部に環状の溶着痕があり，他の土瓶の口縁部が接していた可能性が高い。一方の702は三足の付近に環状の溶着痕を残す。土瓶を逆さに置いて三足に蓋を引っ掛けてみると，この部分に蓋の縁が触れることから，積み上げた土瓶の最上部は合わせ口で土瓶を倒置し，二足に蓋を掛けて焼くような方法が想定される。

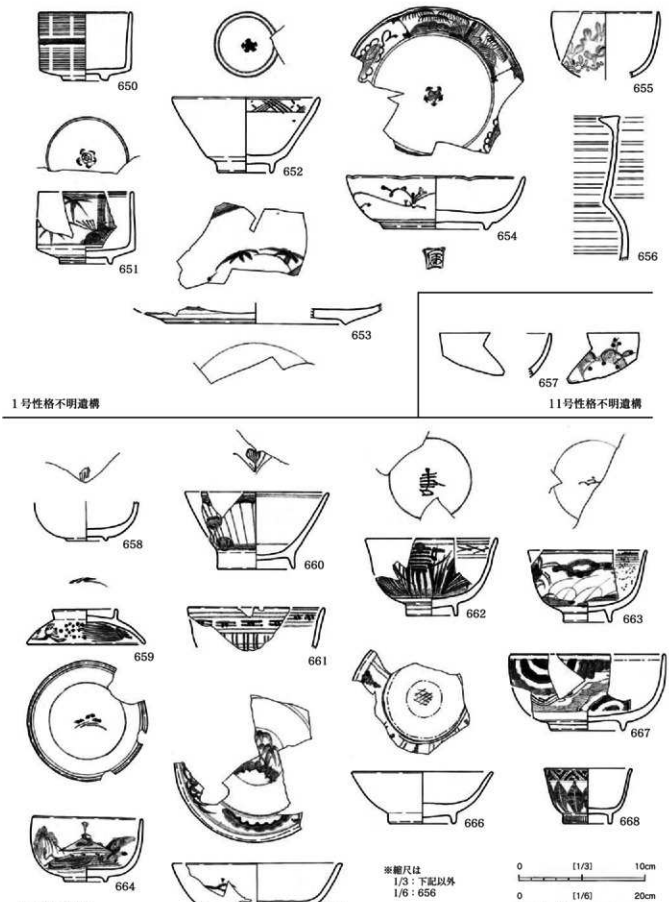
705は大型の甕である。全体的に明るい茶褐色の鉄釉を掛け，肩部には黒褐色釉を流している。こうした施釉法は他の大型甕と類似しているが，口縁部



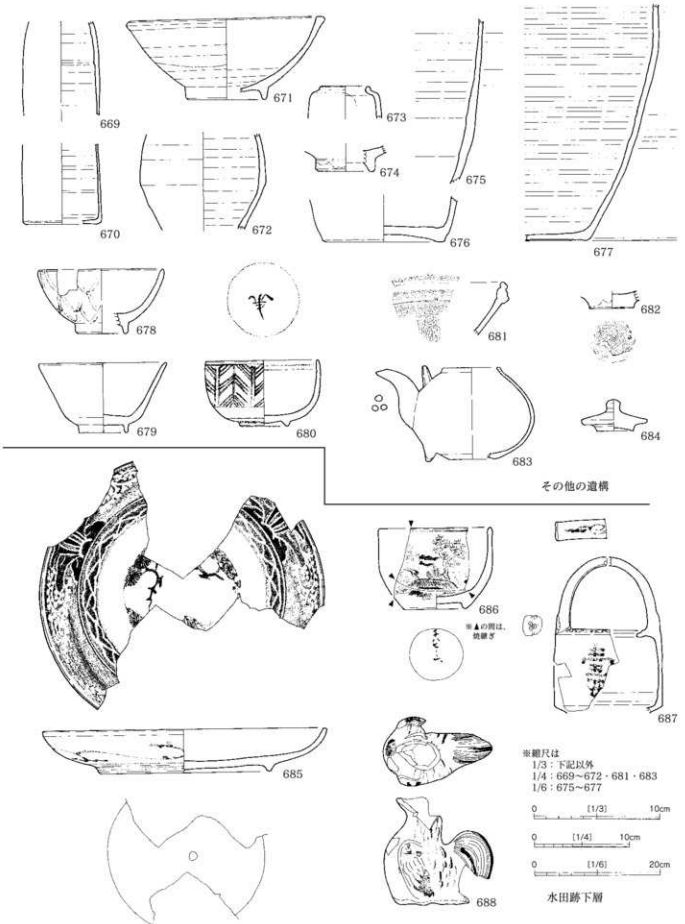
第79図　近世～近代陶磁器実測図（7）



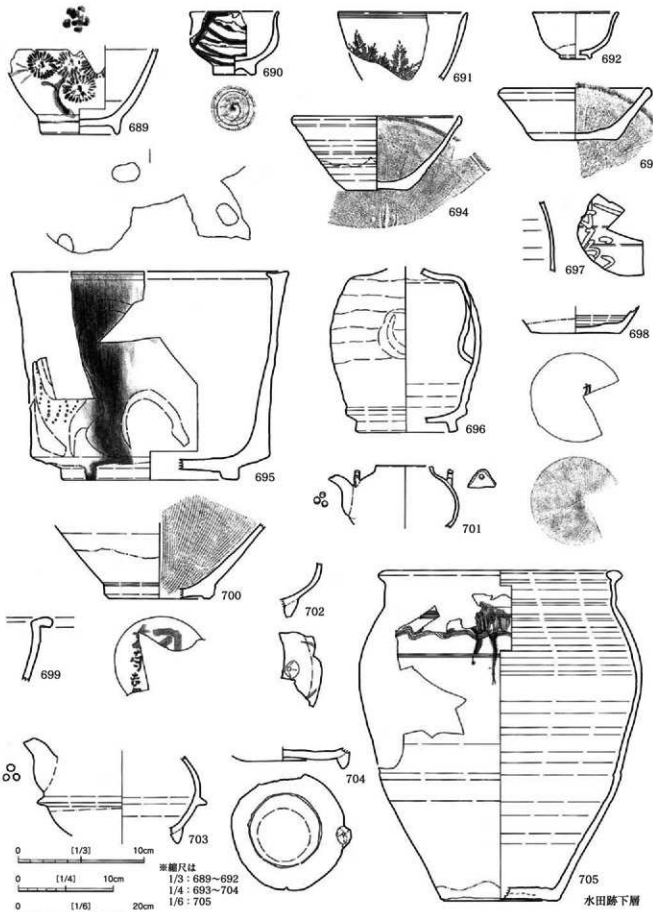
第80図　近世～近代陶磁器実測図（8）



第81図　近世～近代陶磁器実測図（9）



第82図　近世～近代陶磁器実測図（10）



第83図　近世～近代陶磁器実測図（11）

が丸みを帯びて玉縁状となる点、肩部には櫛描による条線や波状文を描く点などは、この甕のみの特徴となっている。

これらを総合してみると、19世紀代と見られる陶磁器も含んでおり、また計量データでも単独で集計すべきであったが、コバルト染付が8点で28.1ｇ入っている。こうした点からも屋敷廃絶時の年代に近いことが裏付けられる。

【遺構外出土】（第84図706～第85図734）

遺構外から出土した陶磁器の大半は、遺構出土のものとほぼ同様であった。ただし紙幅の都合もあるため、この部分のみは特に注目されるものを中心に掲載している。

706は中国徳化窯の白磁碗である。口縁部が無釉で外面には型作りによる細かなシワが残る。県内における清朝磁器の出土事例は延岡市や都城市などにあるが、その数は少なく注目される。

707は初期伊万里と推定される輪花皿である。やや軟質で色調はクリーム色がかっている。口縁部は鉄釉の口紅、見込み付近に呉須の圏線がみえる。

708は青磁の擂鉢である。体部外面から口縁部内面にかけて施釉されている。磁器質の擂鉢はこれが唯一であった。

709・710は小型の碗で、紅の販売容器として用いられたようである。709は「大坂」の染付、710は「笹べに」の赤絵があり、いずれも「大坂新町お笹べに」と書かれていたと推測される。宮崎市高岡町の高岡醸遺跡でも同様の器が出土している。

711は笹文を施す紅猪口である。内面に紅が残存していた。712は紅皿である。こうした紅猪口・紅皿の可能性がある器は、この他にも多数出土している（巻頭図版8）。もちろんこれらの全てが紅に関連するとは限らないが、一定量の紅を消費する＝日常的に化粧をする女性の存在を暗示する。

713は散り蓮華、714は銅澤で覆われた磁器の小杯である。口縁部の一端が外に向かって折れたまま銅澤にからめとられており、溶けた銅を小杯に流し込んだところ高温に耐え切れず、金ハシで挟んだ所から折れてしまったものと推測される。鋳掛など小規模な細工を試みたのであろうか。

715は磁器製の戸車である。この他にも幾つか出土しており、大別すると4種類程度の大きさが確認できた。聞き取りによると建物には雨戸があったようで、あるいはそれに関係するものであろうか。

716は京・信楽系の小杉碗である。口縁部の一端に油煙が付着している。

717～720・727は薩摩錦門司系と推定される製品である。宮崎平野北部でまとまって出土するのは珍しい。717は外面に鼠肌釉をかけた碗である。718は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、719には胡麻目が残る。720は小型の擂鉢である。外底面に墨書が残る。

721は関西系の淡徳利である。大きさから三合徳利か。外面に鉄絵、底面に墨書が認められる。

722・723は関西系と推定される行平鍋である。いずれも外面に飛び鉋が施され、暗褐色の釉がかかる。把手部分には型押しの文様があるが、きわめて不明瞭である。

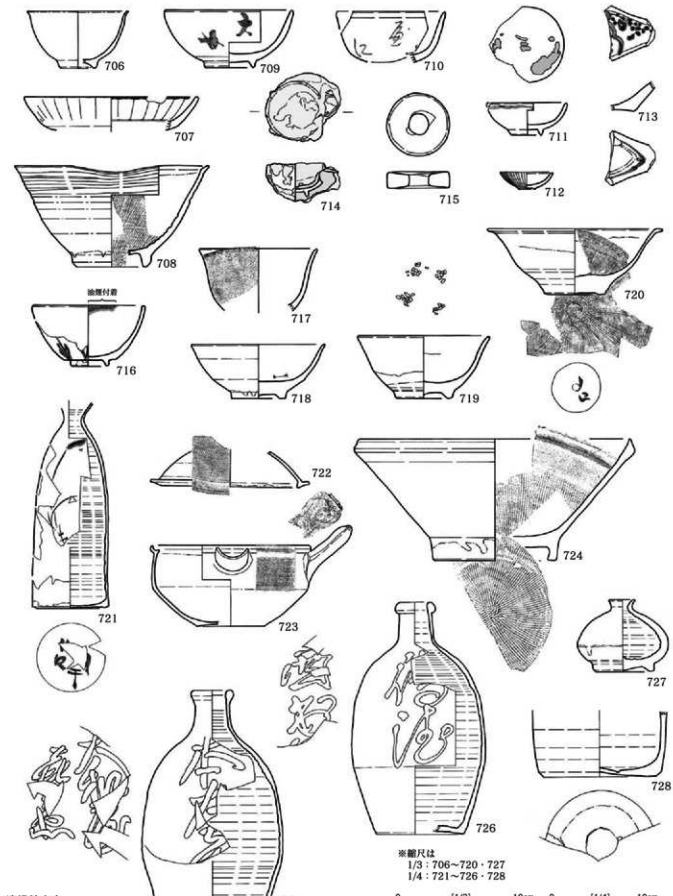
724は高台を有する擂鉢である。内面に重ね焼の溶着痕が認められる。

725・726は五合徳利である。725はヘラ書き、726はイッチン掛けで文字を書いており、通い徳利と考えられる。725は正面に「本左衛門」、裏に「大和屋喜兵衛」、726は正面に「御？酒」、裏に「西村（以下にも文字有り）」と書かれている。このうちの大和屋は中町地区に同名の商家が存在して味噌や醤油を商ったようであるが、関連は明らかにしえない。

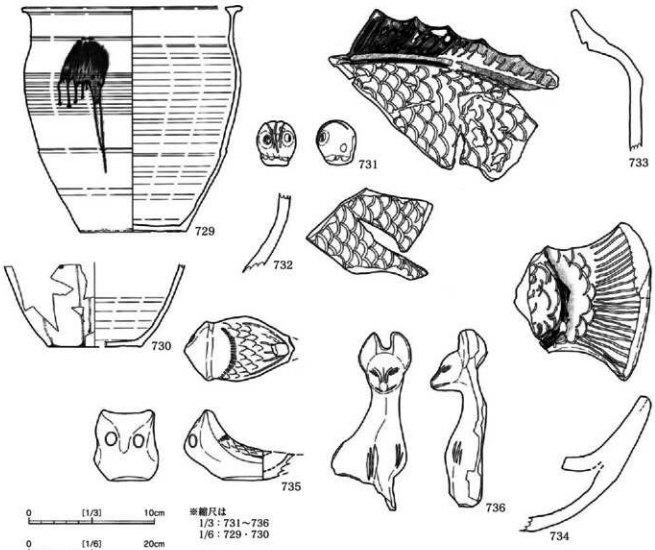
728は鉢の内面をヘラで環状に抉って穿孔しやすくしている。植木鉢への転用を意識した製品である。

729・730は大型の甕である。明るい茶褐色の鉄釉で、肩の部分に黒褐色釉を流している。本遺跡ではこうした甕が多数出ているが、大きさから見て遠隔地からの流通は考えにくく、産地の確定が今後の課題となってくる。

731～734は軟質の三彩陶である。白色の精製された胎土で、緑色を主体として黄色・褐色の釉を部分的に施している。魚を写実的に模した蓋付鉢と考えられ、732は蓋で、731は推定困難だが捻みの可能性があるか。華南三彩陶の影響を受けていることは間違いないが、生産時期・産地については今のところ不明とせざるをえない。



第84図　近世～近代陶磁器実測図（12）



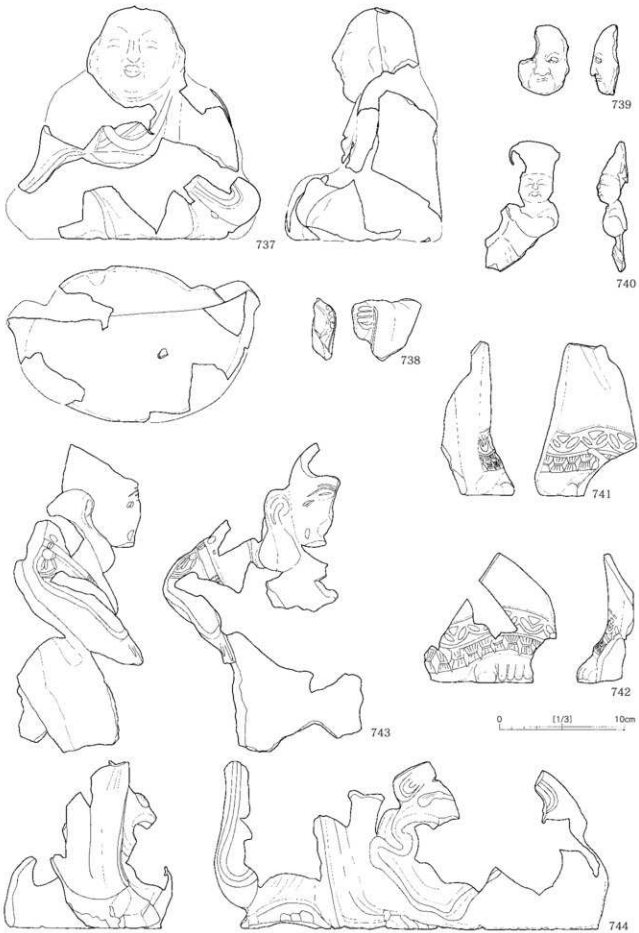
第85図　近世～近代陶器・土製品実測図

B．土製品（第85図735～第86図744）

735は土笛でミミズクを模している。尾の部分を欠損しているがそれ以外は残存良好で、現在でも吹くとミミズクの声のような音が出る。11号土坑から出土した。

736～744は土製人形である。いずれも内側は全面に指頭圧痕が残り、側面に継ぎ目が走っている。これらの特徴は外型を用いて作成した前後のパーツを貼り合せるという工程によることを示しており、佐土原人形に通じるものがある。ただし佐土原人形は京の伏見人形を源流としており、同様の系譜を持つ人形が南九州には他にも存在する（唐佐人形など）ことから、佐土原人形そのものかは検討を要する。

736は狐、737は着物姿で正座した人物であり、西都市三納の庄屋宅に伝わったとされる文化13（1816）年銘の「庄屋さん」とほぼ同形態（青山1994：ただし伏見人形かと推定されている）、738は手の部分しか残存しないが、佐土原人形の「鍍頭食い」に似る。739は歌舞伎役者の可能性があり、740は頭巾を被った人物である。741・742は同一個体であり、化粧まわしを締めた力士人形の脚部である。743・744もやはり同一個体と考えられ、立ち姿の「布袋さん」である。やはり寛政8（1796）年銘の佐土原人形に似る（青山1994）。



第86図　近世～近代土製品実測図

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
485	10号土坑	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(33.8) 底：(12.8) 高：14.7	回転ヘラケズリ	一単位15条の擂目	近代の所産か？	117
486	11号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(10.0)	草花文・圏線	圏線	広東碗	117
487	11号土坑	色絵	碗	口縁～底	口：(7.5) 底：(3.2) 高：5.8	扇文など			117
488	11号土坑	染付	碗	体～底	底：(3.3)	角蓮弁文・圏線	松竹梅・圏線	小丸碗	117
489	12号土坑	陶器	蓋	天井～口縁		鉄釉（暗褐色）・直重ねの塗胴根		土瓶の蓋。薩摩苗代川系	117
490	14号土坑	染付	碗	口縁～体	口：(10.4)	草花文・屋？	圏線	広東碗	117
491	14号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(5.7)	雲文帯・「福寿」・草花文	雲文帯・圏線など	端反碗	117
492	14・54号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(10.8) 底：4.0 高：5.7	格子文・七宝繋文・圏線	格子文・圏線など	端反碗	117
493	14号土坑・8号不明	染付	碗	口縁～底	口：(9.4) 底：3.4 高：5.6	草花文・圏線	昆虫文・圏線	小丸碗。実際には11号性格不明遺構との接合か	117
494	14号土坑	染付	碗	体～底	底：3.2	草花文	岩波文	湯呑碗	117
495	14号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(7.8) 底：(4.8) 高：7.5	草花文		湯呑碗	117
496	14号土坑	染付	碗	口縁～体	口：(7.5)	草花文		湯呑碗	117
497	14号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(6.9) 底：3.3 高：5.4	二重格子文・圏線		湯呑碗	117
498	14号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(7.8) 底：(4.0) 高：6.9	草花文	岩波文	湯呑碗	117
499	14号土坑	染付	皿	体～底	底：(7.4)		二重格子文・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ	小皿7	117
500	14号土坑	染付	皿	口縁～底	口：(12.9) 底：(5.0) 高：3.1	唐草文・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ		小皿7	117
501	14号土坑	白磁？	香炉・火入	口縁	口：(5.2)		体部下半～底部は無釉		117
502	14号土坑	染付	瓶	胴～底	底：(5.2)	草花文？	無釉	瓶1	117
503	14号土坑	陶器	擂鉢	口縁		回転ヘラケズリ	一単位7条以上の擂目	堺・明石系	117
504	14号土坑	陶器	蓋	口縁～底	口：11.3 底：4.7 高：2.2	鉄釉（褐色）		土瓶の蓋。505とセット	117
505	14号土坑	陶器	土瓶	口縁～底	口：14.0 底：8.1 高：14.0	鉄釉（褐色）	茶止め穴（3つ？）	関西系？	117
506	22号土坑	染付	碗	口縁～体	口：(9.8)	二重網目文		丸碗3	119
507	22号土坑	染付	碗	口縁～体	口：(11.5)	青磁釉	四方襷文	青磁染付。朝顔形碗	119
508	22号土坑	染付	仏飯器	口縁～底	口：(7.6) 底：4.2 高：6.3	圏線など			119
509	22・26号土坑	陶器	土瓶	口縁～底	口：9.0 底：(5.0) 高：10.0	鉄釉（暗褐色）・カキメ・注口（溜め口）	茶止め穴（1つ）	薩摩苗代川系	119
510	22号土坑	陶器	擂鉢	口縁	口：(33.0)	回転ヘラケズリ	一単位6条の擂目	堺・明石系	119
511	23号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(11.4) 底：4.9 高：5.7	丸文・圏線	コンニャク印判五弁花，蛇ノ目釉剥ぎ	丸碗5	119
512	23号土坑	染付	油壺	口縁～体	口：24	梅樹文	無釉		119
513	24号土坑	染付	紅猪口	口縁～底	口：7.2) 底：(2.8) 高：5.3	笹文			119
514	24号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(10.0) 底：(3.7) 高：6.0	花文・鹿ノ子文	松竹梅・瓔珞文・圏線	端反碗。コバルト型紙刷り	119
515	25号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(10.3) 底：5.9 高：5.5	寿文・圏線など	圏線など	広東碗	119
516	26号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(5.6) 底：(3.0) 高：5.2	二重網目文		丸碗3	120
517	27号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(6.7) 底：3.7 高：5.5	矢羽根文・圏線	草花文・圏線	筒形碗	120
518	27号土坑	染付	碗	口縁～体	口：(7.1)	割り菊花文・斜格子文・圏線	圏線	筒形碗	120
519	27号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(10.0) 底：(4.2) 高：5.1	二重網目文		丸碗3	120
520	27号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(11.7)	丸文・圏線	蛇ノ目釉剥ぎ	丸碗5	120
521	27号土坑	白磁？	碗	口縁～体	口：(10.3)	青磁釉	蛇ノ目釉剥ぎ	丸碗5	120
522	27号土坑・土層	染付	碗	口縁～底	口：(11.3) 底：4.4 高：4.9	折松葉文・圏線	コンニャク印判五弁花・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ	端反碗	120

第29表　近世～近代陶磁器観察表（1）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
523	27・23号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.4 底:5.6 高:6.9	圏線など	寿字文・圏線	広東碗	120
524	27号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.0 底:3.0 高:4.2	唐文・圏線	昆虫文・圏線	小広東碗	120
525	27号土坑	染付	蓋	天井～体	天:3.2	○×文様帯など	松竹梅	碗の蓋	120
526	27号土坑	染付	碗	口縁～体	口:(7.8)	草花文・鳥文			120
527	27号土坑	染付	皿	口縁～底	口:(17.2) 底:(6.6) 高:2.9		コンニャク印判五弁花・唐草文・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ	小皿7	120
528	27号土坑	染付	仏飯器	口縁～底	口:7.3 底:4.0 高:6.1	コンニャク印判（文様不明瞭）		割口に漆付着	120
529	27号土坑	染付	仏飯器	口縁～底	口:6.7 底:3.9 高:6.0	割り菊花文・圏線			120
530	27号土坑	染付	紅猪口	口縁～底	口:6.8 底:2.2 高:3.5	笹文			120
531	27号土坑	陶器	碗	口縁		鉄釉（黒褐色）	鉄釉（黒褐色）	薩摩龍門司系か	120
532	27号土坑	陶器	小杯	口縁～底	口:5.0 底:1.4 高:2.5	灰釉（黄白色）	灰釉（黄白色）	関西系	120
533	27号土坑	陶器	灯火具	口縁～底	口:3.2 底:4.2 高:4.2	鉄釉（黒褐色）・穿孔	鉄釉（黒褐色）・芯立て	ヒョウソク	120
534	27号土坑	陶器	鉢	口縁～体		沈線？	白化粗土？		120
535	30号土坑	染付	蓋	天井～口縁	天:4.9 口:9.9 高:2.5	蓮弁文	岩波文・圏線	広東碗の蓋	121
536	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.1 底:5.7 高:5.9	蓮弁文	岩波文・圏線	広東碗	121
537	30号土坑・土壇	染付	碗	口縁～底	口:12.2 底:4.4 高:6.5	丸文・圏線	コンニャク印判五弁花・蛇ノ目釉剥ぎ	丸碗5	121
538	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:4.7 底:3.3 高:5.9	菱文・斜格子文・圏線など	寿字文・圏線	筒形碗	121
539	30号土坑	染付	蓋	天井～口縁	天:(3.8) 口:(9.4) 高:3.0	窓絵文・花文・圏線	文様帯・圏線など	端反碗の蓋	121
540	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.4 底:4.3 高:5.7	宝文？	宝文？・圏線	端反碗	121
541	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:(9.6)	草花文？・圏線	圏線	端反碗	121
542	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:(9.2) 底:4.0 高:5.3	草花文・圏線	昆虫文？・圏線	端反碗	121
543	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:(8.8) 底:3.7 高:5.0	牡丹文（素描）・圏線	雷文帯・松竹梅・圏線	端反碗	121
544	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.0 底:(3.6) 高:6.2	窓絵山水楼閣文・二重格子文・圏線	文様帯・斜格子文・圏線	端反碗	121
545	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.1 底:4.0 高:5.4	菊花文・鳥文	菊花文	端反碗	121
546	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.4 底:3.9 高:5.8	圏線など	昆虫文・圏線	端反碗	121
547	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:6.3 底:3.9 高:6.2	よろけ縞文・圏線		湯呑碗	121
548	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:6.3 底:3.6 高:5.3	草花文？		湯呑碗	121
549	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:6.6 底:5.0 高:6.9	草花文・櫛歯文		湯呑碗	121
550	30号土坑	染付	碗	口縁～底	口:7.5 底:4.6 高:6.4	「福寿」・圏線・櫛歯文	雷文帯	湯呑碗	121
551	30号土坑	色絵	碗	口縁～底	口:6.7 底:2.7 高:5.4	花文など		湯呑碗	121
552	30号土坑	白磁	皿	体～底	底:8.0	蛇ノ目凹型高台	ヘラ彫り→足付ハマの溶着痕（5箇所）	小皿6。菊皿	121
553	30号土坑	染付	皿	口縁～底	口:10.1 底:5.4 高:2.3	口紅	山水楼閣文	小皿2。輪花皿	121
554	30号土坑	染付	花生	胴～底	底:(6.0)	文様あり	無釉		121
555	30号土坑	白磁	小杯	口縁～底	口:(5.6) 底:(2.1) 高:2.9		家屋文	イッチンがけ	121
556	30号土坑	陶器	灯火具	口縁～底	口:5.8 底:4.2 高:9.5	鉄釉（暗褐色）・糸切り痕・穿孔	鉄釉（暗褐色）・芯立て（欠損）	ヒョウソク	121
557	30号土坑	陶器	擂鉢	口縁～体		回転ヘラケズリ	一単位10条の擂目	堺・明石系	121
558	30号土坑	陶器	蓋	天井～口縁	口:6.2	回転ヘラケズリ→鉄釉（暗褐色）		薩摩苗代川系土瓶の蓋	121
559	30号土坑	陶器	土瓶	口縁～底	口:7.2 底:5.8 高:12.7	鉄釉（暗褐色）・カキメ・直重ねの溶着痕	茶止め穴（3つ）	薩摩苗代川系	121

第30表　近世～近代陶磁器観察表（2）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
560	61号土坑	染付	碗	口縁～底	口:9.6) 底:3.7 器:4.9	コンニャク印判井桁文・圏線など	圏線？	丸碗3	122
561	61号土坑	染付	碗	口縁～底	口:10.9) 底:5.3 器:6.6	草花文など	圏線など	広東碗	122
562	61号土坑	染付	碗	口縁～底	口:9.1) 底:3.8 器:5.1	風景文？	圏線など	端反碗	122
563	61号土坑	色絵	碗	口縁～底	口:9.0) 底:2.8 器:4.7	花文など	文様有り	端反碗	122
564	61号土坑	染付	碗	口縁～底	口:9.0) 底:3.3 器:5.7	宝文？	文様有り	湯呑碗	122
565	61号土坑	染付	碗	口縁～体	口:7.3	蓮弁文？・圏線	圏線	湯呑碗	122
566	61号土坑	染付	碗	口縁～底	口:8.9) 底:3.0 器:4.2	圏線		湯呑碗	122
567	61号土坑	染付	皿	口縁～底	口:9.7) 底:5.6) 器:2.1	飛雲文・圏線	蛟竜文・飛雲文・圏線	手塩皿	122
568	61号土坑	染付	皿	口縁～底	口:13.5) 底:7.3 器:4.0	口紅・蛇ノ目凹型高台	山水楼閣文	小皿6	122
569	61号土坑	染付	皿	口縁～底	口:10.1) 底:4.5 器:2.5		蛇ノ目釉剥ぎ・松文（墨書）など	小皿7	122
570	61号土坑	染付	鉢	体～底	底:(6.8)	窓絵文？	葉文？	鉢1。八角鉢	122
571	61号土坑	染付	皿	口縁～底	口:12.9 底:7.1 器:3.5	口紅・花唐草文・蛇ノ目凹型高台	花文・蝶文など	コバルト型紙刷り	122
572	61号土坑	陶器	碗	口縁～体		口縁部のみ白化粗土	白化粗土	薩摩龍門司系	122
573	61号土坑	陶器	小杯	口縁～底	口:4.5) 底:2.5 器:2.5	回転ヘラケズリ→灰釉	灰釉	関西系	122
574	61号土坑	陶器	徳利	胴～底	底:(8.0)	回転ヘラケズリ→鉄釉（黒褐色）		関西系？	122
575	61号土坑	陶器	徳利	胴		回転ヘラケズリ→灰釉		関西系	122
576	61号土坑	陶器	擂鉢	口縁～底	口:19.0) 底:9.6 器:7.1	回転ヘラケズリ	一単位10条の擂目	堺・明石系	122
577	61号土坑	陶器	擂鉢	体～底	底:(15.4)	回転ヘラケズリ	一単位13条の擂目・見込み放射状の擂目	堺・明石系	122
578	61号土坑	陶器	土瓶	口縁～底	口:(9.4) 底:14.5	鉄釉（茶褐色）・注口（湯の口）・カキメ	茶止め穴（3つ）	薩摩苗代川系	122
579	61号土坑	陶器	仏花瓶	口縁～頸	口:8.5	耳付（破損している）→鉄釉（黒褐色）	口縁部のみ鉄釉（黒褐色）		122
580	61号土坑	陶器	徳利	胴～底	底:8.1	鉄釉？（茶褐色の光沢）		べこかん。備前系か	122
581	34号土坑	染付	碗	口縁～底	口:(8.1)	折松葉文・圏線		丸碗3	123
582	34号土坑	染付	紅猪口	口縁～底	口:6.6 底:(2.6) 器:3.3	笹文			123
583	65号土坑	染付	碗	口縁～底	口:11.7 底:(3.7) 器:6.1	二重網目文		丸碗3	123
584	65号土坑	染付	碗	口縁～体	口:(10.8)	蝶文	圏線	端反碗	123
585	65号土坑	染付	碗	口縁～体	口:(10.9)	草花文	圏線	端反碗	123
586	65号土坑	陶器	蓋	天井～口縁	下:5.9 径:9.3 器:2.0	鉄釉（茶褐色）		土瓶の蓋。8層出土	123
587	66号土坑	染付	碗	体～底	底:(5.7)	稲束文・圏線	圏線など	広東碗	123
588	近世墓	染付	蓋	天井～口縁	下:3.5 口:9.2 器:2.9	唐草文・圏線		朝鮮形碗の蓋	123
589	近世墓	染付	碗	口縁～体		唐草文		朝鮮形碗	123
590	近世墓	染付	碗	体～底	底:(2.6)	圏線など	花文？・圏線		123
591	近世墓	染付	皿	体～底	底:(5.4)		花文・圏線など		123
592	近世墓	陶器	甕	口縁～胴	口:(30.6)	褐釉＋黒釉の流し掛け			123
593	1号溝	陶器	擂鉢	口縁～底	口:(37.0) 底:(16.2) 器:12.8	回転ヘラケズリ	一単位9条の擂目・見込みウールマーク状の擂目	堺・明石系	123
594	1号溝	染付	碗	口縁～底	口:(9.0) 底:(3.8) 器:5.4	斜格子文・角蓮弁文・圏線など	五弁花・圏線	小丸碗	123
595	1号溝	染付	碗	体～底	底:(6.0)	仙芝視寿文・圏線	圏線	広東碗	123
596	1号溝	白磁	猪口	口縁～底	口:(4.6) 底:(2.7) 器:2.7				123

第31表　近世～近代陶磁器観察表（3）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
597	屋敷入口	染付	碗	口縁～底	口:10.5 底:3.6 高:6.0	二重格子文・圏線など	斜格子文・圏線	端反碗	123
598	屋敷入口	染付	碗	口縁～体	口:(7.1)	笹文・圏線	圏線	筒形碗	123
599	屋敷入口	染付	碗	口縁～体	口:5.5	圏線など	圏線	湯呑碗	123
600	屋敷入口	染付	皿	口縁～底	口:(10.8) 底:14.8 高:2.8	草花文・圏線			123
601	屋敷入口	染付	小杯	口縁～底	口:6.5 底:2.6 高:3.1	二重格子文			123
602	屋敷入口	色絵	段重	口縁～底	口:7.6 底:6.7 高:3.2	花文・圏線など・口縁部と底部周縁は無釉			123
603	屋敷入口	陶器	碗	体～底	底:(3.7)	灰釉（透明）	灰釉（透明）	関西系	123
604	屋敷入口	陶器	碗	口縁～体	口:(9.8)	白濁釉	白濁釉	萩系	123
605	屋敷入口	陶器	片口	口縁～底	口:14.3 底:7.0 高:8.2	回転ヘラケズリ・上半施釉	施釉		123
606	土壇	染付	蓋	天井～口縁	下:3.6 口:9.9 高:2.6	青磁釉	四方襷文・コンニャク印判五弁花・圏線	朝顔形碗の蓋。青磁染付	125
607	土壇	白磁	碗	口縁～底	口:(10.6) 底:(4.2) 高:5.8			朝顔形碗	125
608	土壇	染付	碗	口縁～体	口:(6.8)	青磁釉	四方襷文・圏線	筒形碗。青磁染付	125
609	土壇	染付	碗	体～底	底:3.3	菊散らし文・圏線	圏線	筒形碗。瀬戸・美濃系	125
610	土壇	染付	碗	口縁～底	口:10.0 底:4.0 高:5.2	二重網目文		丸碗3	125
611	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(9.8) 底:(3.8) 高:5.4	草花文・圏線		丸碗3	125
612	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(11.8) 底:4.8 高:4.7	梅樹文・圏線	蛇ノ目釉剥ぎ	丸碗5	125
613	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(11.6) 底:3.9 高:4.9	丸文・斜格子文・圏線	コンニャク印判五弁花・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ	丸碗5。全体的に被熱している	125
614	土壇	色絵	碗	口縁～底	口:8.6 底:3.5 高:5.1	花文・七宝繋ぎ文・角連弁文・圏線など	文様帯・松竹梅	小丸碗	125
615	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(8.5) 底:(3.1) 高:5.0	草花文・圏線	圏線など	小丸碗	125
616	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(10.2) 底:5.9 高:6.0	蓮弁文・圏線	圏線	広東碗	125
617	土壇	染付	蓋	天井～口縁	下:14.8 口:(9.6) 高:2.5	花文・昆虫文	花文・圏線	広東碗の蓋	125
618	土壇	染付	碗	体～底	底:(3.0)	文様あり	花文？・圏線		125
619	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(10.0) 底:(3.2) 高:5.2	唐文・圏線	昆虫文・圏線	小広東碗	125
620	土壇	染付	蓋	天井～口縁	下:3.8 口:9.9 高:2.8	窓絵文・圏線	文様帯・鷺文・圏線	端反碗の蓋	125
621	土壇	染付	蓋	天井～口縁	下:4.5 口:(8.3) 高:2.5	蝶文・二重格子文・圏線	蝶文・圏線	端反碗の蓋	125
622	土壇	染付	碗	口縁～底	口:(12.6) 底:(4.6) 高:4.7	松葉文・圏線	文様帯・コンニャク印判五弁花・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ	端反碗	125
623	土壇	染付	碗	口縁～底	口:10.5 底:3.9 高:6.0	窓絵文・二重格子文・圏線	文様帯・圏線など	端反碗	125
624	土壇	染付	皿	底		唐草文？・圏線	草花文	大皿	125
625	土壇	染付	皿	口縁～底	口:(13.6) 底:6.6 高:2.9		唐草文・コンニャク印判五弁花・蛇ノ目釉剥ぎ	小皿7	125
626	土壇	染付	皿	口縁～底	口:(13.7) 底:(7.4) 高:4.5	唐草文・圏線	草花文・圏線・コンニャク印判五弁花？	小皿4	125
627	土壇	染付	皿	底	底:4.7		桐文？		125
628	土壇	染付	紅猪口	口縁～底	口:(6.1) 底:(2.4) 高:3.2	笹文			125
629	土壇	染付	紅猪口	口縁～底	口:(6.8) 底:(2.8) 高:3.3	笹文			125
630	土壇	染付	酒呑・火入	口縁～体	口:5.6	草花文・圏線	無釉	灰吹か	125
631	土壇	染付	蕎麦猪口	口縁～底	口:6.8 底:4.0 高:5.6	草花文・圏線			125
632	土壇	陶器	碗	口縁～底	口:(10.1) 底:4.6 高:5.9	白濁釉・削り出し高台（渦巻き状）	白濁釉・一部に黒褐釉	萩系	126
633	土壇	陶器	碗	口縁～底	口:(9.6) 底:4.4 高:4.9	白濁釉・削り出し高台（渦巻き状）	白濁釉・一部に黒褐釉	萩系	126
634	土壇	陶器	碗	口縁～体	口:(11.6)	梅樹文	白化粧土	瀬戸・美濃系	126

第32表　近世～近代陶磁器観察表（4）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
635	土壇	陶器	皿	底	底：4.6	鉄釉（暗緑灰色）	鉄釉（暗緑灰色）・蛇ノ目釉剥ぎ	蘆屋苗代川系か	126
636	土壇	陶器	酔・火入	口縁～体	口：(10.2)	回転ヘラケズリ→ヘラ彫り・灰釉（黄褐色）	無釉	瀬戸・美濃系	126
637	土壇	陶器	酔・火入	体～底	底：6.4)	回転ヘラケズリ→灰釉（黄褐色）・三足	無釉	瀬戸・美濃系	126
638	土壇	陶器	灯火具	体～底	底：3.7	右回転糸切り痕・鉄釉（茶褐色）	鉄釉（茶褐色）		126
639	土壇	陶器	灯火具	口縁～底	口：(8.5) 底：2.4 高：2.1	糸切り痕・鉄釉（茶褐色）	鉄釉（茶褐色）		126
640	土壇	陶器	灯火具	口縁～底	口：5.6 底：3.4 高：3.2	穿孔・鉄釉（暗褐色）	芯立て（欠損）・鉄釉（暗褐色）	ヒョウソク	126
641	土壇	陶器	徳利	体～底	底：6.2	回転ヘラケズリ→灰釉（黄白色）	無釉	関西系	126
642	土壇	陶器	擂鉢	口縁		回転ヘラケズリ	一単位10条の擂目	堺・明石系	126
643	土壇	陶器	擂鉢	口縁	口：(34.0)	回転ヘラケズリ	一単位11条の擂目	堺・明石系	126
644	土壇	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(34.5) 底：(14.0) 高：12.7	回転ヘラケズリ	一単位12条の擂目・見込みウールマーク状？の擂目	堺・明石系	126
645	土壇	陶器	甕	肩～底	底：(19.6)	褐釉＋黒釉の流し掛け			126
646	土壇	陶器	甕	口縁～胴		褐釉＋黒釉の流し掛け			126
647	土壇	陶器	酒器	口縁～底	口：7.1 底：6.7 高：19.0	白泥による象嵌・注口（潰の口）		把手は型作り	126
648	土壇	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(34.0) 底：(12.0) 高：11.8	カキメ→鉄釉（暗緑灰色）	一単位4条の擂目	蘆屋苗代川系	126
649	土壇	陶器	甕	口縁～胴		鉄釉（黒褐色）・口縁部上面は無釉	鉄釉（黒褐色）	蘆屋苗代川系	126
650	1号不明	染付	碗	口縁～底	口：(7.2) 底：5.4 高：5.4	口縁部と体部中位に鉄釉		筒形碗	127
651	1号不明	染付	碗	口縁～底	口：(7.9) 底：4.0 高：5.7	竹文？・圏線	五弁花・圏線	筒形碗	127
652	1号不明	染付	碗	口縁～底	口：(11.4) 底：4.2 高：5.3	青磁釉	四方襷文・コンニャク印判五弁花・圏線	朝顔形碗。青磁染付	127
653	1号不明	染付	皿	体～底	底：(14.1)	圏線	松竹梅など	大皿	127
654	1号不明	染付	皿	口縁～底	口：(14.0) 底：(8.1) 高：4.2	唐草文・圏線・裏銘	コンニャク印判五弁花・圏線など	小皿2。輪花皿	127
655	1号不明	色絵	碗	口縁～体	口：(8.3)	文様あり			127
656	1号不明	陶器	甕	口縁～胴		褐釉＋黒釉の流し掛け			127
657	11号不明	染付	碗	口縁		雪輪草花文		丸碗3	127
658	1号土坑	染付	碗	体～底	底：(3.2)		岩波文	小丸碗	127
659	1号土坑	染付	蓋	天井～口縁	天：4.9 口：(9.2) 高：2.6	稲束文・岩波文	岩波文・圏線	広東碗の蓋	127
660	2号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(11.2) 底：5.9 高：6.0	文様あり	草花文	広東碗	127
661	53号土坑	染付	碗	口縁	口：(10.7)	文様帯・二重格子文	文様帯	端反碗	127
662	52号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(10.2) 底：(3.8) 高：6.7	寿字文・圏線など	文様帯・寿字文・圏線	端反碗	127
663	56号土坑	染付	碗	口縁～底	口：(9.2) 底：(3.9) 高：6.5	草花文・圏線	文様帯・昆虫文・圏線	端反碗。コバルト染付	127
664	60号土坑	染付	碗	口縁～底	口：8.5 底：3.2 高：5.1	山水楼閣文		小丸碗。高台内に紅付着	127
665	41号土坑	染付	皿	口縁～底	口：(12.0) 底：8.0 高：3.8	唐草文・圏線・蛇ノ目凹型高台	笹文・圏線		127
666	56号土坑	染付	皿	口縁～底	口：(10.1) 底：5.0 高：4.1		よろけ縞文・斜格子文・圏線・蛇ノ目釉剥ぎ	小皿7	127
667	41号土坑	染付	鉢	口縁～底	口：(12.0) 底：6.7 高：6.0	口縁部無釉・圏線など		鉢3	127
668	53号土坑	染付	小杯	口縁～底	口：6.9 底：3.8 高：4.3	文様帯・蓮弁文・橘重文		コバルト染付	127
669	55・56号土坑	陶器	徳利	胴		灰釉＋緑釉		関西系	128
670	AB6・AC6	陶器	徳利	胴～底	底：7.4	回転ヘラケズリ→灰釉		669と同一個体か	128
671	41号土坑	陶器	鉢	口縁～底	口：(21.1 底：9.3 高：9.6	回転ヘラケズリ→鉄釉（暗褐色）	鉄釉（暗褐色）・口縁部は無釉		128
672	60号土坑	陶器	壺	胴		暗緑色釉（灰釉？）			128

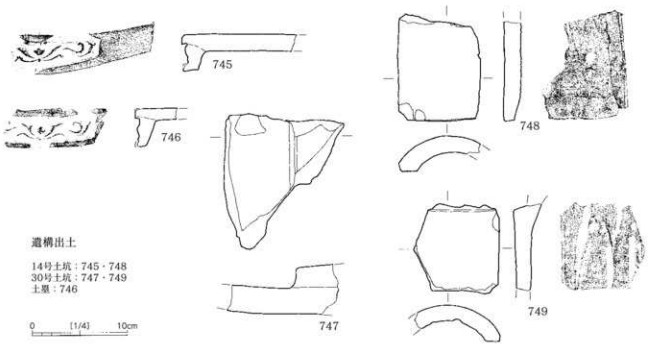
第33表　近世～近代陶磁器観察表（5）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
673	46号土坑	陶器	茶入	口縁～体	口：3.7)	墓灰釉？	鉄釉（茶褐色）		128
674	56号土坑	陶器	碗	底	底：4.4)	鉄釉（茶褐色）	鉄釉（茶褐色）→蛇ノ目釉剥ぎ	薩摩龍門司系か	128
675	51号土坑	陶器	甕	胴		鉄釉（茶褐色）	鉄釉（茶褐色）		128
676	51・53号土坑	陶器	甕	底	底：19.6	鉄釉（茶褐色）・底部も施釉（周縁のみ紗付着）	鉄釉（茶褐色）		128
677	52号土坑	陶器	甕	胴～底		褐釉＋黒釉の流し掛け・底部周縁に砂付着			128
678	8号不明	染付	碗	口縁～底	口：9.8 底：(3.7) 高：5.1	二重網目文		丸碗３	128
679	8号不明	白磁	碗	口縁～底	口：(10.0) 底：3.7 高：5.2			朝鮮形碗	128
680	8号不明	染付	碗	口縁～底	口：9.8 底：3.7 高：5.3	矢羽根文・圏線	昆虫文・圏線	小丸碗	128
681	8号不明	陶器	擂鉢	口縁		回転ヘラケズリ	一単位10条の擂目	堺・明石系	128
682	6号不明	陶器	灯火具	底	底：3.5	右回転糸切り痕・鉄釉（茶褐色）	鉄釉（茶褐色）	薩摩苗代川系	128
683	8号不明	陶器	土瓶	口縁～底	口：6.0 底：14.7 高：10.0	鉄釉（茶褐色）・注口（湯の口）・三足	茶止め穴（３つ）	薩摩苗代川系？	128
684	B区 ピット	陶器	蓋	摘み～底	底：2.9 高：2.5	鉄釉（黒褐色）	回転ヘラケズリ	取り上げNo.30-27-2-P1。壺の蓋か	128
685	水田跡下層	染付	皿	口縁～底	口：22.2 底：13.3 高：3.5	唐草文・ハリ支え痕	墨弾き銹唐草文・松竹梅など	中皿	128
686	水田跡下層	染付	碗	口縁～底	口：9.8 底：5.4 高：4.8	山水楼閣文？		焼継ぎの痕跡あり	128
687	水田跡下層	染付	酒器	口縁～体	口：4.4)	寿字文・柳虫文・貼付の花文など			128
688	水田跡下層	色絵	水滴	口縁～体		鉄釉・赤絵		鶏を模倣	128
689	水田跡下層	陶器	碗	体～底	底：6.0	草花文・圏線	圏線・五弁花	瀬戸・美濃系	129
690	水田跡下層	陶器	碗	口縁～底	口：6.9 底：3.2 高：4.3	黒褐釉・白濁釉・削り出し高台（渦巻き状）	白濁釉	萩系。ビラ掛け碗	129
691	水田跡下層	陶器	碗	口縁～体	口：(10.1)	白泥による象嵌			129
692	水田跡下層	陶器	小杯	口縁～底	口：6.7) 底：(2.0) 高：3.5	灰釉（青灰色）	灰釉（青灰色）	関西系	129
693	水田跡下層	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(15.2) 底：(9.0) 高：5.5	鉄釉（黒褐色）	一単位12条の擂目→鉄釉（黒褐色）		129
694	水田跡下層	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(19.4) 底：(6.5) 高：7.9	鉄釉（茶褐色）・回転糸切り痕	一単位23条の擂目→鉄釉（茶褐色）		129
695	水田跡下層	陶器	水壺	口縁～底	口：(28.6) 底：(18.4) 高：22.3	灰釉＋緑釉の流し掛け	重ね焼きの目跡	瀬戸・美濃系	129
696	水田跡下層	陶器	徳利	肩～底	底：(10.0)	鉄釉（黒褐色）			129
697	水田跡下層	陶器	徳利	胴		鉄釉（黒褐色）→ヘラ描き「本左衛門」			129
698	水田跡下層	陶器	徳利？	底	底：9.4	鉄釉（茶褐色）・静止糸切り痕	鉄釉（茶褐色）	底部に墨書	129
699	水田跡下層	陶器	擂鉢	口縁		カキメ→鉄釉（暗緑灰色）	一単位５条の擂目	薩摩苗代川系	129
700	水田跡下層	陶器	擂鉢	体～底	底：8.6	鉄釉（茶褐色）・墨書	一単位12条以上の擂目→鉄釉（茶褐色）		129
701	水田跡下層	陶器	土瓶	口縁～体	口：5.8	鉄釉（暗褐色）・カキメ・注口（湯の口）	茶止め穴（３つ）	薩摩苗代川系	129
702	水田跡下層	陶器	土瓶	底		鉄釉（黒褐色）・カキメ・三足・溶着痕			129
703	水田跡下層	陶器	土瓶	体～底		鉄釉（暗緑灰色）・カキメ・三足	茶止め穴（３つ）	薩摩苗代川系	129
704	水田跡下層	陶器	土瓶	底		カキメ・三足・溶着痕			129
705	水田跡下層	陶器	甕	口縁～底	口：(43.0) 底：(19.8) 高：29.7	櫛描文・褐釉＋黒釉の流し掛け	窯道具の溶着痕		129
706	10トレンチ	白磁	碗	口縁～底	口：6.0 底：(2.1) 高：4.5	口縁部と高台内は無釉・細かいシワ	細かいシワ	徳化窯。型作り	131
707	A５	染付	皿	口縁～体	口：(13.7)	口紅（鉄釉）	圏線（呉須）	初期伊万里	131
708	D４ほか	青磁	擂鉢	口縁～底	口：(25.5) 底：(7.5) 高：10.7	青磁釉	一単位12条の擂目・口縁部青磁釉		131
709	B５	染付	碗	口縁～底	口：(9.2) 底：(3.7) 高：4.5	染付「大坂」		紅の販売容器。	131
710	A５・B６	色絵	碗	口縁～体	口：8.6	赤絵「笹ベに」		紅の販売容器。	131

第34表　近世～近代陶磁器観察表（6）

No.	出土位置	分類	器種	部位	法量	調整・文様等		備考	掲載頁
						外面	内面		
711	D6	染付	紅猪口	口縁～底	口：6.2 底：2.3 高：2.6	笹文		内面に紅付着	131
712	K4	白磁	紅皿	口縁～底	口：4.2 底：1.2 高：1.4	貝殻状の浮き彫り	施釉		131
713	4トレンチ	染付	散り蓮華			笹文・細かいシワ	梅樹文	型作り	131
714	I5	白磁	小杯	口縁～底		鎬滓付着	鎬滓付着	小鍛冶に利用？	131
715	B5	白磁	戸車		径：5.0 軸：5.8 厚：1.3	側面のみ施釉			131
716	A5	陶器	碗	口縁～底	口：8.6 底：2.9 高：4.9	若松文		京・信楽系。口縁部に油煙が付着	131
717	A4ほか	陶器	碗	口縁～体	口：9.4	鉄肌釉	白化粧土	薩摩龍門司系	131
718	A5	陶器	碗	口縁～底	口：(10.6) 底：4.3 高：4.3	鉄釉（黒褐色）	鉄釉（黒褐色）→蛇ノ目釉剥ぎ	薩摩龍門司系	131
719	A5	陶器	碗	口縁～底	口：(10.3) 底：4.4 高：4.9	上半白化粧土	上半白化粧土・胡麻目	薩摩龍門司系	131
720	A5ほか	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(13.2) 底：4.9 高：5.2	口縁部鉄釉（黄褐色）	一単位8条の擂目・直重ねの沼着痕	薩摩龍門司系	131
721	A5ほか	陶器	徳利	頸～底	底：7.6	鉄絵→灰釉	無釉	関西系。底部に墨書	131
722	K7	陶器	蓋	体～口縁	口：(17.0)	飛びカンナ・鉄釉（茶褐色）	鉄釉（茶褐色）	関西系。723とセットか	131
723	A5・B5	陶器	行平鍋	口縁～底	口：16.7 底：17.0	飛びカンナ・鉄釉（茶褐色）・把手に文様	灰釉？	関西系	131
724	D4ほか	陶器	擂鉢	口縁～底	口：(28.4) 底：(14.8) 高：12.9	鉄釉（茶褐色）	一単位12条以上の擂目→鉄釉（茶褐色）		131
725	10トレンチ	陶器	徳利	口縁～胴	口：(3.8)	鉄釉（茶褐色）→ヘラ書き「本左衛門」など			131
726	A5ほか	陶器	徳利	口縁～底	口：3.4 底：(9.2) 高：(34.6	鉄釉（茶褐色）→イッチン掛け「御酒」など			131
727	D4	陶器	油壺	口縁～底	口：1.9 底：4.7 高：5.8	鉄釉（黄褐色）	無釉	薩摩龍門司系	131
728	A5	陶器	鉢	体～底	底：(11.9)	鉄釉（黒褐色）	ヘラによる環状の抉り	楠木鉢への転用を想定	131
729	A5ほか	陶器	壺	口縁～底	口：(34.0) 底：(16.8) 高：(36.0)	褐釉＋黒釉の流し掛け	重ね焼きの目跡		132
730	K4ほか	陶器	壺	体～底	底：(14.8)	褐釉＋黒釉の流し掛け	重ね焼きの目跡		132
731	B5	陶器	不明			黄釉		732の摑みか？	132
732	J7ほか	陶器	蓋	体～口縁		鯖状の沈線→緑釉	鉄釉（黒褐色）	733・734の蓋	132
733	A6ほか	陶器	鉢	口縁～底		鰭・ヒレ状の沈線→緑釉・褐釉	下面は緑釉・褐釉	734と同一個体。魚形の鉢	132
734	B5	陶器	鉢	口縁～底		鰭・ヒレ状の沈線→緑釉・褐釉	下面は緑釉		132
735	11号土坑	土製品	土笛	頭～脚		目・羽根などを陽刻		型作り。ミミズク	132
736	L6	土製品	人形	頭～脚			指頭圧痕	型作り。狐	132
737	K7・L6	土製品	人形	頭～脚		空気孔？（頭頂部・底部）	指頭圧痕	型作り。「庄屋さん」	133
738	D5	土製品	人形	手			指頭圧痕	型作り。「饅頭食い」	133
739	K7	土製品	人形	頭			指頭圧痕	型作り。歌舞伎役者か	133
740	A4	土製品	人形	頭～胴			指頭圧痕	型作り	133
741	K7・L6	土製品	人形	脚			指頭圧痕	型作り。力士	133
742	K7・L5・L6	土製品	人形	脚			指頭圧痕	742と同一個体	133
743	K6・K7・L6	土製品	人形	頭～胴			指頭圧痕	型作り。「布袋さん」	133
744	K7・L6	土製品	人形	胴～脚			指頭圧痕	743と同一個体	133

第35表　近世～近代陶磁器・土製品観察表



第87図　近世～近代瓦実測図（1）

No.	出土位置	器種	法量			調整・文様等		備考	掲載頁
			最大長	最大幅	最大厚	外面	内面		
745	14号土坑	軒桟瓦	12.2	15.0	3.9	唐草文		取り上げNo.SC14-407	141
746	土層	軒桟瓦	4.5	11.0	4.1	唐草文			141
747	30号土坑	伏間瓦	12.6	14.4	5.4			取り上げNo.SC30-45	141
748	14号土坑	丸瓦	11.2	8.8	1.9	側縁部面取り	布目・工具ナデ	取り上げNo.SC14-359	141
749	30号土坑	丸瓦	9.5	9.1	3.0	側縁部面取り	布目・工具ナデ	取り上げNo.SC30-87	141
750	水田跡下層	軒丸瓦	3.0	11.5	12.4	連珠巴文			142
751	M6	軒丸瓦	2.2	11.5	8.9	四菱文			142
752	M6	不明	3.3	10.5	5.8	花文？			142
753	A区一括	鬼瓦？	5.4	11.8	8.5	刺突文など			142
754	B区一括	鬼瓦？	8.0	15.0	17.7	四菱文など			142
755	10トレンチ	軒桟瓦	12.2	14.2	4.5	唐草文			142
756	C4	軒桟瓦	10.7	18.7	4.5	唐草文			142
757	水田跡下層	軒桟瓦	12.4	18.0	4.3	唐草文			142
758	A5	丸瓦	28.0	13.3	2.6	側縁部面取り	布目・工具ナデ	接続部はソケット状	142
759	C4	軒桟瓦	25.8	25.8	4.0	菊花文		固定のための穿孔	142
760	A区一括	桟瓦	26.4	24.5	1.9				142

第36表　近世～近代瓦観察表

C．瓦（第87図745～第88図760）

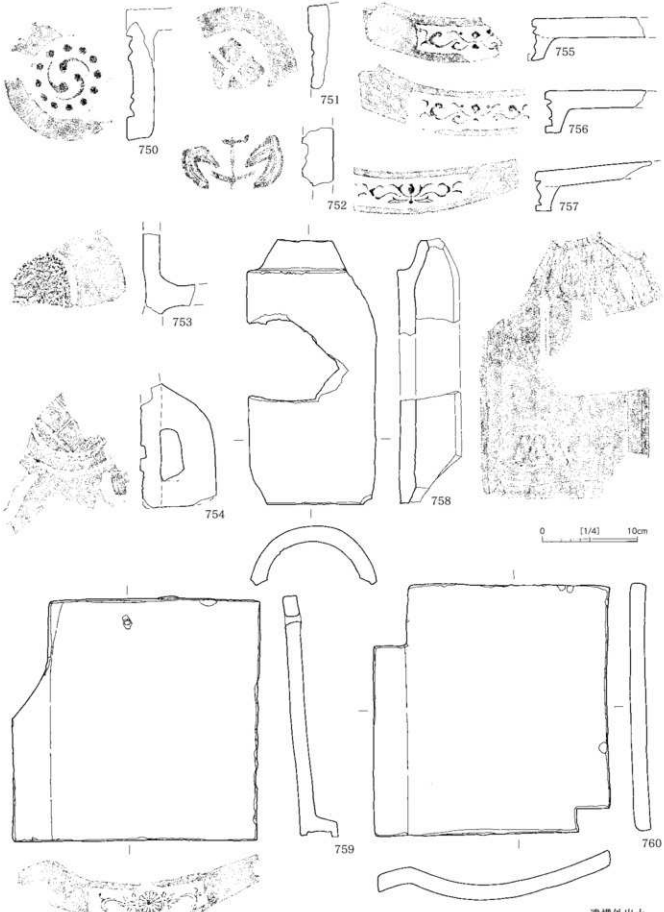
瓦は約12,000点、重量にして約1.8ｔが出土している。非常に粗い計算であることは承知ながら、760の桟瓦１枚が1684.5ｇであることからすると、約1070枚の桟瓦に相当する重量である。聞き取りでは少なくとも昭和の時代には総瓦葺きであったとのことだが、近世段階から同様であった可能性が高い。

軒瓦は丸・桟の双方が認められる。軒丸瓦は隅棟ないし降り棟に用いられたものか。瓦当の文様に通有な連珠巴文の他に、家紋の可能性もある四菱文があり注目される。四菱文は鬼瓦にも付いている。

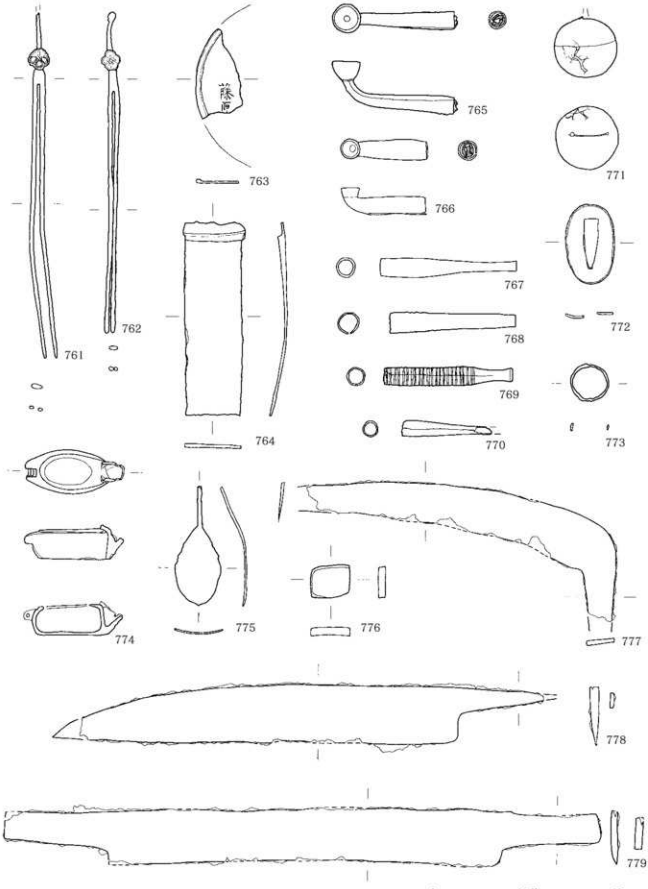
軒桟瓦には唐草文と菊花文があり、いずれかの段階で前者から後者に入れ替わったと推定している。

747は他の瓦のほぼ２倍の厚さを有している。当初は用途を特定できなかったが、高錬潜の家老職を務めた黒水家の住宅（町指定有形文化財）で茅葺き屋根の棟に類似する瓦が乗っていることから伏間瓦と判断した。

丸瓦の内面には布目が残り、内型に粘土板を巻き付けて成形したことが分かる。



第88図　近世～近代瓦実測図（2）



第89図　近世～近代金属製品実測図

D．金属製品（第89図761～779）

761・762は簪で，763・764は和鏡である。これらと先述した紅関係の容器とを合わせ考えると，女性の存在がよりいっそう鮮明になってくる。

765～770は煙管である。形態的には幾つかのタイプがあり，やはり日常的に煙草を嗜んだ人物が想定される。

774は欠立である。後述する携帯用硯？などと合わせると，居住者は外出先で文字を書く必要があったことを暗示する。

779は鉋という道具であり，竹細工や桶組工などで，材料の厚さを一定に削る際に用いられる。

E．銭貨（第90図780～807）

780は慶寧元寶で，唯一の中世銭である。

781～784は古寛永，785は文銭である。786～797は新寛永だが，前二者と比べると銭径が小さい一方，孔径が大きいタイプ（786～790など）が一定量含まれる。

799～804は近世墓の六道銭と考えられる。6枚が鋳着しており，799の側からみると順に新寛永（面）→新寛永（面）→古寛永（背）→新寛永（背）→古寛永（面）→文銭（面）となっていた。面・背についてはそもそも50%の確率ではあるが，2枚ずつセットになっているようには見える。組成では古寛永2枚・文銭1枚・新寛永3枚となり，19世紀後半までこの3種が流通していた可能性を示す。

792～794が出土した12・23号ピットは建物の基礎であり（第56・100図），地鎮の目的で埋納されたと推測される。

F．石製品（第91図808～第92図838）

808～812は硯である。この他にも硯が出土しており，1軒の屋敷としては数が多いような印象を受ける。809は県北地方に産する紅渓石（赤色頁岩）を用いたもの。810・811は大草砥石（リソイダイト）の転用品である。812は作りが粗く実用品か否かの問題は残るが，サイズからは携帯品の可能性がある。

813～816は砥石である。813は天草砥石。

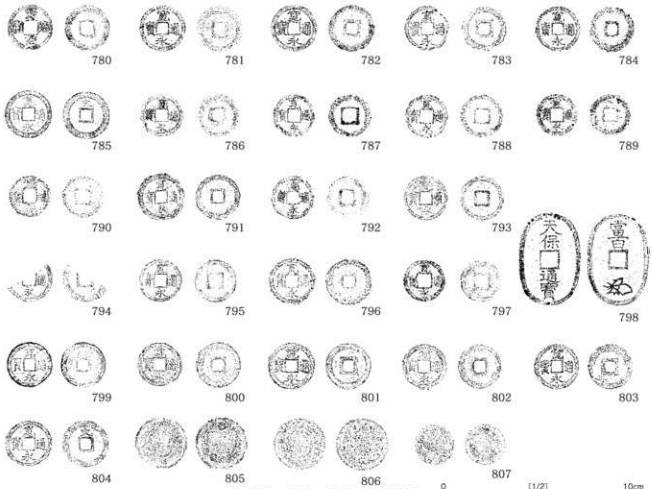
817～836は火打石である。

大別すると4種の石材が認められるが，注目されるのは特異な青緑系の色調を呈するチャートで，徳島県大出井に産する可能性があるようである。また玉髄に関しても，本遺跡から出土する石器の中に類似するものがほとんどなく，特産品として流通してきたと考えられる。

837は先述したように本遺跡で最大の姫島産黒曜石で，11号土坑に廃棄されていた。剥離面などの風化の具合からは新しくも見え，目的はともかく近世になってもたらされた可能性も否定できない。

No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
761	34号土坑	簪	銅	18.2	1.1	0.3	10.0	
762	10トレンチ	簪	銅	16.9	1.0	0.3	10.5	
763	5トレンチ	和鏡	銅	4.7	2.4	0.3	8.3	「藤原」の陽鋳
764	H14	和鏡	銅	10.2	3.3	0.5	37.7	柄
765	B区 Ⅳc	煙管 雁首	銅	6.7	1.5	2.7	8.7	取り上げNo.Ⅳc-784
766	C4	煙管 雁首	銅	4.6	1.1	1.5	6.2	眼メッキ？
767	D5	煙管 吸口	銅	7.3	1.0	1.0	7.6	眼メッキ？766とセットか
768	61号土坑	煙管 吸口	銅	6.7	1.1	1.1	6.2	
769	AB5	煙管 吸口	銅	6.8	1.1	1.0	9.1	
770	1号溝	煙管 吸口	銅	4.8	0.8	0.8	1.9	
771	4トレンチ	鉋	銅	3.2	3.4	3.4	8.9	
772	B3	鋲	銅	4.2	2.5	0.1	5.5	
773	23号土坑	銅環	銅	2.0	2.0	0.2	0.7	
774	23トレンチ	矢立	銅	5.2	2.3	1.8	30.6	蓋を欠損
775	A5	匙	銅	6.3	2.5	0.2	3.3	柄の先を欠損
776	B5		鉛	2.1	1.7	0.4	13.0	銅製品の原料か
777	G3	鎌	鉄	16.4	7.4	0.5	97.2	刃部長 14.1
778	G3	包丁	鉄	24.5	3.1	0.5	35.7	刃部長 19.7
779	G4	鉋	鉄	31.7	3.1	0.4	140.3	刃部長 20.8

第37表　近世～近代金属製品観察表　※最大長・幅・厚の単位はcm，重量はg

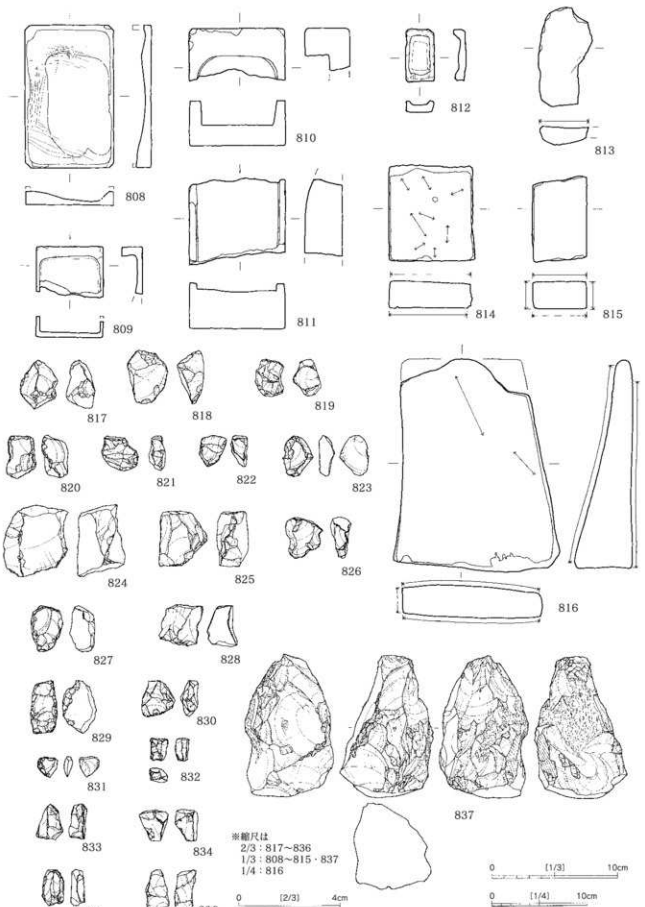


第90図　中世～近代銭貨拓影図

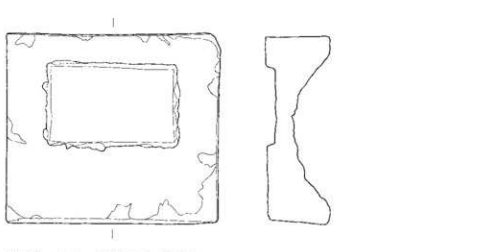
No.	出土位置	銭名	材質	銭径	孔径	厚さ	重量	備考
780	1号溝	熙寧元寶	銅	2.40	0.70	0.15	2.9	篆書体。北宋銭。1068年初鋳。
781	14号土坑	寛永通寶	銅	2.44	0.53	0.13	2.6	古寛永。寛永13（1636）年初鋳。
782	F3	寛永通寶	銅	2.45	0.58	0.11	2.1	古寛永。寛永13（1636）年初鋳。
783	G14	寛永通寶	銅	2.35	0.57	0.11	2.0	古寛永。寛永13（1636）年初鋳。
784	AB5	寛永通寶	銅	2.39	0.55	0.11	1.6	古寛永。寛永13（1636）年初鋳。
785	A区一括	寛永通寶	銅	2.53	0.55	0.12	2.7	文銭。寛文8（1668）年初鋳。
786	14号土坑	寛永通寶	銅	2.34	0.56	0.12	2.6	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
787	61号土坑	寛永通寶	銅	2.31	0.63	0.11	1.7	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
788	61号土坑	寛永通寶	銅	2.30	0.62	0.12	2.1	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
789	61号土坑	寛永通寶	銅	2.25	0.62	0.12	2.2	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
790	61号土坑	寛永通寶	銅	2.25	0.69	0.09	1.8	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
791	土壙	寛永通寶	銅	2.43	0.59	0.11	1.9	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
792	12号ピット	寛永通寶	銅	2.32	0.59	0.10	2.0	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
793	23号ピット	寛永通寶	銅	2.41	0.60	0.14	3.0	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
794	23号ピット	寛永通寶	銅	2.45	0.62	0.14	1.7	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
795	E6	寛永通寶	銅	2.31	0.62	0.13	2.6	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
796	23トレンチ	寛永通寶	銅	2.43	0.58	0.12	2.8	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
797	A区一括	寛永通寶	銅	2.24	0.61	0.14	2.4	新寛永。元禄10（1697）年初鋳。
798	D5	天保通寶	銅	4.93	0.89	0.29	19.1	天保6（1835）年初鋳。
799	3トレンチ	寛永通寶	銅	2.42	0.58	0.12	2.9	新寛永。近世墓関連。六道銭の1枚目。
800	3トレンチ	寛永通寶	銅	2.40	0.61	0.13	3.2	新寛永。近世墓関連。六道銭の2枚目。
801	3トレンチ	寛永通寶	銅	2.48	0.59	0.15	3.4	古寛永。近世墓関連。六道銭の3枚目。
802	3トレンチ	寛永通寶	銅	2.35	0.59	0.09	2.3	新寛永。近世墓関連。六道銭の4枚目。
803	3トレンチ	寛永通寶	銅	2.41	0.53	0.12	3.5	古寛永。近世墓関連。六道銭の5枚目。
804	3トレンチ	寛永通寶	銅	2.52	0.58	0.15	3.2	文銭。近世墓関連。六道銭の6枚目。
805	29号土坑	竜一銭銅貨	銅	2.82	–	0.15	6.6	明治10（1877）年鋳造。
806	61号土坑	竜一銭銅貨	銅	2.85	–	0.15	6.5	明治10（1877）年鋳造。
807	AA5	竜半銭銅貨	銅	2.20	–	0.10	2.8	鋳造年銘めず。明治7年初鋳（銘は明治6年から有）

第38表　中世～近代銭貨観察表

※銭径・孔径・厚の単位はcm、重量はg



第91図　近世～近代石製品実測図（1）



第92図　近世～近代石製品実測図（2）

No.	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
808	A C 6	硯	黒色頁岩	11.3	7.1	(1.2)		海・陸ともに顕著な使用痕あり
809	D 5	硯	紅溪石	(4.0)	5.3	1.6		県北地方に産する
810	G14	硯	天草石	(4.2)	7.6	3.6		砥石の転用品
811	F 14	硯	天草石	(6.8)	7.6	3.6		砥石の転用品。810と同一個体か
812	A 6	硯	シルト岩	4.2	2.3	1.0		小型の硯。作りは粗い
813	14号土坑	砥石	天草石	(7.7)	(4.3)	1.5		取り上げNo.SC14-306
814	J 5	砥石	シルト岩	(7.6)	6.7	2.2		側面に切り出した際の痕跡残る
815	14号土坑	砥石	砂岩	(6.9)	4.3	2.2		取り上げNo.SC14-454
816	A 5	砥石	砂岩	22.6	17.5	6.2	2661.5	自然石を砥石として用いたものか
817	D 6	火打石	玉髄１	2.6	2.0	1.5	6.9	石核状。全ての稜が潰れる。
818	D 3	火打石	玉髄１	2.9	2.1	1.5	8.6	石核状。全ての稜が潰れる。鉄分が部分的に付着。
819	B区一括	火打石	玉髄１	2.0	1.6	1.4	4.8	石核状。全ての稜が潰れる。
820	D 7	火打石	玉髄１	2.3	1.5	1.2	5.7	石核状。全ての稜が潰れる。鉄分が部分的に付着。
821	B 7	火打石	玉髄１	1.8	2.0	0.9	3.9	石核状。全ての稜が潰れる。
822	C 8	火打石	玉髄１	1.6	1.5	0.9	2.6	石核状。全ての稜が潰れる。
823	D 4	剥片	玉髄１	2.2	1.1	0.8	2.2	火打石を打った際に生じた、あるいは新たな角を作り出す際に生じた剥片。
824	A 5	火打石	玉髄２	3.8	3.4	2.6	32.6	石核状。全ての稜が潰れる。
825	F 4	火打石	玉髄２	2.9	2.5	1.6	15.1	石核状。全ての稜が潰れる。
826	D 7	火打石	玉髄２	2.2	2.0	1.1	4.2	剥片素材。全ての稜が潰れる。
827	C 7	火打石	玉髄２	2.5	1.7	1.5	5.8	石核状。全ての稜が潰れる。
828	E 5	火打石	石英	2.2	2.3	1.6	7.7	石核状。全ての稜が潰れる。
829	14号土坑	火打石	チャート１	2.8	1.4	1.8	8.0	石核状。全ての稜が潰れる。
830	B 5	火打石	チャート１	1.9	1.8	1.0	3.3	石核状。全ての稜が潰れる。
831	D 6	剥片	チャート１	1.1	1.1	0.5	0.6	火打石を打った際に生じた、あるいは新たな角を作り出す際に生じた剥片。
832	C 6	火打石	チャート１	1.2	1.0	0.8	1.3	石核状。全ての稜が潰れる。
833	C 5	火打石	チャート２	2.9	1.5	1.0	2.5	石核状。全ての稜が潰れる。
834	D 6	火打石	チャート２	1.7	1.6	1.2	3.1	石核状。全ての稜が潰れる。
835	61号土坑	火打石	チャート２	1.9	1.1	0.8	1.9	石核状。全ての稜が潰れる。
836	A 14	火打石	チャート２	2.3	1.3	1.1	3.5	石核状。全ての稜が潰れる。
837	11号土坑	石核？	黒（姫）	11.2	7.4	6.8	519.6	取り上げNo.SC11-7。一部に被熱による発泡あり。
838		近世墓台座	凝灰岩	30.7	34.4	10.0		第62図参照。

※最大長・幅・厚の単位はcm、重量はg

玉髄１　　玉髄２と同石材であり、半透明乳白色の部分が多い場合、玉髄１とした。
玉髄２　　玉髄１と同石材であり、白色の縞構造（石英脈か）が顕著なものの場合、玉髄２とした。
チャート１　鮮やかな青緑色や褐面の特徴から、徳島県大田井産と目される石材。
チャート２　産地の限定が現状で困難なチャートを一括した。

第39表　近世～近代石製品観察表

				SC4	SC9	SC10	SC11	SC12	SC14	SC17	SC22	SC23	SC24	SC26	SC27	SC29	SC30	SC34
磁器	肥前ほか	碗	丸碗3						1 14.6		2 35.7			1 68.8	4 50.8		2 32.3	1 27.8
			丸碗4												3 28.8			
			丸碗5									4 211.9			7 132.4		4 158.4	
			朝顔形碗								1 39.3				1 5.4			
			小丸碗				2 46.6		4 115.1		2 10.7				4 37.5		7 94.6	
			筒形碗						1 11.8						6 121.8		3 166.4	
			小広東碗												2 32.1			
			広東碗				1 34.7		10 79.2			4 46.3			1 16.1		9 269.8	
			端反碗		1 1.9				7 34.9				1 15.0		2 34.5	1 6.8	33 534.6	
			湯呑碗						16 272.2								24 482.0	
			コバルト										1 8.4					
			その他						9 33.8		1 6.0		3 12.5		8 68.2	2 10.0	11 62.7	
		皿	大皿															
			中皿															
			小皿2														5 147.2	
			小皿3											1 77.5			6 263.3	
			小皿4															
			小皿5															
			小皿6															
			小皿7						2 158.8						1 83.5		4 65.4	
			手塩皿															
			コバルト															
			その他		4 16.0				2 15.3						2 20.7	2 5.8	5 50.1	
		鉢	鉢1						1 3.5									
			鉢2															
			鉢3						1 6.9									
			擂鉢															
			コバルト															
		瓶	瓶1						2 126.5		1 13.3					1 20.4	4 128.6	
			瓶2															
			瓶3														1 14.1	
			瓶4															
			花生														5 84.9	
		薩摩焼口																
		香炉・火入							2 18.6						4 34.3		1 18.2	
		仏飯器									1 6.9				4 247.0			
		小杯															1 9.5	
		紅猪口													2 28.0			1 20.3
		紅皿																
		油壺										4 44.3					1 19.5	
		急須																
		戸車																
	瀬戸・美濃	碗	筒形碗															
			端反碗														1 11.3	
		皿	型打皿															
	その他								5 4.3	1 1.6			2 22.4				6 3.2	

陶器	肥前	碗																				
		皿																				
	関西	碗																				
		皿																				
		小杯																				
		蓋物																2 12.1				
		灯火具																				
		行平鍋																				
		袋物																				
	唐・朝鮮	擂鉢																				
	薩摩	皿																				
		土瓶	1 26.7			2 16.3			4 193.3		10 192.9			7 207.8		1 42.1			1 41.8		5 157.7			35 1078.0	
		片口鉢																				
		擂鉢																				
		鉢																				
		壺																				
		灯火具																			5 116.7	
		碗																				
		皿																				
		擂鉢																				
		油壺																				
		その他																				
	瀬戸・美濃	碗																				
		皿																				
		鉢																				
		徳利																			1 23.4	
		香炉・火入																				
	備前	皿																				
		鉢																				
		徳利																				
		壺・甕																				
	萩	碗																				
	その他	碗															2 9.1			2 14.0		2 5.2
		皿																				
		小杯																				
		香炉・火入																				
		鉢																				
		片口鉢																				
		擂鉢				1 16.6															1 12.1	
		土瓶									36 461.7									3 36.7	1 2.9	
		壺・甕												1 26.3		1 14.8				2 50.6		1 51.2
		袋物				1 0.9																1 1.8
		灯火具												1 9.3						4 104.8		
その他			2 6.6			2 4.8								2 116.6						1 58.8		1 1.4
土器・土製品			1 2.6			1 12.3					6 72.7											2 4.2
近・現代																						
遺構別総計			4 35.9	5 17.9		7 50.9	3 81.3		5 204.8		117 1647.6	1 1.6		20 778.5		13 344.6		10 82.2		3 188.1		70 1375.8		7 45.9		186 4056.9		2 48.1

第40表　近世～近代土器・陶磁器集計表（1）

左側：点数，右側：重量（g）

			SC40	SC61	SC65	SC66	SX1	SX11	近世陶	入口	土壙	その他遺構	遺構外	種別総計
磁器	肥前ほか	碗		1 64.8	1 23.4		3 62.2	4 15.7	1 32.3		14 535.8	8 102.9	229 7745.2	272 8812.3
		碗					1 3.3			1 5.2	6 98.2	1 8.7	106 999.1	118 1143.3
		碗									27 867.4	1 21.0	156 5527.2	199 6918.3
		朝顔形碗		1 6.1			1 28.5		2 76.9	1 6.4	2 126.5	2 14.3	302 4973.1	313 5278.5
		小丸碗		2 36.9			9 91.7			1 7.3	14 133.9	16 396.1	230 3740.9	291 4711.3
		筒形碗		2 3.8			4 115.0			1 8.9	7 57.5		213 2169.5	237 2654.7
		小広東碗					3 11.2				4 30.9		23 186.3	32 260.5
		広東碗		1 59.7		1 44.2					15 292.3	14 176.7	609 9880.5	665 10899.5
		端反碗	1 2.6	12 125.1		1 13.8	3 10.7		1 8.1	6 68.1	18 319.4	19 72.4	2968 30567.7	3074 31815.6
		湯呑碗		9 116.1	2 77.8					1 15.8	4 43.3	1 2.4	641 9367.3	696 10996.9
		コバルト				1 1.2				1 0.6		2 8.1	962 9127.7	967 9146.0
		その他	1 2.8	57 264.0		2 7.5	11 62.6		8 30.3	6 34.2		57 221.2	4613 29514.5	4789 30330.3
		大皿									2 69.9		45 1451.1	47 1521.0
		中皿					1 38.0						54 1366.4	55 1404.4
		小皿2					2 52.4						25 747.7	32 947.3
		小皿3									3 45.2		207 7732.5	217 8118.5
		小皿4					3 174.3			3 25.3	2 89.5		51 1825.3	59 2114.4
		小皿5											132 2415.8	132 2415.8
		小皿6											4 124.6	4 124.6
		小皿7		6 135.5							6 175.2	1 72.1	123 3526.8	143 4217.3
		手塩皿		1 13.2									86 1372.0	87 1385.2
		コバルト		5 225.7								6 450.3	462 6125.2	473 6801.2
		その他		3 5.7		1 10.3	1 11.3		1 12.9		14 122.2	18 83.8	1202 5405.3	1255 5759.4
		鉢1								1 9.8			110 1092.8	112 1106.1
		鉢2		2 108.1								1 3.1	115 1680.8	118 1792.0
		鉢3								1 44.2	1 14.0	3 17.8	98 922.0	104 1004.9
		擂鉢											18 241.9	18 241.9
		コバルト											32 943.5	32 943.5
		瓶1		14 94.9		3 10.5	2 64.9		2 22.8	2 24.6	27 574.9	12 54.3	1295 16167.8	1365 17303.5
		瓶2		1 10.3								5 17.7	57 456.7	63 484.7
		瓶3											15 235.0	16 249.1
		瓶4								1 9.1	4 31.9	3 68.0	85 1798.0	93 1907.0
		花生										1 18.1	21 622.3	27 725.3
		薬表猪口		2 10.2							2 29.8		17 228.6	21 268.6
		香炉・火入					2 19.4				3 40.0	1 2.6	106 1704.0	119 1837.1
		仏飯器					1 13.1				5 115.5		127 2335.4	138 2717.9
		小杯								2 3.4	2 23.0	9 26.6	385 1549.6	399 1612.1
		紅猪口		1 9.2			1 11.5				9 113.5		198 2100.2	212 2282.7
		紅皿											43 148.3	43 148.3
		油壺					1 3.0						57 480.4	63 547.2
		急須											2 5.1	2 5.1
		戸車											11 323.9	11 323.9
	瀬戸・美濃	筒形碗									4 56.1		65 849.6	69 905.7
		端反碗										2 7.9	102 855.5	105 874.7
		型打皿											21 88.0	21 88.0
	その他			7 17.2			3 31.1		1 6.5		3 18.0	10 13.2	794 2422.0	932 2539.5

陶器	肥前		碗																					3	43.5	3	43.5
			皿																					29	243.9	29	243.9
	関西		碗									3	32.9					1	12.7	7	64.2	8	23.1	202	1043.3	221	1176.2
			皿																					18	62.3	18	62.3
			小杯			2	6.8											2	6.7	2	4.5	2	3.0	139	412.5	149	445.6
			蓋物																			1	2.3	29	174.5	30	176.8
			灯火具																					9	37.6	9	37.6
			行平鍋																					55	600.7	55	600.7
			袋物	1	0.9	7	48.3					1	2.1					6	9.2	11	105.7	11	31.0	491	1946.0	528	2143.2
		堺・明石	擂鉢			4	394.8					1	49.1							8	404.7	10	840.9	528	31279.3	558	33458.5
	薩摩	苗代川	皿																	1	41.0			4	139.9	5	180.9
			土瓶			56	793.2					1	5.8					8	85.5	33	575.8	88	864.2	3378	50669.0	3630	54950.1
			片口鉢																					32	1164.7	32	1164.7
			擂鉢																					42	1359.6	42	1359.6
			鉢																					12	342.1	12	342.1
			壺																	3	66.7					3	66.7
			灯火具																	3	125.8			3	96.1	11	338.6
		龍門司	碗																	4	35.4			96	1293.2	100	1328.6
			皿																					8	321.6	8	321.6
			擂鉢																					10	128.4	10	128.4
			油壺																					5	199.8	5	199.8
			その他																			1	30.1	6	22.0	7	52.1
	瀬戸・美濃		碗																			1	2.2	2	10.5	3	12.7
			皿																					1	13.5	1	13.5
			鉢																					62	3863.3	62	3863.3
			徳利			1	5.2															2	48.4	166	3040.3	170	3117.3
			香炉・火入																	2	74.1			4	77.0	6	151.1
	備前		皿																					6	13.0	6	13.0
			鉢																					5	254.6	5	254.6
			徳利			2	369.8																	12	434.7	14	804.5
			壺・甕																					21	806.7	21	806.7
	萩		碗															1	25.1	8	112.5	2	2.2	97	890.2	108	1030.0
	その他		碗			7	31.4	1	1.0			1	62.4							14	79.4	8	51.7	325	2601.9	362	2856.1
			皿																					35	448.5	35	448.5
			小杯																					7	98.4	7	98.4
			香炉・火入																					27	413.0	27	413.0
			鉢															6	88.6			1	17.5	179	3527.9	186	3634.0
			片口鉢																					26	664.0	26	664.0
			擂鉢																			12	977.0	202	7972.3	216	8978.0
			土瓶			3	24.5	1	56.3	1	2.3	8	72.1					3	6.1	14	191.8	9	53.1	800	7419.0	879	8326.5
			壺・甕							1	11.4					6	138.5	1	36.8	81	2938.1	50	4585.8	868	34323.8	1012	42177.3
			袋物			19	211.7									2	13.6	2	37.0	13	241.1	23	163.7	1122	12226.6	1183	12896.4
			灯火具																	4	74.4	1	4.8	5	64.9	15	258.2
その他				1	1.2	4	7.6			2	1.2	33	1523.6							4	27.2	8	120.3	382	3618.3	442	5487.6
土器・土製品						5	45.7					4	21.3			17	117.9	3	65.6	41	561.5	41	653.6	1264	13897.3	1385	15454.7
近・現代																						19	359.3	275	3239.4	294	3598.7
遺構別総計				4	7.5	237	3245.5	5	158.5	13	102.4	104	2573.5	4	15.7	41	459.8	61	636.2	451	9749.8	491	10693.5	28209	375262.2	30072	411864.7

第41表　近世～近代土器・陶磁器集計表（2）

左側：点数，右側：重量（g）

	AN	AL	AK	AJ	AI	AE	AD	AC	AB	AA	A	B
3											216 1413.2	199 1339.7
4									38 208.1	276 1706.6	711 6885.0	377 4217.2
5								62 627.0	864 14282.2	480 5476.7	1769 34131.7	959 19271.7
6							218 1604.1	316 3163.6	187 3429.6	306 2222.6	454 9254.0	188 980.8
7							6 203.0	19 336.6	56 433.3	68 579.4.1	406 6417.3	370 2935.0
8		7 105.8									66 453.9	125 1324.6
9			4 66.5									
10												
11												
12				2 139.0	5 17.1				13 60.7		2 4.3	
13					2 13.6	3 39.5		3 10.8	5 11.9		1 2.2	16 47.1
14	6 26.4							14 40.7	3 4.0	3 8.6	12 56.6	5 19.8
15					1 2.6	2 2.7	6 11.1	2 24.4	9 33.6	2 4.2		26 65.7

	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
3	356 2396.4	110 691.5	295 2402.3	67 742.6	30 1014.8	129 2782.7						
4	584 9694.6	578 8532.9	124 1830.9	202 2592.5	119 801.2	374 5600.2		50 941.5	80 1153.7	2 3.4		
5	56 485.3	463 8096.4	388 5812.5	72 836.9	117 715.7	47 1514.8	146 3258.9	292 5699.8	108 1606.5	59 935.1	26 233.5	53 931.1
6	414 2693.1	606 6751.9	117 821.0	167 843.3	51 322.6	58 984.7	111 1057.0	61 1032.5	340 4492.6	63 2411.0	121 1636.6	224 2601.6
7	310 1763.5	609 4367.7	106 772.3	27 126.2	91 483.7	50 1361.2	99 1406.6	242 3533.3	906 11619.5	110 2026.9		
8	418 2959.6	424 3602.8	290 1562.8	147 945.2	58 376.3	101 490.1	52 470.1	232 4016.7	300 4706.1			
9					77 910.9	4 163.3						
10												
11												
12	4 12.9	3 15.7		7 41.7	18 88.0	87 2201.9						
13				44 1169.4	48 654.1	139 2806.1						
14				326 5053.6	553 12164.2	692 16869.0						
15												

第42表　グリッド出土陶磁器　平面分布表

グリッド総計　22769点
314698.9g
左：点数、右：重量（g）

	AN	AL	AK	AJ	AI	AE	AD	AC	AB	AA	A	B
3												
4												
5									11 1.10	1 0.05	59 14.20	161 26.70
6										6 3.80	399 84.50	40 17.55
7									3 0.40	56 8.20	11 1.05	
8											2 0.20	4 0.25
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15									3 0.16			

	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
3	5 0.20	36 4.80	11 0.70	2 0.25	52 8.70							
4	242 38.45	71 13.65	96 13.65	7 0.80	31 4.75			4 1.00		1 0.50		
5	186 18.95	75 8.45	102 16.25	22 2.00	29 2.00	15 2.00	293 42.90	54 8.30	83 13.60	5 0.50	5 0.50	
6	34 3.45	257 34.25	88 11.50		2 0.05	11 1.50	45 3.50	699 115.50	106 15.70	30 5.10		72 17.75
7	24 1.10	318 38.27	276 26.46		37 2.00		215 24.60	474 79.80	526 81.00	8 2.00		
8	7 0.80	47 6.05	20 1.00	13 0.50		12 0.50		174 22.91	88 9.00			
9					16 3.50	70 16.70						
10												
11												
12				1 0.05	3 0.15	10 0.70						
13				5 0.25	40 5.40	250 37.60						
14				1110 119.70	1647 194.30	696 126.90						
15												

第43表　グリッド出土近世瓦　平面分布表

グリッド総計　9838点
1372.6kg
左：点数、右：重量（kg）

第８節　その他の遺構と遺物

この節では帰属する時代について特定しづらい遺構・遺物について報告することとする。よって前節までに報告した時代以外の遺構・遺物という意味ではないことをお断りしておく。

１．遺構

【１・２号土坑】（第56・93図）

長径が約５ｍ，短径が約１ｍという極端に縦長のプランを有する。いずれも東端が丸みを帯び，底面から緩やかに立ち上がっている。軸がやや異なり，西半では接触しているが，断面の観察から２号→１号の新旧関係が判明している。

１号は底面に炭化材や焼土の広がりが確認できたほか，埋土中でも炭化物層・焼土層が幾重にも重なっており，繰り返し火が焚かれたことが分かる。また長大な土坑の全体ではなく，部分的に掘り返して用いたようである。一方の２号は底面のみが焼けており，そのような痕跡が確認できなかった。

これらの遺構は近世に遡る可能性もあるが，①湯呑碗が出土した30号土坑を切っていること，②１号底面の炭化材がやや新しそうな質感を残していたこと，③発掘作業員から戦後まではこのような穴で炭を焼いていたとの聞き取りを得たこと，などから近世から現代のいずれかに属する炭焼きの穴であるとの結論に達した。

【29号土坑】（第56・93図）

30号土坑の掘り方を切っている。１・２号と比べると幅広で寸詰まりの感があるが，主軸方向や形態・埋土の特徴は近似するため同じ性格の遺構と判断される。明治10年鋳造の竜一銭銅貨が出土した。

【第３号性格不明遺構】（第40・94図）

現時点で最も問題を孕んでいる遺構であり，今後も検討を続ける必要を感じている。

Ａ区平場Ｃ・Ｅ間の段切りにかかっており，５号性格不明遺構と８号性格不明遺構との間に位置する。

段切りのカット面に焼土塊が露出しており，断面逆台形の落ち込みのような箇所が見えた。これにより周辺を精査したところ，平場Ｅでも楕円形の平面プランが検出されたため，サブトレンチにより土層を確認しつつ掘り下げた。

埋土中の３～５層は，その質が基本層序のＶｂ層に酷似しており，かつレベル的にもほとんど差がない状態で，精査中に地山の可能性を考えたほどであった。ただし全体的に焼土粒子などを含んでいたため掘り下げを続けたところ，５層中に多量の焼土ブロックとそれに伴う炭化材を検出した。

１層が５号性格不明遺構の埋土と類似していたため，古墳時代遺構の可能性があるとみて炭化材の年代測定を試みたところ，全く予想外の3630±40年ＢＰとの結果が出た。

この年代をとるとなれば，概ね縄文時代晩期にあたることとなる。本遺跡からは少量の晩期土器も出土しており，そうした点で矛盾はないが，当該期に類例を見出すことはできておらず，結論は留保せざるを得ない。

２．遺物

【土錘】（第95図839～841）

３点を選択して掲載した。土錘はこの他に数点出土しているが，石錘と比較して圧倒的に数量が少なく，近隣での使用や保管は考えにくい。

839は大型のもので，孔の直径も２cm以上ある。

このためかなり太い縄を通すと思われ，網であるならば相当大型の可能性が高い，棒状のものに粘土を巻き付けて成形したと考えられる。

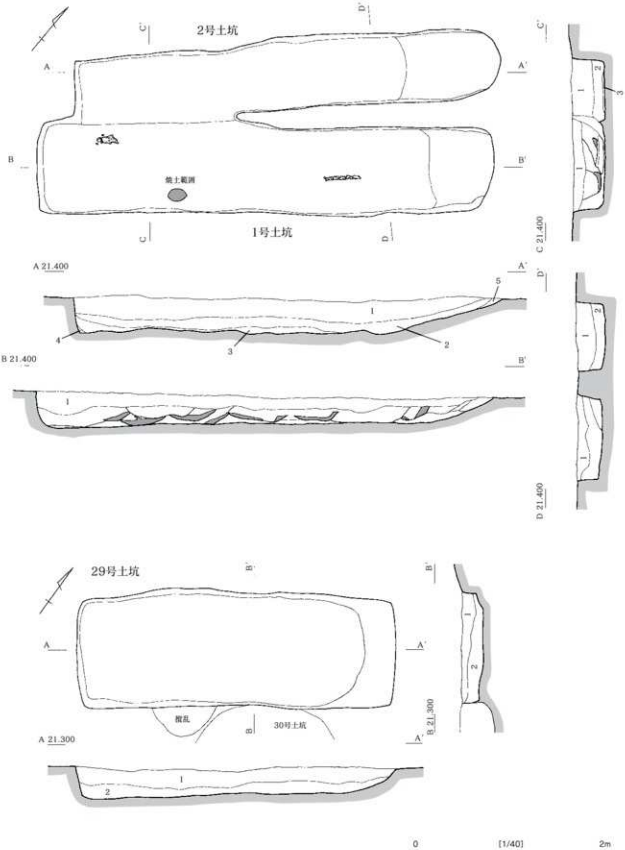
840も839と同様な成形によるが，ちょうど１／２程度のサイズであり，用途は異なっていたと推定される。

841は最も小型の土錘で，5.6ｇしかない。形状・サイズからすると，投網に用いられたものであろう。

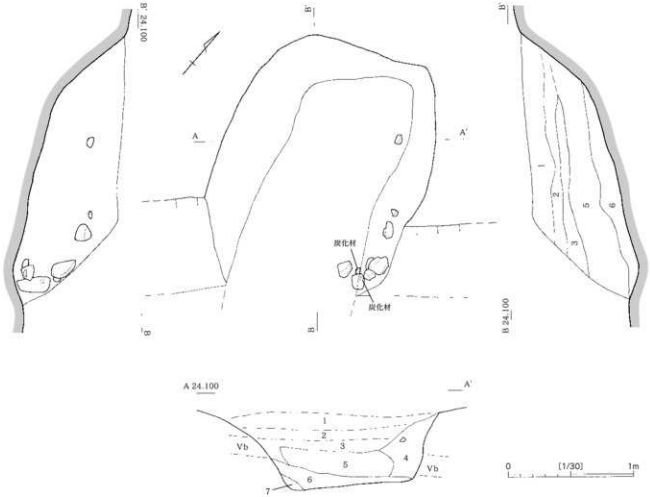
【玉類】（第95図842～844）

842は滑石製で，両端を欠損しているが概ね環状を呈するようである。また断面形は面取りによりやや角張るものの，楕円形としてよいものである。こうした残存部分の特徴から，Ｃ字状を呈する縄文時代の玦状耳飾りが欠損したものと推測される。

843は空色を呈するガラス玉で，側面には縦長の窪みが６箇所あり，上面から見ると花形を呈する稟



第93図　1・2・29号土坑実測図



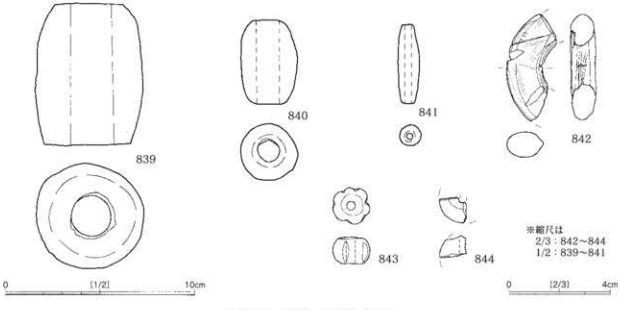
第94図　3号性格不明遺構実測図

【3号性格不明遺構】
1　暗褐色土(10YR3/3)　5号性格不明遺構の7層に類似する。しまりやや強く、粘性弱い。
2　暗褐色土(10YR3/4)　1層にやや類似するが、土色がやや赤みがかる。3cm以下の黒褐色土ブロック(10YR2/2)・1mm以下の焼土粒子を微量含む。
3　黒褐色土(10YR2/2)　80～90%が左記の色調を呈するブロックで、隙間に2層の土が入っている。しまり非常に強く、粘性弱い。
4　暗褐色土(10YR3/4)　土質は5層に似るが、10cm以下の焼土ブロックや焼土粒子を多量に含む。
5　黒褐色土(10YR2/2)　5mm以下の焼土粒子を全体に含むほか、3mm以下の炭化物粒子も見られる。しまり非常に強く、乾燥すると固結する。
6　暗褐色土(10YR3/4)　焼土・炭化物粒子をごく微量含む。しまりやや強く、粘性やや強い。
7　褐灰色土(10YR4/2)　左記の色調を呈するブロックからなり、その隙間に6層の土が入っている。地山の可能性もある。

【1号土坑】
1　暗褐色土(10YR3/4)　5mm以下の焼土粒子、1cm以上の炭化材を約10%含む。しまりあり、粘性なし。
※これ以下は1層の土と炭化物・焼土粒子からなり、炭化物の含有量により細分される。
またアミかけ部分は焼土ブロックの層である。

【2号土坑】
1　1号土坑の1層と同質。
2　黒褐色土(10YR2/3)　1層より大きな焼土粒子・炭化材を約20%含む。しまり・粘性やや弱い。
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　70%が焼化物で、10%は灰の層。底面が焼土化している。しまりあり、粘性なし。
4　黒褐色土(10YR2/3)　2層とほぼ同質だが、粘性に富み、含まれる炭化物が多い。
5　焼土層

【29号土坑】
1　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物・焼土・褐色土粒子を少量含む。しまり・粘性弱い。
2　黒褐色土(10YR2/3)　1.5cm以下の炭化物・焼土・褐色土ブロックを1層より密に含む。しまり・粘性あり。



第95図　土錘・玉類実測図

No.	出土位置	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
839	G8	土錘	粘土	7.6	5.8	5.6	213.1	
840	D3	土錘	粘土	4.4	3.0	3.0	42.8	
841	B区　Ⅳc	土錘	粘土	4.2	1.1	1.1	5.6	取り上げNo.Ⅳc－803。
842	A6	玦状耳飾り？	滑石	(4.25)	1.45	1.00	9.7	
843	1号竪穴？	臍玉	ガラス	1.50	1.45	1.05	2.9	取り上げNo.SA1-45。
844	D3	丸玉	不明	(1.10)	(1.10)	－	1.1	

第44表　土錘・玉類観察表　※最大長・幅・厚の単位はcm、重量はg

玉である。表面は風化して磨りガラス状になっているため白っぽく変色しているが、本来の色調はかなり鮮やかであったと思われる。

1号竪穴建物跡のところで触れたように、出土状況がやや不明瞭であるためここで扱った。

844は鮪色がかった半透明の石材を用いた玉である。ほぼ1／8しか残存していないが、表面は丹念に研磨されており非常に平滑である。本来は直径2cm程度の球状を呈するものと考えられる。

【サンゴ】（図版30－2）

近世屋敷の北東部一角、土塁の裾付近から直径30～40cmの大きなサンゴがまとまって出土した。その他にも10cm前後の比較的小さな塊は、屋敷地内に散在するように埋もれていた。

化石化していない現世のサンゴで、全体の形状やサンゴ個体の特徴より、ほとんどがオオスリバチサンゴ（*Turbinaria peltata*）で、タカクキクメイシ（*Montastrea valenciennesi*）およびその他のスリバチサンゴ属が少量混じっているとの同定結果を得た。いずれも甘向潮沖合に生息する可能性が高い種で、台風などの影響で打ち上げられることも十分ありうるようだが、上述した種の偏りからすると、採取にあたり何らかの選択がなされたらしい。

サンゴは全て白色化しており、見栄えがよいとは言い難いが、大正元（1912）年に川南・都農・美々津の沖合で32貫、当時の価格で11,000円のサンゴが採取されており、また大正9（1920）年に通山浜の沖合で採取されたサンゴのうち、白色の相場は20円だったとのことから、装飾品等の原材料として採取された可能性もある（川南町1983）。

第Ⅴ章　考察

第１節　縄文時代

【A区早期包含層の堆積について】

第Ⅳ章第１節で触れたように、K-Ah（Ⅴ層）より下層の掘削にかかると、散礫が調査区一面に広がり、これを除去していくと集石遺構が現れた。先行トレンチの断面観察などから散礫を含む層をⅥb層とし、散礫の消えるレベルから下位をⅥc層と認定したところ、精査により集石遺構が検出されはじめた。よってⅥc層上面が大半の集石構築当時の地表面に「近い」と理解している。

ただし隣接する集石遺構の検出レベルが数十cm異なる場合も多く（35・38号集石遺構間の30cmなど）、これが時期差あるいは構造差に由来する可能性が高いことには注意を要する。こうした問題については次項以下で検討したい。

出土遺物については、まず貝殻文系土器がⅥc層に集中する傾向にあり、Ⅵb層以上では少量しか出土していない。一方で押型文系土器は粗大な楕円押型文を有するものがⅥc層に含まれる。

最終的にⅥ層は５枚に細分され、最大で1.3ｍもの堆積があった。周辺遺跡と比較しても異例の厚さであり、いかなる成因によるものかが問題となる。

ここで丘陵上に位置する野首第１遺跡（県道）の状況について見ると、早期に属する遺構として土坑59基（炉穴を含む）、集石遺構51基があり、散礫は土坑・集石遺構にやや後出し、早期後半とされる。各遺構の帰属時期は必ずしも明確ではないが、貝殻文系土器が掲載遺物の中にはほとんど確認できないことからは、間接的ではあるが押型文系土器の出現以降にこれらが作られた可能性を想定しうる。

上記の点を総合すると、Ⅵc～Ⅵe層は押型文系土器出現前後（早期中頃）までの自然堆積と一部遺構（炉穴等）の構築に伴う排土からなり、Ⅵa・Ⅵb層はそれ以降（早期後半）の自然堆積や大半の遺構（炉穴・集石等）構築に伴う排土および集石遺構の廃棄礫からなると考えられる。

【集石遺構の構造について】

第６・７表に示したように比較的残存良好であった集石遺構のうちから11基を選択し、礫の石材・サイズ別に計量を行った。もとより母体数が少数であるという限界はあるが、礫の総重量（配石以外）と形態による大まかな類型化が可能ではないかとの見通しを得た。

具体的には以下のようなものである。

30kg級（７・10号集石遺構）
　形態はＢ類。礫は粗密が認められない。
60kg級（20・32号ｂ集石遺構）
　形態はＣ類だが、貧弱な配石。
100kg級（６・８号集石遺構）
　形態はＢ類だが、大型。下一ナツ形に礫が分布。
150kg級（26号集石遺構）
　Ｃ類。花弁状配石を持つ。礫層の直下に配石。
200kg級（32号ａ集石遺構）
　形態はＣ類だが、貧弱な配石。
300kg級（36号集石遺構）
　Ｃ類。花弁状配石、深い掘り込みを持つ。礫層の下に土層があり、大きな炭化材を含む。

これと検出層位・出土遺物や放射性炭素年代の測定結果を合わせると、次のような傾向が看取される。

まず30kg級のうち７号は早期最下層の褐色土（第12図７層）にパックされており、最も古手の可能性が高い。掘り込みの中に扁平礫を敷き詰めており、Ａ区で検出された30号も形態的に類似する。

次に100kg級の２基はいずれも7500～8000年BP頃に収まり、うち１基には手向山式の可能性がある土器（第20図52）が流れ込んでいる。これらは掘り込みが比較的浅く、礫が下一ナツ状に分布することから、調理施設とするならば加熱した礫を積み上げて被覆し、調理後に礫の山を崩して中身を取り出すという方法を採った可能性がある。

また花弁状配石を持つものも礫の総重量や土層を介在するかで150kg級と300kg級の二者に分離でき

る。29号集石遺構の礫は100kg余りであるが、27号集石遺構の事情と同様に構成礫の一部を散礫と共に除去した可能性があり、150kgに含めておきたい。年代的には二者ともほぼ8000－8500年ＢＰに収まるが、35号集石遺構の7670±40年BPとかなり新しい年代が出ている。後者から検出される炭化材は木目が直交する傾向にあり、良好な事例としては川南町尾花坂上遺跡ＳＩ21がある（宮崎県埋蔵文化財センター2005）。こうした残存状況からは礫を加熱するにあたり、配石上に木材を井桁状に組み、その上に礫を積み上げて下から加熱したと推定される。

また石材について見るならば、計測した11基中、５基が点数：尾鈴山酸性岩類＜砂岩、重量：尾鈴山酸性岩類＝砂岩。つまり尾鈴山酸性岩類が大きい傾向にある。サイズ別の分布もこれに符合する。

またある意味当然とも言えるが、配石には15cm以上の礫を用いており、したがって配石は尾鈴山酸性岩類が多数を占める結果となっている。逆に配石以外の構成礫は15cm以下がほとんどで、15cm程度を境に使い分けが存在した可能性がある。

礫全体では尾鈴山酸性岩類と砂岩の量がほぼ拮抗し、ホルンフェルスがやや少ない。これと段丘礫や河岸礫の組成とを比較すれば供給元を明らかにしうると思われる。特に尾鈴山酸性岩類には10kgを超えるものが多数含まれており、集石構築につぎ込む労力を考える上でも重要な問題である。

【集石遺構の検出面と構築時期について】

上記の考察とも密接に関わる問題であるが、通常は集石遺構の帰属時期を推定するために平面的な精査による検出層位を用いることが多い。つまりある程度大きな視点で堆積層を等しく掘り下げていき、同じ程度の層位で検出された集石遺構をほぼ同時期とみなしていると考えられる。

ところが今回の調査で、たまたま土層観察のベルトにかかった集石遺構が複数あり、さらにそのうちの何基かは炭化物が出土するという幸運な状況であった。これらの分析から重要な知見が得られたので、以下で述べておきたい。

Ｂ区で検出された８号集石遺構は、７号集石遺構と一緒にベルトにかかったため、地形と共に断面を記録した（第12図）。これによると、８号集石遺構は基本層序Ⅵ層（早期包含層）の中でもＭＢ０の最下層に相当するレベルで構築されたことになっている。このため年代測定結果を得るまでは、早期でも早い段階のものと考えていた。

ところが礫の隙間から取り上げた炭化材による放射性炭素の年代は7800±50年ＢＰと、集石遺構でも最も新しい方に属する数値となり、同形態の６号から手向山式土器と推定される土器が出土している点からも、妥当な結果と考えられる。

そうした目でもう一度第12図を見直すと、断面中でも８号集石遺構の上方に何点かの礫が入っている。おそらくこれらの礫も集石遺構に関わるもので、掘り込みももう少し深かったと判断されるのである。

Ｂ区の集石遺構は黒褐色土（ＭＢ０）に掘り込まれており、埋土と地山の差異が微妙であることから、かなり意識していないと断面でも認識できないということになる。そうした場合に手がかりとなるのは礫の検出であるが、縄文時代早期の包含層は少なからず礫を含んでいるものであるし、もし掘り込みの上部まで礫が充填されていなかったならば、礫の密集域に到達してしまっては既に落としすぎていることになる。またＡ区のように散礫が一面に広がる場合にも区別が極めて困難で、散礫と共に構成礫まで除去する恐れがある（例：第16図35号集石の断面）。

よって検出面＝構築面のケースが少なからず存在し、平面的な検出層位（あるいは場合によっては断面観察を併用しても）から集石遺構の帰属時期を求めるのには危険が伴い、出土遺物や年代測定との相互検証が必要であるという点を指摘しておきたい。

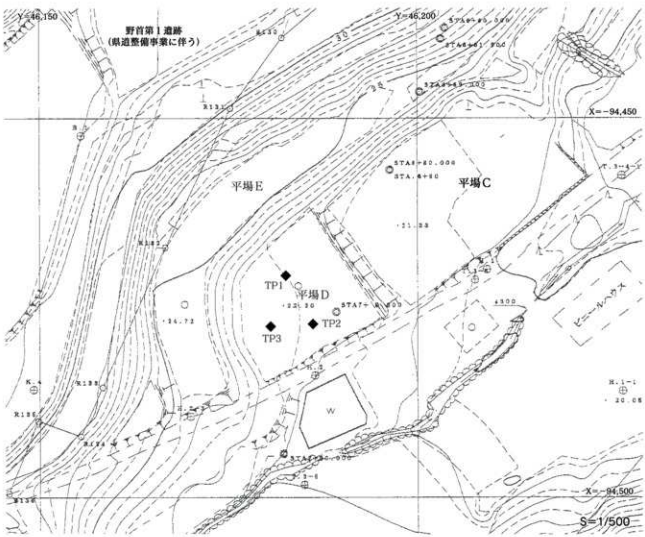
こうした問題は清武町内の調査事例においても指摘されている。（清武町教育委員会2004など）

付け加えるならば、年代測定の試料採取位置によっても測定結果が異なる可能性があるため（35号集石遺構の事例など）、その炭化物が本当に集石遺構に伴うものかの確認も不可欠である。

【集石遺構の季節性について】

26号集石遺構から出土した炭化物中に種実のような形状をしたものが含まれていた。

これらについて分析を試みたところ、「芽」（冬芽）



第96図　TP1～3の設定位置

の可能性があるとの結果が得られた．遺存状態が悪く，残念ながら科レベルの同定もできなかったが，この遺構からは炭化材も出土しており，そちらはコナラ属コナラ節と同定されている（附載参照）。

冬芽は6月頃から形成されはじめ，8月頃には完成するとされる，もちろん樹種によっても差があると思われるが，残存良好な資料であれば形成の度合いである程度の季節を絞り込めると期待される。ドングリなどの種実ともに注目する価値はあろう。

なぜなら本遺跡の集石遺構に限ってみても，年代測定結果の幅だけで1000年以上の開きがある。周辺遺跡と合わせて数百基の集石遺構が検出されており，さらに滅失した集石遺構も数多いと推測されるとはいえ，日常的な調理施設としては数が少なすぎるのではないかとの思いを禁じ得ない。

集石遺構の季節性について検討する必要を感じる所以である。

【微細遺物について】

第Ⅰ章で触れたように，本遺跡は調査区の大半が谷部に立地し，北側斜面～谷底の一部にあたるA区平場Dでは二次堆積K-Ah（基本層序Ⅴ層）が数十cm認められた．調査中に雨が降ると，この層の上面に砕片が浮き上がり，膨大な量の微細遺物が包含されていることが判明したが，それらを通常の発掘調査により全て取り上げることは困難な状況であった。

そこで以下のような調査を考案・実施した。調査の目的は①当センターの主要な掘削用具の一つであるネジリ鎌（以下，ネジリとする）による遺物検出

洗浄抽出

大きさ / 石材	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	石材別小計
姫島産黒曜石	177	57	1	4	1	240
西北九州産黒曜石	62	15	1	0	0	78
チャート	51	40	7	1	1	100
ホルンか安山岩	1	11	1	2	3	18
ホルンフェルスほか	13	17	1	1	3	35
赤色チャート	0	2	0	0	0	2
水晶	0	0	1	0	0	1
縄文土器	0	1	9	18	14	42
大きさ別小計	304	143	21	26	22	516

ネジリ検出

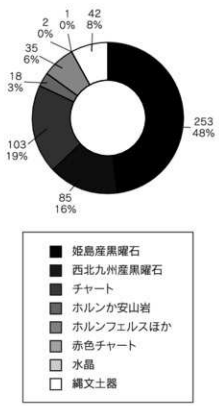
大きさ / 石材	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	石材別小計
姫島産黒曜石	4	5	2	2	0	13
西北九州産黒曜石	2	3	1	1	0	7
チャート	2	1	0	0	0	3
大きさ別小計	8	9	3	3	0	23

	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	全体
大きさ別検出率 (%)	2.56	5.92	12.50	10.34	0.00	4.27

	姫島	西北九州	チャート
石材別検出率 (%)	5.14	8.24	2.91

第45表　TP1出土遺物

グラフ1　TP1石材組成



洗浄抽出

大きさ / 石材	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	石材別小計
姫島産黒曜石	387	123	12	3	3	528
西北九州産黒曜石	90	38	1	0	0	129
チャート	147	22	5	1	0	175
ホルンフェルスほか	18	13	0	1	0	32
縄文土器	0	15	26	32	21	94
土師器	0	9	4	4	6	23
大きさ別小計	642	220	48	41	30	981

ネジリ検出

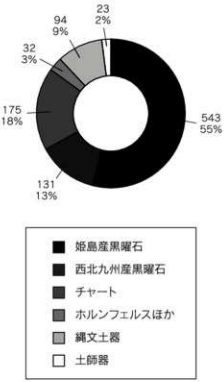
大きさ / 石材	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	石材別小計
姫島産黒曜石	0	10	1	2	2	15
西北九州産黒曜石	0	1	0	0	1	2
大きさ別小計	0	11	1	2	3	17

	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	全体
大きさ別検出率 (%)	0.00	4.76	2.04	4.65	9.09	1.70

	姫島	西北九州
石材別検出率 (%)	2.60	1.53

第46表　TP2出土遺物

グラフ2　TP2石材組成



洗浄抽出

大きさ / 石材	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	石材別小計
姫島産黒曜石	114	50	4	4	2	174
西北九州産黒曜石	152	70	4	2	1	229
南九州産黒曜石	1	0	1	1	0	3
チャート	29	28	0	3	1	61
ホルンフェルスほか	7	14	1	1	1	24
縄文土器	0	1	6	12	14	33
土師器	0	0	0	1	0	1
大きさ別小計	303	163	16	24	19	525

ネジリ検出

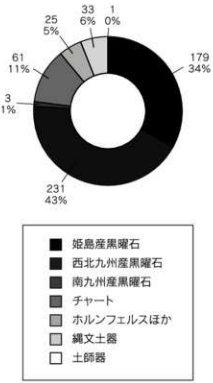
大きさ / 石材	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	石材別小計
姫島産黒曜石	1	2	1	0	1	5
西北九州産黒曜石	0	0	2	0	0	2
ホルンフェルスほか	0	0	1	0	0	1
大きさ別小計	1	2	4	0	1	8

	~4mm	5mm~9mm	10mm~14mm	15~19mm	20mm~	全体
大きさ別検出率 (%)	0.33	1.21	20.00	0.00	5.00	1.50

	姫島	西北九州	チャート
石材別検出率 (%)	2.79	0.87	4.00

第47表　TP3出土遺物

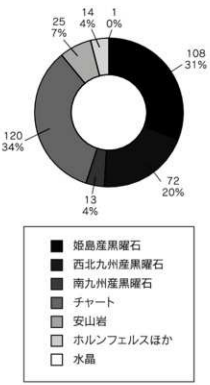
グラフ3　TP3石材組成



石　材	掲載	非掲載	石材別小計
姫島産黒曜石	11	97	108
西北九州産黒曜石	14	58	72
南九州産黒曜石	5	8	13
チャート	15	105	120
安山岩	7	18	25
ホルンフェルスほか	6	8	14
水晶	1	0	1
総計	59	294	353

第48表　石鏃集計表（未成品・破損品含む）

グラフ4　石鏃の石材組成



率の算定（調査方法に関わるもの）、②Ⅴ層全体における微細遺物包含量の類推（遺跡の評価に関わるもの）の二つである。

調査は以下の手順を採った

①任意の場所に1×1mのテストピット（以下、TPとする）を3箇所設定（第96図）。

②TP1箇所につき作業員1名を配置し、掘削に当たらせる。

③作業員には出土砕片を見せ、ネジリによる最も細かい掘削（土を薄く削るように掘る）を指示。

④掘削するのはⅤ層のみとし、排土は全て洗浄を行い、微細遺物を抽出する。

⑤ネジリでの掘削により検出された遺物と、洗浄により抽出された遺物とを比較。

⑥大きさ別の検出率などを算出して、ネジリによる掘削の特性を把握する。

なお掘削は2003年6月12日から数日間、洗浄・選別は降雨による作業中断時を利用して実施した。

掘削の結果、全TPが約20cm下げた時点でⅤ層を抜けた。土量が土嚢で17・15・16袋とほぼ同じであったことも、層厚が等しい裏付けとなる。よって1m×1m×0.2m＝0.2m³（200,000cc）を調査対象の土量（掘削前）と考えてよい。

これらの排土について、作業中断時を利用して洗浄（作業員が担当）・選別（調査員が担当）を行った。洗浄には現場の湧き水と洗濯ネットを使用した。ネットは1mmメッシュを用いたため、より小さい遺物は通り抜けた可能性もあるが、現実的に1mm未満の遺物について選別・石材鑑定を行うことは困難であり、ここでは考慮していない。逆に言えば、1mm以上の遺物はほぼ100％抽出したと判断している[1]。洗浄後には遺物と共に多量の重鉱物が残るため、乾燥後に肉眼選別し、遺物についてはさらに肉眼による石材鑑定を行った[2]。

抽出した遺物について、最大長を基準として機械的に振り分けたのが第45～47表である。TP2・3に土師器が少量含まれるが、上層の残存か近接する古墳時代遺構の関係によると考えられ、Ⅴ層自体はほぼ縄文時代早期～前期の遺物包含層になっている。

水洗により抽出した遺物は半数以上が5mm未満で、最小は1.5mmという微細な砕片であった。これらを全て通常の調査で検出するのは難しい。

それを考慮した上でも、検出率は1.5～4.3％と予想以上に低かった。ただしTP1・2については、検出遺物のうち半数以上が10mm未満であり、微細遺物にも注意が向いていることは間違いない。実験掘削は数日に渡っており（そもそも本調査はほとんど1か月以上である）、単純作業であるネジリでの掘削を通じて集中力の維持が困難ということが想定される。微細遺物出土箇所の掘削に当たる場合は、頻繁に見回って繰り返し指示を出すことが必要と考える。

また重要な問題として、いずれのTPでも土器を1点も検知できていない、ということがある。これが検出率を押し下げている主な要因である。ちなみに土器を加算しなかった場合、一部の例外を除き、大きくなるほど検出率が上昇するという自然な傾向が認められる。特にTP1の15mm以上～20mm未満で27.3％、TP3の10mm以上～15mm未満で28.6％に達し、宮城県田柄貝塚で求められた検出率31％（宮城県教育委員会1986）や、里浜貝塚での「通常の発掘では1cmの大きさを目安にして遺物の回収率は約5割である」（東北歴史資料館1986）という知見に近づく、結論として「土器が目に付きにくい」ということになるが、石器と異なって光ったり、ネジリで引っかけても音がしないことが影響していると考えられる[3]。

次に遺跡の評価に関わる部分であるが、各表を比較した時にTP1とTP3とは「総数」および「大きさ別小計」の値が近似するのに対して、TP2はそれぞれの倍に近い値を示していることが分かる。ここで第96図において地形とサンプリング位置との関係を見ると、TP1・3はほぼ同一の等高線上に乗ることに気づく、つまり上述した格差の要因は、斜面という立地に影響された遺物の移動（流れ込み）にあると推測される。特に5mm未満の遺物について格差が顕著であり、微細な遺物ほど大きく動いている可能性が高い。

続いて各ＴＰの石材別比率を表したものがグラフ１～３である。ＴＰ３で西北九州産黒曜石が突出するが、全体としては姫島産黒曜石がほぼ半数を占め、チャート・西北九州産黒曜石が続き、３種あわせると８割強に達するという状況が共通する。

この傾向は、グラフ４に示した本遺跡における石鏃の石材組成、また野首第１遺跡（県道）における石鏃はじめ小型石器の石材組成とも類似することから、両遺跡で出土した上記石器類に関係するものが数多く含まれていると推測される[4]。

さらに野首第１遺跡（県道）の層序において、K-Ahが局所的に堆積すること、ＭＢ０の堆積もほとんど認められないことから、その直下に位置した緩斜面であるＡ区平場Ｄへと土壌が移動した可能性を指摘できる[5]。これらの知見は、両遺跡のいずれも縄文時代早期～前期に属する石器ブロックを検出していないが、両遺跡内でかつて石器製作が行われたことを示唆するものである。

また平場Ｄの面積が約280㎡であることから、試みにＴＰ１・３における出土遺物数の平均値である536点を乗ずると、150,080点という数字が得られる。不確定要素が大きく信頼性に乏しい部分はあるが、少なくとも数万点オーダーの微細遺物出土量が見込まれ、台地上を中心として石鏃・石匙などの製作が頻繁に行われたことを示すのは可能であろう。

先述した里浜貝塚では、「手掘りサンプリングでは悉皆サンプリングに比較して、おおむね１cm未満の大きさの動物遺体が欠落」することが指摘されている（東北歴史資料館1985）。まずはこの指摘を念頭に調査を進める必要がある。

そして一旦、微細遺物の存在が判明したならば、効率的かつ全体を類推可能なサンプリング方法を検討すべきである。方法は多様多種であるが、「サンプリングの際の大きさの基準によって石器の種類や組成が異なることになる[6]」（東北歴史資料館1984）ため、遺跡の評価を大きく左右する問題と言え、その遺跡に最も適した方法を選ぶことが重要である。

最後に要点をまとめておきたい。

①微細遺物（特に５mm未満）は、ネジリで掘削してもほとんど検出されない可能性がある。

②よって、ネジリで掘削したことを根拠として、微細遺物の有無を判じるのは危険である。

③同様に、ネジリで検出した遺物のみで、石器製作や石材利用の問題を論じるのも難しい。

④上記①~③の問題に対しては、サンプリング土壌の洗浄による遺物抽出が有効である。

⑤ただし安易なサンプリングは調査・整理の工程を圧迫するため、方法・採取量は吟味すべき。

註

(1) 東北歴史資料館が実施した里浜貝塚の発掘調査においても、「１mm未満の遺物は採集していないので存在しないが、２mm未満で１mm以上のチップが明らかにそれより大きなものに比べて極端な減少傾向を示すので、本来的に１mm未満のものはきわめて少ないと予想」されている（東北歴史資料館1984）。

(2) 肉眼選別によるため、あまりに微細なチップ（およそ２mm未満のもの）については、石材を識別している可能性も否定できないが、大勢は動かないものと考える。

(3) この検出格差は、石器に限っても起こりうる現象である（例：姫島産黒曜石より西北九州産黒曜石の方が目に付く、など）。

(4) ただし野首第１遺跡（県道）は報告書に掲載された石器から得た知見である。

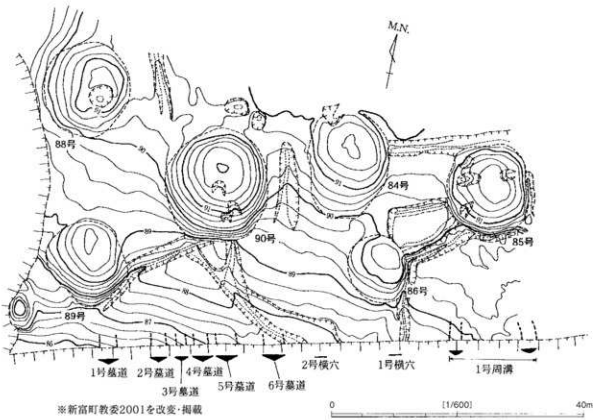
(5) K-Ahの移動は自然の浸食による可能性があるが、ＭＢ０は先述したように早期の掘削行為も影響していると考えられる。

(6) この調査ではサンプリングに４種のフルイを用いており、フルイの目の大きさが異なると、検出遺物の内容・数量も異なることを示している。

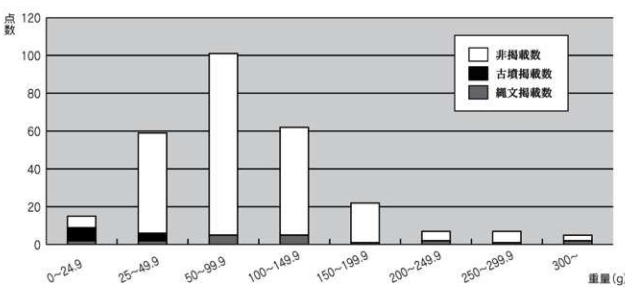
第２節　古墳時代

【性格不明遺構について】

第Ⅳ章第５節で８箇所の「性格不明遺構」が「墓道」として機能した可能性について言及したが、ここではそう考えるに至った根拠について、先行事例を幾つか紹介しつつ、いま少し詳述しておきたい。



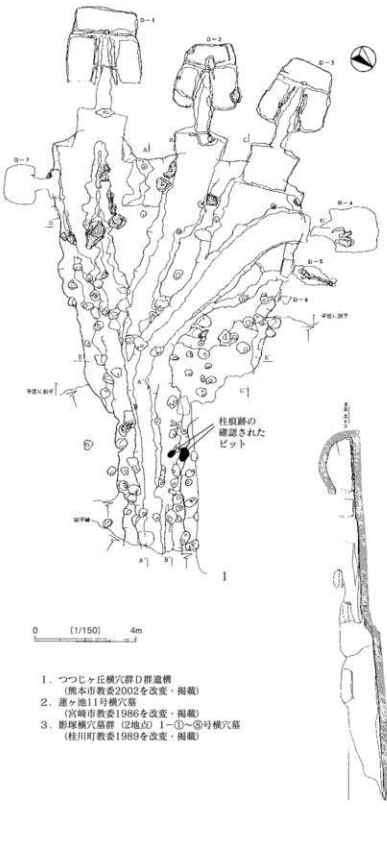
第97図　祇園原横穴墓群



第98図　石錘の重量分布

重量(g)	0~24.9	25~49.9	50~99.9	100~149.9	150~199.9	200~249.9	250~299.9	300~	総数
縄文掲載数	2	2	5	5	1	2	1	2	20
古墳掲載数	7	4	0	0	0	0	0	0	11
非掲載数	6	53	96	57	21	5	6	3	247

第49表　石錘集計表



1．つつじヶ丘横穴群D群遺構
（熊本市教委2002を改変・掲載）
2．遊ヶ池11号横穴墓
（宮崎市教委1986を改変・掲載）
3．影塚横穴墓群（2地点）1－①～⑧号横穴墓
（柱川町教委1989を改変・掲載）

第99図　墓道・前庭部にピットを有する横穴墓

まず先に否定的要素として触れた「古墳と墓道とが一対一対応しない」という点について、県内では新富町祇園原横穴墓群でも同様な状況が見られる（第97図）。横穴墓群の背後に円墳からなる群集墳があり、比較的近隣では7基の（うち1基は滅失墳）円墳がありながら、6条の墓道は西側に偏った状態で存在する。墓道は未調査だが、図版に見える断面はU字状を呈する黒色系の土が堆積しているようで、本遺跡の4・12号性格不明遺構と類似する。

円墳も未調査ながら、2基の横穴墓からは集上りⅡ～Ⅲ型式併行期とされる須恵器が出土しており、本遺跡とほぼ同時期と判断しうる。

次に「段掘りされた浅い溝のような形態で段掘りのラインに沿ってピットが並んでいる」という点であるが、熊本市つつじヶ丘横穴群では複数の横穴墓に伴う大前庭部～共有墓道にかけて類似した構造を有する。これらのピットの中には柱痕跡が確認されたものがあり、注目される（第99図1）。

本遺跡のピットは柱痕跡こそ確認できていないが、非常に深く柱を立てることも十分可能である。

本遺跡4号（および9号）性格不明遺構のように掘り込み底面中央にピットを伴う事例としては、宮崎市蓮ヶ池11号横穴墓の前庭部、福岡県桂川町影塚横穴墓群（2地点）1号横穴墓群の墓道などがある（第99図2・3）。ピットには本遺跡のように遺物は入っていないようである。

さらにつつじヶ丘横穴群では、前庭部などで火床・炭化物の堆積層などが確認されることから、墓前での焔火行為が想定されている。そうした痕跡は8世紀代の須恵器を含む土層が埋没した後にも確認され、横穴墓の埋葬が終了し埋没する過程における追善供養と捉えられており、本遺跡の2号竪穴建物跡で見られた埋没過程での焼土ピットや土器の破砕行為もこれに通じるものとして理解される。

【古墳時代の石錘について】

1号竪穴建物跡から出土した11点の石錘について、本文中でも古墳時代のものと判断した。大きさが比較的揃っており、同様のサイズは縄文時代の石錘に少ないという点を根拠としていたが、この点について検証しておきたい。

第98図・第49表は本遺跡出土の石錘について、破損により形状が損なわれているもの以外を計量し、重量分布を示したものである。基本的に50g単位で集計したが、50g以下のみは問題に関わる部分であり、便宜的に25gを境に細分した。

これによると石錘全体では50～100gをピークとする正規分布を示すが、「古墳掲載数」とした1号竪穴建物跡出土の資料は異質な分布をしており、先述した仮説を裏付けるように思われる。

ただしなぜ1号竪穴建物に石錘が残されたのかについての検討には及ばなかった。

第3節　近世～近代

【遺構の存続年代について】

出土遺物全体の年代観からすると、18世紀後半代～19世紀代の幅が認められた。その中で各遺構の先後関係について見たいが、残念ながら遺構間で接合した陶磁器は少ない。

やや煩雑になるが以下に列記するならば、22・26号土坑間で1点、23・27号土坑間で1点、27号土坑と屋敷入口間で2点、14号土坑と11号性格不明遺構間で1点、1号溝と1号性格不明遺構間で1点、土塁はそれぞれ27号土坑と1点、30号土坑と1点、屋敷入口と1点、28号ピットと1点、1号性格不明遺構と2点、近世墓・1号性格不明遺構の双方と接合するものが1点ある。

この中で土塁の接合状況は、同時性を示すものとは限らず、むしろ土塁の構築時にこれらの破片を含んだ土を用いたと解釈した方が良さそうである。また土塁出土遺物中には湯呑碗も含まれている。

こうした点からすると、石垣・土塁を備えた屋敷としての完成は湯呑碗出現以降、すなわち19世紀前葉でも1820年代以降の時点と想定されるが、上述した陶磁器の接合状況および一部の遺構の切り合いや、土塁や石垣の裏込めに瓦を含むことなどから、その前身となる瓦葺きの建物の存在も濃厚である。もし近世墓（屋敷墓か）に葬られた人物を屋敷の創始者ないしそれに近しい人物であると想定するならば、18世紀の末頃までは遡る可能性もあるが、断定

はできない。

廃絶については、29・61号土坑から出土した明治10（1877）年鋳造の竜一銭銅貨やコバルト染付の存在、銅版転写以降の不在から、明治10～20年代頃と考えられる。そうした場合、屋敷の存続期間は大まかではあるが80年程度と推定される。

水田の構築時期については先述したようにコバルト染付を含む埋め立て層の直上に構築されており、埋め土には土より瓦礫の方が多い部分もあることから、屋敷の廃絶直後と推定した。

なお水田の廃絶時期については、高鍋鉄道株式会社の事業に大きく関係するため、岩切悦子氏の作業により以下で詳しく見ておく（岩切1984など）。

大正12（1923）年８月、児湯郡高鍋町・上江村・木城村の三か町村公営事業として高鍋～木城間に鉄道敷設経営計画が議決された。事業はこの区間を皮切りに高鍋停車場から熊本県馬見原までを結ぶ構想を念頭においたものであったが、折悪く大正末期から昭和初頭における日本経済恐慌の影響を被り、計余曲折の末、幻に終わったとされている。

翌大正13（1924）年８月に、高鍋軽便鉄道株式会社発起人一同の連名で鉄道大臣に提出された「高鍋木城間軽便鉄道免許申請書」に本線の経過地が記載されているが、その中に「上江村字平原、川田、青木等ノ県道ニ沿ヒ宿坂ノ隘路ヲ掘鑿シテ宿坂橋ノ左岸水路堤防ト県道トニ沿ヒ」とある。この内容は立地・施工法共に現存の遺構に極めてよく符合するものであり、調査区内の切り通しが工事の初期に掘削された可能性が高い。

問題はその時期をどのくらい絞り込めるかということである。岩切氏の作成した年表によると、昭和２（1927）年５月には工事施工を許可されていたようであるが、資金調達の不調を理由とする工事着手期限延期の申請等を経て、昭和３（1928）年10月に工事着手届が鉄道大臣あてに提出されたようである。その後も工事の進捗が思わしくなかったようで昭和７（1932）年１月には鉄道大臣から同年11月31日まで工事竣工期限延期を許可されたが、その後の関連資料は確認することができないようである。こうした点を踏まえると、掘削が昭和３年から同７年までの間になされた可能性が高い、つまりそれが水田の下限年代ということになる。

【土器・陶磁器の組成について】

近世～近代の土器・陶磁器については、全破片を分類し、計量した結果を第40・41表に掲載した。

このデータを整理して都城島津家の家老屋敷跡と推定される都城市八幡遺跡の組成と比較したのが第102図である。ただし八幡遺跡のデータは遺構出土の陶磁器のみを母体としている上、そもそも調査区自体に制限があり、屋敷地のごく一部を調査したにすぎない。一方の野首第１遺跡は遺構出土に限ると母体数が激減するため遺跡出土の陶磁器を全て集計している（ただし近・現代とした陶磁器は除いた）。よって厳密な比較とはなりえないことをお断りしておく。

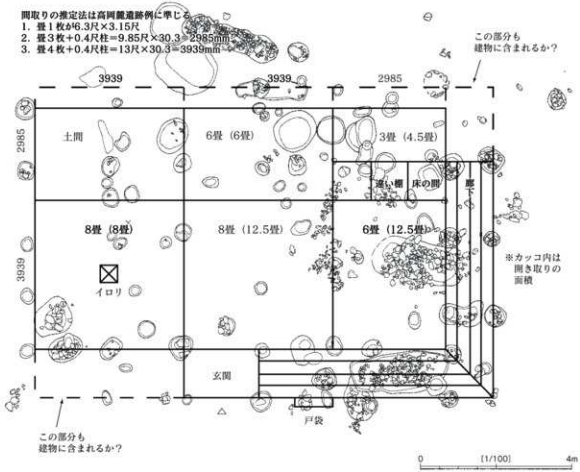
まず陶磁器・土器の組成について、グラフ１・４で比較すると、陶磁器に対する土器の割合がほぼ同率であることが興味深い。八幡遺跡の高い陶器比率は薩摩焼が多量に入ることが影響している。

次に磁器の組成についてグラフ２・５で見るならば、八幡遺跡では18世紀前半代の肥前産と見られる製品が１～２割程度含まれているのに対し、野首第１遺跡では18世紀後半の地方窯勃興以降の陶磁器がほとんどで、瀬戸・美濃産磁器やコバルト染付も一定量見られる。こうした差異は屋敷の存続時期が若干ずれていることによる。

またグラフ３・６による陶器の組成は、八幡遺跡では薩摩焼が合わせて７割程度を占めており、少量の備前焼や琉球系の褐釉陶器（荒焼）がそこに加わるのに対し、野首第１遺跡では唐代川系が約３割、堺・明石系が２割、その他の関西系や瀬戸・美濃系などを合わせて１割という全く異なる状況である。

特に堺・明石系陶器は擂鉢単独であるにもかかわらず上記の割合であり、擂鉢のみで比較すれば圧倒的なシェアを誇ると言える。

西都市茶臼原に存在した原無田窯でも、詳細は不明ながら堺・明石系の擂鉢を模倣生産したようで、高鍋藩の経済において大坂の占める重要性に深く関わっている可能性がある。同様な関西系陶器の流通・模倣生産は、延岡藩でも見られる現象である。



第100図　野首第1遺跡の建物跡

一方、高鍋藩領である野首第1遺跡で薩摩焼が目立つのはどういうことであろうか。現段階ではこれが近世高鍋藩領における一般的な組成なのか、あるいは本遺跡に特有の現象か判定できないが、第Ⅱ章で触れたように本遺跡は鹿児島藩の参勤交代ルートに近く、そうした文物の頻繁な往来に関わる可能性もあると思われる。

ただし現段階では在地産陶磁器の分類がほとんどできていない。「その他」とした中には数多く含まれているはずであり、また先述した各地の特産品を模倣生産した可能性まで想定すると、上述した傾向が様変わりすることさえありうる。今後は窯跡資料の検討ともあわせて考えていかなければならない。

【屋敷の間取りと居住者について】

発掘調査期間中には、地元の方から屋敷に関わる言い伝えを教えていただくことが多々あった。

それらを列記すると次のようである。

・昔、ここには御用（十手持ち）が住んでいた。

・「代官所」と聞いていた。間所ではなかったか。

・屋敷は明治の初め頃に厳島神社の近所にあった庄屋宅に移築した。

・西南の役による刀傷が柱に残っていた。

さらに庄屋の子孫にあたる方にも話をうかがうことができた。実際に居住されていた方である。

・東、南に半間の廊下が取り付いていた。

・雨戸の戸袋がついていた

・雨戸につっかい棒をするための穴が開いていた。

・大きな松の梁が通っていたが、ネジラミ（シロアリ？）にやられてしまった。

・西郷隆盛が宿泊したとも聞いている。

・昭和30年代までは改築して住んでいたが、老朽化により解体してしまった。

廊下や戸袋を備えた雨戸については、遺構・遺物のあり方と符合する。

間取りについて聞き書きしたものを、遺構平面図に重ねたのが第100図である。ただし40年以上も前